
DISSIDIA PHANTASIA FINALIS

宇治総

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DISSIDIA PHANTASIA FINALIS

【Nコード】

N4848I

【作者名】

宇治総

【あらすじ】

デュオデシムに間に合わないどころか発売日すら押さえていなかったデイシディアファイナルファンタジーの二次創作小説。ゲームOPまでを試験的に書いてみる。

INCIPIIT

ちゅういー！

このしょうせつは、ディシディア・ファイナルファンタジーのじぞうさくひんです。

しかし、ひっしゃのおもところあって、せつていのあらゆるところに、ウジフサフィルターによる、ウジフサイジングをほどこしてあります。

ひっしゃは、このゲームのすがたを、ゆがめようとするものではありませんが、しょじじょうにより、これはきつたほうがいいとおもったものは、ようしゃなくきりおとし、これはたしたほうがいいなどおもったものは、ちゅうちよなくつけたし、けっかとして、ぜんたいてきに、くさぐさのかいへんをみることになりました。

もし、ゲームのないように、ちゅうじつなディシディアをこしょもつであれば、このさくひんはおきにめさないかもしれません。へんなディシディアをあまりよんで、ごぶかいになられないように、ごちゅういください。

PHANTASIA FINALLIS

そのかみ一筋の芒のきありき。

ささなる莖、陽あがれば黄土に影を顕うつし、
月つきあづれば奇くしきひかり闇夜やみよに反映てりかへしぬ。

千々代ののち立枯れし芒のもと、

二柱ふたはしらのつがい生れ坐せり。

ををとこ自らをして渾沌カオスと称せしむ。

幾千萬いくまゐのたび影を浴び、

その和を乱せる沃壤わくじやうかれを生めり。

ををみな自らをして秩序コスモスと称せしむ。

幾千萬のつど光を反かへし、

となる闇を闢ひらける芒かれを生めり。

二柱手をたづさへ世に臨みてしかしてこれを統べぬ。

然る折をとこをみなに曰いふ。

世に我らが意志いしに適ふことを得ざりしものあり。

ぬで汝みまともになほ佳きものをば生み、

かれを毀こちてしかしてこれに代へぬと。

をみなをとこに応へて曰ふ。

ぬたづらに生みぬたづらに殺ころすこと、

もとより生まぬに齊ひとしきなめり。

さなきだに世は黎明ひきあけなれば、

今はただ見守りしかしてのち矯ためむ。

彘殺せしと。

ををとこ至誠しじやうを尽くさば、

ををみなの愛あいこれを喜べり。

二柱たがひの言ゆめ蔑なせざりしとぞ。

つがひの御代げに永く算ふること適はじ。

さはあれ渾沌が言、

秩序には解りがたく、

秩序が動、

渾沌には計りがたし。

渾沌は殖やし間引くなり。

秩序は伸ばし矯めるなり。

二柱千代を語らひ万代を説きあひ、

しかしてつひに互ひの愛の叛かざるを得ざりき。

あはれつがひの誠ここにくだちぬ。

あはれつがひの愛ここにつひえぬ。

二柱の争ひかく生まれり。

秩序に巫覡の四人あり。

能く神意を体し士卒を導きぬ。

さときまなこ。

先見に長けひとを用ひること衆を抜きたり。

しろきかいな。

そのしろき双腕ぞ癒しの妙力を具へぬ。

あつきちしお。

勇武こそかれが性なり。血を好み血を恐れじ。

たけきこころ。

鉄の精神万障をして挫くこと能はず。

また渾沌に巫覡の一人あり。

ガーランド。

コーネリアびとなり。

知勇にすぐれ戦を愛し、

能く百卒を整へ万軍を率ゐたり。
その策はかりがたく、
かの劍つるぎのわざあなどりがたし。

二柱たがひの巫覡に命ず。

かの惡しき神を排し、

我をしてふたたび世を治めることを得せしめよと。

二柱兵つはへをして伴侶つれづれを討たしめむと欲し、

そを異世いよより喚べり。

二千代を経てなほ神の争ひに果てなく、

弥終あやばてなきやを疑はぬものなし。

をとことをみな。

あしたとゆふべ。

ひかりとかけ。

永遠とこしえに拮抗こつかうせるは道理ことわりなれば。

あはれ終はりなき争ひよ。

已むことなき死よ。

歡喜よろこびと悲嘆かなしみの繩目なはよ。

究極パタジャ・ファイナリスの幻想。

干戈に倦みしさる一卒、嘆きとともにかく日へりとぞ。

夢から醒めた時にはすでに、その内容のあらかたを忘れてしまっていた。自分の腕が地図に刺してあったピンを押し潰している。すでに蝋燭は燃え尽きている。天幕の中は薄暗い。

(ないことだ、わたしが居眠りを)

ピンを留めてあるのは、秩序の至聖殿から西に五十哩ほど離れた森林地帯である。そのうちの数本が横倒しになっている。

(またここに駐屯することになるとは)

たけきところは情けないような悲しいような、沈んだ気分陥った。夢の中身はよいものではなかったようだ。

倒れたピンは三つ。「N」と彫られた黄、「P」と彫られた赤、「E」と彫られた黒である。

(ニューラズ、パウサニ阿斯、エリーチエ)

「縁起がわるい」

ピンを拾い始めてすぐ、入口からコンコンと木材を打ち付ける音が鳴った。「はいれ」と言うと、次いでコココンと音が応酬する。

気休めの合図のようなものだったが、この天幕を訪うてこれをしないものは有無を言わず刺すと伝えてある。むろん望んだ習慣ではない。たけきところはいつそう滅入った。

三重の仕切を重たげにくぐって現れたのは、小柄な女と壮年の男である。前者は頭巾のついた白いクローク姿で、湯気たつ皿と匙を携えている。後者は胸甲と手甲をつけて、その背に薄汚れた櫃ひつを負っている。仕切から仄赤い明かりが漏れ入った。どうも夕刻まで居眠りをしていたらしい。溜息が漏れそうになったが、仲間の手前でそうするのは憚られた。

「たけきところよ、食事を」

白い女は言つて、大事に抱えていた皿を卓のうえにそつと置いた。中身は粥らしい。

「食事を採ってください。そうしてすこし休んで。あなたまで倒れては」

たけきこころは白い女に一瞥を送ったあと、背後の男に向かつて「まるで輜重兵だ」と呟いた。

「輜重兵さ。君がそれを食わんのなら槍なぞ捨ててやる」といって、男は背の櫃を床に下ろした。どうも食糧と思しい。

「食べるとも、友よ。君が輜重兵に転職して」と言つて、たけきこころは白い女に向かつて無理に笑つてみせた。「あなたに槍を執らせるようなことになったら、さときまなこに言つて罵られるか」

白い女は笑うどころか、今にも泣き出しそうな顔である。やはりさときまなこの真似はできそうにもない。たけきこころは沈黙を嫌つて、

「クレアルコス、ウルフリードはもう還つたか」

男に声をかけた。

「いや、まだだ、還らない。それで、フリオニールが騎兵三十をともなつて偵察に向かつた。そう、かれこれ二時間も経つたらうか」

「……なにかあつたのか」

「それで、きみは寝ていたから」と前おいて、クレアルコスは白い女をちらと見て、「しろきかいなど図つて、とりあえずカミルラ、ルーカン、それにスコールの部隊に武装させておいた。ほかも甲よろいを着て寝起きしているから、命じればすぐ準備できる」

「……君はここに来ていたのか？」

「来たさ」

「合図は？」

「したさ」

「君を刺すところだつた」

「夢の中でかね」

「スコールというのは初耳だ」

「それは」白い女がクレアルコスを遮って「わたしが任命を。混成部隊です」

「混成部隊というのは」クレアルコスが白い女のを継いで、「まあ、急場凌ぎさ。ご存じのとおり、遊ばせておく兵がないものだから」

たけきところはしばらく黙ったあと、「非戦闘員を使ったのか」と呻いた。

「一部だ。おおかたは部隊をなくした兵と、あとは寝返り組さ。三百と少し。副官はイーディスとかいう、元カオスの小娘で間に合わせた」

「部隊長はどんなひとかな」

「ここに」クレアルコスが自分の眉間を指先でなぞった。「こんな大きい向う疵がある。そのせいかちよつとやくざな風貌でね」

「君の人物評は」

彼は奇妙な表情を浮かべて、「小僧さんだが、あれは中身は爺さんだ」と評した。

「しろきかいなよ、座りなさい」と、たけきところは女に席を勧めた。「わたしは眠ったし、食事も採ろう。次はあなたがそうしなければ」

たけきところがしろきかいなと話しだすとじきに、クレアルコスは「しばらくはわたし一人でも用は足りよう。二人とも今日は休息すべきだ」と言って素っ気なく踵を返した。

「クレアルコス、それは」

たけきところは言いかけて腰を浮かせたが、彼は聞かずに天幕を出て行ってしまった。

二人きりの天幕に会話は絶えた。クレアルコスの出て行った入口から外の明かりがほそく差し込んでいる。天幕のなかの埃が反射して舞っているのが見える。

「わたしは器ではない。さときまなこの代わりなど……」

彼はふいに呟いた。しろきかいなはちょうど蠟燭を用意しようと席を立ちかけたところで、その姿勢のまま凍りついている。

「……あなたを大事に思っているのです。決してあなたを侮ったりなど」

「ここで眠っていたのがさときまなこだったなら」椅子の背もたれを撫でて、「彼は起こしただろう。そういうことだ」

「たけきこころよ、決して弛まぬあなたがなんとそのような」「意志強固であるからどうだというのだ」と、たけきこころは声を荒らげた。「しろきかいなよ、かの至聖殿より七万の軍勢を率いて発つたとき、いったいだれがこのような状況を？ 指揮官は討たれ、敗走を重ね、兵は刻々と摩滅し、神佑しんゆうはついに絶えた。言ってくれ、だれがこのような状況を？ われらが軍の総勢は非戦闘員を含めて四千に満たず、敵は無限の軍勢を率いて意気高らかだ。もはや神の御許までわずか五十哩を残すのみ。代わりに指揮を執る男は昼日中に居眠りをし、部下に体を気遣われる体たらく！ さときまなこがその眼を閉じて、どうしてたけきこころの折れぬ道理があるのか」

しろきかいなは俯いて、声を殺して泣いている。卓に広げている地図に肘をついて、たけきこころは頭を抱えた。天幕の中を遊いでいた目が、隅に飾ってあった旗を捉える。刀子とタマネギの意匠を施した、オニオン騎士アーリアートゥスの象徴である。

「……しろきかいなよ、あつきちしおは如何に」
「……………」

「言いなさい。あなたはそれを伝えに来たはずなのだから」

しろきかいなは長い時間だまつたあと、「嘆いてください、兄弟よ」と涙声で呟いた。

(ああ……それでは逝つたのだ、彼は。わたしたちを置いて)
まなじり
眦に涙が溜まるのを感じたが、それに克かつことはどうやらできそうになかった。しろきかいながたけきこころの背中に回って、その肩に縋りついた。

「たけきこころよ、嘆いてください。あつきちしおはさときまなこ

の許へ、神の御許へ参りました」

（コスモスよ照覧あれ、そしてどのような小さなものでもいい、光を与えたまえ！　すでにあなたの戦士はその半ばが身罷みまかつたのだ！）
女の涙が肩に沁む。暗い天幕は慟哭と嗚咽に満ちた。

神々の争いは二千年の昔に端を発するという。

それは同時に、四人の光の戦士と一人の影の騎士との闘いの歴史でもあった。両者は万軍を駆使して数え切れないほどの衝突を繰り返し、勝者と敗者は目まぐるしく入れ替わった。およそこの二柱ふたはしら、そして四人と一人は互角であり、失った兵は異世界からいくらでも補充が利いたからである。

二千年にも及ぶこの均衡を破ったのは、カオスの軍勢に末席を連ねるある一卒であった。

エクステス。この男の用いる力は、ほかのどのような異世界びとの持つものとも性質を異にした。彼は敵味方を問わず、その姿をそっくりそのまま写した幻像イミタージェイオーの兵を造り出すことができたのである。それも、無限に。

彼の台頭は当初、むしろコスモスの軍勢に有利にすら働いた。何処とも知れぬ世より来たった彼の、その望みはしかし、ガーランド麾下のものたちに到底つけいられる類のものではなかったからである。彼の望み、それは秩序の軍勢を滅ぼし、次いで渾沌の軍勢を滅ぼし、誰もいなくなった世界を破壊し、自らをすら滅ぼして一切を無に帰することであった。

しかし渾沌の神は彼の力を嘉する。エクステスが軍中で然るべき地位を獲得すると、ほどなくカオス軍からは続々と脱走兵が相次いだ。彼の最終目的は徹頭徹尾「無」と、その過程である「滅び」で

あつたので。エクステスに賛同できないもの、彼を恐れるものたちは力オス勢の物資を掠め、情報を流し、あるいは主要な部隊長の寝首をかき、それらを土産にコスモス勢に降った。

光の戦士たちは思わぬ誤算を喜んだ。コスモス勢は日増しに膨れあがり、昨日の敵の肩を抱いて兵たちの意気はいや増す。これが二千年に及ぶ戦の終末の端緒たれと、光の戦士たちは神慮に感謝を捧げ、供物を惜しまなかった。そしてこのできごとはたしかに、終末の端緒ではあつたのである。

秩序の軍勢は快進撃を続ける。そのさなかに、影の騎士はとうとうその深謀を明らかにした。エクステスをして降った将兵の幻像兵を作らしめ、巨きくなりすぎたコスモス勢の、軍営の至る処に忍ばせたのである。

ガーランドの鬼手の標的にして最初の犠牲者は、光の戦士の筆頭にして指揮官である、さときまなこであつた。

彼にはあまりよろしくない習慣があつた。ただひとり供も連れず、なにかにつけてよく軍営の隅々を歩きまわり、将卒に親しく声をかけて已まなかつたのである。それが結果的に軍の結束に貢献するものとわかつていても、他の三者を始め慎重なものたちの、それは頭痛と非難のタネであつた。そしてガーランドは永年の好敵手のならいを知悉していた。

さときまなこは軍営の外、ほんの五十碼のところ、最寄りの河から水を汲んできた一兵卒を労おうとして殺害された。兵が水桶を置き剣を抜くのを見ると、彼はとつさに自分の背後からなにかが迫っているのだと錯覚して、兵に背を向けてしまったのである。彼は背後から心臓をひと突きされ、あえなく首を落とされた。亡骸は河に投げ捨てられ、その首は彼の滅びを招いた水桶に押し込められ、はるばるガーランドの許へ届けられたのであつた。

果たしてコスモス勢は大混乱に陥る。行方を絶つた指揮官は数日後に河の下流から発見された。

暗殺の容疑をかけられたのは宜なるかな、投降してきた元力オス

軍のものたちであつた。彼らを糾弾するものと擁護するものが袂を別ち、彼らに半ば引き摺られるもの、中立を守るもの、軍勢はほどなく見えない仕切で断たれ四分五裂した。昨日までの味方は一転、たがいに唾み合い、冤罪に問われたものは当惑憤激する。

ここまで舞台と役者が整えば、あとはただひとたびの剣の閃きでことは動き出す。幻像兵たちはあえて相手を特定せず、あるものは喧嘩を装つて、あるものは酔いを演じて、あるものは夜半の枕頭で送り込まれた真の目的のために為すべきことを為した。暴動の火の手が軍営の各所で上がり、軍律は踏みにじられ、良識を備えるものたちはただ縮こまつて自衛に努めるよりほかなかつた。

ガーランド麾下の力オス勢にはさぞ見物であつたことだろう。コスモス勢は敵軍の攻囲にいつさい因らず、身中の虫にのみ蝕まれ、内紛によつて毎日弾きあい闘せめぎあい、みるみるうちにその数を減らしていったのである。この一連の悲劇が幻像兵の為業であることに、光の戦士たちはじき気付いたが、見分けがつかぬのでは手の施しようがない。最盛期に十数万を数えた軍勢が、わずかのうちにたった六万あまりに減ずるに及んで、指揮官を代行していた男は苦渋の決断を強いられることになつた。

彼は以前からコスモス軍に在籍していたもの、新たに至聖殿から加勢に来たものたちの名簿を作らせ、それに漏れるものたち、つまり元力オス軍の兵士たちをひとり残らず殺害させた。指揮官の変死より一連の事例から、加害者が大抵において元力オス軍のものであつたことが判明していたのである。投降した力オス勢に幻像兵を紛れ込ませ、内紛によつて兵を削るといふ敵方の目論見に、三人はようやく目星をつけた。

しかし確証はついに見つからず、ためにこの計画に反対するものも少なくなかつた。指揮官代行はたとえ志を共にするものであつても、寝返つた元力オス勢のために今まで苦楽を分かち合つたコスモス勢の命を危険に曝すことはできない。六万が三万に、三万が一万になる前に取りうる手は取らなければならぬと説き、採決を強行

した。計画は夜に決行され、すっかり縮小された軍営に断末魔が引きも切らず続いた。

幻像兵は死骸を残さない。コスモス勢は夜が明けのを待って、昨夜みずからの為したことどもが白日のもとに曝されるのを、諦めと悲しみをもって打ち眺めた。幻像兵そのものは大した数ではなく、元カオス軍の兵士たちはそのほとんどが本物だったのである。指揮官代行は意気沮喪した兵たちを集め、この殺戮は自衛の為に已むなく為されたことであり、それ以外の要因があつたとしたらそれは自分ひとりに科せられるものであると宣言し、みなの方を見ている前でコスモスに神慮を乞い、自らの一指を切り落とした。

こうして幻像兵の間者は一掃されたが、体勢を立て直す隙もあればこそ、これを待っていたかのように激減したコスモス勢をカオス勢の大軍が拉ぐ。コスモス勢が自滅に忙しくしている間、カオス勢は専らエクステスによる兵力の増強に努めていたのである。

カオス勢の攻撃はその様相を一変させていた。彼らは繁く小型の檻を携行するようになり、できるだけ殺さぬように闘い、敵を生け捕った。そしてコスモス勢が敗走すると、捕虜の姿に似せた幻像兵を生み出し、後を追わせる。生還を喜んで駆け寄ってくるコスモス勢の胸に、幻像兵の剣はいとも簡単に吸い込まれた。この残酷な罠にコスモス勢が慣れ始めると、ガールランドは幻像兵のなかに本物を紛れ込ませ、コスモスの将卒をして悲惨な同士討ちとためらいを誘発せしめる。この奸計によってコスモス勢の士気は弥がうえにも下がり、指揮官代行は以後戦場で行方不明になった兵は死んだものと見做すよう、全軍に周知徹底せざるをえなかった。

光の戦士たちはよく戦ったが、敗色が薄くなる気配はなかった。このころより至聖殿からの加勢は目減りし、物資の輸送も途絶えがちになった。神の加護は失われたと嘆き、古参兵の中には自ら命を絶つものも出現する。もはや神慮を仰いでも応えは遠鳴りのようで、光の戦士たちですらコスモスの力の減退を意識せずにはいられなかった。

コスモス勢が指揮官を失ってより百年。

秩序の至聖殿を進発して意気揚々と前進してきた道程を、彼らは楯の影に隠れて後退しつつあった。

天幕の外はすでに薄暗かった。

楯の間隙を縫って、ちょうど山間に隠れゆく入日が目に映った。

周囲一帯は光の戦士麾下の親衛兵三百が、文字どおり人垣をつくって天幕を衛護しているのである。

天幕は小高い丘のうえにある。指揮官の計より学んで以降、光の戦士たちの在所は部隊の駐屯しているあたりから少し離れた位置に設営されるのが常となっていた。

一帯に広がる原生林を要害と恃むこの野営地は、多分に防衛むきで攻勢に出にくい地理にあった。

(ここで食い止めているあいだに、しるきかいなを至聖殿へ戻さなければ)

コスモス勢は現在、張り切って二、三日ほど経った弓弦のような少々疲弊ぎみの緊張状態にあった。今し日の沈んでいく山脈、それを挟んでむこう側に駐留しているはずの力オス勢を山峡の隘路に誘い込み、戦線を窄めて数の不利を補おうという手はずだったのだが、敵も心得たものでなかなか動かない。目下相手の出方まちといった状況で、日がな斥候を放って乏しい情報をむさぼる日々が続いている。

周りの兵たちはちょうど交代どきのようで、夕食を摂りに三々五々坂を下りていくところであった。

彼らの肩むこうの幕舎から細々と昇りゆくのは、夕の炊ぎの煙であろつか。

「パウサニアス」

天幕を圍繞する兵の中から男がひとり、呼びかけに応じて振り向いた。男も兵たちも一様に完全武装で、両手に槍と胄を携えている。

「ちゃんと食ったかい」

「食べたとも。みなわたしの食事が気がりらしい」

「クレアルコスが輜重兵になったら、わたしは料理人になるよ」

どうもパウサニアスは天幕での会話を聞いていたらしい。たけきこころの吐露もあつきしおのくだりも耳に挟んだに違いないが、そんな様子は露も見せなかった。

「ウルフリードが戻らないと聞いた」

「うん」と、パウサニアスは思案気に俯いた。「まあ敵さんも動くに動けないだろうから、大丈夫だとは思うがね。でもフリオニールは心配している。だから止めたんだが、行ってしまった」

「そうか」

「そら、二人いなくなるとよけい心配だろう。だから言ったよわたしは、たけきこころが心配すると。でも聞かないんだな、彼は」

「幕舎へ下りていこうと思うのだが」

「どうして。いや」と、パウサニアスは言い淀んで、続けて「

護衛をつけよう。気をつけて」

行き先を察したのだろう、普段は渋るパウサニアスは存外ききわけよく、すぐに周囲の兵から人員を選び抜きだした。

「十人でいい」

「冗談いっちゃいけない。百人つけるよ」

「中にしろきかいながいるのだ。彼女を護ってくれ」

「もちろん護るよ、君もしろきかいなも」パウサニアスは聞かずに、むりやり百人の護衛を随行させた。「アカルタエ、お前がたけきこころで、わたしがしろきかいなを担当だ」

甲をつけた女が駆け寄ってきて、「たけきこころよ、せめて胸甲むねあてだけでもつけてください」と言った。パウサニアスの副官で、冑も槍も持たぬ代わりに小型の楯と剣を佩いている。

「君たちに勝る甲はないとも」

「でも危険ですわ、ええ、ありがとうございます、ですが」

「少し下りるだけだ。ここに敵はいない」

「ええ、でも　パウサニアスあなたからも言ってください」

アカルタエは困り切って援軍を求めたが、当の隊長は「たけきところは折れないぞ、頑固だから」とどこ吹く風である。

「パウサニアス、そういえばヤンは？」

「ヤン、誰だったかな」

「わたしの伝令をしている、茶色い髪で、のつぼの少年」

「ああのつぼか。いや、ここに来てから一度も見えてないよ。なんだ怪しからんね」

「いや、見ていないならいい」

「たけきところよ、お願いですから」

「君がそうやって心配していてくれれば、矢弾もわたしを避けて通るだろう」

「たけきところに言うことを聞かせたいなら」と、パウサニアスが言った。「有無を言わず無理矢理することだ。ついさつきわたしがやったみたいに。お前の立場でするなら、甲をつけたまま彼に抱き付けばいい」

「友よ、君はたまにはいいことを言う」と言つて、たけきところはアカルタエに向き直つて両手を広げた。「君ならいつでも歓迎だ」

アカルタエは絶句している。

「冗談だよ。まったくよくよく頑固な男だよ君は。わたしの副官を困らせるのに飽きたらさっさと行きたまえ」

パウサニアスは手を振りながら人垣に紛れ入った。声だけが続けて「たけきところよ、檻には絶対に行つてはいけないよ。これはよく言い含めてあるから、彼女も手段を選ばないよ」と付け加えた。

「君も彼に賛成か」

アカルタエは応えず、あらぬ方を向いて「ミルト、ミルト」と呼ばわった。三度目の「ミルト」で、兵士たちの合間から瘦せた少女がまろび出てくる。大人もののクロークの裾を引き摺って、自分の身長より長い杖を両手に持っている。

(……武器だ、この杖は)

「暗くなつてきましたから、この子が足下を」

と、アカルタエが言うなり、少女の杖の先がぴかっと光った。吃りながら「あつ足下を照らします」と言つて、彼女は体を折り曲げるようにしてお辞儀をした。

「この子は」

「エリーチエの部隊から、借りてきました」

後半の「借りてきました」は消え入らんばかりの小声である。聞き流せないほどの激情が、彼の「この子は」のひと言には籠められていた。

「エリーチエは真に盲めいたか。それともこころ狂ふれたか」

アカルタエが釈明するように「この子も立派な兵士です。もちろん見習いですが」と言つた。

「……ミルトよ、戦場に出たことは？」

少女は力いっぱい首を振つて否んだ。

「そのほかにできることはないか？」

トントンと杖の尻で地面を突くと、明かりが心持ち強くなった。どうもこれしかできないらしい。

(こんな無力な子どもに兵力を頼らざるを得ないのか)

たけきところは暫時やるせなく佇んでいたが、ややあつて少女を促すと、二人だけでさつさと歩き出した。そのあとを百名もの重装歩兵が物の具の音も賑々しく、虫の音を圧してがちゃがちゃと追いかける。

「頼もしい護衛だ。今後は暗くなつたらわたしの天幕に来てくれ。わたしとしろきかいなに明かりを提供して欲しい」

少女はのぼせ上がつて、壊れた人形みたいにがくがくと首肯した。アカルタエが彼の背後で「エリーチエが許さないかと」と注進したが、たけきところは黙殺した。

「たけきこころよ」

アカルタエが追いついてくると同時に、兵たちの数十人が先行して前に広がり、速度を緩めるとばかりにゆっくり歩き出した。下

り坂が平地になり、鉄靴が砂利を蹴る音に代わってさくさくと草叢が鳴った。この辺りの森林は火攻めを警戒して、幾度か伐採の手を入れてあるので見晴らしがいい。幕舎もそれほど離れていない。ほどなく暗がりのそこに屯たむろしている人間の姿が見て取れるようになった。

日はほぼ落ちかけていた。

「エリーチエに罰をお与えになりませんよう」

「エリーチエを裁くのは自らの為したことごとであって、わたしではない」

兵士の輪の中でアカルタエは首を竦めた。ミルトも竦めた。内側の兵士たちは気まずげにそっぽを向いている。

厩舎の前を通り過ぎる。とたんに騎鳥チヨコホがえさを期待してか、長い首をもたげて盛んに鳴きわめき始めた。たちまち弓と松明を持った歩哨が二十名ほど、すわなにごとかと血相を変えて牧柵を飛び越えてくる。屋根もない急拵えの厩舎のことで、餓えた兵が盗みに入らぬよう見張っているのである。一行の中にたけきところを認めると彼らはまったく当惑した様子を見せて、それでも思いおもいに敬意を表明した。

（警邏が増えた……糧食にもこと欠き始めたのか）

しろきかいなが持つてきたのは薄い粥ひと皿だけであった。つまりはそういうことであろう。

「たけきところよ、エリーチエはあなたの為に。兵が足りないのです。魔導師は稀少です、育てれば重要な戦力に」

「ここからはわたしひとりでいい。諸君は下がれ」

野営地のほぼ真ん中の、ひととき大きな営舎に着くと、たけきところはそう言ってアカルタエを遮った。営舎の天辺には闇に溶けて風なく垂れる、オニオン騎士アーリアートゥスの旗が今なお掲げられている。

（見よ、かつての勇者たちの会堂は、いまや寂しい殯もがりの宮と化した。そしてこの旗のふたたび翻ることはあるまい）

「あまりにも多くの戦士が斃れたのだ。子どもが剣を握るのももは

や已むなきか……」

「たけきここ」

言い募るアカルタ工に一顧をも与えず、たけきこころは営舎の中に消えていった。

「ヤンか」

弾かれたように振り返ったのは、まだ面に一抹の幼さを刷^はいた、しかし背の高いがっしりとした少年である。

「あつ、申し訳ありません！ クレアル」

「いい、わたしも君と同じだ」

「申し訳も……」

「ここも広くなった」と、たけきこころは独りごちた。若き伝令使は自らの失態に打ちのめされて悄然としている。見つけたらいちおう釘を刺しておこうとも考えていたが、ヤン少年の様子を見ているうちにそんな気配は霧散してしまった。

（彼が伝令使としての役目をおろそかにしたとは言えまい。光の戦士に近侍していたことに違いはないのだから）

営舎の中は広々としている。近頃は診療院として活用されていたはずだったが、いまは仕切も寝台もほぼすべて撤去されて、ただ薄闇の中に名残の壁掛けと旗が飾られているだけである。潰走に次ぐ潰走は、宿るひとを失った虚ろな天幕をいたずらに殖やした。使われなくなつて畳まれた数多の天幕のひとつに、ここは数えられる途中なのだ。

ヤンは独りではなかった。傍に女がひとりと小柄な少年がひとりと、煤けたランプの明かりに照らされて、白い花で飾られた大きな寝台が設えられているのが見える。

「たけきこころよ、お一人でこちらに？」

女はまったく驚愕の面持ちで口を開いた。隣の少年もたいそう驚

いたようで、死人が起き上がったのを目の当たりにしたかのような顔をしている。

「ミー、彼は苦しまずに？」

寝台に歩み寄ってじきに、彼は女が口火を切る前に質問の回答を得た。寝台に横たわった大男、あつきちしおの亡骸はやや上向きに横を向いて、凄まじい形相のまま固まっている。さだめし苦悶のうちに死を迎えたに違いない。

（誰よりも死に名誉を求めた貴様が、よりによって宿敵の剣にそれも毒によつて斃れる汚辱を蒙ろうとは）

亡骸の胸を埋めていたひとひらを拾ってみる。薬しやくの黄いろい、小さく可憐な花である。彼に捧げられるとすれば紅い花だろうと勝手に想像していたのだが、死者の青白いかんばせにそれはよく似合った。

「はい、苦しまずに参りました」と、ミーは意外なことを言った。

「このお顔は……自分が死んでからは決して直すなど。ガーランドと麾下の弱卒どもをこうして威嚇し続けるのだと、そのように仰いまして」

ミーは真つ赤な目でちよつと笑った。たけきこころは目の奥が熱くなるのを感じた。あつきちしおは北を睨んだまま絶命していた。

「あつきちしおよ、貴様らしいことだ」

「あつきちしおは」と、ミーの隣にいた少年がいかにも思い切ったふうに口を開いた。「自分で自分を刺したんです。最後に。　　ガーランドの手によつては逝かないって」

「最後のオニオン騎士はかく名誉を保ち得たか」黙禱を捧げたあと、少年に向かつて、「ときに君は？　彼の友人か？」

少年がへどもどしていると、ヤンが助け船を出して「おれの友達なんです」と言った。

「ミー、食事がまだなら摂って来なさい。しばらくいるつもりだから」

ミーは「さぞお心落としとお察し申し上げます。どうかお気をし

「つかりお持ちになつて」と殊勝に挨拶を陳べると、肅々と営舎を後にした。

「君の名は」

少年に向き直る。彼はなおもじもじしている。これにもヤンが代わりに応えて、「こいつ、名前がないんです」と呟いた。

「名がないとは」

「ぼく、なにも覚えてないんです」少年の口調は恥を打ち明けるかのようである。「そういうのって、珍しいみたいですけど」

「君の言うとおりだ。わたしも始めて聞いた」たけきところは素直に驚いた。

異世界から喚び出されたものたちは、個々人に差こそあつても、たいてい元の世界のことをいくらかは覚えているのが常であつた。甚だしいものでも自分の名前くらいは知っているのだが、それすらわからないというのはかなり珍しい。

「二人は彼と面識が？」

「はい」これには少年が応えた。「よくお忍びで、つて言つても、みんな知つてたけど、遊びに来てくれたんです」

「そうか、君は……」

野営地には各戦闘部隊とは別に、輜重や衛生、生産、資材管理などを務めとする非戦闘員が群れつどう一画がある。あつきちしおがそこに繁しげく通つていることは知つていた。みなを鼓舞して敗戦の気落ちや不安を払拭するために行っていたのだろう。さときまなこには頑としてそれを止めても、彼は自分だけは特別だと言つて一人歩きを控えることはなかつた。

（兄弟よ。最も兵卒に近しかった光の戦士よ、どうすればいい。さときまなこはすでに亡く、貴様はわたしたちを置いて去つた。コスモス勢の痛手はここに極まつた……）

「彼は強かつたんですか？」

たけきところはじつと大男の死顔を見つめている。

「強かつたとも。ガーランドと対等に渡り合えたのは、彼を除けば

ユツグくらいのもだった」

「ユツグ？」と、二人は異口同音に聞いた。

「ユツグ。最初のオニオン騎士だ。もともとオニオン騎士を創設したのは彼とあつきちしおだった」

寝台の横にあつきちしおの遺品が無造作に置かれていた。彼が肌身離さなかったユツグ遺愛の剣が大小二振りと、十呎フィートはあろうかという大槍が一筋、乾いた血のついた甲冑、雅やかに飾られた腰帯と腕輪、真つ赤な鞍、鎖でつないだエリクサー靈薬の小瓶、そしてオニオン騎士の肩章と旗。

「ええと、どうしてオニオンなんですか？」と、だしぬけに少年が聞いた。「ぼく、ずっと気になってたんですけど……」

たけきところは遺品の中から肩章を拾い上げると、それを少年に示して見せた。刀子とタマネギの図案の下に銘句が踊っている。

「カオス・ラクリマ・ヌムクウアム・ファイニオー」字句を指で追いながら、少年はそれをたどどしく読み上げた。「カオスのなみだは已まじ……タマネギだから？」

「タマネギだから」真面目くさつて肯うへなう。「カオス勢を打ち拉ぎ、彼らの戦友をして悲嘆の落涙の止まることのないように……」という願ねがいが、しかし本当のところは違う」

たけきところはちよつと笑った。大小の少年は顔を見合わせている。

「もう何百年以上も昔になるが、ここよりずっと北へ、何百哩も北へ行つたところに、ひとつの大きな要塞があつた。君たちには信じがたいかもしれないが、当時は行軍路に人員を留めて、軍を支援させるための町や要塞を作っていたのだ。兵の数も今とは比べものにならなかつた。戦線もずっとカオス寄りで、コスモス勢は押しんでいた……」

たけきところは黙りこくっている。少年たちが居心地悪げにしているのに気付くと、「すまない、思い出していた」と言つてあとを続けた。

「太古の昔、ドワーフが住んでいたというそこに、我々は何年もの月日を費やして堅固な要塞を築いた。その頃は、きつと巡り合わせがよかったのだろう、勝ち戦のほうが多くてね。それで、ある戦いの中でガーランドが敗死したという噂が流れたことがあった」

ヤンは目を輝かせて相づちを打っている。

「もちろん誤報だったのだが、ちょうど要塞が完成した折で、さらにそんな吉報が舞い込んだものだから、みなひどく喜んだ。それで、そのころ部隊長だったユツグが、この輝かしい勲を記念して、みないでなにか造ろうではないかと言い出した。当初はコスモス勢の戦勝を讃える立派な碑や、カオス勢の肝を冷やすような兵器を造る予定だったのだが、要塞を築くので肝心の石材も木材も払底していてね、それで、それなら兵たちの戦意昂揚のために、勲章を創設しようということになった」

「それがオニオン騎士アーリアートゥスと、少年が呟いた。「カオスのなみだは已まし……」

「そう。最初期に受勲されたのは、ユツグ以下えり抜かれた九十九名の勇士たち」たけきところは遠い目を、どこを見るでもなく闇に游がせている。「彼らに贈られた品々は、それこそ見るものに溜息をつかせずには居れないほどの、それは素晴らしいものだった。工匠たちは当初、造る予定であった貴石の記念碑の製作が流れてがっかりしていたところだったが、この代わりに勲章製作にその情熱を傾けて、兵たちの垂涎の的となれかすと腕によりをかけてくれた。

これがそうだ」

言って、寝台の下に転がっている遺品を拾い上げる。からまる蔓薔薇を象った精緻な腕輪と、のたうつ竜の意匠を凝らした華麗な剣帯の二つを示して、

「美しいだろう。全てミスリルによって造られている。もはや失われてしまったが、ほかに揃いの戦長衣と冑かぶとが贈られた。それらを身につけた彼らの姿は譬えようもなく壮観で、加えていずれも剽悍ならびなき戦士であったので、あつきちしおのふとした思い付きで組

織立てられてしまつて、じき独立した精鋭部隊を形成することになったのだ」

少年たちは感心してしきりに「ほー」を連発した。

「それであのう、オニオンの由来は」

「ああ、そうだった」たけきところはまた笑つたが、今度のものには自嘲のいろがあつた。「……さて、いったん部隊として機能しだすと、今度は彼らは一般の兵士たちと自分たちの差別化を図りたいと望んで、特別な営舎を建造しようと画策したのだ。だが要塞はかなりの大規模であつたとはいえ、壁の内側にそんな余分な建築を許す構造でもなかつた。かといつてすでに建ててあるなにかを壊すことも許されない。彼らはあれこれと立地を案じた末、そのころタマネギとニンニクを栽培していた畑を一部つぶして　　というのも、その辺りだけは臭いがきつくて、誰もが住むのをためらつたからだが　　そこに会堂を建てることにしたのだ。そんなだから、彼らはいつもちよつと臭つてね、そのうち陰でオニオン騎士と囁かれるようになった、というわけだ」

「それじゃあ、カオスのなみだは已まじ……は？」

「その銘句はずつとあとになってから改めて案出された。旗も肩章も、初期のオニオン騎士たちに贈られたものがあまりにも高価に過ぎて、その代わりとして贈られるようになったものだ。　　そう、ユッグはオニオン騎士と呼ばれるとたいそう腹を立てたものだった。彼のみならず、かの勇士たちの前でオニオン騎士は禁句だったよ」

「へえー……」

たけきところは盛んに話しながら一方で、昔話を聞いて頬を紅潮させている少年たちの傍らに、自分も畏まつて同じようにしているような、奇妙な錯覚を覚えていた。顧みれば話自体も、半ばからは自分に話して聞かせていたようにも思える。

（わたしはきつと）と、たけきところは思った。（こんな話を、コスモス勢の意気盛んであつた頃の話をして、誰かにして欲しいのだろう。この耳に吉報は絶えて聞こえないのだから）

「……すっかり話し込んでしまったな。ミーが来たら、わたしはもう帰ったと伝えて欲しい。君たちもじゅうぶんに別れを惜しんでくれ」

言って踵を返すと、少年がその背に「待って下さい、お願いがあります！」と声をかけた。

「たけきところよ、ぼくを兵士にして下さい。あつきちしおには何度もお願ひしていたんです」

たけきところは向き直ると、じっと少年の顔を見つめて、ややあつて「そして彼はなんと」と返した。

「いずれそのうちとか、いつかきつとか、そろそろだがまだとか……今度の戦いだって、ぼくは行くつもりだったんだ。でも彼はいろいろ言つてうやむやにして……こんなふうになってしまつて……」

そのまま泣き出すかとも思われた少年は、しかし不敵な光を目に面を上げて、「必ず役に立ちます。お願いです、あなたの下で戦わせて下さい！」と言つてあたまを下げた。

「おれも……おれもあなたの下で！」と、ヤンも少年に続く。「おれだって戦えます。その日のためにずっと訓練をしてきたんです。

おれは背も高いし、力だつてこいつよりあります」「背が低くて悪かつたな。ヤンは伝令使じゃないか！ ひよろひよろのつばに兵士なんか務まりっこないさ」

「お前ずるいぞ、こういうときにそんなお願ひして。おれのほうがずっとなりたかつたんだ。ちびは引つ込んでるよ、^{あぶみ}鎧に足が届かないくせに」

たけきところはしばらく、ふたりの言い合つのを黙って聞いていたが、少年の旗色が悪くなってきたところで、

「二人ともそこまでだ。死者は静寂を好む。彼の安眠を妨げるものに、わたしはなにをも与えることはないだろう」

制止した。彼の「なにをも与えることはないだろう」の言葉にむしる期待を煽られて、少年たちは示し合わせたようにぴたりと黙つた。

「……少年よ、君を兵士にすることはできない」

「どうして！」

「子どもだからだ。 ヤン、君もだ」

「おれは子どもじゃ」

「君は子どもではないかもしれないが、伝令使だ」彼にとつてヤンは子ども以外の何者でもなかったのだが、それには触れずに静かに続けて、「わたしと、しろきかいなど、あつきちしおの三人が任命した。指揮官である彼らは、それが少なくともいま現在の、ヤン少年の適任だと判断してそうしたのだ。それに違反すれば彼らは報復を考えざるを得ないだろう」

「……………」

「くそつ、いつもそうだ……子どもだから、ちびだからって。ぼくは十分に戦えるのに。みんな勝手なことを言っつてぼくを爪弾きにするんだ……………」

ヤンはさすがに慚然とし、少年は遅ればせながら悔し泣きに泣き出した。

（昔話をしたことで期待させてしまったか…………）

「ヤン」と、たけきこころはなるべく明るく語りかけた。「話に夢中で忘れていたが、あつきちしおの友人であつた君に、形見分けをしなければならなかった。この腕輪と腰帯を、あつきちしおの名代として君に贈ろう。受け取ってくれるかな」

ヤンは一転、しばらくぼうつとしたあと、「よ、よろしいのですか！」と上擦つた声をあげた。

「いいとも。 これを着けているところをクレアルコスやカミルラに見つかったら、わたしが君に贈つたと言いなさい。彼らはきつとたいそう悔しがらるだろうが…………」

「…………着けないでおきます。でも、ありがとうございます！ すぐいい、こんな立派なものを」

（そう、もういいのだ。オニオン騎士は解散したのだから。腕輪も腰帯も、もはや在りし日の彼らを偲ぶよすがとすべきではない）

「少年よ」と、今度はヤンの傍らで物欲しげにしていた少年を手招く。「ヤンに遣って君に遣らないという法はないから、君にも形見分けを。このオニオン騎士の旗と肩章を贈ろう。受け取ってくれるかな」

「はい、ありがとうございます」それは友人の贈られたものと比べて格段に見劣りがしたので、少年はまったく素直に「嬉しくなさそうな」表情を浮かべた。

「少年よ、君はまだ子どもだ」

「はい」少年は父親の説教の終わりかけた子どものような態度を取っている。

「だがじきにそうでなくなる。当節は兵が足りない。そのときはたとえ君が否んでも、ぜひわたしの麾下に加わって貰おう。あつきちしおは口約束だけだったが、君がそれを不服と思うのなら、たけきこころはこの約束に対してふさわしい証を与えるだろう」

言って、たけきこころは遺品の二剣を取り上げた。少年が二人揃って「あつ！」と声をあげた。

「これはあつきちしおがユツグより受け継いだもの。ガーランドの手によって斃れたユツグの無念を晴らさんと、彼はこの剣にミスリルと玉髓とで造った鞘を合わせ、自らの血を絞ってカオスを呪う詩を刻んだ」

長剣の口金を緩めて鞘から一寸ほど^{インチ}払うと、数百年を経たものは思えないほどの清澄な耀きが漏れ出でた。

「ユツグは二剣を巧みに操った。しかしわたしに彼の真似はできそうにもない。この長いほうを、わたしは形見分けとして頂戴しようと思う。君にはこの短いほうを約束の証として与えよう。この二剣の強靱なアダマタイトの刃は、あまたの甲冑を？んでかつて一度として毀れた^壊ことがないという。長さも君にはちょうどいいだろう」

三呎弱ほどの美しい短剣である。それを鞘がらみに少年に差し出す。受け取る手は小刻みに震えていた。

「少年たちよ」と言って、たけきところは二人の肩を掴んだ。「君たちの初陣は　我々ができるだけその到来を遅らせるよう努めてきたのだが　そう遠くない未来に控えている。いまや敵の刃は我々の喉もとに迫りつつあるのだ。コスモス軍は今日、この上もない勇士の死にかつてない痛手を蒙ったが、しかし彼の友人たちがこれによって奮起し、彼に代わってみな力になってくれるに違いないと、わたしは信じている」

「なります、もちろんなってみせます！」

二人とも先ほど志願を断られたことなどすっかり忘れて、今にも武器を取って駆け出していきそうな雰囲気である。この幼い二人に戦況を覆しうる何事をも期待することはできなかつたが、贈物を抱えてはしゃぐ彼らを見て、鬱ふさぎがちになっていた心が明るむのを彼は感じていた。

「ではわたしは戻るから、ミーに宜しく言っておいてくれ。二人とも大切にな」

天幕を出しなに振りかえると、少年たちは今ほど手に入れた品々を見せ合っているところだった。

アカルタエ以下百人は律儀に天幕の外で待機していた。天幕からたけきこころが出てくるとすぐ、真つ暗闇の中に忽然と明かりが灯った。ミルトが彼の姿を認めたのだらう。兵たちの無言の視線が、甲冑の鈍い照り返しとともに彼に注がれた。

「諸君、ご苦労」と言ったなり、野営地の奥のほうから無数の足音が近づいてきたので、彼は機を逸して黙った。明かりがないので目には見えないが、どうもあまり整列していないようで、兵士がたてる物音にしては猥雑のきらいがある。護衛兵たちも彼を注視するのは止めにして、なんとなく音のするほうへ目を向けている。

「ルーカンの部隊でしょうか」

たけきこころはぎよっとした。いつの間に近づいたものが、アカルタエがすぐ横に立っていた。

「向こうはあなたの天幕があるだけです」

「どうか　ルーカン！　この部隊はルーカンか！」

と、ふいに大声を出すと、狙いどおりアカルタエは吃驚して跳びあがった。ささやかな復讐は果たされた。

「大きな声を出さないでください」

「指揮官どのか」

だいぶ丘寄りの方角から声があがった。ルーカンのものではなかった。ミルトの杖が声のほうを向いて、それでこちらに歩いてくる青年の姿が明らかになった。始めて見る顔で、後にこれも見知らぬ少女を伴っている。両者とも若い。

「指揮官どの？」と、青年はもう一度確認した。

「光の戦士のことを言っているのなら、そつだ」と、たけきこころは肯った。

「わたしに用事があつて天幕へ？」

「ああ」

「君は……カミルラかルーカンの兵か？」

問いかけの途中でクレアルコスと言っていた混成部隊の存在に勘付いた。青年たちは恰好も兵種もちぐはぐで、あまり纏まっているという印象を受けない。彼の眉間に走る、刀疵と思しい跡がことさらに目に留まった。

「違う。そのカミルラのことであんたに話がある」

アカルタエの気配が硬くなるのを感じた。止める暇もあればこそ、彼女は「兵士よ、口の利き方に気をつけなさい」と青年に言い放った。青年の溜息がかすかに聞いて取れた。

「指揮官どの、カミルラが何人か連れて檻に向かった」

「……カミルラか」

「これまでも何度か見てるが、已めさせたほうがいい」

「君はカミルラが檻で何をしているか知っているのか」

「私刑だろう」青年はあっけらかんとしている。

（カミルラ……根は深いようだ）

「君はそれを伝えるに天幕へ？」

「ああ」

「こんな大勢を、それも武装した兵を引き連れて？」と懐疑的にアカルタエ。あまり彼に良い印象を抱いていない様子である。

青年は眉ひとつ動かさずに淡々と「斥候が行方を絶つたとクレアルコスから聞いた。今は厳戒中で、おれたちは武装を命じられている。天幕へはひとりで行こうと思つたが、行かせてくれないから連れてきた」と言った。

（ああ、ではやはりこの青年が……）

アカルタエはちよつと黙つて、きつい声で「あなたはどこの所属？ 部隊長は？」と尋ねた。

「部隊長の名前はスコールだ」

「……たけきこころよ、聞いたことはありませんか？」

「……つい最近、しろきかいなが任命したそうだ」

(面白い青年だな)

無表情、無愛想きわまる青年だったが、なぜかおかしみを感じさせる。あえて名乗らずにしれっと部隊長の名前　むろん青年の名前に相違ないが　を告げたのも、彼流の諧謔かいぎやくと取れなくもない。

「君の事情はよくわかった。すぐに向かおう」

言つてミルトを手招くと、アカルタエが慌てて「駄目です、檻へは行かせませんよ」と釘を刺した。

「パウサニアスからよく言われていますから」

「事情が事情だ。聞いていただきます」

「いけません。危険です」

「危険なのはわたしではないよ」

「いけませんったらいけません」

「さて参つたな」左手が知らぬうちに、ユツグの剣の柄頭についた房を弄つていた。あつきちしおならこういうときにどう出る？

きつとアカルタエを投げ飛ばして檻に走ることだろう。「君が譲ってくれないと、ここでずっと立ちんぼうだ」

「お願いです、あなたを通したらパウサニアスに叱られます」

「君も憐れだが、檻の彼女はその比ではあるまい」

たけきころろがこう言うと、アカルタエはちよつと逡巡してから小声で「彼女にはふさわしいのでは？」と言つた。

(ふさわしい？ 私刑にふさわしいと言つたか！)

「アカルタエ」たけきころろはほんのいつとき激情にかられて、周囲の兵の竦むほどの厳しい声を上げた。

「はい」彼女の面はじきに激しい後悔で彩られた。

「君の口からそんな言葉を聞きたくはなかった。あつきちしおが今ここにいたら、何と言つて君を罵つただろう」

「……申し訳も」

「指揮官どの、行けないならそう言つてくれ」と、青年が焦れて言つた。「駄目ならしろきかいなをあたる」

「アカルタエ、君はすぐに檻へ向かって、わたしがこう言っていたとカミルラに伝えなさい」先程とは打ってかわって優しい口調で、「今は厳戒中である。そのさなかに私情で軍律に背くものの事情などいっさい考慮しない。ただちに今やっていることを中止して、命じられていたことに従容と服するか、命令を二度無視した廉で兵ともども処刑されるか、いずれかを選べと」

声とは裏腹に、内容は冷厳きわまる。アカルタエは青くなって「仰せの通りに」と言った。

「この百名も連れていくといい。彼らを背景にしたほうが話も早いだろう」

「はい。いいえ、いけません。わたしひとりで行きます。あなたを独りにするわけには」

「ちょうど交代要員が来てくれている」と言っつて、たけきところは青年に笑いかけた。「君がそれほど心配してくれるのなら、それでは彼に天幕まで送ってもらおうとしよう」

「……仕方ありません」アカルタエは胡散臭そうな視線を隠さない。「兵士よ、部隊長を呼びなさい。わたしからいくつか伝えておきたいこともあるので」

「……」青年はいわく言い難い表情を浮かべている。突っ立つたまま誰かを捜しに行く気配は見せず、代わりに後に控えていた少女を振り返って、「……イーデイス、部隊長を呼んできてくれ」

果たしてイーデイスはしどろもどろになるばかり。「早くなさい。なにをしているの」とアカルタエも中つ腹になる。このあたりで堪えきれなくなつて、たけきところは嘔き出してしまった。

「な、なんです。なにが可笑しいのですか」

「いやいや、いとも親愛なるアカルタエよ！」声をあげて笑う彼が珍しいのか、アカルタエ以下百名は目を瞠っている。「安んじて檻に向かいなさい。というのも、部隊長はすでにここに来ているのだ」

「は？」

「さあスコール」親しげに青年の肩に手をかけて、「ご苦労だがわ

たしと一緒に天幕まで来てもらおう」

「ええっ？」

ようやく青年の正体に気付いて、アカルタエは素つ頓狂な声をあげた。少なくとも席次のうえでは、副官より部隊長のほうが上であるから、彼女は知らず目上の人間に対して露骨に礼儀を要求していたことになる。が、この期に及んでもスコールは特に気分を害した様子も見せず、無表情を貫いていた。

「たけきころよ、知っていたならどうして教えてくれないのですか！」

「わたしも知らなかったよ、つい先程まで」

「知っていたらあんなことは……スコール、失礼を」

スコールは黙って肩を竦めた。気にしていないと言いたいのだろう。

「お互い口の利き方には気をつけようではないか、アカルタエ」

「……お恨みますからね」

アカルタエは膨れたままぷいと背中を向けた。兵たちに号令して、先程スコールたちがやってきた方へさっさと行ってしまった。

「スコール、君の前歴はだれの副官かな」

「副官だったことはない。前籍はトリーネの部隊だ」

（それでは……よほど能力を見込まれたことなのだろう）

将卒ともに足りない緊急時であることも手伝ったのだろうが、それでも一兵卒がいきなり部隊長に格上げされるといっはかつてないことであつた。

「混成部隊ということ遣りにくがるうが、よろしく努めて欲しい」

「断つたが、承知してくれない」

スコールの無表情が少し歪んで、うんざりしたような色が薄く浮かんだ。しろきかいなとトリーネが苦り切つた青年を挟んで、よしなにと拝み倒す光景がありありと浮かぶようだ。

「こんなのは柄じゃないが、やるからには失望させない」

「その言葉を聞いて安心した。イーデイス、君は元カオスとい

うことだが」

「はいっ」

呼ばれた少女がぴしっと気をつけの姿勢を取った。女性にしても小柄かつ華奢で、武器らしいものは持っておらず、着けている革の胸甲は寸が合っていない。兵士たちに囲まれていると異様に浮くいでたちである。

「何ヶ月か前にごく少数の投降があった、君はあの中にいたのか」「そうです。そうです」

エクステスの台頭より連綿と続いてきたカオス勢の寝返りは、奇妙なことにコスモス勢の圧倒的劣勢という事実を見ても止まることはなかった。至聖殿からの援軍をほとんど恃めなくなっているコスモス勢にとっては、それは皮肉にも貴重な増兵の機会には違いない。軍内部によほど耐えがたいなにかがあったのか、脱走兵はいずれもかつての敵軍に対してかなり好意的であった。単純に自軍物資の節減のために彼らを追い出したのか、それともわざと悪意を示して彼らの叛意を促し、こちらに寝返らせて食糧資源の窮乏を加速させる意図があるのか。しかしいずれにせよ、カオス勢が脱走兵の存在によって兵力を減ずることはまずなかったと言っている。

（もはやカオス勢はエクステス以外の兵を必要としないのか……）

「イーデイスよ、古巣を攻撃するのだ、ためらいもあることと思う。あるいはかつての戦友の斃れるのを見ることになるかもしれないが、今後は割り切ってコスモスの為に奮励努力して欲しい」

「はい。でもその、戦ったりはちよつと」

「君は兵士ではなかったのか？」

「はいそうなんです」

寝耳に水だった。兵が一足飛びに部隊長になるのも型破りだが、非戦闘員が士官になるなどは想像の範疇を超える。

「……カオス軍にいた頃はなにを？」

「あのおう、騎鳥の世話を。チヨコボ、好きなんです」

「……………」

「ここは切れる」と言つて、スコールは自分の頭をトントンと突いて見せた。「あとは逃げ足が速い」

「彼女はしろきかいなが？」

口調はどうしても「なぜ彼女を？」との底意を隠しきれず、イーデイスは俯いてちよつと悄気た。

「いや、おれが選んだ」

イーデイスは救われたように面をあげた。

「頭が切れるから、か？」

たけきこころの問いに、スコールはあらぬ方を向いてしばし黙考したのち、いみじくもこう陳べた。

「預けられた兵の中で、彼女がいちばん弱かった。とても前には出せない」

その檻は森の中に置き去りにされた、忘れ物のような印象を見るものに与えた。

人間が百人も収容できそうな、方形のかなり大型のもので、間仕切りはない。一面だけが格子になっている。中は存外牢屋ふうとは見えず、ひとの住むに不足のない造りになっていたが、いずれにせよこの中で暮らすことを余儀なくされた人間にとつて、そんなことは大した慰めにならないだろう。辺りに人気じんぎは絶えてなく、ごくまれに顔を見せるモーグリと虫の音と、葉叢に半ば隠れる月明かりのほかは、ただ折々木間を吹いてくる微風が孤独をそよがせるばかりであつた。

「テイナ、起きてる？」

檻の中に声をかけると、真つ暗闇の奥でなにか動く気配があつた。「待つてて、いま明かりをつけるからさ」

少年はうずくまって、小さなナイフに燧石を打ち付けて火を熾している。灯心に飛び火すると闇の中に狭く、橙色の世界が浮かび上

がった。

「ランプあつたよね。なかつたっけ？」

「うん、割れちゃつたの」

闇の中から毛布にくるまった少女が這い出てきた。

「ティナ、その顔！」

格子越しに照らし出されたしろい顔の、額やこめかみに痣と血痕とが醜い跡をつけている。檻の中にはおそらく彼女の顔を痛めつけた原因であろう、大小さまざまの石が転がっていた。

「くっそ……もう来ないと思つてたのに！」少年は悔しがって檻の格子を力任せに蹴った。格子はびくともしない。「こんなのつてないよ、絶対たけきところに言つて酷い目に遭わせてやる！ ティナ、カミルラでしょ？」

少女は途方に暮れて「わからないわ」と呟いた。

「ぜつたいカミルラだ、許さないぞ」

「やめて。ここに来たことがばれるわ」と言つて、ティナは格子を掴んだ。しろく繊細な手指にささくれたような傷が走っている。頭を庇つたときにできたのだろう。

「わたしのことはいいのよ。それに、今日は他のひとたちが来て止めてくれたの。きつとそのひとたちが取りなしてくるから……」

（今日は？ それって、いつも来てるってこと？）

少年は齒噛みして、腰に下げた短剣の柄頭を折れよとばかりに握りしめた。

（なんでティナがこんな目に遭うんだろう。こんなに優しく可愛いの……）

実際、ティナはたおやかで容姿も可憐で、ひとに恨まれるようなことはしようと思つてもできないような少女であつたし、その見た目からも迫害の原因になりそうなものはとても見つけられなかつた。まつたくのところ彼女に比べれば、その辺りにいる見も知らない人間のほうが、よほど石を投げつけるに足る理由を見出し易いことだろう。

(そもそもどうして檻なんか？ 食事も満足に貰えない、おまけに毛布一枚で服も与えられないなんて、捕虜以下の扱いじゃないか！)

ティナという少女は、少年がどこかの世界から喚び出されてコスモス勢に加わったとき、すでに檻の中で今と同じような境遇にあったのである。周りの人間に理由を質してただも檻を訪うたことを咎められるばかりで、答らしい答を得たことはなかった。

(ぼくが部隊長だったら……)

と、夢想するのも虚しいひとり相撲である。少年はやるせなく溜息をひとつついて、気を取りなおして負っていたはいのう背嚢を足下に降ろした。

「ティナ、食べ物もってきたよ」

丸麵麩と干しイチジクと、いっしょに葡萄酒の入った皮の水筒を取り出した。ティナは遠慮がちに受け取って、それでも嬉しげにそれにはくついた。が、ややあつてすぐに思い直したように顔を上げた。

「これ、どうしたの？」

「どうしたのって、なにがさ」

「軍の食糧、もうだいぶ減ってるんでしょっ？」

「なんで、知ってるの」

「……言ってたの」

「誰が。なんてさ」

「わたしに回す分は……もうないって」

(くそっ……落ち着け、ここで怒ったってなんにもならないんだ)

「盗ってきたの？」

正直にそうだと言えば、この少女はもう口に入れないだろう。かといって呑んでも信じはすまい。少年はとっさに思いついて、「もちろんティナの正当な取り分さ。ここに行くって言ったなら、たけきところに渡されたんだ」と胸を張った。

「たけきところ」

「そうだよ、今までだってそうさ。誰が盗むもんか、盗む必要がないんだからさ」

「ごめん」

「いいさ。ねえ、見てよ」

言つて、少年は腰の短剣を抜いてティナに示した。銅とも金ともつかない、アダマントタイトの瑰麗な姿を灯明にかざして、

「たけきところがぼくを信頼して託したんだ。最初のオニオン騎士、アーリアートゥス勇者ユツグの剣さ。ユツグって知ってる？」

「あなた、剣なんて……」ティナの秀眉が曇った。

「失礼しちゃうな、たけきところはぼくだから渡したんだよ。ユツグはこれを振るって敵なしで、あのガーランドだって一対一じゃぜんぜん敵わなかったんだ」

「あぶないわ……」

「あぶなくはないさ。ぼくはこれの使い方をちゃんと知ってるし、そのことはたけきところもよく知ってる。彼はすごいよ。」

同じ光の戦士でも、あつきちしおはぼくを子ども扱いしたけど、彼はちゃんと見てるんだ」

「そう」ティナはあまり関心がない様子である。

「そうだ。ねえティナ、ぼくのこと、今日からユツグって呼んでよ」「ユツグ？ でもあなた、名前のこと」

「それはもういいんだ。ひよっとしたら思い出すかもって思ったけど……」短剣を二度三度と振り回しながら続けて、「ユツグとオニオン騎士の話聞いたとき、なんかこう、カチツてなにかが嵌はまつたような感じがしたんだ。ひよっとするとぼく、ユツグの生まれ変わりなのかもしれない」

「あなたが気に入ったのなら、それでいいと思うわ」

「ね、呼んでよ。ユツグって」

「ユツグ」

「ティナ、もう少しだけ待ってて」拔身を握ったまま空いている方の手で、少年は格子を掴んだティナの手にちよっと触れた。「誓う

よ。このぼくが、オニオン騎士アーリアートゥスのユツグが、必ずここから出してあげるからね」

「……うん、ありがとう」

「じゃあ、もう行くね」と言って抜身を納めて、少年は踵を返してそのまま駆け出した。心地よい重みが腰で揺れている。左手に鞘を掴んで走ると、却って足が速くなるように思えた。

少年は心中複雑だった。少女の感謝に期待らしい期待のいろは見えなかった。ユツグと呼ばれた嬉しさと、ほとんど頼りにされていないことへの不満が、彼の足を交互に動かして急ぎ立てた。

（ぼくならできるさ。ぼくは最後のオニオン騎士、ユツグだ！ 決して誓いをおろそかにはしない！）

少年は駆けながら、今度はどこに盗みに入ろうかと思案を始めた。

だしぬけにコンコンと音がしたので、たけきところは反射的に立ち上がった。しろきかいは座ったまま船を漕いでいる。

深更である。普段はこんな時刻にひとが来ることはあまりない。

「はいれ」

すぐにコココンと応答があった。仕切が持ち上がって襞ひだの踊っている隙に、たけきところは長剣の鞘を払って訪問者に躍り掛かった。

「おっ、なにを　！」

「イミターテイオー幻像兵よ、その合図は少し古かったようだな」

喉元に剣の刃を擬せられて、入って来た青年は「そんな初耳だぞ、待ってくれ！」と混乱しながら両手を挙げた。降ってわいた喧騒にしろきかいは目を醒まして、「て、敵襲ですか！」と椅子を蹴立てた。

「たった一匹でわたしをどうこうできるとでも？　わたしを討つつもりならもう百人は必要になるぞ、ガーランドの走狗め」

「お、おれは本物だつて！　おいパウサニアス！」

外からの返事はない。しばらく青年の喉を締め付けたあと、たけきころはおもむろに青年を解放した。

「幻像兵ではないようだな。戻ったか、フリオニール」

「いきなり何をする！」

遅ればせながらパウサニアスが首だけ天幕の中に突っ込んできて、「このくらいの時間に来るとね、そういうことをするよ、彼は」と言っすぐ引っ込んだ。

「もつと早く言ってくれ！」

「それでは意味がないのだ。知らないものを試しに掛けなければ」

「……血が出た」

との声はまったく忌々しげである。刃を突きつけられていたところから、血のひとすじ流れているのを無闇に拭っている。ほどなく彼の手袋と首は赤まだらに血染めになった。

「ごめんなさいねフリオニール」

傍らにしろきかいなが寄ると、フリオニールの憤りはたちどころに鳴りをひそめた。いったいに裏表のない性格で、誰に対しても公平に接する青年であったが、なにか謂われがあつてのことか、彼は彼女にはひととき敬意を払って惜しまないのだった。そのまま首を絞めるような恰好で手を巻き付けられてもされるがままである。

ややあつてその手が外れると、フリオニールの首から傷は消えている。こびりついた血痕だけが、傷の幻でなかったことを証して残った。

「もう痛みませんか」

「ああ……ありがとう、きれいに消えました」

「すまないなフリオニール」

「まあ、いいさ。でも、ここまでする必要があるのか」

「許してくれ、我々も用心が必要なのだ、特にこのような非常の時刻は」

言つて、卓に伏せてあつた杯を取つて、天幕の隅に据えてある棚の前に立つた。フリオニールは言葉を待ってたけきこころの背中を見つめている。

「フリオニール、ウルフリードは」

「結論を言えば、いない」

たけきこころは無言で、灯し油や膏薬の入った壺の群を思案気に選っている。

「ただ……東に二、三哩ほど行った森の中で、騎鳥の死骸と矢がいくつか落ちていたのを見つけた。樹に刺さつたものもあつた」

「東？ 西ではなくて？」と、しろきかいな。

「クレウーサたちは」

「もちろん様子を見に行つてみたさ。それでちよつと遅くなつたん

だが 無事だった。カオス勢に動きはない。烽火台のうしに屋根をつけるとかつけないとかで盛り上がったいた」

コスモス軍は現在、山裾の森林地帯 カオス軍を迎え撃たんとしている山間の隘路から、東に三哩ほどの近場に駐屯していた。件の隘路を見晴るかす裸山のうえには、本軍にカオス勢の動静を連絡するために、クレウーサ以下弓兵二百弱が小規模の柵壘を営んでいる。彼女らが有事を伝えてこない限り、敵が山脈を挟んでこちらがわに来るとするのは考えづらい。

「フリオニール、飲むか」

「それは？」

柵から振り返ったたけきこころの手には、さきほど取った杯と透きのない硝子の壘びんとが握られている。獣類の腸で封をされたそれは飲料らしい。

「火酒ということだ」

「ということだ……って」

「イーディスという元カオスのひとが、あまつた葡萄酒と雑穀で造ったのだそうです」と、しろきかいなが注釈を入れた。「大丈夫、飲めますよ」

「の、飲んだんですか、あなたが」知らずに毒を呷あおったひとを見るように言つて、「あまりにも不用心に過ぎる。元カオスの造ったものを」

「ちよつとだけ」

「いとも親愛なる友パウサニアスが、我が身を顧みずに毒味役を熱望してくれてね」と、たけきこころは外に聞こえよがしに大声で、「遅効性の毒かもしれないなど言つて、結局この壘の半ばほどを空けたが、いまもびんびんしている。もつとも君の危惧するような事態になつたら、今ごろアカルタ工は泣いて喜んでるだろうが」

外からパウサニアスのものと思しき笑い声が聞こえた。

「わたしも少し飲んでみたんだが、かなり角があつてね。それで事後になつてすまないが、またちよつと君の花圃から失敬させてもら

った」

「今度はなにを持っていった」

それには応えずに、壘の封を外して杯に注いだものを黙って突き出す。茶褐色の液体にしぼんだ花がいくつか浮いている。

「スイカズラ？」

「結構いれてみたんだが、それでも克つ。強情な酒だ」

「材料が悪いんだろう」フリオニールは火酒をひとくち含んで顔を顰めた。「……またぜんぶ引っこ抜いたりしてないだろうな」

「フリオニールごめんなさい、わたしも二、三いただけでした」

「傷薬ですか？」

「鋸草と、それと石鹼草をたくさん。診療院で使うぶんだけでも、もう鉢植では足りなくて……」

「まあ、薬草なら二、三株くらい残しておいてくれれば構いませんが、花は事前に言ってもらわないといけない。いまは株数がないんだ」

たけきところは唐突に、あつきちしおの亡骸を覆っていた白い花のことに思い当たった。おそらく出所は彼の圃だろう。趣味にせよ実益にせよ、軍中で花を丹精している人間など何人もいない。

「……友よ、あつきちしおに代わって礼を。あの白い花は君だろう」
フリオニールはちよつと決まり悪げに「ああ」と言っつて、杯の中に目を伏せた。

「フリオニール、わたしからもお礼を。彼も喜んでいると思います

あなたからの饒はなむけならなおのこと」

「いや、彼のことだから、きつと気に食わないとか趣味が悪いとか言っているに違いない。それでいい、喧嘩の続きは向こうでやります」

この青年はやや直情型で猪突気味のきらいがあつて、あつきちしおに似ているところがあつた。似ているものどうし仲が良くなるものと悪くなるものがあるが、彼らは後者の典型で、顔を合わせればお互いにかしらい合ひ合うのが常だったのである。

「あれはなんとという花なのかな」

「野薔薇。好きな花なんだ」杯を呷って中身を飲み下す。「派手さはないが、しぶとくて、活力旺盛で、へこたれない。ついでに放っておいてもよく育つ。彼にびったりだ」

（それでも枯れたのだ、かの花は。コスモスの圃よりそれは手折られ去って、もはやふたたび咲くことはない）

「……フリオニール、舌がよく回るようになったところで、君の考えを聞かせてもらいたい」

「これは飲めたもんじゃないな」

「それもそうだが」たけきこころはちよつと笑って、「斥候の結果のことだ。なぜ敵のいないこちら側で交戦の跡が？」

「……迂回できるんだっただか」

「できるが 地図を」卓を振り返ったところで、しろきかいなが先行して地図を手にした。「ありがとう。迂回するとしたらここだが」

コスモス勢とカオス勢を分かつ山脈は、地図上でほぼ南から北へ走っている。ちょうど仕切のように大陸を縦断して、海に臨んで弓なりに西へ折れ返っていた。カオス勢が回り道するとしたら、この西に突き出た山脈を大きく迂回して北の内海に出て、さらにそこから船を使って、陸地沿いにこちら側 東側の浅い入江を目指さなければならぬ。山を避けるだけでも陸路でゆうに百と数十哩以上海路で三十哩ほど、上陸後さらに百哩以上の大行程である。ずっと陸路のまま南下してきたはずのカオス勢に船の用意のあるはずがなく、道程の長大なことも考慮に入れると、

「現実的ではない。それにもしカオス勢が反転するなり別働隊を派遣するなりすれば、クレウーサたちが手を拱こまねいているはずがない。ずっと以前から計画していて、同時に船の建造を進めていたと考えても、運送の都合が……いや、やはり現実性を欠く」

「だよな。それに」

「それに？」

「もし迂回したとしたら」地図に落としていた目がたけきこころの顔を捉えた。「この駐屯地より先に……至聖殿にぶつかる、よな」

「……………」
「……至聖殿の守りは？」

「イツアークとルークリース……たぶん、兵は五百もいません」

地図のうえで頭を突き合わせている三者ともども、その表情には苦渋のいろが浮かんでいる。兵力不足のために久しい以前から、すでに至聖殿の守備は最低限に落としていたのである。コスモスによる召喚をほとんど当てにできない現状、しろきかいなの出した数字はそれほど的外してはいないだろう。

「しかしどうやって迂回を……………」

「ウルフリードはひよっとしたら」と、しろきかいな。「なんらかの情報を掴んで、そのまま至聖殿に向かったのかも」

「あるいは至聖殿から使者が来て、それに行き会ったのかもしれないが」と、たけきこころ。「それでも我々に知らせずに行くとは思えない。彼女はそれほど粗忽ではないし、無謀でもないだろう」

「……もしかすると、遇ったかもしれない」と、フリオニール。

光の戦士ふたりは異口同音に「誰に？」と聞いた。

「その使者に、あるいはウルフリードの伝令にさ」

光の戦士ふたりは異口同音に「どこで？」と聞いた。

「さっき言った交戦の跡のことだ。死体はなかったが、騎鳥の死骸と矢があった。それが彼らのものかもしれない」

「つまり……どちらの使いにせよ、そこで敵に見つかるか追いつかれるかして、討たれたと？」

「死体がないのが妙だが……根拠のない憶測だ。そもそも至聖殿に敵の手が回ったと考えることじたい憶測なんだから」

（いつカオス勢が攻めてくるかわからないこのときに……弱った）

もし至聖殿が襲われているなら、無論ここを放棄してでもそちらに向かわなければならぬ。しかし確証のないまま取って返して無事な至聖殿を見出すだけならまだいいが、その間に無人の隘路を抜

かれればクレウーサたちはまず助からず、なにより自ら戦線を下げ
て窮地に飛び込むことになってしまふ。ひらけた土地に出てしまえ
ば、カオス勢の大軍がどれだけその脅威を増すか計りがたい。コス
モス軍は至聖殿に立て籠もって落ちるところまで落ちた士気の元、
カオス勢の圧倒的攻囲に対して絶望的な戦いを挑むことになる。

(では軍をふたつに分けるか)

この考えは結局のところ、隘路の防衛と至聖殿の救援のどちらも
為し得ずに終わる危険性がある。じっさい口に出すことは絶対にで
きないが、現在の兵力で隘路の防衛が成るかすらもわからないので
ある。その寡勢をこのうえ分かつなど自殺行為であることは言うま
でもない。

(やはり駄目だ……至聖殿に敵の手が回っていたとして、どのくら
いいるかもわからない。もし無事であったとして、行って帰ってく
るのにどれだけかかる?)

目下のところ、もはやコスモスの神慮だけが頼みの綱で、明日に
でもしろきかいなを至聖殿に帰還させて神意を伺わせようとしてい
たところだったのである。が、向こうの情勢が闇に覆われてしまっ
た今、それも迂闊にはできなくなってしまった。

「たけきころよ……ひとりで悩まないで。わたしたちに話してく
ださい」

「彼女の言うとおりだ。そりゃあ、おれじゃあんまり役に立てない
かもしれないが、聞くことくらいはできる」

たけきころはなおもしばらく黙ったあと、「斥候を出そうと思
う」と呟いた。

「軍勢でなくて?」と、フリオニール。

「軍は出せない。ここを空けることはできない」

「向こうには敵がいるかも。斥候が危険では」と、しろきかいな。

「確認せずに放っておけることではないのだ」すっかり手擦れのし
た地図を指でなぞって、「三百だ。それ以上は出せないし、どのみ
ち騎鳥が足りない。三百騎いれば威力偵察も可能だろう。確認でき

次第、敵がいてもいなくても帰陣する。往復百哩ほどの道程だが、騎鳥をめいっばい急がせれば……そう、四日目の暮れないうちには戻ってこれるだろう」

「四日、か。 敵さんが動くかどうか」

「我々はすでに半年ほど、この辺りに根を張っている。もう四日くらいは待つてくれるだろう」

「ガーランドが食あたりで寝込むよう祈るさ」

「フリオニール、伝令使の仕事を君に押し付けるのは心苦しいが、クレアルコスに今の話を伝えて欲しい。彼にこれといった異論がなければ明朝にでも」「たけきこころはすぐにかぶりを振って、」

「いや、すぐにでも向かわせよう。時間がない」

「誰に行かせる」

「……レアーティーズに行ってもらおう。彼はもともと騎兵だ、うまくやってくれるだろう。とにかく騎鳥を急がせなければならぬ。できうる限り軽装で、食糧も最低限にする。不足の兵はわたしの麾下の人間で補うように、パウサニアスに伝えてくれ」

天幕の外から「了解」と返事が返ってきた。一様に眉根の寄っていた三人の表情がふとほころんだ。

「友よ、耳のいいことだ！ 彼のおかげで内緒話もままならない」

「入れてやればいいのに」

「外のほうがよく聞こえるのだそうです」

パウサニアスが天幕に入ろうとしない本当の理由を、たけきこころは知っていた。どれほど親しく言葉を交わしても、光の戦士たちに対する並々ならぬ敬意と忠誠が、彼をして一線を踏み越えることをさせない。コスモスの巫覡ふけき、ただの人間ではない ひよつとすると人間ではない 彼らに、パウサニアスは声をかけこそすれ決して触れようとはしないし、ひとがみだりに触れたりすることを好まなかった。天幕の警備を自ら買って出て、護衛に大人数を割いて憚らないのも、そんな理由に基づいているのだろう。

（あるいは彼も……）

「……なんだ？ なにか付いてるか」

「いや。すまないが、すぐに行つて欲しい」

「わかった」

「ああ、ちよつと待つてくれ。これを」呼び止められて振り返つたところに先程の火酒を突きだして、「外で盗み聞きをしている彼に渡してくれ。それとも君が飲むか」

「いや、いい。これはちよつと飲めない」

「飲まないのでしたらわたしが」

「そうか、ではパウサニアスに。彼はこれが好きみたいだから」

しろきかいなは不服そうにしている。

「わかつた……けど」

「いいのだ、彼女は飲むと眠りが深くなる。こういうときでなければ好きにさせてあげたいが……」

「いいですよ。持つていつてください。わたしはお茶を飲みますからね。あなたから貰つたお茶をね」

先程たけきところが選つていた棚の前までとぼとぼ歩いていつてしろきかいなはそこにしゃがみ込んだ。丸めた背中に「お茶じゃ不満だ」と書いてあるのが読み取れるようである。

「行つてくれ。すまないな、帰つてきて早々」

フリオニールは応える代わりに、たけきこころの胸を軽く突いてにっこり笑つた。

彼が出て行つてしまつと、天幕の中は静かになつた。棚でお茶を用意するこそそした音が聞こえる。地図をなぞつて今後について思案に耽つてみようとしても、静寂の中であるのになかなか抄らなかつた。伝令はアカルタエに行つてもらえばよかつたと、彼は少し後悔した。却つてフリオニールが隣にいてあれこれ喋つてくれたほうが、よほど思索も抄はかがゆくように思われた。

（フリオニール……彼はパウサニアスとは違うようだ）

しろきかいなが熾を突きながら「あなたも飲みますか？」と肩越しに振り返つた。

未明。天幕の外に兵たちの蠢くかすかな物音を聞いて、たけきこころは垂れていた頭をあげた。天幕の闇は闐然げきぜんとしている。夜は光の戦士たちの、コスモスへの祈りの時間である。

すぐ隣には彼と同じような恰好で、両膝について手のひらを合わせたしろきかいなの姿がある。蠟燭の仄明りに白いクロークの肩がおぼめいている。微動だにしないので眠っているのかと思えば、ちらとこちらに顔を向ける。薄闇のなかで定かならぬ面には「なにかありましたか？」と書いてあった。

「交代だろう」と、たけきこころは囁いた。しろきかいなはまた無言のまま俯いた。

コスモスに祈りを捧げる二人を気遣って、天幕を衛る兵たちはめいめい音を立てないよう慎んでいる。彼らはそれが間接的にでも、現在の戦況によい影響を与えることになるかと信じてしているのだが、実のところ神の声は久しく遠い。かつては四人の戦士たちに等しく有益な助言を授け、時には目に見える奇跡を下賜くだすことすらあったコスモスの神佑は、いまではその声も壁の向こうで囁いていくかのようにかすかなもので、理解は日を追って困難になっていく。なにかを伝えたいという意志だけは明確に感じ取れるので、目を瞑って両膝について、瞼の闇に身を沈めて一心に祈っても、得られるのは神の声を聞けない焦りのほかは、その祈りの場を整えてくれる兵たちへの申し訳なさばかりであった。

「……しろきかいなよ、神の声は如何に」

囁くのでなく、普通の声調で、たけきこころは聞いた。祈りの時間は能うかぎり音を立てないようにというのが決まりであったので、しろきかいなは応えの代わりに訝しげな視線を返してきた。

「どうしました」

「なにか聞こえたかな、あなたは」

祈りの途中で彼がこんなことを聞くのは初めてだったので、彼女は訝しむというより多く困惑したふうを見せた。

「あなたこそ。らしくありませんわ、なにか聞こえたのですか」

「らしくないのはわたしだけではないようだ。あなたも聞こえない、そうではないかな」

しろきかいなはちよつと言い淀んで、「はい」と肯った。

「已めよう。夜明けまで三時間はあるだろう。あなたは少し休むといい」

立ち上がると膝が痛んだ。以前は膝台を使ったものだったが、神の声の遠くなつてからはそんなことすら祈りに影響するのではないかと考えて、自らの安樂の助けになるようなものは意識して排するようになった。無論、結果は変わらなかったのだが。

「今日、いや、昨日になるのか、久しぶりに軍営を歩いてみた」

祈りを已めるわけにもゆかず、たけきこころの言うことを否むわけにもゆかず、しろきかいなは妙な折衷の末に跪いたまま彼のほうへ向き直った。その眼は不意に藪から飛び出てきた珍しい動物を目の当たりにしたような、にわかな好奇心と不安に漲っている。

「わたしは昨日、居眠りをした。疲れは言い訳にならない。落ち込んだ。ついあなたに愚痴も言った。今日は、いや」「たけきこころはちよつと笑つて、「昨日だった。昨日は、わたしたちを打ちのめすに足る悲報の齎された日だった。嘆きの日だった」

しろきかいなはじきに態度を軟化させて、「はい」と頷いた。ほんの十時間ほど前に、彼が少しく彼らしさを逸脱してもおかしくないほどの衝撃のあったことを、彼女はようやく思い出した。

「パウサニアスが護衛を百人もつけてね、そのなかでほんのこれくらい、子どもの兵士に会った。軍営では兵士になりたがっている少年や、あなたの任命した変わった青年にも。スコールは檻にいるティナにカミルラが私刑を加えるのを見かねて、わたしたちへ注進に来るところだった」

「わたしは……わたしはティナが憐れでなりません。カミルラも憐

れです。ふたりとも自らに最も似合わない、ふさわしくない役柄を割り当てられることを余儀なくされています。カミルラはそのままに?」

「いや、アカルタエに言つて已めるよう伝えた。あんなことはどちらのためにもならない。ならないが、カミルラは折に触れてこれからもそれを続けるだろう。二千人分の恨みは晴れたと彼女が得心するまで。そしてそんな日は永遠に来ないのだ」

「……………」

「わずかな時間だったが、色々なことがあった。それで、この天幕に戻ってくる頃には、わたしはすっかりとはいかなくても、元氣になった。明るくもなった。繁くみなと交わりあうというのは、やはりいいものだ。さときまなこもあつきちしおも、兵たちのためだけにそうしていたのではなかったのだろう」

「……………そうですね」

「あなたも機会があつたら、診療院以外のところへも行つてみるといい。ただ護衛は大勢つくが」

「パウサニアスはわたしにもきっかり百人つけますよ」

「しろきかいなよ」

「はい」

「……………我々は勝てるだろうか。光の戦士はふたりになってしまった」「あなたらしくないですわ、ほんとうに」しろきかいなはちよつと笑つて、「まだふたり残っているのです。そして影の騎士はひとり。二対一です」

「我々にはもう後がない」

「わたしたちだって、渾沌の神殿を眺望に捉えたことがありました。そのときガーランドめはどうしました? 彼奴は力と謀を以て、わたしたちをここまで押し返しました。彼奴きやつにできてわたしたちにできないことがありますか」

「コスモスの力は衰えたのだろうか。それとも我々は見限られたのか」

「心にもないことを言うのですね」

「それとも……それでは……それではこれは罰か。七千もの無辜の兵を殺戮し、賜った兵を今日まで削り殺し、兄弟を戦場に置き去ったわたしへの、これは罰か」

「愚かなことを」と、優しく言つて立ち上がつて、しろきかいなは正面から彼を抱きしめた。「兄弟よ、あなたも天幕を出るまでは落ち込んでいたでしょう？ でも帰ってきたときは元のとおりになっていました。コスモスもきつとお気をお落としになって、それでわたしたちのところへいらつしやる途中なのでしょう。いまにきつとお声も元の通りに聞こえるようになります」

「……しろきかいなよ、アリス・ウァリドゥラスたけきこころの字はあなたにこそふさわしい」

ややあつて体を離すと、しろきかいなは名残惜しげに彼の腕を取つて、「あら、でもあなたの腕はあまり白くないですわ」と戯けた。

と、この彼女の言葉の終わらぬうちに、入口の向こうから、
「たけきこころよ、祈りは終わったのかな」

押し殺したような声が聞こえた。パウサニアスのものである。祈りの時間を憚らずに声をかけてくるのは至極めずらしい。というより、彼の場合はじめてのことだった。

「ああ、終わった。どうした」

と、たけきこころが言うや否や、天幕の中に彼の頭がにゅつと入ってきて、「こんな時間に恐縮だがね、ちよつと出てきてくれないかな」と言った。

(こんな非常の時刻に……烽火が上がったか！)

「わかった。すぐ出る」と応えて、たけきこころはユツグの長剣を掴んで天幕を飛び出ていった。

「パウサニ阿斯」

異変は一目で知れた。この時刻に幕営一帯に明かりがついている。そのちらちらと不規則に明滅するのは、兵たちが忙しく行き来しているせいだろう。

「来たね。カミルラ、ニューラーズ、役者が揃ったよ」

篝かがりがそこかしこに焚かれている。天幕しつぽの設えられた丘には、光の戦士麾下の親衛兵のほかにも多数の兵たちがひしめいていた。パウサニ阿斯、カミルラ麾下の重装歩兵と、ニューラーズ麾下の弓兵である。長弓に張られた弓弦が非常時であることを如実に証している。

「烽火のろしが上がったか」

「いえ、少なくともガーランドではないようです」

と応えたのは、パウサニ阿斯に続いて現れた背の高い女である。

長い髪を身動きの邪魔にならないよう結び上げて、周りの兵たちと同じように甲を身につけている。アカルタエと同じに胄を持たず、やはり同様な楯を携行していた。

「カミルラ、なにがあった」

「敵襲です」と、短く言っただけ、幕営のほうから遠く鬨とぎとも叫びともつかない声と、聞き間違えようもない、干戈を交える音が戛然と響いてきた。「もう幕営に！」

(なぜここに敵が……やはり迂回した軍がいたということなのか)

「手短かに状況を。あと君たちは何人連れてきた」

「ついさきほど檻を巡廻していった兵たちが、とつぜん何者かに襲われたと言って引き返してきました。損害は軽微です。ただちにクレアルコスの指揮でフリオニール、ルーカン、アグリアス、トリーネ、エリーチェ隊千三百が檻と駐屯地の間に布陣、スコール隊三百は幕

營に待機中。ここには八百ほど」

「急襲されたのか。見張りはなにをしていた」

「それが……わからないのです。気づいたらいつの間にか背後に、包囲の内側に軍勢がいたと」

「……パウサニ阿斯、レアーティーズは発ったな」

「うん、参ったね。君の兵から二百を貸した」

（総勢九百か）

遅ればせながらしろきかいなが天幕から出てきて、ニューラーズとなにか問答を始めた。

（しろきかいなをここに残すとして、誰を守りに？）

丘に集った将卒ともども、たけきこころの動静に視線を集中させている。ふと思案中に、脳裏に妙な連絡が起こって、居眠りをして倒してしまったピンのことが忽然と思い出された。

（ニューラーズ、パウサニ阿斯、エリーチェ……）

「諸君、聞いてくれ」と、周囲のものの注意を引いて、「ニューラーズ、パウサニ阿斯はここで天幕を衛つて欲しい。カミルラ、君はわたしとともに来てくれ」

「たけきこころよ、そりゃあない」と、パウサニ阿斯が声をあげた。

「君が戦場に行つてわたしが行かないなんてことがあるかい」

「パウサニ阿斯、わたしの言うことに従ってくれ」

「できない、こればかりは聞けない。わたしに残つて君の埋葬の準備をしると？」 冗談じゃない」

「こちらも冗談ではないのだ友よ。時間がない。従わないなら君を処罰するぞ。ここに残つてしろきかいなを護つてくれ、パウサニ阿斯」

「わが将」と、カミルラが小声で言い出て、「時間がありません、わたしは先行して幕営に向かいます。御身はセシルが」

と、後に控えていた、面立ちの女のように整った青年が進み出てきて、カミルラの要請を肯った。

「よくお守りして、お願いねセシル」

「あなたも気をつけて、戦場で会おう」

カミルラは二百人を引き連れて、物の具の音も賑々しく丘を下っていった。彼女らの行先、幕営の端にちらほらと赤いものが揺らめいている。天幕が燃えているのであろう。

「パウサニアス、二度とは言わない。ここで天幕を守ってくれ、いいな」

「……わかった、わかったが」

「ニューラーズ、しろきかいなを頼む」

「いざとなったら抱き上げて走りますよ。その時が待ち遠しい」ニューラーズは図太く笑った。

「たけきこころよ、せめて甲冑をつけてくれ！ その態^{なり}じゃ危険すぎるー！」

珍しく泡を食って慌てる隊長の姿に、傍らのアカルタエは言葉もなく瞠目している。

「セシル、行こう」

「矢が飛んでくるんだよ！」

「君が抱き付くか？ 友よ」パウサニアスに向かって笑ってみせて、君ならいつでも歓迎だ」

パウサニアスが絶句したところで、「待つて下さい！待つて下さい！」との叫び声とともに、兵たちの間からヤンが押し出されてきた。いったいどこから調達してきたのか、彼の長身にびったりあった甲冑をつけ、右手に槍を、左手に騎鳥の手綱を握っている。腕と腰にはあつきちしおの形見が、篝の炎に照らされて赤々と輝いていた。

「なんとかこの鳥だけは曳いて来られました。これに乗^まってください」

「スポリアートル……」

珍しい漆黒の羽をもつ大型のチョコボで、亡きあつきちしおの愛鳥であった。長い首をもたげて、ひしめく兵たちを怖気もなく左見^{こみ}右見^{こみ}している。ほんの一瞬、その背に大柄な戦士が跨っているのを

見たような気がして、たけきところは言葉を失った。幻の戦士は彼に向かって首を振ったように思えたのである。

「ヤン、なぜ武装している」

「なぜって、敵が」

「槍をよこせ」有無を言わず槍をふんだくる。「それは君が曳いているのだ。歩兵の群にひとりだけ騎乗しては、射殺してくれと言っているようなものだ。わたしには必要ない」

さだめし喜ばれると思っていたのか、たけきこころの返答がしくく意外のようで、少年は口を半開きにして言葉もないといったふうである。

「その態について今は問うまい。天幕の中でしろきかいなと一緒になさい。彼女が誰かになにか伝えようとしたときには、君はスポリアートルの駿足を借りて伝令使としての務めを全うするのだ。それ以外の用事で天幕を出てはならない」

早口に言う。言い終わらないうちに彼は「おれも戦います」と意気込む。否むのを今度はセシルが割って入って取りなそうとする。たけきこころは苛々するのを抑えられなくなってくる。

「こうしている間にも天幕が燃える。ヤン、何度も言わせるな。ここに残れ」

「嫌です、兵が足りないんでしょう？ おれも」

「わたしはならないと言ったし、最前から言い続けてもいるぞ」

「いつもとは状況が違います」

「どうでも聞けないか」

「おれも着いて行きます」

もはやこれまでと、彼は胃をつけた少年の頬を思いっきり殴りつけた。不意打ちもいいところで、ろくな防御もできなかった少年はあえなくその場に伸びた。

「セシル行くぞ」

「……………」

辺りはしんとしてしまった。大の字に伸びたヤンを遠巻きに眺め

て、兵たちはなにかとんでもないものを見てしまったような面持ちで突っ立っている。再度たけきこころが急かすと、セシルはなにか含みのある表情で、しかしなにも言わずに彼に従った。丘を下りはじめるとすぐ、重装歩兵二百名が彼らを円陣の中に囲い込んだ。

カミルラ隊が鬨を上げたのか、遠く幕営のほうから声の揃った叫喚が聞こえてきた。

「セシル、なにか言いたそうだな」

「うん」

「じき満足に会話もままならなくなる。心残りはすっきりさせておいたほうがいい」

「指の骨、折れたんじゃないかな」

「……………」

凶星だった。このわずかの間に中指が腫れ上がってきている。折れてこそいけないようだったが、ヒビは確実だ。鉄の頬当を本気で殴ったのだからさもあるう。

「あなたは意志強固だ、たけきこころよ」

「骨はそうでもなかったようだ」

「あなたほど硬くなかったから、折れるだけで済んだ」

遠回しに先刻のことを非難しているのは容易に知れた。もっとも口を開くまでもなく、というより、セシルが最前からそれを切り出す機会を窺っていたことも承知していた。

「彼を兵士にすることに、あなたは反対？」

「彼は戦場を知らない子どもだ」

「……彼は戦場を知らなくていい子どもなのかな」

「心配なのだ。生きて還れる見込みの芽生えるまで、彼はそれを知ってはいけない」

二人に言い合っているつもりはまったくなかったが、彼らを**圍繞**

する兵たちはそうと取らないようで、めいめい気まずげにそっぽうを向いたまま鉄靴を引き摺っている。たけきところは既視感を覚えた。

「ぼくは……着いて来させるべきだったと思う」

「そしてわたしに彼の亡骸を背負って帰れと？ パウサニアスが掘ったわたしの墓穴に彼を横たえろと、君は言うのか」

「あのあと気の付いた彼が、あなたの言いつけを思い出して従容と納得すると思う？」憂わしげにしていると、彼の麗貌はいっそう汀立った。「ぼくはなお心配だ。彼が周囲の止めるのも聞かずにあの黒チヨコボに跨って、ただ一騎あなたを探しに敵中に飛び込んでいきはしないかと。着いてこさせて、その上で近くから離さないで、せめて身の守り方だけでも教えてあげたほうがよかった」

「……………」

「カミルラはあなたを心から尊敬している。ぼくも彼女に負けているつもりはないよ。それでも、あなたは硬すぎるように思える。皮肉ではないけど、あなたの骨があなたの思っているほど丈夫でなくて良かった。折れても接げるけど、砕けてしまっただけはそれもできないから」

非常に痛いところを突かれた。たけきところはセシルの言うのを聞いて、ヤンへの心配の膨れあがるのにも況して、パウサニアスも彼の言うような手順を踏みはしないかと危ぶみだした。万一にも彼の率いる重装歩兵三百が天幕を離れるようなことになれば、しろきかいなの身の安全にも影響する。

「君の言うとおりかもしれない」

砂利の音が消えた。下りが緩やかに、次いで平地になって、足首丈の草生を蹴りあるく所まで進むと、幕舎はすでに目睫の間である。セシルが手を挙げてひとこえ合図すると、後を囲んでいた兵たちが前に十数人走り出てきて、奇妙に静まりかえった敷地内へそのまま駆け入ってしまった。隊列が停止する。合図のひとつあった他は、二人ともおのがじし無言のままであった。

「ごめん」と、ややあつてセシルがぼつんと呟いた。

「なぜ謝る」

「優柔では指揮官は務まらない」長い銀髪の切れ目からちらと流し目で、「ぼくのように。ぼくがやるみたいに、勿論あなたは一兵卒の心配をしてはいけなかった。ぼくは彼が、ヤンが足手纏いになる可能性を考えようとしていなかった」

「君は……彼と？」

彼は首を振って否んで、自身ふしぎそうに「なんであんなに気に掛かったんだろう」と言った。

「それでは面識はないのか」

「うん。でも……うん、会ったことはない。けど」

(……妙な青年だ)

しばらく沈思したあと、セシルは思い出したように「たけきころ、指は大丈夫？」と言った。

「ん、ああ、それほど痛まない」と虚勢を張ったが、じつさい剣など握れそうにもない。「なに、どうとでもなる」

「そう。腫れてるけど……」

(そう、どうとでもなるう。わたしが剣を握ってひとり奮闘するよな段になれば、もはや帰趨は明らかだ。わたしひとり戦えなかったとして、戦局にどんな影響が？ 敵が後始末にちよつと手を抜けるだけの違いに過ぎない……)

と、このように考えた途端、たけきころは自分の思考に小さく驚いた。戦に臨んでいついかなるときも たとえ数多^{あまた}たび敗走の憂き目に遭おうとも 勝利を諦めたことはなく、自棄とも無縁であった彼が、今ふと負けたときのことを考えたのである。そしてこの何気ない考えが奇妙なほど彼を擲めた。

(くそ、なぜこんな弱気に……くだらぬことを！ たけきころが聞いて呆れる、お前がそれでどうする！)

セシルはなおも心配そうにしていたが、先の発言の「どうとでもなる」は聞き流すつもりらしい。この弱気な彼らしくない考えを口

に出さなかった、自らの無意識の分別を、たけきこころはせめて誇って気を取りなおした。

じき偵察が戻ってくる。とりあえず周囲に敵は見当たらないとのことだった。

「押しているようだな」

「だと、いいのだけど」と言っつて、なにか隠し事を打ち明けるような口調で続けて、「カミルラはクレアルコスたちが檻と幕営の間に布陣したと言っつていたけど、本当は少し違うんだ」

「と言っつと」

「……敵は駐屯地自体を攻めるつもりはないんじゃないかな。目的はたぶん、檻だと思う。クレアルコスたちは檻の奪回に向かったんだ」

(檻。ティナか！)

「セシルよ、話はあとだ。スコールが待機していると言っつたな、あれは本当か」

「それは本当。非戦闘員の護衛に」

「合流しよう。諸君、進もう」

丘からは火の手が見えていたが、いざ降りてきてみると存外たいした被害は出ていないようだった。

「ひとがいます」と、最前列の兵のひとりが叫んだ。あつきちしおを見送つた、例の大きな天幕の前である。「ひとが 味方のようです。確認しますか？」

この場合の「確認」とは、幻像兵であるかないかという意味である。

幻像兵は少なくとも、その見た目は本物となにひとつ変わらない。変わらないが、幾たびもの戦いの末に、コスモス勢はいくつかの点に於いて、彼らが生物とは異なる反応を示すということを見つけて

いた。

そのうち敵味方を判別する方法としてよく使うのが、相手に出血させるといふものであった。幻像兵は斬れば血を流し、断末魔さえ上げるものもいるが、その血は地面に落ちる前に忽然と消えてしまふのである。

ただ夜間であるとその方法はやりづらい。遠くから見えにくく、かといって近づいては意味がない。実際、過去に同じような事例でのこの近寄っていったあげくに刺された兵が何人もいた。

「たけきこころ、どうする？」とセシル。

「明かりが乏しいな。向こうは何人いる」

前列から「十数名ほどです」と応えがあった。

「そうか。だれか弓は持っていないか」

「多分いない、と思う。少なくともぼくの隊にはいない」

「うん……よし、諸君」壁よろしく周りを取り囲む兵たちを見回して、「わたしが合図をしたら、めいめい鬨を上げて、前方へ二十歩駆けるのだ。できるだけ戦意を剥き出しにして、武器を振り上げて」

兵たちは得心するものと困惑するものとに分かれた。セシルは後者だったようで、訝しげに「なにか意味が？」と聞いてきた。

「イミターティオー幻像兵は決して逃げないのだ。もし本物ならこの人数差だ、算を乱して逃げるか、少なくともあそこに踏みとどまることはしないだろう。偽物なら看破されたと判断した瞬間、こちらの兵をひとりでも多く道連れにしようと向かってくる」

「それは……知らなかった」

「おそらくは本物だろうが、いちおう試しに掛けておこう。諸

君、準備はいいか」

兵たちは口で言う代わりに、槍で地面をこつこつと突いた。前列の兵の間からはおぼろげに、天幕の前に屯する小集団が覗える。向こうもまたこちらの正体を見極めようとしているのか、なんとなく慌ただしげな雰囲気があった。

「はしれひかりよ!」

たけきこころの喊声を合図に、ものみな得物を振り上げて「わーっ」と駆け出した。　　どうやら本物だったようで、小集団はひとたまりもなく散ってしまった。

（全員が別々の方向へ逃げたな……練度は低くないようだ）

兵たちはきつかり二十歩駆けて、示し合わせたようにぴたりと静まった。天幕の中からはひとの、それもかなり多数の気配がする。

「スコール！　この部隊はスコールか！」

とりあえず天幕の中へ、たけきこころは声をかけた。恐るおそる様子を覗いに来るかと思えば、意外にも返事はない。もう一度おなじように呼ばわると、少し時間を置いて後方から応えがあった。

「指揮官どのか！」

スコールの声の上がった途端、周囲の天幕と言わず木石と言わず、障害物の周辺で一斉に灯明が点った。外周の兵たちが波打つように動揺を露わにする。光の戦士の兵たちはいつの間にか包囲されていたのである。

「指揮官どの、ひとりだけで前に出てきてくれ」

との声は、先ほど呼びかけのあった位置から動いていない。スコールは自分のほうからこちらに近づくつもりはないらしい。

「……たけきこころ、ぼくも行くぞう」

「彼はひとりでと言っているが」

「あなたをひとりで行かせたりしたら、カミルラに叱られる」

「いま出て行く！」とひと声さけんで、セシルはたけきこころを背後に伴って兵の垣根から離れた。後に残された兵たちの動揺たるや、降将を見送る敗残兵のそれにも劣らない。

（なるほど、一兵卒から抜擢されるだけのことはある）

すっかり縮こまる兵たちを後目に見れば、スコールの将才を認めないわけにはいかなかった。彼が敵であつたら万事に休していたことだろう。

「スコール、見事だ。試しに掛けるつもりが、まったく君にしてやられたようだ」

セシルの随伴について、スコールはとくに気に止めない様子だった。光の戦士の姿を認めるとすぐ、部隊に合図して散開を指示する。ほとんどの兵が部隊長の下には留まらずに、灯明を消して思いおもいの方角へ消えていった。

「ついさつきカミルラが通りがかったが、すぐに檻へ向かった」

会釈をするでもなく、にこりともせず、スコールは顔を合わせるやいなや淡泊にそう陳べた。まるで相手が話をちよつと中断して、顔をそむけてくしゃみをして、ふたたび向き直ったのに対して言葉を続けるかのような、身も蓋もない無愛想な口である。

「クレアルコスたちが檻へ向かつてすぐ、幻像兵の小集団が幕営に攻め上がった」

「丘から火が見えた。天幕を燃やされたか」

「いや、天幕は奴らが来る前に水を撒いてある。ただ駆除する前に備蓄庫を二、三やられた」

「備蓄庫は延焼対策をしておつたはずだが……」

食糧その他の行軍に不可欠な消耗物資は、おもに兵たちの盗みを警戒して、組立式の木造倉庫に錠を下ろして保管しており、戦火に負えて鉛を塗つてあつた。強い火力で長時間炙られでもない限り、火はつかないはずだった。

「ああ、それでか」と、スコールがなにかに得心した。「奴ら、わざわざ倉庫を解体して中身に火をつけていた。だから全焼は免れたんだが」

「中身は」

「食糧。最初から狙っていたようだ」

「二、三と言つたな。二か。三か」

スコールはちよつと視線を切つて、「三」と返した。食糧庫の数は八棟。実に三分の一を焼かれたことになる。痛恨だった。

「敵はそれきり？」とセシル。

「御無沙汰だ。いつとき抜かれたと思つたが、檻ではうまくやつているんだらう、あとは静かなものだ。ただ、負傷者が後送されてく

る。それで、彼らを収容するのでかなり忙しい」

スコールは持っていた拔身 肉厚でしごく奇妙な形状の で、オニオン騎士旗の揚がる天幕を指してそう言った。

「どれくらいの人数がいる。治療は？」

「百人以上はいる。ひとを遣ってザカリアスとミーを呼んであるが、人手が足りないらしい。こちらから心得のあるものを二十人ほど貸してある」

「檻の戦況について、君はなにか知らないか」

「よくわからないが激戦だろう。 百人以上と言ったが、死人は数に入れていない」

「そうか……何人死んだ」

「数えていない。できるだけ遠くまで持って行って放つてある」

「なぜ」とセシル。声音には少しく非難のいろがあった。

「数えないほうがいいし、目に付かないほうがいい。土気に影響する」

セシルは毒気を抜かれたように「そう」とだけ応えた。

「スコール、君にもぜひ来て欲しいが……君はここを離れられそうか？」

「離れてもいいが」と言つて、スコールは残った兵たちに一瞥を送った。みな疲れ切った目には部隊長への、隠れもない無言の信頼が籠められている。「先刻みたいなのが度々くるのなら離れないほうがいいだろう」

「イーデイスには任せられないか。彼女は？」

「重態だ。先の戦闘で」

スコールは極めて淡泊にそう陳べた。少なくともその口振りには毛ほどの動揺も覗えない。明日の天気の話をしているのと同じである。それでもそのとき、彼の作り付けの陶器のような貌にすこし裂目が生じて、その隙間に感情のいろの動くのをたけきこころは見たような気がした。

「助からないだろう。」

「こんなのは柄じゃない、だからやりたく

なかつた」
言つて、彼は肩を竦めた。

天幕の中は酷い有様だった。

あつきちしおの亡骸が安置されていた昨日とはまるで別の世界である。大きさも形も不揃いな寝台がいびつな列を作り、血と汚物とで白い敷布など見当たらない。室内は満足な照明もなく仄暗い。死とその過程である呻吟しんぎんと異臭　オニオン騎士旗の下にあるものは今はただそれだけであった。ここに横たわっているものたちがひとりとして、無事恢復して日の光を拝むことができようかとも思われるほどの惨状である。

「ザカリアス、ミー、どこにいる」

小声で呼びかけたが、周囲の苦悶の呻きにかき消された。もう二度声を大きくすると、彼のすぐ脇で「そんなに怒鳴らなくなつて聞こえてる！」と怒号が帰ってきた。

「そこにいたか、ザカ」

「どけほら、邪魔だ」と、血まみれの手を邪険に振る。大抵の人間は光の戦士にそれなりの敬意を払うものだったが、この偏屈な医者にはだれに対してもこうであった。

「ここに健康な人間の居場所なんかねえぞ。用がないなら出てつてくれ」

「だいぶ死んだのか」

「ここに転がってる奴らと同じくらいは見送つたよ。表の小僧がみんな捨てちまつたがね」

会話を聞きつけたのか、ミーがやはり血まみれの手を拭きふき、「まあたけきこころよ、おひとりでこちらに？」と寝台の間を蛇行しながら近づいてきた。足下は暗くてほとんど見えなかったが、彼

女がなにかを踏まないように抜き足差し足しているからには、満足な踏み場もないのだろう。あるいは怪我人が転がっているのかもしれない。

「ミー、忙しいようだな」

「スコールが人手を割いてくれましたので、ええ前ほどでは　　ザ
カリアス追記を、ゴーヴァンと、ミルトと」

ザカリアスは鋭く舌打ちをすると、隠しに突っ込んであった布切れと炭筆を取り出して、ぶつぶつ呟きながらなにか書き殴った。ちらと見えたそれには、雑な字で無数のひとの名前が記されている。

「それは」

「死んじまった奴らさ」

「……ミルトと言ったか、ミー」

「ええ、はい、今ほど。そこに」

ふたたび抜き足差し足して、彼女はすぐ近くの傾いた寝台を覗き込んで、「この子です。本当にかわいそうなこと。まだ子どもでした」と嘆いた。悲しみより多くやりきれなさの滲んだ言葉であった。「お知り合いましたか」

「……………」

「とんでもねえ軍隊だぜ、おい光の戦士よ」ザカリアスの言葉は強い軽蔑を含んでいた。「なにが光の戦士だ。ろくろく戦えもしねえガキを戦場に放り出しゃがって、こいつがやんごとねえコスモスさまの大御心ってかい」

「……………」

「その子はしこたま矢ア食らって、ついさっきまで痛え痛えって喚いてたんだ。その育ちきってねえ胸に刀子いれなきゃならねえこっちの身にもなってみろってんだバカヤロー」

「たけきころよ、しろきかいなにこちらに来ていただくわけには
いかないのでしょうか」

ミーの口調は一縷の希望に縋らんとしたものである。しろきか
いなケアルの奇跡を期待して言っているのだろう。

「せいぜい助けられて十人だ。それ以上やれば彼女は昏睡するし……たぶん昏睡するまで彼女は已めないだろう。今この時にそれはまずい」

「せめてその十人だけでも」

「ミー、ここにイーデイスという女はいるか」

「イーデイス……ザカリアス？」

ザカリアスは黙って隅のほうを顎で示した。天幕のほうぼうで看護の人間が立働いているのに、その一角に動いている人間はいない。しんと静まりかえっている。

「向こうはお迎え待ちだ。助からねえ」

たけきところはザカリアスの怒るのを承知で「手は尽くしたのだろくな」と念を押した。案の定ザカリアスは怒った。

「ほざけ素人。手遅れにかかずらってりや助かる奴までくたばっちまわあ」

天幕の奥のほうから女の声で「ザカリアス、追記です。ルーカン」と叫ぶのが聞こえた。胃に氷が落ちてきたような感覚があつて、じきにそれはぬるい諦念に代わった。歴戦の部隊長の死、友人の死。その麗貌と勇猛とでコスモス勢を鼓舞し続けたルーカンの命の灯は、この薄暗い天幕、汚い寝台の隅でひっそりと消えたのだった。

「ああ……とうとうルーカンも」とミー。

(君もわたしたちを置いて行ってしまふのか……)

さだめしルーカンの部隊は全滅か、それに近い損害を被ったことだろう。たけきところはミーを促して、足早にイーデイスの床を訪うた。なにかに蹴躓^{けつまぎ}いて足下に眼を凝らすと、なんと脛上から切断されたひとの脚が転がっている。異臭に肉の焦げたような臭いの混じっているのは、鋸と鑊^{こて}を使ったせいであろうか。しろきかいながいたら卒倒せんばかりの光景である。

「イーデイス」

イーデイスは潤んだ瞳を彼に向けたが、言葉は発せなかった。上衣はほぼ切り取られて、包帯の胸から下は一面黒く血に染んでいる。

土いろの面には脂汗が浮き、呼吸も浅い。一目で手遅れとわかる重態である。

「イーデイス、酒の礼がまだだった」

「……………」彼女はただ彼を見上げている。

「背から腹部を剣が貫通して……ザカリアスはあんなことを言いましたが、それでも手は尽くせるだけ尽くしました。ああこの子も若いわ」

(……………やはり使おう。ためらっていてはこの娘は早晚死ぬ。ミルトヤルーカンの死を嘆くのはあとでもできる)

「ミー、これを」と言つて、たけきこころは懐から指先ほどの小瓶を出した。鎖で繋いで首にかけられるようになっていいる。「これを使いなさい」

「これは……………」

「エリクサー靈薬。あつきちしおのものだ。彼もここで使うことに否やはないだろう」

「靈薬……………」ミーは仄暗い明かりの中でもそうとわかるほど青くなつた。「……………コスモスはお赦しにならないでしょう。それを光の戦士以外のもののために使うことを」

靈薬はこの世界で造られたものではない。コスモスが光の戦士を生み出したそのかみ、もしもの為と下賜くだされた四つがあるばかりであつた。

「わたしが赦せば罰は下らない。これはわたしにだけは使えないものなのだ、君にやつてもらわなければ」

ミーはなおも青くなつて否むばかりである。

靈薬の封は異世界の人間の手によつてのみ開かれる。コスモスが光の戦士と兵たちとの信意の証たれと計らつた制約であつた。

「ミー！　そうやって拒むからには、君はこれの効果を知っているのだらう」

「それは、ええ、聞き及んではおりますが……………」

ミーが自分の身かわいさに拒むのでないということは、彼にもわ

かっていた。彼女は禁忌を犯すのを恐れているのである。

百年ほど前、かつて一度だけ霊薬の使用されたことがあった。光の戦士の所有する四つのうち、その時すでに亡かったときまなこのものを、危篤の恋人を助けたい一心で盗み出した女がいたのである。

彼女はそれがただ特効このうえない妙薬であるという噂だけを信じて、藁をも掴む思いで恋人に与えた。男は直後、不可思議な力によって傷病の痕跡ひとつない完全な体を取り戻し、しばらくの間それが続きさえしたということだったが、女のほうは薬を使ってほどなく全身の血を凝固させて即死したのである。神託によればそれは、神の赦しを得ずして行われた為の報いということだったが、

（神の巫覡^{ふけき}が代わって赦せば障りなどないはず。況^ましてこの時この用途に使うことを、いったい誰がどのような罪によって罰しようというのだ！ この状況にあつてただ指を啜えて座視することこそを、コスモスは赦さないだろう）

「ミー、罰など下らない！ 皆、だれでもいい、これを使ってくれ君！」

呼び止められた男　ちょうど死体を寝台から降ろそうとしていた　がきよんととして、自らの顔を指さした。

「そう君だ。これを使って皆を救ってほしい」

男はなにか褒美を貰うような、ちよつと嬉しげな顔すらしてこちらに歩み寄りかけたが、近くにいた同輩と思しき男が切迫して「馬鹿、お前は死ぬんだぞ！」と止めると、ミーと同じような表情で立ち竦んだ。　百年近く経った今でも、霊薬に纏わる逸話は有名なようだった。

「おい光の戦士、なんだ、それで何人助けられるんだ」

と、背後からザカリアスの声。最前から切開を続けながら顔も上げない。

「何人助かるんだって」

「百人」と、たけきこころは言い切った。

ザカリアスはしばらく手を動かしたあと、やはり顔を上げずに「よこせ」と呟いた。

間髪入れずにミーが「いけません！ あなたが死んでしまったら誰が皆を治すのですか！」と血相を変えて止めた。周りで看護に当たっていた人間もそれに和してどよめいた。

「ひとり死んで百人助かるんだ、安い取引だぜ。おれでもできる計算だ」

「いや、誰も死なない。コスモスの巫覡であるわたしがそれを赦すのだ、死ぬものか」

「へえ、よくわからねえが、そんなら詐欺みてえなもんだ。乗っからねえ手はねえな」

「コスモスの赦しとあなたの」

「それはどうやって使うんだ」

「ザカリアス！」

「ミー静かに。これをほんの少し、一滴でいい、額に点ずるのだ。それだけだ」

「もつとねえのか」

たけきところは一瞬迷ったあと、正直に「まだあるがもう使えない」と言った。ザカリアスは案外にそれで納得したようだった。

「ザカリアスお願いです、いえ、わかりました、あなたにやらせるくらいなら、わ、わたしが」

「そんなにがたがた震える奴に薬なんか渡せねえよあぶなっかしい」

「あなたは霊薬を知らないのですかっ！ コスモスのお罰を」

「ミー黙ってる。おい、それだけか。空気に触れると悪くなるとか、揮発しやすいとか、なんかねえのか」

「ないが……そう、中身に触れてはならない。触れればみな君に吸収されてしまう」

「それみるあぶねえ。薬つてのは必ず正しい使い方があるもんだ。ほらよこせ」

薬を受け取りしな、彼は目敏くたけきこころの手首を掴んで、「

骨、折ってるな。なにした」と上目遣いに睨んだ。これについてはさすがに正直にもなれず、

「転んだのだ」

空とぼけた。

「ミー、こいつを診てやれ」

ミーははや死人を見る目つきで咽び泣いている。周りで忙しく立働いていたものたちも、ザカリアスの崇高な自己犠牲の精神。それは勘違いなのだが　に打たれて鼻をすすったりしている。

「霊薬ねえ、まあなんだってこんないいもんをもっとたくさん作ってくれねえもんやら、神さんの考えることアよくわからねえ」

「君のような男が尊敬されなくなってしまうからだろう」

「ほざきやがる」ザカリアスは始めて笑った。「だがまあ理に適ってる。尊敬されるべき人間が尊敬されなくなっちゃうのはいただけねえ」

ミーはなおもおいおい泣いている。彼女には遺言にも聞こえるのだろう。とても骨折を診る余裕などなさそうだった。

「おいミーよ、誰のために泣いてるかしらねえが、お前みてえな奴があと百人がとこ、これを使わなけりや助からねえ奴らの帰りを待ってるんだってことを忘れんじゃねえぞ」

早口にまくし立てるときも、その手は忙しく針を左右している。

ザカリアスは手早く縫合を済ませると大儀そうに立ち上がって、汚れた袖で刀子の血糊を拭った。たけきこころの手にあつては溶接したように堅固であつた霊薬の封は、彼の手でさほどの力も必要とせずの開いた。口から怪しい煙が溢れ出てきて、彼の手をすべり降りて床の間に落ちていく。

「……妙な匂いがするな。なんなんだこりゃ、元がなんなのか見当がつかねえ」

「ザカリアス、それは人間に作り出せるものではない」

「神の御業ってかい」

ザカリアスの手に緊張の震えは見られない。いつも取り扱うよう

な煎薬を持つように持って、イーデイスの寝台めがけて抜き足差し足を始める。ちょっと歩いて下を向いて、彼はなにか重いものを蹴飛ばした。最前から泣いていたミーが悲鳴を上げて跳びあがった。先程の脚が転がってきたのである。

「神さんはいい仕事をするが、怠けもんだ。おい光の戦士、お前もそう言われたくなけりゃあ、こんなところでぐずぐずしてねえでさっさと仕事に戻りな」

「しかと百人、救ってくれ、ザカリアス」
言つて踵を返すと、その背に威勢のいい啖呵が飛んできた。

ミルトモルーカンも逝つたが、きつとイーデイスは助かるだろう。ここを笑顔で出られるとは、彼も予想だにしていなかった。

「なめんな素人、お前の百人はおれの百五十人だ」

「スコール」

返事がないので顔を向けると、ぴたりと眼が合った。彼は口で返事をしない質らしい。その眼はたしかに口の無精を補って饒舌であった。

「君は凄い」

「なにが」

「用兵の手腕さ。ぼくにはとても真似できない」

自らを卑下する気持ちは毛ほどもなかったが、セシルは素直に感服していた。待機を命じられていた彼らが、寡勢をもって誰にも指しを仰がず救援を求めず、単独で奇襲に備えて応変してみせたのである。実際、少数を囷に使って自分たちを包囲した手際ひとつ取っても、セシルには賞賛に値することのように思えた。

スコールは肩を竦めた。たけきところと話していたときは割と喋ったのだが、今は鳴りをひそめている。

「聞いていいかな」

「どござ」

「どうして兵を散開させるんだろう。ひとつところに集めておかないと、いざというとき困らない？」

セシルは疑問を抱くような言い方をして、その実きつとなにか理由があるのだと信じて聞いた。

「……イミターテイオー幻像兵は音を聞けないらしい」

スコールが重い口を開いた。今の問いとの聯関がわからず、しかし耳新しいことを聞かされたので、彼はやや混乱気味に感心してとりあえず「本当に？」と返した。

「奴らは暗闇でもよく見えるようだが、少なくとも周りに仲間しかいないとき、どうやら音を聞けない。たぶん匂いもわからない。本物に成り済ますとき、相手を攻撃するときは、どうやってか会話もするし割と能動的だが、そうでないとき……例えば索敵中であるとか、移動中であるとか、そういうとき、奴らは案外抜けてる。

だから少数でほうぼうに散って、なにかの陰に隠れたほうが見つかりにくいし、奇襲もやりやすい。幻像兵は背後から走って襲いかかってもほぼ気付かない」

急に饒舌になった。腕を組んで天幕の支柱に寄っかかって、こちらに顔を向けずに俯いたまま言うので、なにか目の前に書が開いてあって、それを読み下しているような感がある。セシルは彼の変貌と話の内容と、二重に驚いた。

「……本当だとしたら凄い発見だと思う。でも、どうして判った？」

「観察した」

「君はやっぱり凄い」

「……」

「遅くなったけど、セシルだ。君が味方で心強いよ」

「ここに来たとき」と言っ、彼は立てかけていた剣をセシルに示した。「おれが覚えていたのは、自分の名前と、こいつの使い方だけだった」

非常に扱いづらそうな剣である。およそ機能性に欠ける複雑怪奇

かつ大仰な鍔、剣というより工具とでも形容できそうな肉厚の剣身、柄から緩やかに折れ曲がった奇妙な輪郭。彼が携行しているのをセシルは何度か見ていたが、かなりの重量のあることは間違いない。

少なくともふつうの剣を使うようには使えないだろう。

「戦場にいるとなんとなく、どこに着眼点を置けばいいのか、優先順位をつけるとしたらどこか、なにを切つてなにを生かすか、そんなことを無意識に考える。どんなふうにもひとを動かすか、どこから崩すか、どこから逃げるか……」

「うん」

「おれはきつと、元の世界でも似たようなことをやっていたんだろ
う」スコールは相変わらずの無表情だったが、それは少なくとも誇
つて言っているのではないようだった。「なにが凄いものか。ここ
では重宝されるかもしれないが、こんなのは自慢できるようなこと
じゃない。おれはきつと元の世界で、仕方なくこんなことをやって
いた」

「君は戦うのがきらい？」

「……好きな奴なんかいない。やらなければならぬからやってる。
カオスだってそうだろう」

「元の世界の君もそうだった？」

「そうだ。ここに来てからも」

「理由があったからさ。なにか^{ゆゑが}忽せにできない理由が」
「ここでもか」

「ぼくはコスモスの勝利のために戦っているけど、それはうわべだ。
最初にそう言われて、いちおう納得して始めたけど、いま何のため
に戦っているかと聞かれたら、一緒に戦っているひと達のためと言
うよ。君もそうだと思う」

スコールはちよつと侮つたような薄笑いを浮かべた。

「おれは命令されたから戦っている。それが任務だからだ。他人の
余所事^{よそごと}の事情のために戦うのに、おれはそれほど抵抗を感じないら
しい」

「部隊長を務めるのも？」

「そうだ」

「みんな君を慕っている」

「迷惑だ」

「そう？」

「そうだ」 苦々しげに続けて、「頼られるのは重荷だし、期待されるのは苦痛だ。ひとりのほうが性に合っている。きつと元の世界でもそうだった。おれはそういう人間だ、部隊長なんて柄じゃない」「身近なひとが傷つくのも苦痛？」

「そんなことは言っていない」

今度はセシルが笑った。侮り含みではない、慈愛の微笑みである。イーデイスの負傷を口に上したときの彼の貌を、彼は覚えていた。

「君は凄い」

「……またそれが」

「よろしく、スコール」

と言って差し出した手を、スコールはまったく突きつけられたナイフを見るような目で見た。その面に「なんでそこでそうなる」と書いてあるのが見て取れるようだ。彼はちよつと読みづらい文字を判読するような貌でセシルの手を眺めたあと、ぞんざいにそれを握って「よろしく」と洗面を作った。ちよつど握手が終わったところで、

「待たせた」

たけきところが天幕から出てきた。

ふたりに歩み寄りながら貪るように幾度も深呼吸する。貌の判別できるくらいに近づいてきた彼は、さぞ沈んでいるだろうと思われたのに反して、心なしか和やかに見える。出てきた場所が場所なだけに、セシルにはそれが奇妙に思えた。

「スコール、イーデイスは助かるだろう」

「本当？ よかった。スコール、君のためにも」

「……………」

開口一番の朗報に、しかしスコールは言葉を吟味するように暫時だまつたあと、再び腕を組み直して「助かる傷ではなかった」とたけきこころを睨めつけた。いつもの無表情ではない、彼の表情にはつきりとした変化が萌したが、それは喜びではなく騙されまいとする厳しいものである。身に具わった明晰さが樂觀を許さないのだから。

「本当だとも。ザカリアスを呼び寄せた君の判断のたまものだ」

「見込みは一分もないとザカリアスは言った。甘い期待はするなとも。あれは致命傷だ。もしおれを気遣っているのなら、そんなものは必要ない」

たけきこころの眉がちらと顰んで、すぐに元の通りに戻るのが見えた。

「もちろん君を気遣うのにやぶさかではないが、それはそれとして、彼女は助かったのだ。ザカリアスは自身が思っている以上に名医だったということだ」

「信じられないし、信じる要素が見当たらない。あんたが見舞えば死人も起き上がるのか」

「君の猜疑心は大したものだ。イーデイスが聞いたならその過剰な悲観を笑うことだろう」

「正直に言え、彼女は死んだんだろう」スコールはついにはつきりと不機嫌を露わにした。「ついてこいと言うならついていく。そんな小細工は無用だ」

「なにを言い出す」たけきこころはさすがにちよつとムツとして、「小細工など弄するものか。もし死んだのなら死んだと言う」。

「急いでいるんじゃないかったのか。行くなら早く行くべきだ」と、仏頂面のスコール。

「君はちよつと異常だ。なぜ信じない。そこまで疑うなら中に入っ
て見てくるがいい」と、仏頂面のたけきこころ。

(たけきこころも頑固だけど……彼もかなり……)

ふたりはみるみるうちに険悪になった。お互い一歩でも退くか回

り込むかすれば、どちらの話が食い違っているにせよ誤解も解けようものなのに、スコールは持論をあくまで曲げずに「安っぽい同情はやめろ。あんたはそれがお得意のようだが」と決めつけ、そうと言われればたけきこころも意固地になって「イーデイスが憐れだ。君がそれほど彼女の死を願っていたとは」と中つ腹になる。

ふたりともいつしかイーデイスの件をただの下敷きと見做して、お互いに忿懣ふんまんをぶつけ合う子どもの喧嘩のごとき様相を呈しだした。セシルは驚きかつ呆れた。ふたりともあまり似ているほうではなかったが、少なくともその欠点の性質は驚くほど似通っているようだった。

「ふたりともそんなこと言い合ってる場合じゃないだろう！」業を煮やしてセシル。

「おれはさつきから行くと言っている。邪魔してるのは彼だ」と、スコール。

「君がこれほど頑迷だとは思っても寄らなかつた。行くとも。君はせいぜい彼女の墓でも掘っているがいい。彼女にとって無用でも解約待ちがたくさんいるだろう」と、たけきこころ。

最前からすでに三人を遠巻きにして、兵たちが耳打ちを交わし合っている。たけきこころもスコールも冷静でさえあれば、士気に悪影響するようなことは真つ先に慎むはずなのに、すっかり感情的になつて周りが見えていない。

(ふだん冷静に見えるひとほどこうなのかな……)

「いい加減にしてくれふたりとも！ みんな見てるじゃないか！」

唾を飛ばして諫めても聞く耳を持たない。片方が捨て科白して天幕を離れようとしても、もう片方が負けじと応酬するのが業腹で結局もどつてくる。つかみ合いにならないだけマシだったが、まったく終わりそうにない。ふたりを放っておいて自分だけ行こうかしらとセシルが考え始めた矢先、外でわあわあ遣っているのを聞き咎めたのか、天幕から凄じ剣幕でひとが飛び出てきた。

「やかましい黙れ！ そんなに喧嘩してえなら前線に行つてやれク

ソつたれども！」

ザカリアスだった。ふたりともぴたりと押し黙った。

「中で聞いてりゃ下らねえことをごちゃごちゃと……おい小僧」

スコールはセシルにやったように目で返事をする。　間髪入れずザカリアスに「返事しろ小僧！」と怒鳴られて「はっ」と気を付けの姿勢を取った。

「イーデイスは生きてらあ。おいイーデイス、こつち。こつちこいほら」

天幕の中に顔だけ突っ込むと、ザカリアスに次いでイーデイスが出てくる。スコールに向かつてはつの悪そうな笑顔を作って、小さく手を振った。体は敷布で覆われていて傷のあるなしは覗えなかったが、立居振舞からはなんともなさそうな印象を受ける。

「無事なのか、イーデイス」

「無事であります、隊長」

イーデイスは腕を上げて手のひらをぴつと伸ばして、それをこめかみに添えた。なにかの合図か礼のようなものだろう。スコールの嶮けわしかった貌がたちまち緩んだ。

「しかしどうやって……あれは確かに致命傷だった」

「そこでてめえと言いつてる奴がな、この世に三つだか四つだかしかねえとかいう、神さんの作つたいいい薬を持ってきたんだ。頭のひとつも下げとけってんだ」

「……あんたが？」

たけきところは悪事のばれて観念したような貌をした。

（恩を着せたくなかつたんだな。このひとらしい）

「おい小僧、てめえの邪推癖とものぐさにア開いた口がふさがらねえぜ。キーキーほざいてねえでその脚つかってちつと見に来れア済むことじゃねえかバカヤロー！　こんなときじゃなけりやあてめえの口を縫合してやるとこだぜまったく……聞いてんのか小僧っ！」

スコールはふたたび「はっ」と伸び上がった。

「次はお前だ能なし」

たけきところは悄然として「すまない。騒がせた」と言った。誰かに叱られて悄気しやげている光の戦士を見るのは、セシルはもちろんのこと周りの兵たちも初めての体験だろう。いや、ひよっとしたら当の本人すら始めてかもしれない。天幕前の寸劇にはすでに多くの観客が集たかっていた。

「なにカツコつけてやがる。お前が本当のことを言やあそもそこんなつまらねえ騒ぎは起きねえんだ！ まったく神さんに輪をかけた怠けもんだぜ、手足はお留守で口ばかり動かしやがる。光の戦士が聞いて呆れらあ。周りの連中がやいのやいのとガキみてえに言い合っお前を見て、それで尊敬してくれるとでも思ってんのかこの能なし！ お前なんざあの薬があるうがなかるうが舐められるだけだ指揮官なんざ已めちまえ！」

思うさまぺらまくし立てると、それでいちおう気が収まったのか、ザカリアスは何事もなかったように天幕の仕切を除けて、「とつとと行け野郎ども。みんな待つてんだらうが」

捨て科白を残して中に入っていた。嵐のあとの気まずい沈黙が残った。

「……イーデイス、本当に無事か」

スコールが口火を切った。所在なげにしていた少女が駆け寄ってきて、彼の横に納まった。やはりどこかに支障のあるような動き方ではない。

「無事無事。なんだかその辺りを走り回りたいくらい元気」

「傷が塞がったとして、相当量の出血があつたはずだが」

「エリクサー霊薬はそういうものらしい。身体が完全な状態になるのだそうだと、たけきところが説明をいれた。「その恩恵を受けた最初の男は、恋人の神罰によって死ぬや自らも自害を図ったというが、その体は一切の毒を受け付けず、生半可な傷はすべてたちどころに癒えてしまったという。飢渴や窒息によつても命に別状きたを来さなかった。そういう状態が何十日も続いたそうだ」

「へえー……わたし、しばらく死なないんですか」

「いや、あくまでしばらくのあいだ健常を維持するだけだ。その男は自殺が困難であることを悟ると、ついには友人に頼んで騎鳥に自らの頭を踏み潰させた」

「……………」
「イーデイス、ここを頼めるか」 スコールはすっかり元の無表情に戻ってしまった。「おれは彼らとともに檻へ向かう」

「了解であります、隊長」先の礼を繰り返して、「わたしみたいに助かった兵が何人もいますから、隊長は三百人ぜんぶ連れてってください。わたし彼らを再編して負傷者の護送と警備に当たります」

「百人は残す。備蓄庫の警備に人数を割いてくれ。 頼んだ」

言って、スコールは鏡写しに同じ礼を返した。珍しいことに笑いさえした。

「待たせた。いつでも行ける」

スコールはたけきころではなく、セシルに向かってそう言った。両者とも未だ含みを持っているのか、たけきころのほうでもスコールには一瞥もくれずに、澄ました顔で周りの兵たちに号令している。セシルは溜息をついた。いずれも相手が先に頭を下げるのを待っているのである。

(このふたりって……………けっこう似てるのかも)

「ふたりとも」

「……………」

「さあ、ちよつどみんなも見てる。仲直りするんだ」

たけきころは心底イヤそうな顔をしている。スコールの仏頂面には「おれのほうがもっとイヤだ」と書いてある。イーデイスは一連の騒動を中で聞いてはいたのだろうが、すっかり他人事あつかいにしてにこにこ笑っている。

「さあ。時間はないよ」

「……………すまなかった」と、たけきころ。

「まったくだ」と、スコール。

「スコール！」

「あんたは頑固だが、指揮官ならそれくらいでなければ駄目なのかもな。悪かった」

両者ともなおもむつかしい貌をして睨み合っていたが、やがて各々のなかで折り合いをつけると視線を切った。セシルは得体の知れない安堵と疲労とでほっと息をついた。彼らに対して抱いていた尊敬や賞賛が多少なりとも鳴りをひそめるのを、彼は自覚しないわけにはいかなかった。

「指揮官どの、兵を集める。先に行ってくれ。すぐ追いつく」

と言つて、返事も待たずにスコールは駆けていく。

「……頑固はどちらだ」

なお余憤さめやらぬ様子で、たけきこころの独りごちるのを聞いて、セシルは言おうか言うまいかちよっと迷ったあと、

「あなたも彼も大した頑固者だ」

やはり言うことにした。

檻へと続く林道は急場ごしらえもいいところで、かてて加えて手入れも碌々していないために、たいそう歩きづらかった。森へ分け入るとあまり変わらない。檻を野営地から遠ざけるために 実際は捨ててくるのたいして違わなかった いい加減に樹木を刈り払っただけのその道は、日に四度の見回りと、交代制の世話係が朝晩に様子を覗いに行くのを除けば、そもそもひとの行き来らしいものはないのである。

枝葉の軒がばっさり天井を覆っていて暗い。月を完全に隠している。いつもなら繁く聞こえるであろう、モーグリとフクロウの輪唱は休業らしい。林道は戦火を指呼ししの間まに寂然と静まりかえっているかといえ、決してそうではなかった。むしろ騒がしい。

(……戦闘不能者が予想以上に多い。ここまで来るのに時間をかけ過ぎたか)

緑の濃く匂うのにも増して、辺りには最前から強い血臭が漂っている。檻の方角から逃れてくる傷兵は引きも切らない。よろばい下生えを蹴り荒らす音、呻き、助けを求める声で林道は賑々しかった。傷兵たちは援軍に行き合つと、それを上げられるものは喜びの声を上げた。戦況を質したところでは五分ということだったが、敵の総数は判っていないという。多くのものはルーカンの部隊の奮戦を疲れた声で誉め上げ、ついで彼の消息を聞きたがった。

素直に話せるはずもない。そうと聞かれればたけきところは「わたくしが見たときは治療中だった」と言い、セシルは「彼は今も戦況を気にしているよ」と言い、スコールだけが平然と「ごく軽傷だ。彼は動けるものを集めてしるきかいなの護衛に回った」と嘘をついた。怪我をして意気消沈した兵たちも、どのみち悲嘆に打ちの

めされて膝を折るのであれば、少なくともここよりは診療院のほう
がマシであろう。

「ルーカンの部隊はほぼ壊滅してしまいました。残ったものた
ちも後へ。アトツサも重傷を」

槍を杖にびっこを曳いた兵が、彼らにそう告げた。アトツサはル
ーカンの副官である。

「アトツサはもう？」

「いいえ……わたくしのすぐ後にいたはずなんですが……」

兵はじきに自分の怪我のことを思い出して、辞去を求めて一礼し
て去っていった。入れ替わりに別の兵がすれ違いざまに、トリーネ
の部隊の急を告げた。千と三百いたはずの兵たちが、今や何人に減
じていることだろう。折った中指が火のついたように発熱している。
わざわざ良くない報せを手に入れるために悪路をやっつけているよ
うな気さえする。

遠く檻からの騒音がかすかに聞こえる段になって、ふいに複数の
乱れた足音が聞かれ、次いで前方の闇からある程度まとまった兵た
ちがよろぼい出てきた。尾羽打ち枯らした散々な様子である。その
うちのひとりが真っ先にこちらに気付いて、松明を突きだして近寄
ってくる。

「やっとな援軍が……」

と言った。それは喜びよりも多く、遅れてきたものを詰るいろが
ある。

望みを灯した声がほろぼろと上がって、光の戦士たちの周りで弱
々しい波になった。兵のひとりが背後を振り返って「アトツサ、援
軍です。来ましたよ」と声をかけている。これがルーカンの部隊の
なれの果て。折れた指を握り込んで、この痛恨に比せよう痛み
はどこからも湧いて出ては来なかった。

（ルーカン、友よ、すまない！ それでも今は君のために涙を流す
時間はないのだ！）

こちらが思いおもい労いを入れると、ルーカンの兵の多くは精魂

尽きた様子でその場に座り込んでしまった。雑な造りの簡素な担架を地面に下ろして、それに横臥するものの意識を確かめているものもいる。この時だけは森の闇を歓迎できた。その横たわったまま微動だにしない兵たちの中に、アトツサの姿を見出すのは怖ろしい。たけきところは勇を鼓して、

「アトツサはいるか」

手近な兵を掴まえて聞いた。

「たけきところよ、ルーカンは如何に。彼はすこし前に前線を離れたんです」

「彼は治療中だ。アトツサは？」

「どうしてあんな檻を護るために我々が？ それでもルーカンは武器を握る腕がなくなるまで戦いました。ルーカンは如何に」

兵はそう言つて泣き崩れた。如何にと聞いておきながら、彼はほとんど部隊長の生存を諦めているようにも見えた。たけきところは応えずにもう一度おなじことを繰り返したが、甲斐はなかった。

「アトツサはここだ。こつち」

会話を耳に挟んだのか、座り込んでいた兵のひとりが存外元気な声を上げた。隣に腰を下ろしていた兵をいたわつて助け起こそうとしている。小柄な兵で、声にまだ若干の幼さを残しているのが、たけきところにヤンの安否を想わせた。彼が悪戦苦闘しながら肩を入れてやると、もうひとりのほうは半分眠ったひとのように力なく身を起こす。それがアトツサらしい。

「やつと援軍が来たぜ。ここから仕切り直しだ」

「アトツサ」

すぐ後でセシルが呻くのが聞こえた。アトツサの顔は半ば以上が潰れて別人のようになっていた。おそらく目も見えていない。震えながら声のするほうへ顔を向けようとすると、長い髪を生やした頭皮が捲れて首の横に垂れた。ルーカンと並んで美貌を謳われた彼女の、それはあまりにも無惨な姿だった。

「アトツサよ、よく持ち堪えてくれた」

肩に手を置くと攣ったような反応があつて、アトツサは貌を上げた。くぐもつた聞き取りづらい声で「たけきこころですか？」と問う。

「遅れてすまなかつた。ルーカンは後方で治療を受けている。君も行つて彼を安心させてやつてほしい」

彼女はすぐに返答せず、助けを借りている兵の肩に頭をあずけてうーうーと呻いていた。唇のあらかたなくなつた口から、呻きとともに血が流れ出ている。泣いているようだった。

「アトツサ、泣くなつて、綺麗な顔がだいなしだぜ」

兵はよくよく見ればまだ少年である。しかし血に染んだ態を見れば兵であることに疑いはない。百人が百人、見えては顔を背けるであらうアトツサの変わり果てた容貌に、彼は毛ほども拘泥する様子はなかつた。

「失敗しました。失敗しました」と、アトツサは涙ながらに繰り返した。「しゅ、集中攻撃を受けて、わたしたちは隊列を切つて、退いて、しまいました。ルーカンは分断され、敵中へ置き去りに……多くの兵が、多くの兵が……」

「よく戦つた。ルーカンは戻るつもりでいるぞ、だが君はすこし休むといい」

「失敗しました」と言つたあと、彼女は力なく咳き込んだ。口からふたたび血が流れ出した。

「もういいだろ」と、少年がはつきりと咎める口で言つた。「アトツサ、もう少しだ、もう少し我慢しろよ」

二、三歩歩き出すなり、アトツサの膝がぐつと崩れて、少年は彼女に引つ張られる形でともに倒れ込んでしまった。咄嗟に助け起こそうと駆け寄つたセルルの手を、少年は邪険に払いのけた。

「悪い、大丈夫か」

アトツサはごぼごぼと濡れた咳をしたあと、「ありがとうジタン」と呟いてそれきり黙つた。呼吸が遠く浅くなつて、じきに絶えた。まるで最後の戦況報告をするためだけに生きながらえていたかのよ

う。そして彼女はルーカンの後を追ったのだった。

「アトツサ」

「……言葉もないよ」

今度は肩に手を置こうとするのを、セシルは再び打ち払われた。

少年は彼の言うとおり、言葉もなかった。アトツサの死は周りの兵たちに知れたはずだったが、少年と同じに誰ひとりとして悲しみを露わにする気配はない。みな自らの望みを絶つのに忙しい。

部隊長が敗走し、隊が壊滅した今、彼らにとってもはやなにが起ころうとも大した違いはないのだ。この景色ほどコスモス勢がその実、コスモスのためだけに戦っているのではないということを知らしめるものはない。そして光の戦士たちは二千年の戦いの中でこのたぐいの景を倦むほどに見てきた。倦むほどに見て、いっかな慣れることはなかった。

（コスモスよ照覧あれ……光を与えたまえ……ここにはもうそれはどこにも見られない）

少年はアトツサの亡骸に覆いかぶさるようにして、なにかしようにしてし倦^{あぐ}ねているようだった。彼女の瞼を閉じようとしているのだとすぐに知れた。彼女に瞼は残っていなかったので、少年は伸ばしかけた手を甲斐なく握り込んで、ぐしゃぐしゃになった彼女の頬に軽く口づけした。彼が立ち上がったとき始めて、その腰の辺りから伸びた尻尾が目に残まった。

「君、どこへ」と、セシル。

「決まってるんだろ」その口振りに押し殺した怒りが滲んでいる。尻尾のほうはまったく正直にぶんぶん荒れ狂っていた。檻のほうを示して、「あっちだよ」

「君はルーカンの兵か」と、たけきこころ。

「だったらどうした」

「そうであつたらもう一度奮起してくれと言つし、そうでなかったら力を貸してくれと言おう。我々も檻に向かうところだ。一緒に来てほしい」

「あんたはあんたで行けばいい。オレはオレで用事がある」と言つて、少年は踵を返して今ほどやってきたほうへ戻つていった。後手に手を振つて、「檻はやばいぜ、気をつけな」

「待て、君ひとりで行つてどうなる！」少年を引き留めるために怒るのを百も承知で、たけきところはちよつと嘲りを込めて怒鳴つた。「アトツサの後を追うのか！ みすみす死んで、彼女がそれを喜ぶとでも？ それとも彼女の尻にそれほど未練が？」

はじめて周りの兵たちが不快そうな顔をした。セシルが緊張も露わに「言い過ぎだ、たけきこころ」と咎めた。少年は聞こえなかつたようにそのまま歩んで、その姿が半ば以上闇に溶けた頃、ついと振り返つて、

「あんた野暮だな！ だからせめてそれだけでもするんじゃないか！」

走り去つた。それは絶望とは無縁の、しごく明るい声だった。

「ひとがいます」と、最前列から切迫した声が飛んできた。「確認しますか？」

「……諸君、とりあえずは武器を執ろう。声はあげなくていい」林道は狭く足場も悪いうえに、満足な明かりもない。こういうところではなににつけ躊躇う時間ためらはなかつた。とはいえ、すでに檻は間近である。傷兵の退路を確保してあるかぎり、この辺りで幻像兵が襲つてくることは考えにくかつた。

檻の周りで篝火を焚いているようで、すでに周囲を取り囲む人びとの隙から薄ぼんやりと、その輪郭は視界に入っている。明かりがその周りの闇を濃くしてこちらからはよく見えないが、檻を巡る人びと、その外縁部からひっきりなしに怖ろしい音のあがるのが聞かれた。ひとと鉄の争う音である。

(……逃げない。幻像兵か)

檻のほうからよろばい出てきた一見傷兵と見えるものたちは、こちらが武器を執って粛々と詰め寄るのを見ると、素早く得物を取り上げた。たけきところは無意識に剣を抜こうとして、セシルやスコールの思わず振り向くような派手な呻きをあげた。指を折っているのを失念していた。

「……………！」

「どうした、指揮官どの！」

「いい……………前に集中してくれ！　グ……………」

「スコール、彼は指の骨を折ってるんだ」セシルが言いにくそうに説明を入れた。

「……………」

「たけきころよ、近づいてきます！　どうしますか！」

「……………彼らに言うのだ、武器を投げ捨てて、その場に伏せろ。もしなにか言って、否むなら、そのときは大声を挙げよう」

彼に問うた兵が言われたとおりに怒鳴った。兵たちの背中に隠されて前は見えない。脂汗が滲んだ。緊張の汗でもあったが、彼はとりあえず指が痛かった。

いつ「武器を捨てようとしません！」とのひと言が来るかと身構えていると、前方の闇から人間のものではない、軽快な足音が近づいてきて、次いで聞き覚えのある声が「たけきころか！」と呼ばわるのが聞こえた。

「フリオニール！　わたしだ！」

「みんな援軍だ！　武器を下ろすんだ！」

たけきころのここに在るを確認するや、フリオニールは幾度か周囲にそう言って回った。フリオニールとともに現れたもう一騎も同じようにしている。彼らの姿よりなにより、跨ったチョコボの存在が、彼らの幻像兵でないことを明確に証した。然しものエクステスもひと以外の幻像を造ることはできないのである。

兵の垣が割れて、ちょうど騎鳥から降りたふたりが松明に火を点ずるのが見える。前線一歩手前であるのに、たけきころは指の痛

みを忘れるほどの安堵を得た。彼らが生きているのを確認できただけでも、この闇黒の林道では光を見るようである。

「間に合ってくれたな！ 何人連れてきた」

「四百。重装歩兵二百と、あとはいろいろ取り混ぜて二百だ」

「四百……」フリオニールは失望しているようだった。それを隠そうとして隠せていないのが彼らしい。

「フリオニール」一緒に来た青年が明るい声で、「今ここに無傷の兵のいることが大切なんだ。四百でも十分。たけきこころ、セシル、と……」

「……スコールだ」

「スコール、戦場へようこそ。君たちの取り分はちゃんと残してあるから、目一杯こなしてくれたまえ」

「ゼノフォン、カミルラは来た？」と、セシル。

「来たよ。今はクレアルコスのところ、檻の正面だ。 中のひとと凄いいことになってね」

「……彼女はまた？」

「やってるよ」と、溜息まじりにゼノフォン。「わたしもクレアルコスも止めようがないんだ。みんな辟易してる」

乗り捨てられた騎鳥が二匹、主のいないのを探して不安げに鳴くのが聞こえた。鞍に縛められた羽を広げようとじたばたしている。あまり訓練されていない鳥らしい。騎鳥は幕営ではなく檻のほうへ戻ろうとしきりに行きつ戻りつしている。

「いつまでもこうしちゃいられないな。たけきこころ、あれに乗ってくれ」と、騎鳥を指さしてフリオニール。

「わたしはいい」

「おれが乗ってあなたが乗らないのは、なんだか変な気分だ。さあ「フリオニール、彼は指の骨を折っているんだ」セシルが言いにくそうに説明を入れた。

「へえ、どうして」と聞き返すのが、彼とスコールの違うところである。

「林道に入るところで転んだらしい」と、眉ひとつ動かさずにスコール。「ゼノフォン、おれたちの連れてきた人数、クレアルコスには千くらいに言ってくれ。そしてじきにパウサニアスの増援も駆けつけると」

「それは……うーん、嘘つくのか。あ、増援も嘘かな」

「嘘だ」

「だろうね」

「だがその情報が伝播でんぱすれば、皆も望みをつなぐ。この暗さだ、わかりはしない。あんたのように」

「フリオニールの顔を見据えて、失望する兵が増えたら却つてまずい。なんのために加勢に来たかわからない」

「失望してなんか」

「皆、ここまでだ！」と、セシルがにわか大きな声をあげた。「まずは檻へ！ ぼくたちは援軍に来たんだから、まずはそれをしなければ。話すのはそのあとだ。さあさあ！」

セシルがフリオニールの肩を掴んで回れ右させると、

「さあ彼の言うとおりだフリオニール、クレアルコスがお待ちかねだ」

ゼノフォンがあとを引き継いでその背を押した。フリオニールはまだぶつぶつ言っている。主を見つけたチヨコボが跳ねるようにしてふたりに殺到した。

「諸君、我々も急ごう」

兵たちは声をあげる代わりに、槍の石突で地を打って瞋意を表わした。スコールはなんの反応も見せず、セシルは秀眉を曇らせてなにかしきりに考えている。恐らくは先のスコールの発言をどう諫めたらいいのか考えているのだろう。自分も彼にこんな顔をさせていたと、たけきところは思い返していた。

（わたしは硬すぎるのだろうか。そしてスコールも。セシルには気の毒なことだ。彼の言うところの大した頑固者がふたりもいるのだ。

しかしわたしだって、いくらなんでもあんな明け透けには言わ

ない。彼のほうがずっと上手だ、ずっと硬い。まったく大した頑固者だ)

後の兵に押される形で、たけきところは歩き出した。フリオニールもゼノフォンも騎鳥を掴まえ損なつてぐずぐずしている。跳ね回つてすこしもじつとしていないものだから、手綱もあひみ鎧も手に捕まるどころか、彼らの顔や肩を打つて悲鳴をあげさせるばかりであった。滑稽な眺めで、この暗い林道ではやはり光を見るようである。フリオニールはもう先のスコールの言葉など忘れ去つたことだろう。(セシルに言わせれば、彼は硬くないのだろう。あんなふうになればいいのか。それとも……先の少年のように)

ふいにアトツサを支えていた少年　ジタンと呼ばれていたのことを思い出して、そこから連想して、殴られて地面に伸びたヤンの顔を思い出した。天幕を出てからの出来事が沸々と思ひ出される。スコールとの頑固者合戦。ザカリアスの叱責。ミルトとルーカ、そしてアトツサの死。　少年たちの安否を想っているうちに、やがて遠く手を振るクレアルコス姿が見えて、彼は物思いに耽るのを止めた。

檻は喧騒に満ちている。

檻はちょうど正面が林道に正対していて、格子のあるそこまで兵が楯壁を築いて、短い道のようなものを造っていた。クレアルコスの兵は光の戦士たちを認めると素早く楯の道を拡げ、口々に「お早く！」と言つて中に入るのを急かした。めいめい徒競走のようにして兵たちの内に駆け込んで、最後尾の兵が蓋をする形で納まると、すぐさま幻像兵と思しき集団がそこに突っ込んでくる。楯壁を造っていた兵と後列にいた兵が慌ただしく応戦に向かった。　林道への防衛戦が切れた形である。

檻の正面　鉄格子には内側から一面に布が垂れ下がっていて、

それを背に折りたたみ式の椅子を数脚置いただけの簡素な陣が敷かれていた。狭いそこには、クレアルコスとトリーネのほかには、ただ血まみれの死体がひとつ横たわっているだけで、カミルラの姿は覗えない。ゼノフォンが短く帰陣を伝えたと、早足にクレアルコスが歩み寄ってきて、甲を着けたままたけきこころを抱擁した。

「友よ、まさか君が来るとは！」

「パウサニアスが来るとでも？ カミルラは言わなかったのかな」
クレアルコスの言葉は予期せぬ嬉しさのほかに、同量の非難をも含んでいた。

「君が来てくれて正直心強いが……ちと軽率じゃないか。後方にいるべきだろう」

たけきこころは応えずに「友よ、戦況は」と聞いた。

「とりあえず今、君たちを招じ入れるので退路を断られた」

「指揮官どの、おれが行こう」スコールが名乗りをあげた。

「待った」と、トリーネが口を挟んだ。彼女は椅子に腰かけて、脚の怪我を診てもらっているところだった。「そっちはわたしが行くスコール、来たばかりで悪いけど、姉さんを援けてあげて。た

けきこころ、兵を借りたいのだけど、何人連れてきたの？」

「千。千人だ」

あからさまに安堵の表情を浮かべるトリーネと対照的に、クレアルコスは「そんなに連れてきて、しろきかいなは大丈夫なのか」と眉を顰める。

「そう、だから早くここを片付けて戻ってやらなければ。トリー

ーネ、大事ないのか」

「こんなのは怪我のうちに入らないよ。クレアルコス、それでいい？」

「お前はここにいるべきだ」と、彼は言下に撥ねつける。「ゼノフォン、行けるか」

「ええ行けますとも。残念だったねトリーネ、君はもうちょっとここで椅子を温めていてくれたまえ」

トリーネは申し訳なさそうにして「すまない」と言った。

「トリーネ、エリーチェはどこに」と、スコール。

「姉さんは向こう」檻の正面から右を指して、「早く行ってあげてほんとうにすまない、わたしの隊はほぼ死んだか退いたかしてしまつた。今は姉さんたちを護る兵がほとんどいないんだ」

ちょうどトリーネの指さしたほうから、ズシンと重々しい音があがつた。折からの闇でなにも見えないが、彼女らの魔法によるものに違いない。部隊中で最も殺傷能力に長けた魔導師たちは、しかし専ら力仕事は不得手で、刀槍の危険から護衛してやる人間が必要なのである。

「指揮官どの、二百だけ借りたい」と、スコール。千から二百だけ引くように言っているが、実際はもともとすべて彼の兵である。

「スコールが二百なら、じゃあわたしも二百でいいや」と、ゼノフオン。実数を知っている彼としては、そうとしか言いようがない。

「たけきところ、ぼくたちも行くよ。残りをぜんぶ貸して欲しい」ふたりの話の流れにすぐさま合わせて、セシルも名乗りをあげた。

ぼろが出ないうちにと気を回したのだろう。「さあフリオニール、君も来てくれ」

「あ、ああ、わかった……」フリオニールはしどろもどろになるばかり。嘘をつけない性格はこういうときてきめん観面に仇となったが、暗いのが幸いしてかクレアルコスに悟られることはなかった。「えーと、セシルについていけばいいのか」

「カミルラはどこに？」

「彼女は檻の向う側にいる、はずだ」

「裏にはほかに？」

「フリオニールが衛まもっていたが、戦闘不能者が続出してね、再編制のためにいったん引き上げさせた。君たちがあそこで」と言つ

て、クレアルコスは先程たけきころたちのいた辺りを示した。「騒がしくしていたから見に行ってもらつたんだが」

「余ってる兵はどれくらい？」

これにはフリオニールが応えて、「掻き集めて百くらいだ。満足に動けるのは」と言った。

「彼らにも来てもらおう」

(実際のところ、我々はどれだけ残ったのだろう……)

「よし、役者が揃ったな。反撃の烽火のうしを上げようではないか」と、クレアルコスが奮起した。「さあやつつけてこい、四人とも生きて還れよ。フェレウスフェレウス・コスモスの加護あれ！」

檄が飛ぶ。スコール、ゼノフォン、セシル、フリオニールの四者が慌ただしく出て行くと、陣はいよいよ周辺の喧騒に支配されて、却ってうるさくなつたように思われた。トリーネは落ち着かなげに跛を引いてうろろしている。クレアルコスはいかにも悠然と構えていたが、あくまでうわべの話で、その内実はさだめし大慌てに違いない。

「クレアルコス、ところで彼は？」

「彼って」

「その彼さ」

言つて示したのは、血染めの包帯に包まれた死体である。最後の最後まで戦つて斃れたのだろう、満身創痍の態で、虫のように丸まつて横臥している。

「彼か。まあ、とんでもない男さ」

「……見ればわかる」

「伝え聞くオニオン騎士アーリアートゥスというやつは、きっと彼みたいなのを言うのだろう」

クレアルコスの声には混じり気のない賞賛のいろがある。

天幕で、診療院で、あるいは林道で、自分たちが無益に足踏みしている間、彼は遠からず来たるはずの援軍を信じて奮戦したのだろう。その援軍がさんざん遅れたあげくに兵数を偽つたことを、この青年が知つたらさだめし失望しただろうと、たけきところはふと思つた。彼の霊は浅はかな嘘を看破したに違いない。

「間に合わなかつたな、怨め」たけきところは死体の傍らに屈み込

んだ。「君の死にとってそんなことはなんの慰めにもなるまいが」
「うん……彼はまだ生きてるがね」

青年がふいにぱつと目を開いて、たけきところは吃驚して「おおっ！」と跳びあがった。 ついでにそれを見ていたクレアルコスとトリーネも吃驚して跳びあがった。

「……勝手に殺すな」

「ま、まさかこの態で生きているとは……すまない。驚いた」

青年は生きてこそいたが、さすがに総身の傷は伊達ではないようで、満足に動くことはできそうになかった。上体を起こすのが精々らしく、実際彼はおもむろにそうして、じつとたけきところを見上げていた。

「もう担架もなくてね、これほどまでに痛めつけられなければ後送したんだが、この有様じゃあそれもできない」と、クレアルコス。

「わたしの命の恩人。でもグリゼルダは助からなかった」と、トリーネは副官の死を嘆いた。

「君は……どこの兵かな」

青年は伏し目がちに「ルーカン」と呟いた。

「たけきところよ、ルーカンとアトツサが後送されたはずなんだが、会わなかったかい」

「会わなかったな」我ながらスコールのような口で、たけきところはちよつと複雑だった。

「ルーカンは……望み薄だろう。たぶん助からない」

青年の言葉を、クレアルコスも否定しなかった。ただたけきところが事情に疎いと思っっているので、「まあ、医者が診てなんと云うかだ。素人目じゃあなんともわからない」と付け加えるのを忘れなかった。

「クレアルコス、敵はどのくらいいいそうだ」

「わからない。が、減ってきてはいるように思える。多くてもこちらの倍もない」

「こちらの損害は」

「半分以上は戦線離脱さ。あとのことを考えてできるだけ死ぬ前に逃がしたが、檻を奪い返すのでだいぶ強引にやってね、二百がここは討たれたと思う。君が千人も連れてきたからには、まあなんとかできると思うが」ひとつ溜息をついて、「もう少し踏ん張ってどうにもならなければ退くしかない。ここでこれ以上の損害は出せない」

「ここを放棄するのか。ティナはどうする」

クレアルコスの口角が上がった。笑おうとして笑えていない貌である。

「イヤな名前が出てきたぞ」

「置き去るのか」

「君がそう言うと思ったから、ここの奪回に赴いたのだ」クレアルコスはうんざりしたような貌で、布で覆われた格子を睨めつけた。

「だがじつさい敵さんがその悪魔を御所望なら、リボンで飾って差し出したいくらいだ」

「彼女が敵の手に渡ったらどうなると思う」

「正直に言うが、向こうが殺すつもりならすぐにも引き渡すさ。

だが味方として取り込むかもしれないから、ここでこうしているのだ。この答で満足したかね」

「声が高い。皆に聞こえるぞ、友よ」

「いいさ、友よ。それだけのことをしてきたのだ、まさか文句は言うまい」

「……トリーネ、君の見解は」

トリーネはクレアルコスの顔をちらと見たあと、「わたしは少し可哀想に思うよ。いくらなんでも」と言った。

「きつとあれも喜ぶぞ、トリーネ。そのお礼に部下の死体を山ほど贈られれば、お前もあれに同情したことを後悔するようになる」

言葉の内容とは裏腹に、その声にも貌にもなにかしら烈しいものは見られない。クレアルコスは淡々としている。彼の怒りは決して生々しいものではなく、もっと水気のない、言うなれば乾いた怒り

であつた。そしてそれだけに根強く日持ちするようだつた。

「檻に入れるか」

「危険だから已める……とパウサニアスなら言うところだが、それで君の気の済むのならそうするといひ。先にカミルラに散々やつつけられたから、今はだいたい大人しくなつた」

「クレアルコス、彼女が怨めしいか」さすがに腹に据えかねて、たけきところは声を荒らげた。「彼女を再三もちいたのはわたしだ、呪わばわたしを呪うがいい。君の怨みは筋を違えているぞ」

「わたしの怒りはもちろん正当さ」クレアルコスは表面上冷静を装つているようだったが、明らかに興奮していた。「君やほかの連中に同意を強いたりしないだろう。石も投げないし、殴りもしない。カミルラはいろいろ工夫して、焼けた火掻棒を持ち出したこともあつたが、わたしはあれに危害を加えたことはない。わたしはわたしひとりの内に納めているぞ。これだけ譲歩して筋違いと言ふなら仕方がない、それならもう少し変えてみるさ。とりあえずあれの歯をぜんぶ折つてみようか。歯が駄目なら爪を剥いでやる」

これには応えるのを諦めた。スコールとの遣り取りが思い出される。なにか言えば論争は避けられまい。たけきところは苦勞して激情を嘔み潰して、檻の横に設えられた頑丈な鉄扉じゅうに手をかけた。誰かが カミルラかもしれない。すでに開けたのか、錠は下りていなかった。

「たけきこころよ」

「入るぞ、あとを頼む」返事をするのも業腹で、彼は無視して扉を開けた。

「友よ、酷いじゃないか、いちばん触れて欲しくなかつた話題を振つておいて。わたしにももうどうしようもないのだ、この感情は。本当に、どうしてみようもない……」

背後で派手な音をたてて鉄扉が閉まつた。

檻の中は暗い。外の簾も格子に廻らせた布に遮られて甲斐はなかつた。

床の隅っこに油皿がひとつ置いてあつて、その小さな明かりでなにかの塊のようなものと、膝立ちになつた丸い大柄な女の姿が見える。そして床に散らばつた無数の石くれも。

たけきところは入つたきり、しばらく突つ立つたままそれらを眺めていた。女は黙つてこちらを見つめている。塊は毛布に包まつたひとと知れた。静かで動きの乏しい、絵のような光景で、四方のくぐもつた喧騒を耳にしながらそういうものを見るのは、少しく不気味な感じさえした。

「誰です」

と、女が短く誰何すいかした。檻の中はかなり広い。この闇では向こうからは見えないはずだつた。彼は黙つて明かりに歩み寄つた。

「たけきこころ……」

「君はなぜここに。クレアルコスが連れてきたのか」

女は彼の顔をまじまじと見つめると返事は置いて、最前から小刻みに震えている毛布に手をかけて揺すつて「ティナ、たけきこころが見えましたよ！ このお方はお味方ですよ！」と喜んだ。おもむろに毛布がずり落ちて、そこから濃い金いろの巻毛が覗いた。

「たけきこころ？」

「君はなぜここに」と、彼は繰り返した。ティナはともかくとして、隣の女は明らかに非戦闘員である。

「成り行きで逃げられなくなつてしまつたんでございます」と、女が言つた。世話係のようで、檻が襲撃にあつ前にすでにここにいたといつ。

「でも結果的にはようございました。まあわたくし以外のだれもこの子を庇ってあげられないのでございますもの」

「この格子の垂幕は君が？」

「さようでございます」女はこれを皮切りに、きんきん声で苦情を並べ出した。「まああんまり酷いじゃございませんか！ 外のひとたちときたら、拳こぶつてこの子に石を投げつけて悪口を言うのでございます！ まあ大の男が揃いも揃ってなんて情けのないこと！ たけきころには大いに叱ってやってくださりましょうね！」

「まあ、それもやろうが。君のようなひとが世話をしてくれるのは、彼女にとつてもわたしにとつても大いに助かることだ」

「とくにカミルラ！ まああの女はほんとうに」

「君、すまない、ちょっと静かに。彼女と話をさせて欲しい」

「あら、まあ、ここは久しく煩わづうございますとも」女は黙った。

「ティナ」と声をかけたあとで、格別なにを言つてやるうとここに来たのでないことを、彼は思い出した。「君とはだいぶ御無沙汰だった。大事ないか」

毛布がするつと落ちて、灯明に照らされた橙色の、裸の上半身が露わになった。女が「あらまあ」と言った。ティナはことさらそれに拘泥する気配はなかった。ただじつと彼の貌を覗っていた。投石から庇いきれなかったと見えて、額や肩の辺りにいくつも痣が浮いている。

ティナは「こんばんわ」とちょっと間の抜けた挨拶をした。

「食べ物のお礼を」

「……礼とは」

「あなたさまが差し入れてくださったもののごさいますよ」女がたちまち合の手を入れた。「あの子に持たせて遣わしてくれていたんじゃないやありませんか。まあわたくしはどこのどなたが道理を見失つても、いやしくも光の戦士だけは誰に対しても公平に計らつてくださることをもちろん信じておりましたのでございますが」

（差し入れ？ あの子？）

「ほんとうにこの子の支えになってくださるお方はあなたさまくらのもので」

「君しずかに。 いや、それはわたしではない」

女は「まあ」と絶句した。

「しろきかいなかもしれない。わたしではない」

「確かにたけきころと 言っていたんですねティナ」

「うん……あの子、あなたのことを褒めてた。自分のことを認めてくれたって」

「あの子とは」

「ユツグ。でもあの子、昨日まで名前がなかったの。ユツグというひとの話を聞いたから、今日からそう呼んで欲しいって」

(……あの子が？ ユツグと名乗っているのか)

かの偉丈夫ユツグと小さな少年の懸隔たるや甚だしい。たけきころは頭のなかでふたりを並べて、おのおのに自己紹介をさせてみた。 知らず笑みがこぼれた。

「じゃあ、やつぱりあの子……」

「まだそうと決まったわけじゃありませんとも。なんなら直接聞いてごらんさい」

ふたりはたけきころの与りないところに話を落として、なんとなく暗澹としてしまった。説明しようとする気配もない。なおも耳を傾けて黙然としてしていると、天井からドドコと重々しい音がして、さらにしばらくするとそれが忙しげに往復を始めた。敵か味方か、うえに誰がいるようだ。

「ティナ、君に危害を加えるのはカミルラだけか」

こう問うと、ふたりは言葉少なに話し合つのを已めて、片や黙って俯き、片や我こそは代弁者なりとばかりに熱り立った。前者はティナで、後者はおしゃべり女である。

「まああの女がいちばん酷うございます。ひとりで来るんじゃない、自分の手下を何人も連れてきて、寄つて集つて石を投げるのでございます。それもわたくしたちがいけないの見計らつて！」

「フェニヤ」と、ティナが咎めるような声をあげた。このおしゃべり女はフェニヤというらしい。

「わたくし一計を案じまして、苦勞してこの辺りの石ころを全部ひるってしまつたんですが、そうすると今度はわざわざここから石を集めてきて、また同じようにするんですが、それでもこの檻があつてまだようございます。これがなかったら本当に、なにをされるかわかりませんもの。そうそう、わたくしではありませんでしたが、同じく世話を申しつけられている他のものが、あの女に檻の鍵を貸せと脅されたと言つておりました」

「フェニヤやめて」

「まあ、これは報告して差し上げなければならぬことなんですよ。さつきもそうでございます。いそいそとここに来るなり、この子のことを疫病神だの悪魔だの人殺しだのと呼ばわつて！ あんまり喧しいものですからわたくしこうやつて仕切つて向こうから見えなくしてしまつたのでございます。そうそう、クレアルコスに早くここを放棄するようになどと唆してもおりました。もちろんクレアルコスは賢明なお方でございますから、そんな妄言は右から左でございましてが」

「……………」

「たけきところよ、聞いておいでですか」

「聞いている。酷い話だ」

「いつもわたくしが来るとこの子はもう泣いて泣いて」

「フェニヤ！」ティナがフェニヤの頑丈そうな肩を平手で打つた。

当の本人は蚊が刺したほどにも感じていないようだった。

「あなたさまもその姿を一度ご覧になつてみてくださいませ。どんな冷血漢の凍つた涙だつてたちどころに溶けてしまひますとも。この檻の扉の開くたびに、この子はそれはもう病氣みたいに」

「フェニヤつたら！ 黙つて！」今度は掴みかかった。が、目方の差が圧倒的すぎてまつたく歯が立たない。幼児が駄々をこねるのを、母親が笑い混じりに苦もなくあしらうような眺め。

「まあ悪い口だこと。あなたのことを想って話しているんですよ」
「フェニヤ、よくわかった。もういい」

フェニヤは話し足りない様子で、それでもたけきこころの言葉を待つて黙った。いざ口を開こうとした時、突然檻の背面になにかが激しくぶつかったような轟音が響いて、ために檻はちよつと揺れた。彼は反射的に剣の柄に手をやってまたしても痛い目に遭った。フェニヤは見た目どおりに凶太く、ちよつと虚勢めいたものの反応らしい反応は示さなかったが、ティナのほうは傍目にも痛々しいくらいの脅えようを見せて、初め見たような毛布の塊に戻ってしまった。カミルラがこの檻の前に立つとき、彼女はこんなふうになるのだから。

(裏はカミルラたちか……なにがあった)

「まあ、どうなさいました。すごいお汗」

「不手際で、指を、折った」

「たけきこころ、怪我を？」

ふたたび毛布の裾がそろそろと下りて、灯明の黄味の混ざったしろい顔が現れた。かつてまじまじと見つめたことのなかった顔だが、こうして見るとなるほど、極めて繊細かつ端整な面立ちで、それひとつ取っても周りの人間と比べて、彼女に具わる能力の普通でないことの証左であるような気がしてくる。見た目だけはまったく人畜無害で柔弱な、そして美しい少女だった。

(こんな娘に戦う力の具わったことは不幸だ)

コスモスの召喚　あるいはカオスも　を受ける異世界びとたちはみな等しく、戦うためのなにがしかの力を具えているのが常であった。が、神も戦う力を持つものを探すことはできても、戦う意志をも同様に具えているものばかりを揃えるわけにはいかなかったようである。

召喚されてこの世界の説明を受けるもののうち、得てして二、三割の人間は、純粋な力以外の理由から、戦争に耐え得ないようななにがしかの要素　ヤンのような幼さもそのひとつ　を含んでい

た。争いごとに関わることで自体を拒むものもたくさんいる。そういつた人間には無理強いをせず、ほかの職能を生かすべく非戦闘員として後方の諸事に当たってもらうことになっていた。そしてティナはその性情からいっても非戦闘員に属する類であり、それにも拘わらず戦うことを選んだ珍かなひとりであった。

「味方の、それも君とそれほど違わない少年を殴つたのだ」ザカリアスとは違って、この少女ならどんな非難の言葉も口には出さないだろうとの微かな依頼心から、彼は彼女には正直にことを告白した。「ほかに数多もの腕力を使うべき用事に急ぎ立てられながら、わたしはここに来るまでにそんなことにはかり時間を費やしてきた。わたしがもつと早く来れば、君もあるいは投石の憂き目を見ずに済んだろう。ミルトもルーカンも、アトツサもグリゼルダも死なずに済んだかもしれない。ほかの多くの兵たちも。かかる事態はすべてわたしが招いた」

彼の言葉は中途から懺悔になっていった。ルーカンの死を聞かやフェニヤが「おおなんてこと、ルーカンが逝ってしまったとは！」と嘆いた。クレアルコスでさえ知らないのだから、閉じこめられていたフェニヤにそのことを知るよしもない。なにも知らずに戦っている将卒がこれを知ったらどうなるだろう、こうなるのだろうか。彼は危ぶんだ。

ティナにいらえはなく、代わりに毛布の中から腕を伸ばして、彼女は彼の傷めた手を取った。額や肩と同じに、そのしろい腕に痣の浮いているのが、乏しい照明の中でも覗われる。そのまま自分の胸元まで持つていくので、彼はいきおい彼女の前に膝をつく恰好になった。

「痛い？」

「その手で殴られた少年はもつと痛かった。体も心もだ。わたしは彼の崇高な意志を暴力で挫いたので、その痛みはこんなものではなかった。ミルトは戦う術も知らないまま戦場に出て行って射殺された。その痛みはこんなものではなかった。ルーカンも、外の青年も、

血と汚物にまみれて息を引き取っていった多くの兵たちも、君もだ。その痛みはこんなものでは……」

(わたしはなにを言っているのだろう)

自らの口から滔々といずる言葉に、彼はひどく困惑させられた。自分の判断を省みる、あるいは戦友の死を悼むのに慣れることのがかったとはいえ、これほどの後悔の念に襲われたことはなかった。ましてその片鱗を口に上すことなどかつてなかった。彼は自分の中にこの病の原因を見つけられなかった。ティナがなにか妙な力を隠し持つていて、その作用がこんな精神の状態を招いたのだろうか、彼女のほうを疑いさえした。

「カミルラも？」ティナの言葉には少なくとも、そのうわべに怒りや憎しみのようなものを刷いてはいなかった。

「……彼女もだ。彼女も苦しんでいる。彼女の患部は彼女自身にも見えていない。薬の在りかもわからない。だから君にそれを求めよ」とする。君につけられた傷だと思っているから。もちろんカミルラは間違っている。彼女は傷の原因となったナイフでそれを癒そうとしているのだ。それでなおいっそう傷が開いても……彼女を許してやってほしい、カミルラはそれでもわからないのだ、自分がなにをしているのか」

「彼女は悪くないわ」隣で聞いていたフェニヤが瞠目した。

「いや、悪い。ただより怨まれてしかるべき相手がほかにいるだけだ。それは」

と、ここまで言つて次に、それは自分だと言おうとして、彼は自らの醜い依頼心にはたと気づいて口ごもった。

悪いのは自分だ、自分を怨めと言って、彼女がそうするだろうか。彼女がそれを聞いたとたん、自分を憎悪に満ちた目で見る？　ひとでなしと罵って打つか？　そんなことにはなるまい。なにを言ったところで軽くなるのは自分のところだけであつて、彼女はこのあとも今までどおりを貫いて、カミルラが来たら毛布を被つて、なにも言わずに責めに耐えるのだ。そして彼はそれを暗黙のうちに知

っていた。

「それは神だ、ティナ」考え倦れた末に口をついて出てきたのは、まったく思いも寄らない言葉だった。「君の受難の基もとはコスモスの……コスモスの」

ティナが「あっ」と声をあげた。彼女の両の掌に縛められたまま、たけきところは手を骨折した指もろとも力のかぎり握り締めていた。折った指は弾けんばかりに赤黒く腫れ上がり、掌に爪が食い込んで皮肉を破った。ティナの膝に血の雫がしたむ。彼は悪寒に襲われたように震えだした。

（わたしは今なんと言った。なんと言った。なんということをおかしく思ふ！ 我が身よ今すぐ腐って落ちるがいい！ 骨は砕けて散じるがいい！ 呪われる！ お前はいま神に唾したのだ……！）
「たけきところよ、どうなさいました！」

彼は後悔と激痛に焦がれて呻くだけで、ひと言も発しなかった。なぜこんな言葉が自らの口から迷い出たか 考えるだに憚しい。二千年以上もの間、刹那たりとも夢想だにすることのなかった、それは神に対して始めて抱いた批判であった。

「神を怨めばいいの？」

たけきところが手を引き戻そうとするのを、ティナは存外つよい力で自らの顎の下に引き付けた。

「違う」

「誰を怨めばいいの？」

「……………」

「じゃあ、こう言っわ。誰か怨めばいいの？」

脂汗の浮く面をあげると、それを静かに見下ろすティナの、紫いろの眼が待っていた。にわかになやみ弱な様子は鳴りをひそめて、なにか筋金を背に通したような、凜乎とした気配に満ちている。フェニヤが口を開かないのは、あるいはたけきところの拉がれる姿より多く、彼女の変貌に驚いて呆気に取られているからか。まだ召喚されただばかりの頃、至聖殿から来たったばかりの時分、彼女はまさにか

くあつたかと彼は思い出ししていた。

「ここに来てから独りぼつちでつらいことばかりだけど、おぼろげ
だけ覚えてるの。こんなわたしにも大切な仲間がいたんだって。
顔も名前も思い出せないけど、きつとたくさんいたわ。そのひ
と達がもし目の前で殺されたら、きつとわたしだってカミルラと同
じになる。だから彼女の気持ちがわかるの。彼女を怨むのは自分を
怨むことだわ」

朗々と語って、保持していたたけきこころの手に唇を近づけて、
彼女は血に染んだ掌に細く息を吹きかけた。

「なにを」

「動かさないで」

悴かじかんだ手指を湯に漬けるような、あたたかく快い神経の鈍麻を経
たあと、あれほど火の勢いで荒れ狂っていた痛みが忽然と消えるの
を、たけきこころは感じた。

「奇跡ケアル……」

唯一しろきかいなを除いては、およそ今まで見てきた異世界びと
の誰も具えることのなかった特別な力である。たけきこころの驚き
ようは一方ならないものがあつた。

「君はケアルを？」

手にはもうどのような傷痕も見られなかった。血糊が灯明を照り
返すだけである。幾度か握り込んでも血の粘つくだけで、不調らし
い不調は感ぜられない。一部始終を見ていたフェニヤがよくわから
ないなりに驚いて「あらまあ」と陳べた。

「しろきかいなもこれができるんでしょう？」と言って、ティナは
始めて屈託のない貌を見せた。

「できる。できるが、十人も診れば限界だ。そう、そうだ、君
はそれをどのくらいできる」

たけきこころは勢い込んで尋ねた。この暗い檻に希望の光が差し
入ったような心持ちであつた。もとよりこの少女の身に具わる不思
議な力は、まずもって余人のそれと比べられるような規模のもので

はない。十人が百人、あるいは千人を助けることができるかもしれない。診療院で悪戦苦闘するザカリアスたちを想って、彼はこころ逸よほった。

「わからない」と、ティナは秀眉を顰めた。「しろきかいなにひとの前でしないほうがいいって言われたわ。特にカミルラの前では」「それは……さもあろう」

カミルラにとってティナは憎んでも憎みきれない仇だ。その仇が軍に多大な貢献をし得るとわかれば、もはや投石程度で溜飲は下がるまい。彼女はもうティナに償いや悔悟を求めてはいない。憎い敵のままひたすらに、自分の目の前でもがき苦しんで欲しいとだけ願っている。

（あわれなカミルラ、願わくば彼女を癒す医者の特徴れんことを。

だが今は緊急時だ。彼女の心痛ばかりを慮ってはやれない）

なんとかしてティナをここから出して、宿営まで後送しなければ
久しぶりに建設的な懸案を得た気分であった。このところ苦
渋の決断ばかりを迫られていた身としては、こんな悩みはむしろ快
楽ですらあった。

（問題は道程ではない、まずザカリアスだ。彼がどのような反応を示すか）

ザカリアスはかつて、ティナの作った数多の傷兵を診、そのうちの多くを甲斐なく亡くしている。それと同数、あるいはそれより多くを助けられるかもしれない保証があっても、彼が彼女を許すかどうかはわからなかった。性格に妙なところのある彼だからして、存外すんなりと許すかもしれないし、顔を見たとたん刀子で刺すかもしれない。

（他にも多くの者たちが彼女を怨んでいる……頭の痛いことだが、しかしこれは彼女の汚名を返上するまたとない機会かもしれない）
「ティナ、まずは礼を。ありがたい、君が治したのはこの手ばかりではなかったぞ」

ティナはちよつと考えて首を傾げた。隣のフェニヤもそれに倣っ

た。

「ティナよ、もはや戦ってくれとは言わない。ただ今の力をわたしに貸してはくれないか」

「……………」

「わたしは今まで君の引き起こした何事をも、今や責めるつもりはない」と言つて、彼女の肩に手を置いて、「ただ軍にはカミルラを筆頭に、君に遺恨を残すものたちはたくさんいる。その力があれば、彼らの怨嗟を解くことができる。望まず負った君の汚名も雪がれよう。今こそ君はここから出なければ」

「わたし……そんなにうまくいかないと思うの」

「それで……ごさいますねえ」

ティナは乗り気でない様子。彼女の救済を願うフェニヤすら同じ旗幟きしを示す。説得を試みようとする両肩を掴んだところで、外からクレアルコスの呼ばれる声が聞こえた。垂幕を挟んですぐそこにひとの気配がある。声には色濃い緊張が覗えた。

「たけきこころよ、話は終わったかい」

「いや、どうした」

「もうちょっとそこにいてくれ」と言つたあと、彼は誰かに指示を怒鳴つて、続けて「もうすぐそこまで幻像兵どもが来てるから。顔を出すなよ」

「すぐ出る。ティナ、またあとで話をしよう」

「だめだ出るな、危険だ　タイタス、鍵」

「クレアルコス！」

慌てて鉄扉に取り付くと、向う側からなにかがドンとぶつかってくる。誰かが開けまいと押さえつけるのを、たけきこころは力づくで押し返して鉄扉をこじ開けた。指を折つたままであったら軟禁の憂き目は避けられなかつただろう。果たして扉の向こうには屈強の兵がふたり、観念した面持ちで叱責を待っていた。

「なかなか力があるな。君たちは咎めまい、これからもクレアルコスの命令をよく聞いてやって欲しい」それぞれの肩に手を置い

て、「友よ、酷いじゃないか。君にわたしを拘束する権限はないぞ」
「友だちを心配する権限は誰にだってあるさ。音が近いだろう。ここはもう退くべきかもしれない」

「退路がない」

「今しがたゼノフォンが確保した。したが、するまでにかなりの数が林道へ入って行ったらしい。潮時だよ友よ、戻って非戦闘員を守らねば」

「潮時かどうかはわたしが決める。宿営はイーディスが守っている。丘にはパウサニアスとニューラーズもいる。ここの敵兵を減らしたと思え」

なにか言い返そうとして已めて、クレアルコスは先のふたりに鍵を閉めるよう命じた。百歩譲ってここを引き払うとして、中の彼女を伴うことを、彼は容易に賛成しはしないだろう。

「裏はどうだ。なにか報告は」

「ない。だが支えきれなくなったら戻るように伝えてある」

「……君は最初からここを死守するつもりはなかったのだな」

「指揮官の君がそれでどうする。神がそう言ったのか、みなこの檻を枕に死ねと？ こちらの科白だよ友よ、君は最初からここを死守するつもりだったのか」

（駄目だ、言い争うなたけきころよ、愚か者め！ 激情を支配しろ！ 彼はまだ彼女の本当の価値を知らないのだ！）

陣を取り囲む兵たちが波打つように動揺しだした。彼らの背の向こうにはもう、幻像兵のものと思しき刀槍の穂先がちらほら見える。前線はすぐそこまで迫っていた。

「トリーネ、ゼノフォン。たけきころを護衛して退け」と、クレアルコス。

「あなたは、クレアルコス」と、トリーネ。

「そっちはトリーネに任かせた。わたしは疲れたからもうちょっとここで休んでいく」と、ゼノフォン。

「だめだゼノフォン、お前もだ。わたしなら心配ない」

「クレアルコス、君こそ退け」と、たけきこころ。「トリーネ、君に頼みがある。この中のティナとフェニヤを連れ出して、宿営まで後送して欲しい」

「なにをばかなことを、狂ったか！」

横合からわあつと声が上がって、ある一画の兵たちが堪えきれずといったふうの後退った。幻像兵が陣になだれ込んでくるのは時間の問題であった。

「隊長、言い合っている場合じゃ」

「だまれゼノフォン。許可できない。トリーネ、彼は動転している。正常な判断を下せない。早く連れていけ」

「愚かな、わたしが動転しただと！ トリーネ二度は言わない、ティナを後方へ！」

「ま、待って、わたしはどつちに従えばいいの！」

「トリーネ、彼女は奇跡ケアルが行える。しろきかいなと同じなのだ。連れて行って診療院を訪え、多くの兵が助かる！」

「幕営を火の海にするつもりか！ トリーネ聞くな、彼の妄想だ」

「妄想と言ったかクレアルコス、動転しているのはどちらだ！ トリーネ早く行け、ゼノフォンでもいい、命令に従わないのなら君たちを処罰するぞ」

「ばかばかしい！ 君は」

「おい」

四人はなおもしばらくわあわあ言い合ったあと、今ほどの「おい」の出所がなんとなく気になって、誰からもなく静かになった。四人を遠巻きにしている兵たちを除けば、近くに居るのは件の血まみれの青年だけである。

「……青年よ、今のは君か？」

「ああ」青年の碧眼が闇の中で光を放っている。「もう終わったか」「どうした。ああ、君もなんとかして送らせよう、よく戦ってくれた」と、クレアルコス。

「あんた達は退くのか」

「退かない」

「退く」

「……どうして退く。今までは退かなかった」

クレアルコスがすぐそこまで迫った幻像兵を示して、「もうここは保たない。このままでは数で押し潰される。みな君のようになって、そのあと死ぬ。退くしかない」

「そこを」青年が人垣の一面をあごで示して、「そこをなんとかすればいいのか」

「なんとかならんさ。君はそんなだし、援軍はみな裏に回した。兵が足りない」

皆まで聞かないうちに、青年は満身創痍の態ながら、何事もなかったようにひょいと立ち上がった。今までの演技であったかのような機敏な動作である。

「君…… 大事なののか」

「おれの剣は」

「だめだ、もう君にはやらせないぞ。ここで死なせるわけにはいかない」と、クレアルコス。

「トリーネ、剣は」

「自分の体を見なさい！ 動ける状態では」と、トリーネ。

「あ、あつた」

ふたりの制止を無視して、青年は檻の陰の暗がりには込み込んだ。

下生えから持ち上げられたものはなるほど、剣である。少なくとも剣の形はしていた。

（なんだあれは……あれが剣だと……）

実際のところ青年の持ちあげたものは、剣とは名ばかりの巨大な鉄の塊だった。長さは彼の身長に比し、厚さは柄の径とほぼ同等。剣身の広さは大人の掌に余る。まず間違いなく彼自身より重いだろう。人間用の武器というより攻城用の兵器とでも言えようものだった。

「あなた……たけきところ、だったか」

「ああ、そう、なになな」

「何人やればいい」

「と言うと」

「何人斬れば退かずに済む」

なんとも言いようがないので、たけきところは「何人斬れる」と問い返した。青年は自分の体をうんざりと見下ろして、腕を振った。脚を振ったりしたあと、ぞんざいに「二百」と呟いた。

（これは……冗談のつもりか？ いやしかし、彼のあの剣……）

「たけきところよ、彼はできるぞ。実際すでに百人は斬ってる。幻像兵どものただ中からルーカンを救ったのは彼だ」と、クレアルコス。

「でも彼もただじゃすまない。見てよ、こんな状態でもう一度あんなことすれば、今度こそ死ぬよ。たけきところ、已めさせて」と、トリーネ。

「……本当にできるか」

「できなかったら言わない」

「クラウド！」

「百人斬って、戻れ。逃げる余力を残すのだ」

「了解」

「……くそ、やむを得ん、また君を頼らざるを得んようだ。クラウド、生きて戻れよ」

「布切れかなにか、あれば欲しい。柄巻が滑る」

滑るはずで、彼の手も剣も血みどろで真っ黒である。幻像兵の血は消えてしまうのだからして、これはほぼすべて彼自身のものだろう。立ち上がったからの彼は意識こそはっきりしているものの、出血の影響から足取りは雲を踏むようで、最前から重心を少しく左右に揺すっている。

「これ、使ってくれ」

と、ゼノフォンが自分の袖を裂いたものを手渡した。

「全然たりない。もっとないか」

「……包帯、なかったかな」

「彼に巻き付いているやつで最後だ。と言っても、それを剥いで使
い回すわけにも……」

「これを使え」と言っ、たけきところは上着を脱いで襯衣一枚に
なった。

「パウサニアスが見たら卒倒する」と、クレアルコス。

「アカルタエもしますよきつと。泡も吹くな」と、ゼノフォン。

上衣を剣で切り裂いて巻布をこしらえる間に、負傷した兵が数人、
両肩を支えられて陣に運び込まれてきた。いずれも爪先を引き摺ら
れるままで意識はない。その彼らからして、少なくとも見た目のう
えでは、クラウドと呼ばれた青年より余程マシな態をしているので
ある。隣で冗談みたいな剣を杖にふらふらしている彼は、実際いつ
気を失ってもおかしくない状態だった。

「手を。巻こう」

差し出された手は、すでにして血染めの包帯で覆われている。な
にか握ったりすれば相当痛むはずだったが、彼は眉ひとつ動かさな
い。痛覚がないようにも思われる。

「よし、左だ。　　痛くないか」

「痛い」

「君はいつもこんな戦い方をするのか。体が保たないぞ」

「いつもはしない。保つような遣り方でやればやってる」

「……君はひよつとして、この檻の中にいるひとを知っているのか」
「知らない」

「ではなぜこんなに無理を　　」

「終わったか」

「……右もいい。次は剣を」

クラウドは杖にしていた剣の柄を無造作に突きだした。

「これは重くないか」

「重い」

「ちよつと持たせてくれないか」

彼は黙って手を離れた。たけきこころはものの数秒で音を上げた。見かけより軽いのかと思えばさにあらず、垂直にするのでさえ容易でない。鉄の柱を支えるような印象である。

クラウドはそれほど体格に恵まれているようには見えない。腕の太さなどあつきちしおの半分くらいだろう。むしろ兵にしては華奢な印象すらある。普通に考えればこんな剣の化物を持ちあげられる道理はないのだが、

「よし、できた。いいぞ」

「離れてくれ。もつとだ」

幾度か両手を握って具合を確かめると、彼は人払いをして巨剣を引き抜いて、それを二、三度その場で振り回した。身の竦むような轟音と前髪が逆返るほどの風圧が起こる。たけきこころは呆れて言葉もなかった。こんなものをこの速度でぶち当てられれば、甲を着けていようが裸であろうが結果は同じである。

「クラウドが出るぞ！ 合図したら散開、彼のために道を作れ！ 巻き込まれるな！」クレアルコスが怒鳴った。

「クラウド。ひとつだけ聞かせて欲しい」と、たけきこころは青年を呼び止めた。「その態ならとうに後方へ退いて、寝台の上で絶対安静を命じられているはずなのだ、君は。なぜそんなに無理をする」クラウドは訝しげに「無理しなければならぬんじゃないのか」と問い返した。

「そうではなく……そう、君がそんなになるまで戦う理由とはなんだ」

「こう言っておきながら、彼はまたしても自分の言葉に自分で驚いた。」

それはもちろんコスモスの勝利のため以外には考えられない。余人は知らず、光の戦士だけはその理由ですべての努力を説明できるはずだった。それでも今の口は我がことながら、まず神のためではないと決めてかかっているようにも聞こえる。いや、実際かれはそういうつもりで言ったのだった。

（わたしはなにを言っている、一体どうしてしまったのだ……その為死んでいったルーカンたちにも、お前は同じように問うのか。それほど身を粉にしたからには、それはきつと神のためではないだろうと……）

「ルーカンはその「クラウドが重い口を開いて、檻をあごで示した。「そのなかの女のためだと言った。愛する彼女のために死ねれば本望だ」と

「……ルーカンが」たけきところは絶句した。青天の霹靂だった。「おれに理由はない。今はルーカンのを借りる。もう返す当てもなさそうだが」

言つて、クラウドは剣を肩にかついで猛然と走り出した。兵たちが疲れた声を張り上げ、槍で地を打って氣勢を上げる。クラウド！
クラウド！ 彼の名は鬨の代わりとなって辺りに響動もした。

「グイード！ 矢！」

「おれのもなくなった！ これで最後」

言つて示すのをひよいと取り上げて、フリオニールはそれを長弓に番つがえた。鏃つがに凶悪な返しをついた騎鳥殺しである。

（最後の一矢、どいつに当てたもんかな）

「フリオニール、もう皆のも尽きたみたいだ。降りて戦やるしかないぞ！」

「皆！ まだ残つてないか！」

檻のうえに陣取つた弓兵八十余名は、めいめい垣楯の陰から弓だけ振り上げて、口々に「もうありません！」と喚いた。フリオニール麾下弓兵部隊の残党たちである。

（射返して来ればまだやれるんだが……）

幻像兵の射掛けてきた矢は、すでに垣楯から抜いてぜんぶ射返してしまつていた。

殺せば幻のように消えてしまう幻像兵も、矢だけは本物を使うと見える。当初はお互い矢を拾いあつて射返しあつていたのであったが、こちらの弓を封じたほうが有利と踏んだのか、何度か再利用しているうちに向こうでも矢を惜しむようになっていた。

（下の連中、持ってないかな。持ってないよな）

カミルラとセシルたちはちょうど足の下あたりにいる。重装歩兵を従える彼らに矢の用意があるとは思われなかったが、

「おおいカミルラ！ セシル！ 矢アないか！」

聞いてみた。ふたりとも彼を仰いだものの、要領を得ない貌をしている。

「聞こえない！　なんて言ったの！」

「矢ア！　矢だよ！」

「なにがイヤだった！」

「イヤじゃない！　矢！」

檻はそれほど高いわけでもなかったが、周囲の喧騒のせいで声が通りにくいようだ。フリオニールは弓弦を引いて射る仕草をして、ついでに両手をひらいて首を傾げてみせた。カミルラが呆れたような顔をして「ないわよオ！」と怒鳴った。

（降りるしかないか……あまり降ろしたくないな）

フリオニールの部隊は弓兵がほとんどで、弓射の邪魔になる防具の類は最低限しか着けていない。無論、槍も楯も持っていないので接戦には向かない。おまけにいずれも弓の腕だけを買われた技能者たちで、腰に吊っている剣などお守り程度の認識しかないはずだった。幻像兵と真正面から斬り合って分のあるはずもない。

（そうだ、チヨコボ！　営舎から矢を持ってくればいい！　振り分けに積めば二千本は……）

「グイード」

「おお、降りるか」

「いや　下に騎鳥を一匹つないである。それに乗って幕営に戻って、矢を持ってきてくれ」

「チヨコボで通れるか」

「向こう　アグリアスたちのほうを廻れば」

グイードはちよつと思案気にしたあと、彼の提案を肯って檻から降りて行った。下までは六碼ヤほどもあるので飛び降りるわけにもゆかず、彼はちよつと躊躇したあといったん端にぶら下がって、ひとつ息を吞んで手を離れた。まさか降りてくるとは思わなかったものが、セシルとカミルラが慌てたように飛び退った。グイードが派手に尻餅をつくのが見える。

（あ、しまった！　退路が断たれたままだった！）

「待て、グイード！　グイード！」

眼下のグイードはこちらを向くことなく、さつと篝の明かりの外へ駆けていってしまふ。セシルがふたたびこちらを仰いで、頭を振りながらなにか振り払うような仕草をした。危ないから止せと言っているのだろう。

（だめか……ま、仕方ない。駄目なら戻ってくるさ。きつと今頃はゼノフォンたちも……）

ゼノフォンが連れていったのは二百。二百人と残存兵を併せれば、退路をこじ開けてしばらく保持するくらいは難くないだろう。

幻像兵の攻囲はそれほど厚いものではなく、むしろ突撃に対して脆弱な左面 エリーチェたちの正面に兵力を集めるきらいがあった。ルーカン麾下精鋭三百も彼女らを護衛して潰滅した。スコールが後を引き継いだ、激戦に疑いはないだろう。

（まずはこつちをなんとかして どいつに当てたもんかな）

幻像兵たちは明かりを必要としないようで、こちらから見えるのは彼らの身につけている、篝の炎を照り返す金物くらいである。弓弦を緩く絞って闇の中の塊に眼を凝らしていると、ややあつて後尾の辺りに林立する槍の穂先が、向かって右にそろそろと移動するの気がついた。

（向こうはエリーチェの……）

どうも最後尾から順にそうしてきたようで、気づけたのは目視できるところまで来たせいであろう。フリオニールは番えた矢をそのままに、檻の天板を駆けてエリーチェの陣のうえに膝をついた。

（まずい……奴ら、こつちを押し切ろうとしている！）

案の定、エリーチェたちは多数の幻像兵に揉まれている。

「スコール！」

折も折、敵の囲みの中からスコールが飛び出てくるところだった。右手にいつもの変な剣を下げて、左手で大腿のあたりを押さえて跳ねるように走っている。怪我をしているようだ。

「おおいスコール！」

たちまち幾本かの矢が闇の向こうから飛んできた。矢が足下の檻

の端を擦って鏃の破片が散る。フリオニールは反射的に眼を庇ってその場に伏せた。矢を惜しんでいたのではない、ただ単に弓兵がこちらに移動しただけのことだったらしい。

フリオニールは匍匐のまま後退して、仰向けになって上体を起こすと、裏面に展開する味方の垣楯めがけて器用に矢を射た。悲鳴のような風切り音を引いて、それは一卒の背後から耳元すれすれに垣楯の一角に突き立った。音に驚いた数人がすわ何事かとこちらを向く。

「こつちだつ！ 楯エ！」

フリオニールはあらん限りの声で怒鳴った。甲斐もあつて、一番ちかくにあつた垣楯を数人が屋根に担いでこちらに駆けてくる。すでに猛烈な射撃が始まっていて頭を上げることできない。流れ矢が檻のそこかしこに降るようになると、待機していた連中もようやく事態を飲み込んで、めいめい楯の庇を頂いて左面に集結し始めた。

「垣楯設置、屋根つくれ。降ってくるぞ」

「隊長、裏は」

「その裏の幻像兵がこつちに集まってる。 怪我人は？」

「いま呼んできます」

「あ、待った。ついでに右面の様子を。向こうは大丈夫だとは思つが」

右面はいちど様子を見に行ったかぎりでは優勢だった。むしろ敵が兵力を左面に集めている現状、裏と同じにそちらからも抽出が図られているかもしれない。

「みんな、裏と同じだ！ 弓兵に向けて射るな、射返されるぞ！」

檻のうえの弓兵たちはどうしても目立つ。幻像兵たちはじきに援軍の存在に気づいて、楯も砕けよとばかりに遮二無二矢を射掛けた。兵たちに返事をする余裕はない。裏とは比べものにならないほどの苛烈な制圧射撃で、表に鉄を張った頑丈な垣楯がたちまちハリネズミのようになる。楯を挟んで向う側に猛獣がいて、それが張り狂って無茶苦茶に引っ掻いてくるかのような、もの凄い衝撃が仮

づくりの砦を震わした。

(これだけ射ればじき矢が尽きるはず。今は耐えるとき)

腿に鋭い痛みを感じて、フリオニールは短く呻き声をあげた。楯の裏側の木目が裂けて、そこを矢が貫通して彼の脚に達していた。周りの兵は隙をみて矢を回収するのに忙しく、彼の負傷には気づかなかった。

(そろそろ楯が……くそつ、まだ切れないのか！)

楯を射抜いたのが幸いして、鏃はその半ばほどが肉を穿っただけである。腹立ち紛れに引き抜いて矢柄をへし折って、「畜生！」とそれを楯の向こうに投げた。新たに数本、鏃が楯を射抜いて顔を出した。楯の寿命が近づいて来ている。

「……くそ、駄目か！ いったん中央まで退いて矢を回収！ 退がれっ！」

少なくとも端から離れば、部隊への狙い撃ちだけは避けられる。何度か「真ん中まで退がれ！」を繰り返しながら、彼は周りの数人とともに楯を引き摺りながら退いた。が、楯は十歩も行かぬうちに半ばから割れてしまう。上からは疎^{まほ}らに矢の雨が降ってくる。めいめい弓を放り出して楯の破片を拾って、それで頭を庇って中央まで駆けた。

(……けっこう深い、場所が悪かった)

腿の傷が走るのに障った。戦場の常でそれほど痛みはなかったが、出血はすでにして靴の中に流れ込む量である。スコールも脚を負傷していたようだったことを思い出して、彼はこんな状況で他人の心配をしている自分を滑稽に思った。

(グイード……大丈夫だろうか。カミルラもセシルも、たけきころも……)

全員が這々の体で避難を終えたころ、先に右面の偵察に行っていた兵が、行きときは持つていなかった歩兵用の楯を頭上に掲げて走ってくるのが見えた。ひとりではなく、ほか数人を従えている。

「戻りました隊長。向こうは」

「向こうは駄目だ。　　他はどうした、もつといただろっ」

「いえ、彼らは　　」ふいに掲げていた楯を矢が射抜いて、兵の鼻先で止まった。彼は言葉を止めて「くそ力オス！　お前らの口にぶち込んでやる！」と空に向かって毒突いた。

「おい」

「くそっ、隊長、助かりませんでした、みんな。矢が降ってきて…

…」

「……………」

裏での戦闘で負傷した二十数名は、みな降ってきた矢によって死んだという。陣を移したことに後悔が萌す。あるいはあのまま降りて、カミルラたちとともに戦った方がよかったのかもしれない。

「フリオニール、怪我を？」

兵に従ってやってきた女が問うた。同様に楯を頭上に掲げて、態は重装歩兵のそれである。顔も見知ったものではない。

「……………君は」

「……………アリシアです」彼が顔を覚えていないのが、女には不満らしかった。「フリオニール、こちらから助勢の用意が」

「隊長、矢が！」

兵が叫んだので、アリシアはひとまず話すのを已めてそちらを向いた。気づいてみればカツカツと疎らに降っていた矢が、いつの間にか鳴りをひそめている。とうとう射尽くしたのか、あるいは敵が退いたので中断したか、楯の陰で縮こまっていた弓兵たちも困惑気に夜空を仰いで、相たがいにも密めき合っている。

（しめた！　あれだけ射たんだ、もう打ち止めに違いない。よし、今度はこっちの番だ）

「みんな、矢を集める！」

隊長の言を待つこともなく、弓兵たちはめいめい引き摺ってきた楯から矢を回収し始めている。立ち上がって彼らの仲間になるうとするのを、アリシアが手を引いて留めた。

「……………それで、助勢って」

「わたしたちのほうはあらかた片付きました。重装歩兵百余名、いつでも援軍できます」腰に巻いていた袋を探って、包帯と膏薬と思しい小さな壺を取り出すと、彼女はフリオニールの脚の応急処置を始めた。「弓はありませんけど」

「君は向こうの……右の？」

「ええ」

「ありがたい！ エリーチエたちが苦戦してる、そっちに兵を回してくれ」

「ラヴィアン、アグリアスさまに一報」

ラヴィアンと呼ばれた兵が立ち上がった。が、すぐにまたしゃがんで彼女の肩を突いて、今ほど自分たちのやってきた方を指さした。見れば右面の端からぼつぼつと兵が上ってきている。どうも下を通らずに檻のうえに上げるつもりらしい。

「おいおい、みんな檻に上がるつもりか」と、フリオニール。「それに君たち、弓を持ってないんだろ。上がってきてもどうしようも……」

「我々が様子を見てからのはずだったんですが……」と、アリシア。

「……フリオニール、終わりました。痛みますか」

「それほどでも……いや、痛い、痛くなってきた。なんだ、なにかしたのか」

「血止めです。よく効くんですが、滲みます。我慢して下さい」

「いやこれは……痛い」

「ザカリアスの軟膏で　フリオニール、アグリアスさまが」

アリシアが一方を指し示す。フリオニールの顔を認めたのだから、十数名ほどの集団がドコドコと床を鳴らしてこちらに歩いてくるどころだった。その後からはなおも数人ずつ、彼らを慕って兵が集まってくる。ここに甲冑を着けた兵が百人も集結したら、さすがの鋼製の檻といえども天板が抜けてしまう。

「アグリアス、そっちはもう大丈夫なのか」

集団の中から背の高い女が歩み出てきて、彼の前で冑を脱いで膝

をついた。

「百人残してきた、援軍するぞ。 怪我を？」

「ああ、軽いもんだが」

「アグリアスさま、胄」と、アリシア。

「いい、もう蒸れてかゆい」

「アグリアスさま、楯も」と、ラヴィアン。

「いい、重い」

「アグリアス、ここに全員上げるつもりか」

「ああ。下を通るよりこちらのほうが速いだろう。見晴らしも利くアグリアスはいたって平然としている。ちょっと誇るいらすらあつた。

「天板が抜けるぞ。おれたちが乗ってさえ撓んでる。このうえ重装歩兵百人なんか乗せたら……」

「む……」

「あと、弓、ないか？ ここじゃ槍も剣もあんまり役に立たない。あそこから降りるなら話は別だが、五、六碼はあるぞ。その態で飛び降りて大事ないか」

「……アリシア、止めてきてくれ」

(猪女……)

「いえ、真ん中に集まらなければ大丈夫だと思います。端のほうに寄れば」と、アリシア。「ほら、縄を持ってきてありますから、降りるのに支障はありませんよ」と、ラヴィアン。

「隊長」弓兵のひとりが焦れたような声をあげた。めいめい両脇に矢束を抱えて、先からそうしていたのだろう、みなフリオニールを注視している。「集め終わりました。指示を」

「あ……待たせた。行こう」

腰を上げるとアリシアが寄ってきて、彼の肩に体を入れて支えになるうとした。が、長身の彼を支えるには丈が足らず、いきおい彼を負い込むような恰好になる。しばらくぐずぐずした後、見かねたアグリアスが彼女に代わった。

「アグリアス、楯が欲しい。おれたちの用意したやつはほとんど使えなくなってしまった」

「アリシア、みなを脇へ誘導してきてくれ」言って、アリシアが離れるのを見届けてから、「我々が持っているようなものでよければ」「それと……あんたの部下で弓を使えるやつはいないか。こつちで五十張ほど余ってる。使えるなら矢が尽きるまでいい、射撃のほうを手伝って貰いたいんだ」

カミルラの隊には見事なまでにひとりもいなかった。同じ重装歩兵隊であるからして望み薄だったが、フリオニールはいちおう質^{ただ}してみた。

敵の攻囲はそれほど大きいわけではない。こちらに余剰の兵があつても、接戦を戦うものの数はどうしても限られる。刀槍の届かない敵を攻撃できる弓兵はひとりでも多く欲しい所である。

「弓、弓か。わたしはまあ、一応はつかえる。ラヴィアンお前は「遣^やつてやれないことも……ないかと思ひます。たぶん遣れます」

「弓か……たしかマイナロスが上手かったな、あれの直属にも使える人間がいたはず　ラヴィアン」

「呼びますか」

「うん。行つて募つてきてくれ」

アグリアスの肩を借りて跋^{ふく}を曳いて、フリオニールはふたたび左面の端に辿り着いた。アグリアスの配下が前に駆け出て楯壁を作つたものの、矢は飛んでこない。やはり射尽くしたと見るべきだろう。幻像兵の攻囲はいつそう狭まり、味方は為す術なくじりじりと後退を余儀なくされている。あるいは裏面のカミルラたちが割当の敵を攻略して、眼下にひしめく敵の横腹を突いてはくれないものかと期待するも、檻に遮られた彼女らの陣からは、喧騒のほかはどのような徴^{しほ}もない。おたがい余所事に構っている暇はないようだった。

足下には簀に照らされた、無数の兵の臥せているのが見える。怪我人を後送できないでいるのだ。その合間にぼつぼつと椅子が置いてあつて、そののひとつに座つて体をくの字に折っているエリーチ

エが見えた。少し離れたところには、誰かに指示するように指先を振り回してくる動き回る、スコールの姿も見取れる。

「スコール！ エリーチェ！ 大丈夫か！」

ふたりを含む、下にいた連中がいつせいにフリオニールを仰いだ。増援を迎えるというより、予期せぬ敵襲に愕然とするといったような反応である。つまるところ、彼らは戦闘が始まってからそんなことばかり経験してきたのだろう。遠目に彼の顔を認めて、スコールが破顔するのが眺められた。

「射撃開始！ 弓兵を射るな、いま味方と遣り合ってるやつの後方を狙え！」

エリーチェとスコールがこちらに向かってなにか言っている。彼女が席を立つと、彼が足早に歩み寄ってその腕を取った。彼女は盲人で、普段はその魔力によって周囲を探るのだったが、今は完全になにも見えていない様子である。さしもの魔女も力を使い果たしたらしい。

「なにか言っているな」

「駄目だな、こう騒がしいと。よし、降りよう」

「その脚で大丈夫なのか」

「下と没交渉じゃ連携もできないし、兵の損耗の程度も押さえなければ。彼女たち、たぶん孤立してる。クレアルコス達と連絡できていない」

脚の傷を探ってみる。血はどうやら止まったが、痛いのはちっとも退かない。これで五碼も六碼も下に飛び降りるなど思うだにぞつとする。フリオニールは下を覗き込んで青くなった。まず傷の開くのは避けられまい。考えただけでも痛い。

「なあに……死にはしないさ、死には」

「ラヴィアンめ、縄を置いていけばいいものを　仕方ない、それならわたしが降りる」

「あなた、その態なりでか」

「怪我人よりはマシだ。どのみち弓の使えないものは下に降ろすし

かないのだし、わたしも」と言つて、腰の長剣をがちゃんと叩いて、「こつちのほうが得手だ。やはりこの態で弓は扱いつらい」

「外せばいい、胸甲と籠手だけでも」あっけらかんとフリオニール。余剰の弓をひと張でも無駄にしたくない一心である。「弓の使えるあんたが無理に降りていくことはない」

「外したらよけい使いにくい」

「どうして」

「どうしてもだ」

「理由があるなら言ってくれ。こつちで解決できるかもしれないじゃないか」

「……気楽だな、男は」

「なにを あ、いや」そうとまで言われては、さすがのフリオニールも気づかないわけにはいかない。「そうだな、わかった、頼む」
「なんと伝える」

「まず聞いてくれ、どれくらいの戦闘不能者が出たか、あとどれくらい戦れそうか。特にエリーチエの魔道士たち、見る限りもうほとんど機能してないみたいだが……」

「みな！ 弓を使えるものは残れ！ そうでないものはわたしに続け、降りるぞ！」アグリアスの周りには、既にしてほぼ百名ほどが集っている。号令されて槍を置いたのはやはりごく少数、十人もいない。「フリオニール、矢を一本もらえないか」

「なにに使う」

「下で得た情報をそれに結んで、ここに投げ上げる。とりあえずはクレアルコスに報告するのが筋だろうな」

「たけきところも来ているんだ、彼の判断を仰ごう。 あつちで援軍を工面できればいいが」

アグリアスはきよんとしている。

「……たけきところが、おいでに？ こんな危険なところに？ なぜ」

「ああ。ちよつと前に。援軍を連れて。」

指揮官だからじゃない

か

彼女は黙ってしまった。気が揉めるらしい。

「心配か？」

「お前……心配じゃないのか？ あの方にもしものことがあったら
なにもかもお仕舞いなんだぞ！」

「いや、そりゃそうだが、指揮官だしな」

「安全なところで待機なさって、伝令をお遣りになるべきだった。

猪男め、少しは配慮しないか！ お側周りのお前がそんな認識
でどうする！」

「おれに言われても」

「ええいこれで方にひとつも退けなくなってしまった」

「おい」

フリオニールを黙殺して端までのしりやっつて来ると、彼女は「
行くぞ、続け！」と甲高い声をあげた。そのままえいと飛び降りる
つもりらしい。

「おい待て！ そのまま飛んだら脚を折る！」

「骨折なにするものぞ、フェロークス・コスモスの加護われにあり」
剛胆なる

（この猪女！）

「待てつたら！」傍らに落ちていた槍 先の兵が弓と代えた

を拾って、石突のほうを彼女に示して、「こつちを持つてるから、
そつちを握るんだ。これで少しは安全に降りられる」

槍の柄を縄がわりにしようというのである。なおもぶりぶりする
彼女を宥めなだすかしてそれを握らせて、いざ降りるといふとき、とつ
ぜん重苦しい轟音が檻を揺るがした。檻のうえのものみな咄嗟に屈
み込んで、おのがじし思いおもいの恰好で平衡を取りだす。

「なんだ……今のは」

アグリアスは無言で、きびしい貌を裏面の闇へ向けている。音は
そちらから聞こえてきたようだった。綱づくりの檻をこれほどに揺
らしたからには、なにが当たってきたにせよ大変な衝撃であろう。
ひとならまず生きてはいまい。

(そう、ひとなら……カミルラ、セシル、なにかあったのか)

「フリオニール、フリオニール！」いちど放した槍の石突を握りなおすと、アグリアスはそれを引いて、茫茫然たるフリオニールの注意を喚起した。「集中しろ！今のがなにか判じるのは後だ。まずわたしを降ろしてくれ、そしてみなを。向こうはこちらが片付いてからだ、今は目の前に集中しろ！」

「ああ……ああ、そうだな」

「我々はふたつのことを同時にできない。わかるな」

「そうだな」

「行くぞ、しっかり握っていて。みな、わたしたちに倣えなまら！」

重装歩兵ひとりにつき弓兵ふたりの割合で、槍を支えにアグリアス隊は降下を始めた。下ではスコールほか数名が集まって来ていて、なにかに飛び掛かる寸前といった恰好でうえを見上げている。

「アグリアス、スコールに伝えてくれ！弓射が途絶えるまでは防御に専念、殺す役はおれたちに任せると！」

槍を掴んで降りられるところまで降りると、彼女はいちど下を見て、次いで彼を仰いでにつと笑った。

「コスモスの加護あれ！」

「あんたにも！」

アグリアスは槍を放した。

グイードが駆けていくとすぐ、フリオニールが顔を覗かせた。なにか言っている。自分も降りると言っているのだろう。

「駄目だ、駄目！ 危ない！」

セシルが大手を振って否むと、フリオニールは渋々あたまを引っ込めた。

「フリオニールも？」

「いや、諦めたみたいだけど」

「グイード、なにをしに降りてきたのかしら……」

グイードは降りてくる、と言っより落ちてくるなり、ふたりに軽く会釈しただけでさっさと駆けて行ってしまった。先に矢がないかなどと言っていたからには、おそらくはそれを取りにいったのだろうが。

「カミルラ、もういちど行ってくる」

「気をつけて、ほどほどにね」

「ほどほどにできるならね。 カミルラ」

「なに」

「……うん、アグリアスのところはどうなってるかな」

「フリオニールは大丈夫と言っていたけど、どうかしら」

「また彼に聞いてみてくれないか。このままでもなんとかかなりそうだけど、もし向こうで兵が剩あまるようなら廻まわして貰おう」

セシルは握っていた白刃を逆手に持って、それを地面に突き刺した。

「連絡がついたら私も」

「あなたは隊長なんだから、武器なんか執とってはいけない。 あ

んこくとともに」

なにかに命じるようにして柄に手を翳すと、篝の明かりを受けて踊る彼の影がぴたりと静止して、それが蛇のようにうねって剣の刃を昇り始めた。

彼はひとつ溜息をついた。

「あんこくとともに、ね。 それ、あなたには似合わないわ。何度きいても」カミルラが笑った。「それだけじゃないわ、武器を持っている姿も似合わない。自分でもそう思わない？」

「似合わないのはお互い様」

影がすべて吸い取られてしまうと、剣はすっかりその姿を変じてしまった。地面に突き立っているのは八呎ほどの長大な棒である。滑るような黒色で、ところどころ装飾めいた突起のついたそれは、先端が鋭利に尖っていた。槍のように見えなくもない。

「檻の正面はどうなっただろう」

「たけきところは来たんでしょう？」

「来た。けど……彼がいるからよけい心配だ」

「危険だけど仕方ないわ。光の戦士がいるのといないのでは、士気が全然ちがうから」

「うん」

棒槍に伸ばしかけた手を、セシルはおもむろに下ろした。

「どうしたの」

「うん……ちよつとね」

カミルラと合流してからこの方、セシルはゼノフォンによって齎された懸念 無論ティナのこと にたいそう息苦しい思いをさせられていた。折を見てそれを質そうにも一向に機会を得ない。得たとして、どのように切り出せば穏当にことを運べるかまったく想像にあまる。仲裁や説得のたぐいはむしろ彼の得意とする分野であったが、

(相手が痛がらないように急所を刺すなんてできるわけない……参ったな)

彼はこのとうてい実を結びそうにもない低徊(ていかい)を持って余し始めてい

た。

「カミルラ、ちょっと話があるんだ」

「こんなときに？　今じゃなければ駄目？」

「うん……多分ね」

カミルラは怪訝そうにしている。幾度が弱気に流されて「こんなときに聞くことじゃないだろう」と思い直したが、その度に「普段だから言えないのだ。こういうときこそ機会だ」と自らを叱咤した。彼としても以前から知っていて、かつ万難を排して触れるのを避けていた事柄である。今までは彼女を気遣って見て見ぬふりを通していたが、

（殺すなんて公言するようになれば、もう他人事ではいられない）

ゼノフォンの耳打ちは衝撃的だった。彼女が檻の鍵を手に入れようとしていて、なんとクレアルコスがその手引きをする予定だと言うのである。　　思い出すだけに嘆かわしくも憤ろしい！　平素はなにかにつけ彼女を庇いがちな彼も、これには義憤を禁じ得なかった。いや、ふだん格別に親しくしている人間の闇黒をいきなり思い知らされたのだ、たしように手前勝手な感情から来るものにせよ、その怒りはひとしおであった。

（よし、やはり言おう。単刀直入だ、痛がったら後で治してあげればいいことだ。こうやってあれこれ想像して、起こってもいないことに一喜一憂するのはもううんざりだ！　彼女がどう出ようと、セシル、お前の正義が変わるわけもないじゃないか！）

「カミルラ、落ち着いて聞いて。ティナのことだ」

セシルは単刀直入に聞いた。一瞬、彼女の眼が敵を見るそれにすり替わって、すぐに元に戻った。

「その話はやめて」

「いいや、已めない。もうずいぶん已めてきた。そろそろ始めなければ」

「あなたには関係ないわ」

「あなたは部隊長で、ぼくはその副官さ。関係といえば関係だらけ

だ

「私的なことよ」

「殺人に公私の差別があつてたまるものか」

「なにを聞いたの」

「聞きたくなかったことを」

「真面目にこたえて」

「あなたがそうするなら」

「……なにが言いたいの」

「あなたには以後、あんな無道は謹んで貰いたい」彼が一步あゆみ寄ると、彼女は一步後退つた。「常軌を逸しているよカミルラ、殺すだなんて！ いや、今までのことだつて看過されるべきではなかつたんだ」

「なんのことを言つてるのかわからない」

「どのことを、だろう？」

彼は立ち止まつた。幸い、兵は彼らを遠巻きにしている。カミルラが自らの醜い仕打ちを強いてみなに公表したいとでも思わない限り、周りに知れる危険はないだろう。

「カミルラ、まだ演じ足りない？ あなたのその役、あなたにはぜんぜん似合つてないよ。嘘ひとつにしたつて普段やり慣れないんだから見え透いている。演技も五流さ、もともと向かない役どころなんだから」

「あなたには解らないわ」

「解らないさ、話してくれないんだから。あなたはいつだつてその話題を避けた。ただ触れないでくれと仕草で語つた」

「解つて。話したくないのよ」

「ぼくを憚はばっているなら、そんなものは見当違いだ。ご存じのとおり、あなたとぼくには歴とした聯関がある。でももしあなた自身の名誉のためにそう言つているなら、仕方ない、黙るよ。黙つて軽蔑するよ。そんなひとを尊敬していた自分を恥ずかしく思つ」

彼女の眉宇まゆぶに刻まれた懊惱うごの影は濃い。篝かの明かりのせいばかり

ではあるまい。憎しみのきらめきを放つかと思われたカミルラの瞳は、しかし依稀いさとした嘆願者のそれを刷はいている。かつてこんな哀願めいた眼で見詰められたことのない追求者は、むしろ気圧された。カミルラは長い間だまつたあと、おもむろに口を開いた。

「……演じざるを得ないわ、その役が廻つてきたからには」彼女が先に退いた一步を詰めた。「わたしの部下の多くは、科白のひとつもない役を振られた。土の下に横たわつて、墓標を戴いて、未来永劫口を利かない、そんな役が、二千人もの役者に故なく振られたわ。あなたは彼らにも言えるの？ ぜんぜん似合わないって。五流だつて」

「……二千人つて」

「そうよ、あいつが振つたの。何千人もの味方を殺しておいて、いざ舞台を降りれば途端に悲劇の女主人公を気取る、あの女狼。

わたしの、復讐者の役の演技にご不満なら、文句はどうぞあいつに言つてちょうだい。あいつの書いた筋書きだから」

ティナの監禁が懲戒目的であることを知らない人間はいない。その限りにおいて表立つて非難の声のあがったことはなかったが、どれだけのことをしてそのような処分に帰着したのかは、少なくともセシルには謎であつた。士官にとつての謎であるからして、兵たちに真相を知る者はまずいまい。いたとして、その謎の解の一向に広まらないことを考えれば、口止めされているか、黙っているかそして実際、真偽の程はともかくとしても、それは鉗口や黙秘にじゆうぶん値するほどの内容であつた。

（信じられない、けど、カミルラがこんな嘘をつくとも……）

「それは本当の話？」言つて、カミルラが口を開くより早く付け加えて、「疑つてるわけじゃないんだ、確認だ。始めて聞くことだから」

「見た目からは想像もできないわよね。みんなそうだったわ。みんな拳こぶつて、あいつを背中に庇かばいたがつた」俯うついたために、彼女の表情は闇に臥せられた。「あなた、アリに擬態するクモって知ってる

? つまりあれよ、あいつは。 なんのために擬態するか、わかるわよね」

「にわかには信じられないけど」

檻の中の少女と直接ことばを交わしたことはない。ただ、近くで話しているのを見るともなしに見たことは幾度があった。なんだか線のほそい、か弱い、風が吹いたら飛んでいきそうな、なやかな印象を持ったことを覚えている。あの少女が二千人の兵をどうこうする? ひとりだってとうてい為し得そうにない。セシルの先入観に住まうティナは、そういう決断力や実行力とまったく結びつかない人間であった。

「そうよね。でも明証を得てからでは遅すぎるのよ。あいつは我が軍の恥部、猛毒性の肉腫よ、一刻も早く除くべきだった!」

「カミルラ、あなたの言葉は信じられないけど、あなたは信じよう」セシルは長い沈黙のあと、そう言った。「あなたの口から出たことははやっぱり間違っている。でもあなたの良識を信じるよ。あなたは柄に手をかけても、それを抜きはしない」

「向こうにないものを、あなたはわたしたちに求めるのね。その刃にもう鞘はないのよ、あるのは打ち下ろすべき標的だけ」カミルラの口角が上がった。笑おうとして笑えていない貌である。

「……わたしたち?」

「仲間を殺されたのはわたしだけじゃない、クレアルコスとルーカソも、それぞれ千人以上やられてる。ルーカンは副官を三人も殺された。彼自身も指を二本うしなつた。きつと骨の髄まで怨みに満ちているわ」

四千人前後といえ、現在の総兵力を凌ぐ大軍である。彼女の言うことが本当であったとして、一体どのようにしてそれだけのことを為し得たというのか。セシルはなんとなく、あたまの中でティナにナイフを握らせて、一列縦隊で並べた四千人の兵の前に立たせてみた。一向に甲斐はない。日が暮れるまで座り込んだまま、彼女は手にしたナイフで地面に絵を描いていた。じっさいに遣らせて

みても似たような結果になるはずだ。どう考えてもあの痩せた、華奢な、いかにも柔弱な、ひよわな少女にできることではない。

「……わからない、やっぱり信じられない。どうしてあんな子がそんなことをできる？」

「そんなことまで説明させるの？ あなたって残忍ね。もう思い出したくないし、もういちど見るのも御免よ。だから殺すわ。だれに聞いたの？」

「まだぼくの話は終わってない」

「いいえ終わったわ。もうあなたの問いかけに応える人間はいないのだから」

「たけきところは許さない」

「許すわ。説得する自信はある。処刑に強硬に反対していたあつきちしおはもういない。わたしとクレアルコス、ルーカンが決を迫れば、たけきところは肯^{つぐな}わざるを得ない。四千人も殺戮だもの、彼がどう思っているかが、軍律が彼に温情を下すことを許さない」

「彼は良識を持っている。復讐に荷担したりしない。あなたもよく知っている」

「もちろん知っているわ、彼は良識人よ。これはわたしたちの復讐である前に、肅正なの。たけきところに一片の良識があれば、かならず許すわ」

「ぼくは許さない。絶対に」

カミルラの眼が例の哀調を強めた。彼としてもこういう方面から攻めたくはなかったのだが、ほかに選択肢はないようだ。セシルは理攻めを諦めて、情に訴える方法に切り替えた。

「あなたは副官の勧告を撥ねつけてしまった。だから今度はあなたを慕う、多くの人間のうちのひとりとして言うよ、そんなことは已めてくれと」

「セシル」と、今度は彼女が一步踏みだした。「誰の許しを得ても、あなたの許しの得られないのがつらい」

「カミルラ、ぼくはあなたの闇黒を見た。そんなものはぼくに

だつて具わっている。それで動揺するような人間じゃない。でもその闇黒があなたの光を覆うのなら話は別だ。誰がかわいそうだななんて話じゃない。檻の中身なんてどうでもいい、あなたのために！

「あなたのためにぼくは已めると言う」
「理解して欲しい。それができないなら、せめて眼を瞑っていてください」

「あなたという人間を理解しているものなら誰であれ、こういうときに眼を瞑ったりなんかしない」

「残忍だわ、あなたは」

「あなたのやろうとしていることも」

「あなたにこの話を聞かせた人間を憎む！」それがゼノフォンだと知ったら刺しかねない剣幕である。「どうすればいい？ 毎夜ごと夢に現れて復讐を急かす、多くの部下たちになんと言えればいい？ この怒りをどこに持っていけばいい？」

「死者は口を利かない。あなたが言った、そういう役だと。あなたはあなたの見たい筋書きを夢の中で演出しているだけだ。あなたが手を叩けば幕は降りる、みな書割の裏に引っ込む。あなた次第だ」

臆病な小動物を逃がさないためにするように、彼は堂々と慎重に彼女に歩み寄った。

「この無念を噛み潰せと言うの？ これほどの仕打ちを受けておきながら、黙って引き下がって、この憎悪の炎の鎮まる日まで涙を注げと言うの？ またあの殺戮の繰り返し返されるのを指を啜えて見ると言うの？ そのなかに今度はあなたが含まれるかもしれないのに！」
「カミルラ、そうだ、ぼくはそう言っている」セシルはカミルラの目の前で立ち止まった。「あなたので足りなければ、ぼくのも足りそう。それでも足りなければ、周りのみんなが喜んで協力してくれる。あなたの炎の消えるまで。もしぼくたちにそんなことしかできないのであれば、せめて共に泣こう」

「……あいつを許せというの？」

「カミルラ、もうぼくに言えるのはこれだけだ」と言って、セシル

はカミルラの肩を掴んだ。「二千人の兵の幻を取るか、それとも
こうい言う方は卑怯きわまりないけど、ひとりの副官を取るか
だ」

「副官の代わりなんていくらでもいるわ」

「じゃあ言い換えるよ。あなたを愛するひとりの人間と」

カミルラは呆気に取られている。こんな言葉がするつと出てきたのは、あるいは平素とうてい立ち上がり得まいと無視していた本心が、ほんの束の間自由を得たからか、なんの気もなく口にしたつもりが、言い終わったあとでやっと、セシルは科白の内容の重大なことに気づいた。愛の告白と取られても仕方のない言いようである。彼は熱いものに触れたように彼女の肩から手を離れた。

「……それはちよつと、代わりが見つかりそうもないわ」彼女の憂い顔が徐々に解けて、微かな笑みが浮かび上がってきた。

「いや！ いるさ、もちろん、たくさん。ここにいるみんながそうさ、みんなあなたを愛している」セシルは押されたように「二、三歩さがった。」

「あいつを許すことはできないわ」

「……カミルラ」

「でも処刑を談判するのは見合わせる。とりあえずは」セシルの下がった歩数分だけ、カミルラは詰め寄った。「あなたの代わりが見つかるまでは」

「ああ……その、よかつたよ、あなたが思い直してくれて」

「よかつたわね」

「カミルラ、ちよつと長話し過ぎた、もう行かなければ」

「あら、一緒に泣いてくれるんじゃないの？」

「いや、するよ、するさ、けど今それは」

「あなた、ほんとうに残忍ね。冗談よ、行ってらっしゃい」

（この件、どうにか収まりはついた。ついたけど……どうして今あんなことを言うんだ、ぼくは！）

余所事ちいさなの悩みがようやくきれいに雲散したと思ったら、こんどは

こちらに悩ましい雲が立ち籠めて来た。しかも図らずも自分で乞うた雨雲なのだから世話はない。彼は継るようにして槍に手をかけた。「セシル」

「な、なに」

「ほんとうに愛してくれて？ 説得するために言ったんじゃないの？」

「……あんなふうにして口に出したのは本意じゃないけど、そういうふうに取りられるのは心外だ」

「あなたってまどろっこしいわ」

「説得するために言ったんじゃない」と、言っただけで、でもこういふときに言うことではなかった

「つまり？」

「その……雰囲気がないし」

カミルラは弾けたように笑い出した。ふたりを背を向けて遠巻きにしている兵たちが数名、訝しげに振り返った。昼日中であつたら、副官の隠しようもなく赤面しているのが見て取れただろう。

(だめだ、墓穴を掘るだけだ、止そう、もう喋るのは……)

「セシル」

「もう行くよ」セシルは槍を引き抜いて小脇に抱えた。

「幻滅した？」

「なにに」

「あなた、闇黒を見たって言ったわ。幻滅したわよね」

セシルは背を向けたまま黙っている。右手に持った槍から墨のようなものがひたひたと昇ってきて、先に剣にそうしたように彼の体を覆い始めた。腕、肩、胸から分かれて全身を浸した墨は、ほどなくその出所に似た意匠の、陶磁のような光沢を持つ甲冑へと変じる。隙間のひとつもない、爪先から頭の天辺、顔までを真っ黒な装甲で鎧った戦士が、さきほどまで優男の立っていた場所に忽然と現れた。「部隊長の命令よ、セシル。こたえなさい」両手を腰に、部下に命令する口調で、カミルラは言った。「幻滅した？ あなたの愛する

ひとつ」

「あなたの闇黒と共に」

もし振りかえれば部隊長の会心の笑みを見られたるうに、セシルはそうせずになんげも言わず、人垣の外周めざして駆け出した。

幻像兵の攻囲は心持ちまばらになつたように思われる。

(いない……移動したか)

檻を見晴るかす樹梢のひとつに跨つて、ジタンは朦朧としながら手庇を作っていた。

彼の潜む高木は、敵の攻囲の真つ直中に植わっている。尻の下には無論のこと、数多の幻像兵がひしめいていた。

一帯にいるのはすべて弓兵のようで、最前からめいめい狂つたように檻に向けて矢を放っている。弓弦を絞る音の聞こえてきたときは、尻の穴を増やされるかもと冷や汗をかいたものだったが、さいわい今のところ下の連中に気付かれた様子はない。

(なにやっつてんだあいつら……檻が潰れるぞ)

ジタンは檻のうえに目を移した。下から射掛けられる矢に辟易して、味方の弓兵はすでに端から退いてしまっている。射返さないからには矢を尽いているのだろう。なすすべもなく楯を引き摺って右往左往しているうちに、どこから来たものか続々とひとが登り来たつたのに、彼は目を留めた。

(あいつ……ええと、なんていったつ……ウルフニールだったか) 木叢の向こうの薄闇の中には、部隊長と思しい弓を持った男が、今ほどよじ登ってきた数人となにか話しているのが見えた。が、遠目の利く彼でも唇の動きまでは判然としない。

(アリシア……ラヴィアン……てことは、あれはアグリアスの兵だ。なんで重装歩兵がうえに……)

ふいに足下から喊声が上がって、ジタンは咄嗟に身を強張らせた。

彼の身を潜める葉叢は濃く、ちょっと下から見上げたくらいで見つかる怖れはないのだが、

(くそつ、なにやってる！ よそ見してる場合じゃない！)

二の腕を伝う血をぬぐって、彼はしばらく息をひそめた。

体中どこもかしこも痛くて、具体的にどこが痛いのかすらわからない。腰、背中、腕、中でも右肩の創傷はさうとう深く、こんな不安定なところで応急で凌ぐような手当では、到底出血を止めらそうにもなかった。我ながらこんな有様でよくもここまで昇って来られたと感心してしまう。

(寒気がしてきた……このままじゃ犬死にだ)

吐く息に微かな震えを自覚できるのは、出血のせいばかりではあるまい。利き腕の自由を制限される痛恨と、それに況まして、このままではいずれ樹から墜ちて死ぬか、見つかって殺されるかという恐怖 死それ自体ではない、目的を果たし得ぬうちに彼の肩を叩こうとする死 が、彼をしてこの樹頭の一角に凍りつかせている。

しばらくそのまま縮こまっていると、じきにあれほどびゅんびゅんやっていた弦打ちの音がまばらになって、やがて途絶えた。とうとう射尽くしたのだろう、じきに金属質の擦過音が辺りに広がった。

弓兵が剣を抜いた。

(よし、転機。次はこっちの番)

足下から檻へ視線を転じたとき、視界の上端にしろいなにかが映り込んだ。はつと上を見上げると、果たしてひとが浮いている。纏っている外套がひらひらはためいて、その裏地の白が目飛び込んできたのである。 ジタンは危うく声をあげるところだった。

(いた！ 見つけた、上だったのか！)

かっとう頭が赤熱するようで、先ほどまで彼を悩ましていた寒気はたちまち去った。背中を向けていてもひと目でわかる。紅白の外套、白粉を刷いた項うなじ、派手な原色を鏤うっしほめたふざけた装い。アトツサの顔を切り刻んだ張本人であった。

ジタンは衝動の命ずるまま、腰の短剣を握った。利手は思うよう

に動かせない。左手でそろそろと一振りを引き抜いてから、手の届く位置に相手のいないのに遅まきながら気付く。ちょうど彼のいる位置と檻との中間あたりに男は浮いている。ジタンは短剣を諦めて、長靴の脇に縫いつけてある鞘から投げナイフを抜いた。

(遠い……急所に当てられるか……くそっ、せめて右が使えれば！)
首、心臓、四肢の付け根、いずれも的小さく、小刻みに動く。

加えてひらめく外套が刃を弾くおそれもある。文字通り一擲に乾坤を賭すか、剣の届くところまで近づくの待つか 決しかねているうちに男が行動を起こした。

(まずい、魔法を)

男の両掌の周りの空気が揺らめいたかと思うと、彼はそれを顔の横でぱんと合わせて、下手投げに眼下へと投じた。傍目にはゴミを放り投げるような仕草である。殺せないまでも男の魔法を妨害するか、それとも彼の狙っている誰かに警告するか ナイフの使い道にわずかな逡巡^{しゆんゆん}を得た結果、ジタンは男に攻撃を許してしまった。男の投じた見えないなにかは、空気を切り裂いて檻へ殺到した。

破城槌を思わせる轟音が響^{とよ}動む。ちよつと離れた木のうえにいるジタンが身を強張らせるほどの音である。衝撃で一瞬、檻の壁面が薄い鉄板のように波打つのが、彼のいる位置から見て取れた。

(……誰かに当たった！)

誰かまでは見えない。彼は齒噛みしてナイフを握り締めた。誰に当たったにせよあの衝撃である、死は免れまい。仇敵を殺すために抜いたナイフが、味方を殺すのを看過した この後悔が彼に捨て身の攻撃を思い立たせた。

被害にあった味方は、敵襲の出所に見当をつけていないようで、遠目にも混乱しているように見える。男は笑っているようだった。気が済みしだい、次の標的を選び出すだろう。

(まずは奴の存在を報せなければ……)

今やナイフの使い道は決まった。彼はそれを振りかぶって、山なりに檻のうえへ落ちるよう投げた。気付くかどうかはウルフニール

たち弓兵次第だったが、これで駄目なら短剣を投げるつもりである。もし宙に浮いている魔道士がこちらに気付いて近づいてくるようなら、それはそれでよし　ジタンは捨て身で彼に飛びついて、もろとも墜死する覚悟を決めている。

弓兵の反応は期待以上であった。彼らは絶え間ない弦打ちの音の中から誤たず、小さなナイフの落ちる音を聞き分けたようで、投じて数秒ののち、ウルフニールを含む三分の一ほどの弓兵が弾かれたように空を仰いだ。うち数名が宙に浮いた男を指さす。

(よし！　あとは……)

弓兵隊が新たな標的に向けて射撃を開始した。流れ矢が一矢、ジタンの留まっている樹に突き立って彼を脅かした。男は空中を浮いたり沈んだりしながら、ひとしきりなにか喚いていたが、じきに飛矢を嫌って後方へ退がりだした。ジタンのいる樹へ、背中を向けて、真っ直ぐ。　先に収めた短剣を、彼はふたたび静かに抜き放った。左手に逆手に持って、痛む右手を柄頭に添える。

(さあ来い、ひとりでは行かないぜ)

彼は跳躍に備えて腰を浮かせた。

気の付くや否や、彼は横を向いて激しく咽せて、泥まじりの血をもどした。セシルは泥土に突っ伏していた。

(なにが起こった)

泥を吸った髪が顔にへばりついている。どうやら影の甲冑が解けてしまったようで、彼の意志に反して身体中がなんの反応も示さない中、そこばかり敏感な指先に、冷たく硬いなにかが触っているのを感じる。これは檻だと彼は思い当たった。

「セシル」

耳鳴りの治まらないうちに、遠くカミルラの声を聞いたと思った途端、彼は誰かに抱き起こされた。視界に今ほどの声の持ち主の映ったのを、彼は異様に思った。

「……今のはあなたか」

「しっかりとして 楯を！ 彼を囲んで！」

「驚いた。遠くにいると」

「ここにいるわ」

「カミルラ、あなたは部隊長なんだから、前に出ては」

「そんなことはもう わかったわ、前には出ない。ほら、わたしもあなたも最後尾よ」

自らの地面に接吻するはめに陥る、直前の記憶を彼はようやく取り戻した。カミルラが前線に出てこようとするのを止めるために振り向いたところで、それは途切れている。次の瞬間には泥を喰っていた。後から襲われたのだろう、少なくとも刀槍によるものではない、もつと強力ななにかで打たれて意識を失ったらしい。

(影が……)

カミルラが頭を抱き抱えてくれたおかげで、自身の体が俯瞰ふかんされ

た。先に鎧よろった影はやはり消えてしまっている。独特な陶磁の墨色は見当たらず、それをまとう前に着けていた胸甲は、上下する胸のういで大きく形を損なっていた。

影の甲冑と胸甲、二重の装甲がなければどうなっていたことか。なるほど余程の衝撃だったようで、左脚が妙な方向に折れ曲がっていた。まるで他人の体を見ているよう。というのも、セシルに痛みらしい痛みは感ぜられなかったのである。ただ息の詰まるような重苦しいなにかが肚はらの中に座っているようで、無闇に動悸がした。

「知らなかった、あの甲冑」と言って、彼は口中に残った血と泥をべつと吐いた。「……手荒にされると、消えてしまいうらい。ひとつ発見だ」

「そうね、発見だわ」カミルラは声を詰まらせた。「セシル、あなた死ぬの？ あなたって忙しすぎる。副官だったのが恋人になってすぐに今度は死人になってしまふの？」

（死ぬ？ いや、死なないだろう、けど、参った、体が動かない……）

指一本うごかせなかったが、さしあたってすぐに命がどうこうなるといっわけでもなさそうだ。これから死に下りてゆくひとではまだない、彼は自分が緩やかな上り坂に居ることを自覚した。指先から身体の中心に向かって徐々に感覚が戻りつつある。今は身体のごにも痛苦の存在を認められなかったが、じきに宿主を悩ませる本来の仕事を思い出して、ほうぼうで生の賛歌を高らかに歌い始めることだろう。

「死人のふりも新鮮だ……あなたが誰かに縊すがって泣いているのを始めて見た」セシルは無事を訴えるために無理に笑ってみせた。「誰だか知らないけど、羨ましいやつだ。もし見えたら聞かせてくれ、彼女は誰に縊すがっている？」

「死人のふりをやめたら、もっと新鮮な気分になれるかもしれないわ」カミルラも笑った。お互いがお互い無理にそうしているのを理解し合うと、笑顔は自然と面に浮かんだ。「セシル、大丈夫なの

？」

「大丈夫、だと、思う。カミルラ、部隊への被害は」

「痛む？ 脚が折れてるわ、すぐに処置をさせる。セシル、こんなところで死んではいけないわ、あなたの代わりはいない」

「カミルラ、被害」

「ラスキウス・コスモスよ、どうしてこのひとがこんな目に？ わたしの復讐の報い？ あなたが助かるならあいつの足に口づけしたっていい！」

カミルラは明らかに錯乱していた。泣いたり俯うつむしたり神に訴えたりするので忙しい。これもまた非常に新鮮な眺めであった。ふたりを楯垣で囲っている兵たちにも同様だろう。いったいに彼女はどんな時でも毅然としていて、女性らしい優しさや柔和さよりは、むしろ冷静さや果断さのほうが目立つひとだった。取り乱したとしても、それを露わにするような人間ではなかった。

（彼女のいう、あいつ ティナと話すときも、カミルラはこんなふうなのだろうか。こんなふうにしてあの子に毒突いて、打つのだろうか。どうしてわたしをこんな目に……と）

カミルラはそのままにして、セシルは楯垣のひとりに被害の確認を頼んだ。ひとしきり彼女らの間に蟠わたかまるなにかに思いを馳せても、それは解の出ない無為な低徊ていかいに終わった。彼は既視感を覚えた。

カミルラは未だ自己を取り戻さない。

「何人が来てくれ！ 上からひとが降りてくる！」

呼ばわっても、声に心えて駆けてくる人間はわずかに四人。動けるものはほぼ全員接敵している。負傷して臥せっている兵を鞭打つわけにもいかない。仕方なく自分を勘定に入れて五人、スコールたちは降下してくる兵を受け止めるために檻の下で身構えた。

「下がぬかるんでいることを彼らは知らない、降りてきたら」

「スコール、スコール、手を取ってちょうだい」

声に振りかえれば、エリーチエがいつの間にか席を立って、イミタリテ 幻像兵の攻囲に向かつて行くところとしていた。地べたに横たわった傷兵に躓いて、あわや転びそうになっている。

「エリーチエそっぢじゃない！ 危ないから座っている」

闇の中を往くひとのようにふらふら歩き出したのが、スコールの声を聞きつけて、彼女は彼のいる方向へよちよち遣りだした。彼は内心辟易した。

（動くなと言ったのに！）

「スコール、降りてくる！」

先に押っ取り刀で集まった四人が狼狽したような声をあげた。

（もちろん降りてくるだろうとも、おれはさつきそう言った）

「多分つんのめるから、支えるんだ。こう」

「おおいスコール！ 槍はもうないか！」

（スコール！ 誰か来たぞ。あんたも大変だな、客が絶えなくて）

スコールは説明を諦めて、うんざりと声のしたほうへ向き直った。やたらと体格のよい兵が五、六人連れだつて、前線から戻ってくるところだつた。

見たところ怪我らしい怪我もしていない。ちよつと前に余った武器を投げるとかなんとか言つて、こちらに有無を言わさずに余剰を持ち去つた強盗のごとき兵である。

（槍はないかだと？ 次は隣のやつを投げればいい。おれも手伝つてやる）

「目の前にあるだろう、そいつを投げればいい」

皮肉にはいつこう気付かないらしく、件の兵は呆れたような貌をして、腰のものに目をやって「これを投げたら戦いにならないじゃないか」と返した。

（そうだとも。よくわかつたな。てつきり知らないかと思つた）

「いまあそこから援軍が降りてくるところだ、手伝つてほしい」

兵は露骨に迷惑そうな貌をして「兄弟のところに戻らなきゃいか

ん」と言った。

(……兄弟の背のうしろにな)

兵は立派な体つきをしている割に、乱戦に付きものの乱れたところがほとんど見られなかった。こいつは戦う意志のない兵だと、スコールはひそかに断じた。おおかた見えづらいところで騒いでいただけに違いない。

「少しでいい。うえの連中が降りてくればここも楽になる」

別の兵が「こっちは怪我もしてる」と言っ腕をあげた。転んで擦りでもしたのだらう、申しわけ程度、そこに傷らしいものがこびり付いていた。

(なるほど……揃いもそろって見かけ倒しか、こいつらは)

スコールは無言で自分の大腿に手をやって、自称怪我人の擦り傷に血糊をなすり付けた。ろくな手当もできずに動き回ったせいで、先に付けられた傷はとうに開いている。

「本物らしくなったな。そういうのを傷と言う」

「あんだこの量……痛くないのか？ 早く手当しないと」

(痛くないかだと？ 痛いに決まってるだらう。土産にあんたにも同じようなやつをお見舞いしてやるうか)

「あんだたちが手伝ってくればできる。さあ」

血止めの必要に思い当たっても、スコールには自身のために使う時間がまったくない。援軍に來た直後から、まるで予め用意されていたように山積した厄介事に忙殺されて、彼は寸暇も得られなかった。

スコールは脂汗をぬぐった。出血のせいか軽い息切れのするのを、彼は深呼吸して曖昧にした。

左面の味方が苦戦を強いられるのは、なにも魔道士だからというだけではない。ルーカンたちが早い段階で潰走し、エリーチェの副官が死に、彼女もまた魔力を尽いて文字通り前後不覚の態で、この部隊には指揮を執る人間がいなかったのである。

(おまけにこの混成部隊というやつは……)

彼の部下　ほんの二日ほど前にそうなった　には怠け者、というより、戦闘を忌避きひしがちなものが少なくなかった。多くが生き残りの寄せ集めで、加えて一部に非戦闘員を用いているのも原因のひとつだろう。彼らを宥めつつ説きつつ、時には騙しながら言うことを聞かせるのは、忍耐強い彼にしてからがたいそんな骨折りなのである。

「あなた、疲れてんのか？　後にいたのに」

（あなたは疲れてないようだな。前にいたのに）
「行ってくれ、おれも都合がつけば行く」

兵がなにか言い募ろうとして已めて、つとスコールの肩越しになにかを見上げた。視線を辿って振り返ると、ちょうど檻のうえから兵が降り来るところだった。先の四人は二手に分かれていて、降下する兵ひとりに対してふたりで支えようとしている。ふたりともまるで受け止めきれずに、三人もろとも泥の中に突っ伏す形となった。

「……あなたたちなら二人でやれるだろう。あんなふうにして抱き止めてやるんだ。さあ」

要領を得ないような貌の彼らを、尻を叩かんばかりにして送り出すなり、今度はその辺りをよたよた歩き回っているエリーチェの回収に向かう。

（世話の焼ける……！）

「エリーチェ、座っていると云っただろう」

「おおスコール、わたしの杖、導き手」

（もう折れそうだよ、あなたの杖は）

「どうした、魔力が戻ったか」

「ええ少し戻ったわ、だから一緒に使い道を考えましようねえ」

（なんでこんなに悠長なんだ……あなたの兵は大概死んだんだぞ）

彼は眉根を押さえた。

エリーチェは我が道を行くひとだった。しかもその道はあらゆる他人の道と交差しなかった。スコールは仕方なく自分の道を離れて、

彼女の手を取って舗装されていない土手を危なっかしく歩くことを余儀なくされていた。

冷静さだけに焦点を絞れば、なるほど彼女ほど冷静な人間はいないだろう。彼女はなにが起きても平然としていた　というより、たいてい呆けていた。スコールは初対面で白痴を疑ったくらいである。トリーネの姉ということだったが、童顔で小柄で声が高く、瞥見程度ではまったく子ども同然であった。

（エリーチエは古参の部類に入ったはずだが……こんな調子でよく今までなんとか耐えたものだ）

「戻ったのなら……見えるんだろう、ひとを当てにするな」

「見えないわ、見ないわ、みんなの死体なんて見たくないわ」

（あんとは気が合うね。友だちにはなれそうにないが）

「あらなにか着いた。これ血ね、きたない」

「エリーチエ後で聞くから」

「おいスコール！　ひとにやらせといてなにやってる！　手伝えくら！」

今度は先に尻を叩いた六人のうち何人かが、こちらを向いてやいやい遣り始める。スコールはエリーチエの手を投げだして叫び出す寸前といった態。水輪の下で慌てもがく水鳥の努力で、彼は辛うじて無表情を維持した。

（おいだのこらだの……まったく隊長思いの部下どもだ。おれにはささやかな報酬として、部隊長が受けて然るような小さな尊敬すら与えられないのか……）

スコールは鉄面皮の下でひっそりと滅入った。

「いま行く」

「いまのスコールというのは誰だ」

今度は別の声があがる。　スコールはなかば本気で改名を決心した。

（スコール、スコール、スコール！　まったく人気者だなあんたは！）

「こつちだ」

彼の名前を質ただしたからには、声の主は降りてきた援軍のうちのひとりだろう。果たしてやってきた見慣れない女は、長い金髪も露わに胃を着けていなかった。戦時の兵になかなか許されることではない。どうも士官と思しい。

「……あんたは」

近づいて来るなり、着けている甲といわず顔といわず、女の全身泥だらけであるのをスコールは認めた。先に泥の中にあたまから突っ込んでいた手合いに違いない。歩きながら顔の泥をぬぐうその肩越しに、降下してきた援軍の兵溜まりからもう二人、彼女の背を慕ってやってくるのが見えた。

「お前がスコール？」

（あんたは厄介事？ さつきからあんたの親戚がたくさん来ててね）

「ああ」

「顔を合わせるのは初めてだな」と言つて、彼女は握手を求めて、今ほど泥をぬぐっていた手を突き出した。「わたしはアグリアス」

「……援軍は大歓迎だ」スコールは雄々しくその手を握った。アグリアスというのは泥女という意味に違いないと彼は思った。「何人だ」

「わたしたち重装歩兵百強と、うえの弓兵が百弱。 エリーチエ

は無事だな」

「警めくめが無事の範疇に入るのなら」

「クレアルコスたちと連絡は？」

「おれが来てからは取れていない。どのみちエリーチエがああの調子だから、たぶんルーカンが退いてからは没交渉だろう」

エリーチエは相変わらず「スコール、わたしの杖」などと呟きながらその辺りを徘徊している。アグリアスに付いてきた兵の片割れが彼女に歩み寄って、その手を取った。

「ラヴィアン、彼女を。 だいぶやられたようだな。被害はどの程度？」

「エリーチエたち魔道士はほぼ全滅。ルーカンとトリーネの隊は退却。彼らの残党がすこしと、あとは増援に来たおれたちでここを守っている。怪我人は」背後を手で示して、「ご覧のとおり大漁だ」

「死人の数を知りたい」

「死者はほとんど出ていない。おれたちからは、だが」

「そうか。死んでいない？」

「死んでいない。死ぬ前に退かせている」と、彼は繰り返した。「楯で壁を作って手を出さずに、とにかく防御に徹しろと伝えてある。接敵しない兵にはこれを」先ほどアグリアスからもらった泥を示して、「投げつけるように言っている。あいつらにもいちおう目潰しは有効らしい」

「……戦わずにいてどうする。なにも変わらないぞ」

（泥女じゃないな……猪女だ）

「うえの連中が来た。あんたたちも」平然と言って、「実際、対等に得物をやりとりできるような兵力じゃない。援軍を待つか死を待つか、退却を要求できない以上、とにかく少しでも」

アグリアスの背後でふたたび「こらスコール！」の朗唱が始まった。むろん先の兵のもので、悲鳴に近い。おおかたすっかり泥だらけになったので、ここはひとつ尊敬する部隊長の手になすり付けてやるうとでも考えたのだろう。

（どうだ猪女どの、おれの部下は礼儀正しいだろう……）

「こらっ、きさま！」思いがけずアグリアスが声の主に振りかえって、高い声で「こら」を応酬した。「部隊長に向かってこらとは何事だっ！口の利き方に気をつけよっ！」

兵は震え上がって、ひとたまりもなく今までやっていた仕事に逃げた。アグリアスの意味についてちょっと早とちりをしたかもしれないと、スコールは思い直した。

「アグリアス、できるなら少し指揮を代わって欲しい」

「構わないが、どうした」

スコールは黙って自分の腿を示した。

「怪我を？」

「少し前に」

「厄介なところを……急所に？」アグリアスがしゃがみ込んで、彼の傷を検め出した。

「いや、外したが、だいぶ血が抜けた」

脚を庇うのも今さらではあったが、スコールは用心を思い出してそろそろと地べたに腰を下ろした。アグリアスの連れの女が彼の様子に他意を認めたものか、慌てて支えようと前に出てきた。

「アリシア、彼を」

「はい」女はアリシアというらしい。「もう大丈夫ですよ。痛みますか？」

（痛むよ、とつても。　こういう客なら大歓迎だ）

彼女にはお茶を出してもいいと彼は思った。

「それほどでもない」

「少しそこで休むといい。アリシア頼んだぞ」

それだけ言つてアグリアスは立ち上がった。檻のほうではすでに兵の降下を終えて、得物を降ろす作業に取りかかっている。彼女はいったんそちらに歩いていつて、ふと踵かかとを返して戻ってきた。

「忘れていた。スコール」

「？」

「なにか、書くもの、ないか」

彼女は筆でなにか書くような仕草をしている。

「なにに使う」

「なにつて……書くんだ。それしかないだろう」

（そうだとも。よくわかったな。てっきり知らないかと思った）
「ない」

「エリーチエ、ないか」

ラヴィアンと一緒にすこし離れたところに座っていたのが、呼ばれるなりぱつと立ち上がった。ラヴィアンがその手を引いて「あなたは行かなくていいんです。向こうが来ますから」と執りなした。

「あるわ」

言って、腰の小物入れから取り出したのは、細長い革の容れ物だった。ラヴィアンが中身を検めて、ひとつ頷いてそれをアグリアスに手渡した。出てきたのは黄味の強い、大振りなチヨコボの羽筆である。

「いいものだな」

悠長なもので、アグリアスは筆を執ったりひっくり返したりして被せてある銀細工を矯めつ眇めつしている。こういうことをしているうちに用事を忘れるんだなど、スコールは思った。

「アグリアスさま」

「ああ、うん。で、墨壺は」

「ないわ」

「……………」

アグリアスはちょっと考えるふうをして、またスコールの許に戻ってきた。懐から手巾らしい布切れを引っ張り出しながら、

「ちょっともらうぞ」

と言って、なんと羽筆の先端で彼の大腿をつつき出した。つつかれた側も手当てする側も瞠目した。彼女はスコールの血を墨がわりに、膝の上で書き物を始めた。

「アリシア……血は止まりそうか」

「ええ、はい、たぶん」

「もうちよつとな……出してもいいぞ」

（今こいつはなんて言ったんだ……おれの耳がおかしいのか）

「……………」

「スコール、どう」

「早く手当てしてくれ、早く」

「…………アグリアスさま、簡潔にお願いします」

「うん……できたら……………」

スコールの脚の付け根のぐるりに麻縄を廻して、アリシアはその両端を容赦なしに引き絞った。彼の歯間から薄い呻きの漏れるの

を気の毒そうに見遣りながら、それでも彼女の両腕はさながら別の生き物のように、手際よく荒っぽくよく動く。

緊縛を終えると、今度は腰袋から包帯と小さな壺を取り出した。傷口の血糊を丹念に拭って、壺の油紙の封を丁寧に剥ぐ。膏薬と思しい。

「……終わりました。痛みますか？」

（痛むよ。とつても　い、痛い、痛い！　なんだ、なにを塗った！）

「いや」

「そうですか」

アリシアはじつとスコールの顔を観察している。

「……もう？」

「終わりました」

「そう」

「……………」

「……痛い、なんなんだそれは」スコールはようやく観念した。「毒かこれは……薬とはとても……」

「ザカリアスの軟膏です」アリシアの面に妙な笑みが浮かんだ。「よく利きますが、滲みます。我慢してください」

（あの爺さんか……ヤブめ……）

「次もこういう目に遭いたくなかったら怪我をするなって、そう言うんです」

「本末転倒だ、これが」

スコールは言いかけたなり、アリシアとアグリアスを思いつきり突き飛ばした。彼女らがひっくり返るのを見届ける隙もなく、彼のいる辺りを目掛けて何かが突っ込んでくる。

（こいつらに　！）避けるのはもちろん、身構える時間もない。居留守を使う隙などなおなかった。（こいつらにおれの住所を教えたのはいったい誰なんだっ！）

それは盛大に泥の飛沫を上げて着地したあと、勢いもそのままに

スコールの肩に激突、撥ねられた彼は錐搦みしながら宙を舞って泥を喰う。あたまをあげる暇しじまもあればこそ、そこに新たな訪問客の靴の裏が、勢いよく彼の背中を訪うた。

「クレアルコス、彼は生還するかな」

クレアルコスはいちど振り向いて、また視線を戻した。

彼の見据える先、クラウドが切り込んでいった一角はすでに塞がれていたが、意気軒昂たる喊声とその向こうから絶え間なく上がっている。意気消沈して楯に隠れるのが精一杯だった兵が、今は我先に疲れを忘れ熱狂に急ぎ立てられて、クラウドの剣を遮まへり無な二追おいかけるのである。久しく目にしていなかった、それは兵士を鼓舞し奮い立たせる英雄の一撃であった。

ひととき大きな声が上がって、幻像兵が二、三人、彼らの仲間の頭越しに吹っ飛んで行くのが見える。あきれて打ち眺めるほかない。人間の武器を用いないのだからして、その効果もむろん人間業ではなかった。

「まさしく英雄の一撃。こんなところで殺してなるものか、彼は以後きつと、兵たちの希望の拠所となる。あつきちしおに代わる……！」

クレアルコスの言葉にも熱が籠もった。

「しかし、なぜ彼ほどの兵が今まで……ルーカンの隊ということだったか」

「そういえば、彼のことかどうかはわからないが」と、クレアルコスはたけきこころに向き直って、「ルーカンが以前、非戦闘員から徴兵した中に変りダネを発掘したと言っていた」

「徴兵……彼はそんなことを？」

「君は知らないかもしれないが、実のところ水を向けられるのを待っている人間は結構いるのだ。それさえ待たずに直接談判しにくる

若いのもいる」

「初耳だ」

「そうだろうな」クレアルコスはちょっと苦笑した。「誰も君のところへは行かないから。君が渋い顔をするくらい、みなもよくわかつている」

「……………」

「わたしがこんなことを言うのもなんだが……敗戦つづきにも拘わらず、しょうじき妙な心理だとは思っね。こういふときに志願するというのは」

たけきところはヤンの顔を思い出した。そうしてユツグを名乗るあの少年のことも。妙？ 決して妙ではない。

「それで、変りダネという」と

「いつも独りで、誰とも話そうとしない、皆から避けられている、無気力で可哀な青年がいると」

無気力！ 可哀想！ いま最前線で草でも刈るように敵兵をなぎ倒している軍神を形容するのに、これほどのを外したものもない。たけきところは「なにをばかな」と笑いかけた。

「人違いだろう」

「彼となんとかして友誼ゆういを交わしたいと、しきりにそう言っていた。なぜそうしたいのかは聞かなかったが、今にしてみれば心当たりもあるだろう、彼のあの力！ おそらくあれの片鱗を見るかしたに違いない」

（そういえば……ルーカンについてなにか言っていた。彼の戦う理由について）

ティナの為だと。内容があまりにも意外に過ぎて、なぜそんな込み入ったことをクラウドが知っているのか気にも留めなかったのだが、

（そう、彼と親しく話す機会があったのだろう。もっとも、クラウドのほうからどうであったかはわからないが……）

「それにしても……そうだな、君の言うとおりだ、クラウドはなぜ

今ごろになつて？」と、クレアルコス。

「それさ。では君も、今回が初めてなのか。見るのは」

「初めてだ。もっとも、わたしの目の届かないところで戦っていたにせよ、噂にならないはずがない。耳を塞いだって飛び込んでくるさ、あれなら」

「彼がいつ来たか、君は？」

クレアルコスは頭かぶりを振った。

「至聖殿から援軍の途切れたのはずいぶん前だ。いずれにせよ、彼はそれからずっと黙して、あたら剣を錆び付かせていたことになるな。なぜだ。彼がもう少し、もう少しだけ早く戦線に出ていてくれたら……せめて一ヶ月はやく」

「まったく、惜しいな。なぜだろう」たけきところは溜息をついた。「しかし……ほんとうに惜しい。一週間でも」

「今さら欲をかいても仕方がない」クレアルコスは溜息をついた。

「仕方がないがね……そうだな、一週間でもよかった」

「一週間前に彼が戦列にいたら、あつきちしおは今ここにいただろうか……」

「友よ、悲しくても現実を見なければ。彼はもういないのだ。しかもクラウドが轡くつわを並べていたら、きっと……」

たつたいま手に入れた利器の、あまりの価値の大きさに、ふたりとも無駄とわかつてはいても、それを過去に応用してみようとむなしい努力を重ねた。ただいつときの夢想到過ぎなくても、それはいろいろなよい影響を憶おもわせたふたりを慰めたので。

彼らを現実に取り戻したのはゼノフォンの声だった。

「たけきところ、ちょっといいかな」

先に百人ばかりを引き連れて宿営の偵察に向かったのが、ちょうど今しがた林道から帰陣したところらしく、息を弾ませながらふたりに向かって手招きしている。

「戻ったか。彼になにか用事なら、お前が直接出向け、ゼノフォン」挨拶もそこそこに、たちまち彼の隊長がそれを咎めた。「光

の戦士をあごで使うな」

「内緒話なんです」ゼノフォンはとくに怯みもせず、軽げに返した。「わたしと彼の」

「聞かれて困る相手がここに？」

「彼の隣にひとり」

「わたしのことが」

「あなたのことです」

「どうして困る」

「どうしても困るんです」

クレアルコスはこの応えに納得して、たけきところから離れてトリーネの傍そばに寄った。あごで使う必要もなくなったと見えて、ゼノフォンが急ぎ足でやってくる。その貌からこれといって変わった色を読むでもなかったが、彼はなんとなく悪い話題であるような気がした。

「御苦労、早かったな。イーデイスたちはよくやってくれたのかな」

「まあ、いや たけきところ、スコールの話」

「スコール？」

「パウサニアスが増援に来ると」

「嘘だが クレアルコスにはまだ言っていなかったか」

「やっぱり嘘なんだね。 実は本当になった」

「なに？」

「パウサニアスたちがそこまで来てる。彼らが宿営に降りてきて、先に逃した幻像兵を討つたらいいんだ。それで、そのままこちらに」

「天幕の守りは」掴みかからんばかりの勢いでゼノフォンを質す。

「しろきかいなは？ イーデイスたちが？」

「すまない、わからない 来た、直接本人に聞いてみてくれ」

（なにもかも裏目に出たか……恐れていた事態に！）

ゼノフォンと入れ替わりに、棒立ちになる彼めがけて、多数の重装歩兵を従えたパウサニアスが駆け寄ってきた。駆けながら楯を放って胄を脱ぐ。その後からちよつと遅れて、なにか大きな箱を負う

たアカルタエもやってくる。

「やあクレアルコス、トリーネ」ほうぼうに投げかける挨拶は、性急で虚ろである。大本命にかける言葉が喉元まで来ているのである。

「たけきところよ、君というやつは！　なんて恰好してるんだ！　矢が飛んでくるとあれほど　！」

襯衣一枚のたけきところを最前から認めていたのだらう、パウサニアスもアカルタエも血相を変えて彼に詰め寄ってくる。

「パウサニアス、なぜしろきかいなの許を離れた」

「彼女なら大丈夫だ、向こうの敵はすべて片付けたさ。それより自分の心配をしたまえ！」

「パウサニアス」

「ですからわたしがあれほど　！」アカルタエは彼に触ろうとしたり止めたりを繰り返している。「たけきところよ、あなたの甲冑をお持ちしましたから、すぐにこれを　！」

「パウサニアス」

「クレアルコス、奇襲を受けたらどうする！　彼をこんな恰好のままにさせてはいけない！」と、パウサニアス。

「トリーネ！　彼が裸になってもあなたはそこで指を啜えているつもりですか！　彼は指揮官なのよ！」と、アカルタエ。

「パウサニアスっ！」

わあわあ騒いでいた主従が静止した。

「なぜ来たパウサニアス、わたしは天幕を衛れと君に命じたぞ、天幕を衛れと！　君は肯うけなつた！」言つて矛先を変えて、「アカルタエ、君もあの場において聞いていたはずだ。君は隊長に盲従してわたしの命に背いた！」

激昂するたけきところとふたりの間に、クレアルコスの主従が割つて入った。トリーネも困惑顔で駆け寄ってくる。

「君、落ち着け、なにを怒る」と、クレアルコス。「彼らは増援に来たんじゃないか、どうしたというのだ」

「パウサニアス、アカルタエ、君たちを処罰する」と、たけきこ

る。

「たけきところ、とりあえず、止まるんだ、喋るのは構わないから」と、ゼノフォン。

「なにがどうなってるのパウサニ阿斯、どうして彼は」と、トリーネ。

「天幕は無事だ、なんともないんだ、ニューラーズは来なかった」と、パウサニ阿斯。「グイードが苦戦していると言っていたもんだから、君が心配で……」

「わたしが心配……わたしが心配で、わたしの命に背いたと、君は言うのかパウサニ阿斯っ！」たけきころはついに爆発した。「わたしは君の娘か？ 君は小さな娘が石くれに躓つまづいて転ぶかもしれないと心配したのか！ なんとということだ、それほどまでに君に気を揉ませていたとは知らなかった、なるほどすべてはアニマ・ウアリドゥスの弱きころの招いたことか さときまなこよ、君が今ここにいてくれたなら！」

「なんとということ……我々はそのようなつもりで」と、アカルタエ。

「もちろん君たちはそういうつもりだったのだ！ そうとも、彼が生きてここにいたなら、君たちは今ごろ天幕にあつて従容として、しるきかいなと共に火酒を舐めていたに違いない！ セシルの先見の鋭さよ、すべてはわたしの不明であつたか！」

パウサニ阿斯もアカルタエも、もはや弁解を試みるでもなく、蒼白になつて呆然としている。一刻もはやくそれをしようと急せくのに、その手段の全く見いだせないひとのように、ふたりは力なく手を振り上げたり下ろしたりしておろおろしていた。

「友よ、静かに、兵が聞くから、静かに」クレアルコスが取り乱す彼のあたまを抱え込むようにして抑えた。無理にみなに笑いかけて「みんな、珍しいものを見たじゃないか。彼も人さ、たまにはこういうときもある。で、ゼノフォン、パウサニアスの増援というのは」

ゼノフォンは恬として「嘘です」と言った。

「パウサニアスへは彼から、お前にはわたしから、あとでささやかな罰を贈ろう。とりあえず」

「クレアルコス放せ、君にわたしを」

突然、なんの前触れもなく凄まじい関が四方から一斉にあがって、檻を衛るコスモス勢を竦ませた。陣で悶着に忙しくしていた六人もはたと黙る。

「今のは……」

関は一度だけではなく、それを汐に間断的にあがり続けた。声の起こった位置や大きさ、なにより大多数の人間が合図もなしにあげるにしている整齊に過ぎることから、まず間違いなく檻を囲んでいる幻像兵たちの為業である。

「……ティナ？」 ややあつてトリーネが呟いた。「ティナって言うてる？ これ」

関は怖ろしい、悪意に満ちた声で「ティナ」を連呼していた。

(三、二、一！)

ジタンは枝を蹴って、あやまたず魔道士の肩に食らいついた。不意をつかれた男に抵抗のしようもない。飛び掛かると同時に両脚と尻尾を胴に巻き付けて、力いっぱい締め上げる。逆手に握った刃をしろい首と肩の境目に突き込むまでの動作を、彼は一呼吸の間にやってのけた。

「いつ　　！」男が空中で仰け反って、ひとのものとも思えないような絶叫をあげた。「　　たあーいつ！」

そのまま絶命して墜落するかと思えば、男は実に往生際わるく、背中にジタンをくつつけたまま喚きながらめちやくちやに飛び回った。止めを刺^てそうにも柄にしがみつくのが精一杯である。傷口から吹き出る血潮に顔を洗われながら、彼は男の力尽きる瞬間を待って、自身の力の尽きつつあるのを懸命に励ましていた。

(はやく死んでくれ！)

なおもしばらくのあいだ旺盛に飛び回ったあと、男はジタン共々どことも知れぬ地面に激突し、勢い冷めやらず不運な兵をひとり撥ねた。

(……オレ、生きてる？)

着地した衝撃で手を放してしまっただらしい。投げ出されたようで気の付いたときには彼は仰向けに転がって、遠く何かが水のうえを滑っていくような擦過音を聞いていた。今さらのように自分が眼をかたく瞑^{こむ}っているのを自覚する。

(眼を開けたら花畑、なんて……勘弁してくれよ)

さっきまであちこち痛んでいたのに、今はほとんどそれが感じられない。おまけになんだか背中に温もりを感じる。こりゃひよっと

するかもと恐るおそる目を開けると、ちょっとひとの顔だか泥だか判別しがたいなにかが、自分を覗き込んでるのが見えた。

「スコール」

泥ではない、ひとのようで、声は女のものである。天国の住人がこんな汚らしい恰好をしているわけもないと、彼はようやく胸を撫で下ろした。

「……ご婦人、オレはスコールなんて名前じゃないぜ」

「お前じゃない、お前の敷いている布団の名前だ」

「あ……悪い」

慌てて起き上がるうとした途端、ジタンは下から突き上げられて横に転がった。彼が横たわっていた場所には先客がいたようだ。

「スコール大丈夫ですか！」これまた泥だらけの女がもうひとり、スコールというらしい布団の心配をして駆け寄ってくる。「これを

水です、眼に」

布団は身体を起こしたとたん激しく咳き込んだ。女の差し出した水筒から水を掬って、眼を洗ったりえすいて吐いたりと大わらわである。

（誰かオレの心配もしてくれないかな……）

しばらくぼうつとして、布団の洗濯を見るときなしに眺めていると、

「おいお前」

先の泥女に声をかけられた。顔の泥はいい加減に拭い去られて、居丈高な口調にはちよつと釣り合いの取れない、幼気味的美貌が覗いている。

（そうそう、この美人はアグリアス。となると……オレは檻の右に墜ちたのか。そうとう無軌道に振り回されたみたいだ）

「お前、どこの隊のものだ。それともあれの仲間……ではなさそうだな」

「……あれって」

アグリアスは油断なく右手を剣の柄に置いて、左手で一方を指し

示した。指の先には轍わだちのようなものが続いていて、肩に剣の柄を生やした派手な態の人間がひとり、なかば泥に埋没するような恰好で臥している。

（そうだ……あいつに止めを）

「あ、おい」

ジタンは易々と立ち上がったつもりだったが、予想に反して両脚は思うように体重を支えず、倒れまいと突きだした両腕も同様だった。ふたたび泥の中に倒れ込もうとする彼を、アグリアスが横合から抱き止めた。

「しつかりしろ。どうした、なにがしたい」

「これはどうも」アグリアスが甲を着けているのを彼は残念に思った。「なんかオレらしくないな……ご婦人に先添いしてもらうなんて」

「ここは戦場だ、何人もここでらしくあることを許されはしない」

「同感。ご婦人が鉄の衣装で飾られて、紳士がお姫さま扱いされるんだから」

「怪我をしているな 先に手当を」

「いい、後で。それよりあいつのところへ……あの男のところへ連れていってくれ」

アグリアスの肩を借りて、ジタンは引き摺られるような恰好で男の許へと歩んだ。見つけてからというもの、男はぴくりとも動かない。ジタンの一撃も墜落の衝撃も、じゅうぶんに致命傷たり得るものだった。止めなど必要ない、とうに死んでいるはずである。

「死んでいるな。こいつは？」

「仇」

「仇？」

「カオスは仇さ、そうだろ」

「お前は……スコールの部下か？」

「オレはアトツサの部下だ、部下だった」

「ルーカンの副官のことを言っているのか。 だった、とは」

「今はもう、だれの部下でも、ないってことさ。振られたんだ」ジタンは男の足に語りかけるように、悄然と俯いている。「未練は募るけど……天国まではなあ、ちよつと遠くてさ、追っていけそうにない」

「死んだ？」彼の首肯するのを見るや、アグリアスはきつく眼を瞑った。「アトツサが死んだ……それは確かか？ そう、ルーカンの消息は！」

「オレが看取った。ルーカンはわからない、けど、みんな絶望視してた」

「なんてこと……」

「それは朗報」

足下から声が上がると同時に、アグリアスが素晴らしい反応で腰の剣を抜き 支えを失ったジタンはその場に頽くずれた。それでも辛うじて膝立ちになって、もう一振りに手をかける。

「まだ息があつたか、カオス！」

「へっ、そう……こなくっちゃあ。地面に手柄はやれないぜ」

もういちど立ち上がろうと踏ん張っても、膝は萎くだえて推けないようにするのが精々。おまけに白刃を執った右腕はいささか血が抜けすぎたのか、正直なところなにを掴んでいるか感触も定かでない。

無事な左は体重を支えるだけで精一杯。とても戦闘に耐える状態ではなかったが、

「ゴホ……失敗、しちゃったかも。つまんなあい……」

それは男のほうでも同じらしい。何度か口元の泥だまりに血を吐きながら、しかし口だけは威勢を失わずに、顔を精いっぱい横に倒して眼だけをふたりに向けている。

「もうちよつと、楽しめると、思ったんですけど、ゴホ、ねえ」

「お前、イミターテイオー幻像兵ではないな この剣がここに収まる前に、言え」
言つて、アグリアスは剣の切っ先を男の喉に擬した。「なぜおまえたちがここに？ カオス勢は山の向こうにいるはず」

「あっそ。やっぱ……そう思ってたんですね。こりやお笑い種

「言え」切っ先がこころもち男の喉に埋まる。

「言つ言つ言います痛いったら！」

「さあ。言えば命だけは助けてやる。その態で命を拾えればだが」
男は曖昧にへらへら笑つて、「そいつを遠ざけてよっ、なんでも話しちやうから」と愛想を振りまいた。アグリアスは眉を顰めて、それでも素直に剣を引いてしまう。

「アグリアスだめだ、やるんだ！」

「捕虜にすればいい、こいつは幻像兵ではない。情報を吐かせる」

「話すもんか、なにかするつもりだ、早く！」

(くっそ……動けオレの腕！)

ジタンがひとりやきもきしている間に、男はもう一度はげしく咽せて、そのあと震える右手をあたまのうえに立てて、力なく指を鳴らした。アグリアスがふたたび眉根を寄せる。

「コスモスも可哀想にねえ」男は含み笑っている。「あたまの切れるのはみいんな死んじやつて、こおんな馬鹿！ ばっかり残っちゃった」

「きさま、自分の置かれている立場を」

「あ、馬鹿つていうのはア、お、ま、え、のこと！ ゴホ！ さつさと刺しちやえばいいのにつ、おまえみたいな甘ちゃんか」

言葉の途中で男の眼窩にジタンのナイフが生えた。傍らのアグリアスの脚に寄り掛かって左を生かして、その隙に長靴の鞘から引き抜きざま投じたものである。一瞬の早業で、男の首がくたつと寝てからようやく、アグリアスは自分の脚に巻き付いた尻尾の持ち主を見下ろした。

「お、お前……」

(こいつ、なにかしたな、さつき)

「アグリアスさまア！」

声に振り向くと、先のスコールと彼を介抱していた女が、連れ立ってこちらにやってくるころだった。スコールは女に肩を借りて、

剣を杖に脚を庇っている。

「ああ、いい、そつちへ行く」よたよた歩くふたりを制止すると、アグリアスはジタンに肩を貸してふたりと合流した。「スコール災難だったな、大丈夫か」

「問題ない。あんたの兵を前線に加えた。よかつたか」

「うん、いい」

口ほどになく、スコールの顔には「問題だらけ」と大書してある。こいつは表情に出やすいタチなんだなとジタンは思った。

「なにかありましたか。それと、その子はいつたい」

「そういえば……お前、名は」

「あ、自己紹介がまだだった」尻尾を前に突きだして、「ジタンだ腕が上がんなくてね、握手はこつちで受け付けるぜ」

ちよつと躊躇ためらったあと、アリシアが遠慮がちにそれを握った。

「どうも、ジタン」

「どうもアリシア。おっと、あんまり引つ張らないでくれよ。

その気になつちまう」

「……ええと、それで、さっきのは」

「カオスの魔道士らしい。珍しく人間だったから捕らえようとしたんだが……」ジタンの旋毛つむじを睨にらまえて、「駄目だった、死んだ」

「人間？ 幻像兵だろう」と、スコール。彼も最前から仏頂面でジタンを睨めつけている。

「幻像兵では あっ」

言いながらジタンともども振り向くと、思いがけず男の姿は影も形もない。ただ泥の中に短剣とナイフが一振りずつ寝ているだけである。

「ばかな……あれはとても幻像兵には」

「今さつき消えたが」

「わたしも見ました、ほんとうについさつき」

「あれが幻像兵」と、ジタンの旋毛に向かってアグリアス。

「あれも幻像兵」と、彼女を見返してジタン。「新種？」

「具体的になにが」

と、スコールが口火を切ったなり、突如として凄まじい鯨波げいはが四方であがった。

声^{こゑ}が身体に当たってくるかのような、こちらを薙ぎ倒さんばかりの音量である。アグリアスとアリシアは咄嗟に両耳を塞ぎ、支えを失ったジタンとスコールは二人なかよく頼れた。

(……………ティナ?)

「ティナ?」

檻の周囲から喊声とも絶叫ともつかない大声があがると、弓兵たちはめいめい射撃の手を休めて、困惑気に耳をそばだて始めた。

「ティナというと……………この下の?」

「マイナロス、どう聞こえる」

マイナロスはちょっと演技めいた仕草で手を耳に当てて、「ええティナのようです」と言った。

「だよな。というと……………この下の」

「女の子ですね。いやすごい人気だ」

件の声は波のように、規則正しく繰り返しあがり続けている。出所はどうも敵方のように、^{かがり}篝を照り返してあれほどきらきらしていた幻像兵たちの刀槍が、いまは影も形も見られない。どうやら攻撃を中断してまで「ティナティナ」に専念しているようだ。

(なんだろう、新手の魔法かなにかだろうか。　いずれにせよ)

「マイナロス、攻撃再開。好きにさせておこう」彼の肩を軽く突いて、「みんな手を休めるな!　せっかく大口開けてくれてるんだ、イヤってほど喰わせてやれ!」

幻像兵の斉唱に負けじと、ふたたび弦打の音が辺りに満ちる。

幾筋か射たあと、ふと先ほどカオスの魔道士に撥ねられていたスコールが気になって、フリオニールは伸び上がって檻の下を覗き込

んでみた。

(……アグリアス?)

折も折、こちらを見上げていた彼女と眼が合う。どうしたと思う間もなく、アグリアスは大きく振りかぶって、彼めがけてなにか投げつけてきた。

「うおっ！」フリオニールは仰け反って尻餅をついた。

「フリオ　ん、なにか……」

「猪女……片目を潰されるところだった！」

故意か事故か、彼女は彼の眼のあたりを的に矢を投げしてきた。頬を鏃が擦って、口元から顴骨ほおほねにかけて血が滲んでいる。避けなければほんとうに当たっていたかもしれない。下ではアグリアスが両手を合わせて、しきりに謝意を表明していた。

「フリオニール、矢文です。　今では？」

「ああ今のだ、まったく」

「読みますか？」

「謝って済むことじゃ……頼む」

マイナロスは弓を足下に置いて、手套を着けたまま器用に矢文を解いた。

(目玉一個分に値する情報なんだろうな……)

「えー……アグリアスより」前置いたあと、マイナロスはちょっと沈黙した。「……エリーチェら魔道士部隊の被害甚大。スコール隊防戦一方。連絡途絶、活路不開。我が兵を加えるも兵力差歴然、倍から三倍程か。エリーチェ力尽き盲い、スコール負傷、アトツサ死亡確認、ルーカン消息不明も、死亡乃至重傷の色濃し。後退必至、打破不能、乞う尚一層の射撃を　下はあかるい出来事ばかりですな」

「……そうか、死んだか」

「続きです」ふたたび文に眼を落とす。「唯今新種の幻像兵飛来、件の大声と関係か。彼敵情を諷す。(不確定乍ら)カオス勢山脈を越えたか。可能性高し。増援急派請願併せ大至急本陣に知らされた

し」

「やはり……」

「とうとう」

「ウルフリードたちが消えただろう。あの件で昨晚、たけきころとも話したんだ。こちらがわに敵が　いや、喋ってる場合じゃない。マイナロス」

「行きましよう」

「悪い、この脚で下に降りるのはちょっとな」

「フリオニールは尚一層の射撃に専念してください。アグリアスさまのために」

「ああ、請け合った」

マイナロスは檻の正面側へ走っていき、下を覗き込んで躊躇していったん縁にぶら下がった。　グイード流である。きつと落ちるときは尻餅をつくだろうし、たけきこころとクレアルコスも驚いて飛び退るに違いない。今ごろ彼は首尾よく矢束を満載して、騎鳥を責めて林道をひた走っているところだろうか。

（それにしても……いったいどこからこちら側へ？　まさかほんとうに海から来たんじゃない……）

マイナロスを見送ったあと、フリオニールはしばらく弓を執るのも忘れて物思いに耽っていた。

（もしそっちから来たなら至聖殿の無事なはずが……ひょっとしてもう陥落して）

「当たってはおらんが」

ほんの耳元数時のところで声がして、フリオニールはぎょっと横を向いた。息のかかるほどの近くに忽然と、女の顔が置かれている。彼はふたたび「うおっ！」と仰け反った。

「外してもおらん」

「お……お前、カオスの……！」

あまりに急な出来で、フリオニールは身構えるどころか、女と距離を置くのも忘れて棒立ちになった。

「ふふん、なかなか気付かなんだの、ちと焦れたわ」

暗い銀髪、半裸の妖艶な肢体に纏わりつく一対の金蛇、力オス軍創成の頃よりガーランド幕下にある、その存在のあまねく知られた魔女。

「くらやみのくも……」

女つがの存在に気付いた兵のひとりがそう呟いて、彼女に向けて矢を番えた。

「最近はそれで通っておるようだな」くらやみのくもが小首を傾げた。「まあ好きなように呼ぶがいい」

「……なにをしに」

「ちとものを尋ねに来た。小僧、あの物騒なものをしまつよう言わんか。気が散る」

「ここでお前を殺れば大首級だ」

「礼儀がないの。わしがうえでお前の旋毛を眺めておった折、気が向けば墨の柱に変えてやることもできたが」

「……」

こう言われると開き直れないのが彼である。仕方なしに小さく頷くと、件の兵はしぶしぶ矢を外して、代わりにいつでも袋叩きにできるようにするつもりか、周りの兵たちに女の存在を報せて回った。なんの前触れもなく忽然と現われた彼女の存在に、辺りの兵たちは未だほとんどが盲目であったので。

「素直で結構」にこやかに微笑んで、「ときにお前、この辺りで派手たらしい恰好をした、ふざけた魔道士を見なんだかの」

「……それらしいやつは見かけた」

「どこで？」

「……」

「言わんか　ときに、わしがさっき言った言葉、覚えておるか」

「当たっても外してもないと」

「意味はわかるか」

「さっぱりだな」

「お前が悩んでおつたのではないか」くらやみのくもが科をつくつて、フリオニールの顎をついと撫ぜた。「なぜ力オス勢がこちらがわにと。それとももう解決したのかの」

「なぜ いや」狼狽を気取られまいと、彼はことさら平静を保とうとして、いつも大抵そうであるようにそれに失敗した。「……言えば、そつちも応えると?」

「ために言ってみてはどうだ。ひよつとしたら教えるかもしれんぞ」

完全に手玉に取られている 彼はひとつ溜息をついた。

「射殺した。おれが」

「ほう、そうか。腕が立つものよ」

「……………」

「それにしても、口ほどにもないやつ。あれはいつも手段に目的を見出す。お前の周りにもおらなんだか、そういうのが」

「言ったぞ。次はあんたの番だ」

「まあそう急くな。できれば連れて帰るつもりだったが、仕方ない、今回は見送るわ」言っ、くらやみのくもはその場にしゃがみ込んで、両の掌を檻の天板に据えた。「この辺りかの、あの小娘がいるのは」

「なにを」

「そつちくいち反応するものではない。もう終わったわ」彼女はすぐに立ち上がった。「ところで先の応えだが 言葉どおりに受け取るがいい。お前の考えは正しいし、誤っておる」

「つまり?」

「ほう。言つとでも?」

「言つさ、あんたは」

「素直な小僧だ」血石のまなこが興味深げに彼の貌を嘗めた。「前は自分が正直でさえあれば、敵もまたそれを以て応じると信じておるのだな。戦場には似つかわしからぬ輩よ」

「あんたもなかなかのもんだ、敵を前にして訓戒を垂れる」フリオ

ニールはおもむろに腰の剣に手を置いた。「あんたはおれの旋毛に見惚れてたみたいだが、こっちのほうでも同じだと思わないほうがいい。じき気が向くかもしれない」

「威勢のいいことだ。そうだね、わしがここにいるのだから、カオス勢はもうこちらに来ておることになるな」

「……応えになってない」

「そうして……コスモスの神殿は落ちてはおらん、が、あれでは無事とも言いかねよう」

（よくわからないが……至聖殿に敵の手が回ったことは確からしい。まずい）

「もつと具体的に言ってくれ」フリオニールは開き直った。「あんたは説明の仕方がまずい。聞き手のことをもつと考えろ」

くらやみのくもは笑い出した。ことさら陰湿なものは感じられない、鈴を転がすような快活な笑いである。

「ああ、おもしろい小僧よ。そうだね、ちと負けてやろう」未だ含み笑いながら、「エクステスがまぼろしの兵はな、下にいるようなやつばかりではないぞ。わしをよく見ておくがいい」

言うなり、くらやみのくもは自らの鳩尾に拔手を突き込んだ。麗貌の痛苦に歪むのが、人のよいフリオニールの簡素なあたまから、ほんのつかのま敵味方の鬪しきを取り払った。

「おい、しつかり　！」

「ふふ……敵の心配なぞ、これからしたくても、できぬようになるわ」

彼女はその場にへたり込んで、自身の裸かな膝に血を吐いた。

「……墨の柱にできたって言ったな、あんた。なぜそうしなかった」
「勘違いするでない、わしにそうする必要がないから、そうしないだけよ。お前たちにはもつと……痛苦に満ちた死に方が待っている」
血に濡れた顎が彼を仰いで、薄い口の端がにと上がった。「またたきの間に訪れる死など慈悲よ。光よ。しかと期せよ小僧、又ビラ・ノクティスはそのようなものは持ち合わせんぞ」

「あんだ、後悔するぞ」フリオニールはくらやみのくもの真似をして、精一杯ひとの悪そうな笑みを浮かべてみせた。「またたきの間に殺しておけばよかったと」

「威勢のいい小僧よ。これよりのちに起こる災禍を、万が一にも生き残ったら、そのときはまた会えよう。楽しみにしておるぞ」

言い終わると力尽きて、幻像兵が死に際してそうであるように、くらやみのくもは徐々に薄れて、やがて霧散するように消えてしまった。始終を見守っていた兵たちから響動やぶらめきが起る。

「今のが……幻像兵？」

フリオニールは本陣に走るのも忘れて、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

パウサニアスの増援は、カオス勢への追い打ちの決定打となった。関とぎのあがってからというものの、幻像兵は楯を下ろし武器を落として、もはや戦闘などお構いなしといったふうにティナを呼び続けている。苦戦していたコスモス勢は援軍にも心を励まされ、一転して据物を斬るたやすさで敵軍を蹴散らしていった。

（結局、パウサニアスの判断は正解だったのだ。彼奴らが今も攻撃の手を休めていなければ、猶のこと彼らの助けが必要になっただろう）

床几に腰をかけて、たけきところはすっかり落ち込んでいた。先に取り乱したことへの猛省が、彼の頭上に重くのし掛かっている。彼は恥じるあまりに、天幕の護衛の人選からパウサニアスの独断専行に至るまでのことを、自身の誤断ですべて説明付けようと躍りになっていた。

（指揮官の危機を救おうとして罰せられてはたまらない。パウサニアスもアカルタエも、ほとんど愛想をつかしたに違いない。愚かなことだ、そもそも誰にさときまなこの代わりが務まるう。別し

てお前などに……)

「たけきこころよ」

面を上げると、いつからそこでそうしていたものか、クレアルコスが腕組みして彼を見下ろしていた。

「……ティナの様子は」

「トリーネに見させた。怯えているそうさ。この騒ぎの渦中にあっていい気なものだ、自分だけが可愛いと見える」

「そうか」

半ばはたけきこころの反応を期待して言った言葉なのだろうが、彼はまったく反応せずにそれきり俯いてしまう。沈黙を嫌ったクレアルコスが話の接穂を探るように、「友よ、さっきのことなら気に病むなよ」と言った。

「……誰か欲しがるものはいないかな。君でもいい、喜んで進呈する」

「なにをさ」

「字さ。たけきこころなどと、わたしには似合わしくもない」

「まったく 今日は何の日かな、君がこれほど悄気るとは」彼は苦笑した。「いつもは憎たらしくくらい自信たっぷりじゃないからしくないぞ」

クレアルコスの言葉には、なるほど思い当たる節はたくさんある。居眠りはなんとか自己弁護のしようもあったが、彼は今日「らしくなくも」負けたときのことを考え、後悔に駆られて言わでももの愚痴を口にし、神に批判を唱え、一兵卒の戦う理由を疑った。こればかりは誤断で片付けようもない。実のところ最前あくから考え倦あねていた、自身にも不可解な奇態なのであった。

周囲は相変わらずティナティナの斉唱である。

「……君は自身に振るう鞭に容赦のない男だ」

「なに？」

「生前、さときまなごがそう言っていた」クレアルコスと目が合う。「そういうやつは苦しむと」

「指揮官とはそうあるべきでは？　だれもわたしを鞭打てないのだから」

「ああ一般論じゃあない。君さ、アニメ・ウアリドウスのことだ」
組んでいた腕を解いて、今度は手を腰に宛がう。「だれしも一番なにが辛いかといえば、それは自分を許せないことではないかな。ちようどいま君が一生懸命やっているみたいに。　君は君をあまり許さないから、畢竟、他者の許しもいつこう便宜を得ない。だから苦しい」

「……君はわたしを日和見主義者にしたいのか」

「そうなった時こそ、君はだれか欲しがらやつに名前でもなんでも譲ればいい。君はもちろんそのままがいい。ただ苦しかったら、君より高次の存在に許しを求めればいいのじゃないかな」

「コスモスに？」

「コスモスに。　しろきかいはそうしているんじゃないかな。

あつきちしおだつて」

「……あるいは」

（どうして彼が知ろう……もう久しく神の声の遠いことを）

本当のことを話せるわけもなく、彼は押し黙った。が、なんとなく一連の奇態を説明する助けとなりそうなのにかを、彼はクレアルコスという言葉から抽出できたような気がした。

（光の戦士らしからぬ……なかんずく、あの神を畏れぬ唾棄すべき批判。あれの原因が、祈りに応えないコスモスに対して知らず萌芽した、わたし自身めくらであつた、なにかの感情にあると……）

「友よ、その、これは聞いていいことかどうかわからないのだが……」
「クレアルコスはふいに口火を切るなり、彼にしては珍しく歯切れのわるい物言いをした。「そう、たとえば、そういうことを話すのを禁じられているのなら、もちろん言う必要のない事柄なんだがね」

「ずいぶん断るな、君は」

「君は……コスモスを見たことがあるのだろうか。その、神の姿を」

「……なぜそんなことを？」

「いや、応えられないならいいんだ。ただずっと気になっていたもので」

「ない」

クレアルコスは質問しておきながら、聞かれたほうが驚くほど狼狽のいろを見せた。

「ない、のか、そうか」

「見たことはない。声を……」彼は言い淀んだ。

「声はあるだろう？」

「もちろんだ」

「その、どんな声なのだろう、神の声というのは」

「光かな。ひとことと言うと」

「……もうすこし言葉を費やしてみないか」

「と言うが、ほかに形容の仕様がなくてね」たけきこころはちよつと笑った。そうして笑ってから、笑える程度に持ち直す機会を作ってくれた友人に感謝した。「なんとはいいいかな……耳で聞くのでないから、声と言うのも少し語弊がある」

「声ではない？」

「声のようではある。神託が降りると、こつ、あたまの中、両耳の中間になにかが広がるような、ぱつと明るむような感じがする。瞼の裏まで照るような、清澄で、快闊な、暖かに響く……」

昔は特筆に値しない日常の一部であったこの体験を語るのに、いまや追憶と思慕とにたよつてせざるを得ないことがひどく悲しい。彼は話すうちに、自らの心底にこの体験を切望する想いと、それと根を同じくするにも拘わらず、なにか微かな不快感を伴う灰色の感情をばぐくむのに気付いた。それは両方とも、クレアルコスの言うところの「高次の存在」に鋳を向けている。

「たけきこころ？」

「……うん、まあ、そんなところだろうか」

「それでその声は、やはり女性のものなのだろうか」

「神像はそのように表現されているが……そうと言われればそうだな、女性のようでもある」

「はつきりしないな」

「そんなことが気になるのか、君は」

「なるとも。ひよっとしたら、光の戦士以外のものはみなそうかも」

「そんなことを聞かれたのは」

「ちょっと、危ない！」クレアルコスの後方で、ふいにトリーネの甲高い声が上がった。泡を食ってこちらに駆けながら、「そのまま、手を放さないで！下に荷物がある！」

彼女の視線を追いかけて後を振り向くと、誰かが檻の縁にしがみついているのが見えた。足がかりを探しているのか、格子に廻らした垂幕に襷が踊っている。

「いいよ いや、待った！」大車輪で荷物を横に退けると、トリーネはふたりのほうを向いて手招いた。「ふたりともお願い！」

「……あごで使うなと言うのに」

「なに、わたしは構わない」

再度の「いいよ」で、無謀な兵は三人の腕に受け止められた。

「串刺しになるところだったよ」と、トリーネ。荷物はほとんどが武器だった。

「申し訳ありません 失礼ついでに、たけきところはどちらに」「うん、あなたのうしろ」

「あつ」慌てて振り返って、慌ててあたまを下げる。「申し訳も、あなたのお手を煩わせるとは……！」

「串刺しになるところだったぞ」と、たけきこころ。

「串刺しになるところだったな」と、クレアルコス。「さあ、三度も注意すればもうしないだろう。マイナロスか、急ぎか？」

「はい、これを」

マイナロスはどちらにしようかちょっと逡巡したあと、けっきょく手を差し出したクレアルコスに書付らしい手巾を渡した。

「なんだか慌ただしいな。……アグリアスより」前置いたあと、クレアルコスはちよつと沈黙した。「……新種」

「新種？」と、たけきこころ。

「新種？」と、トリーネ。

「……たけきこころよ」クレアルコスが手巾から顔を上げた。「敵がこちら側に来ている可能性がある」と

「……来て、もう襲われている」冷たい汗が背筋を伝った。

「そういう意味ではない、わかっているだろう。マイナロス、彼敵情を諷す^{ふう}とあるが、彼女は敵と会話を？」

「そのようです。その、わたしもアグリアスさまと直接話したわけではないので……」

「クレアルコス貰うぞ」返事を待たずに書付をひったくる。「……アグリアスより」

「新種つて？」と、トリーネ。

「新種というのは、なにか心当たりは」と、クレアルコス。
「飛来とありますが、実際には墜落です。我々が弓で」

「だから新種とはなんだ、なにか新しいのか」

「はあ、その、なんとも」困るマイナロス。

「新種つて、なにの？」と、トリーネ。

「マイナロス、喋ったからか？ 新種というのは」たけきこころが書付から面を上げた。

「ふつうのだって喋る」と、クレアルコス。

「あれは擬態の一種だ、いわゆる交渉ごとはできない。そういうことを言っているのではないかな」

「はあ、その、なんとも」いっそう困るマイナロス。

「……新種つてなんなの」と、トリーネ。

「まあ新種はいい。それより敵がこちらに来ていとなると たけきこころよ、昨晚フリオニールからざつと聞いたが」

「……もしそうなら、もうここを放棄するしかない。もしそうなら、だが」

「ちよつと新種……あれ？」

鳩首凝議たけなわの四人ともども、彼女の言葉を皮切りに示し合
わせたように黙った。最前からずっと続いていて、はや環境の一部
となりつつあった「ティナティナ」がはたと止んだのである。

「……止んだな」

「怒鳴り疲れた……ということではなさそうだが」

辺りはしんとしている。味方もこの不気味な変化を警戒してか、
振り上げた武器をおもむろに下ろして、誰でも近くにいたものたち
と密めき合っている。四人も兵たちに倣って、さっそく新たな議題
で凝議を再開しようとした矢先、

「たけきころよ、そちらにおいでですか！」

垂幕の向こうから金切り声が上がった。動転きわまってひっくり
返った、恐慌状態のひとのそれである。

「フェニヤ？ フェニヤか！」

「神よ、おお……！」言葉はじきに絶叫に代わった。

「どうした、なにが！」

「出してエー！ 出してえー！」

その場に凍りついた四人の目の前、格子を覆う垂幕の下端が煙っ
たかと思うと、それに火がついてみるみるうちに燃え出した。

きな臭いにおいが漂ってくる。それだけではない、髪の毛の焼け
るような、いやなものも混じっている。

「フェニヤ……」

「神よ……」クレアルコス面に苦渋の亀裂が走った。「ラスキウ
ス・コスモスよ、わたしにまたこれを見よと……」

(コスモスよ照覧あれ、光を与え給え！ なぜそれを惜しむのだ！)
垂幕が炎にじりじりと蚕食されてゆく。舞台の幕が上がりつつあ
った。怖ろしい、それも一度ならず観劇して、忘れ去ることは生涯
なかるうとも思われた印象、悲劇中の悲劇。

炎の向こうでなにかが高く吼えた。

幕の上がつてすぐ眼に飛び込んだのは、炎に包まれてまった
く狂乱の態で檻の扉をたたき、あわれなフェニヤの姿だった。首か
らうえを松明のようにして、そこから灰色の煙をもうもつと上げて
いる。

そしてもう一箇 死に物狂いの彼女を一顧だにせず、檻の中を
眺めまわしている怪物。

肌を溶銀のような白っぽい耀きで飾り、おそらく高熱を帯びている
のだろう、その周囲の空気の揺らめくのが、おぼとれ髪を蛇の群の
ように蠢かせている。 身体の輪郭だけは変わらなくとも、それ
に元の少女の面影はもはや見出しようがない。

それでもそれはティナであつた。

「動くな、それと、大きな声を出すなよ」クレアルコスの声は震え
ている。「あれの興味を引くな」

「あれがティナなの？」と、トリーネ。恐怖より驚きのいろが濃い。
「それで……どうやって元に戻すんです、あれを」と、マイナロス。
あんがい動じたふうはない。

「わからない」と、たけきこころ。「クレアルコス、ゼノフォン達
は」

「もう遠巻きにしている」言われてついと振り返ると、陣の人垣が
どんどん広く遠くなっていくのが見えた。四人だけ置き去りにされ
た形である。「ゼノフォンにはこういうときに取るべき手立てを教
えてある。 ひとつう危険なのは我々のほうだ」

フェニヤの叫びはようよう弱まって、その場に頽たふされて泣言なみごとのよう
に苦痛を漏らすだけになった。身体中真っ黒焦げで、ところどころ

に覗いている赤い肉を、なおも全身に纏わる炎に舐められている。小さくぼんとなにか破裂するような音がすると、彼女はそれきり動かなくなつた。死んだのだ。

(フェニヤは彼女を怨んだらうか……あれほど彼女の為に尽くした、その返礼がこれでは……)

「まずは君が退がれ」と、クレアルコス。「わかるな。あれの顔を見ないで、ゆつくりと後退る」

「わたしは最後までいい、君が最初だ」

「またそれが 指揮官がそれでどうする、行け」

「クレアルコス、話は通じないのでしょうか」

「話？ 笑わせるな、ああなつてしまえば聞く耳など持たん。マイナロス彼を連れて行け、ゆつくりだ」

「しかし……今のところなにをしようともしていませんが」

「トリーネ」マイナロスを無視してクレアルコス。「怪我はどうだ、走れるか」

「走れる、けど」

「……言にくいだが、囿をやれるか」

「わ、わたし？」驚愕するトリーネ。「ちよつと待って、囿って」

「お前がいちばん脚が早い。イヤか」

「……失敗したらどうなるの」

クレアルコスは黙ってフェニヤの亡骸を指さした。

「それ、命令？」

「迷うところだが、今のは依頼だ」

「……だれか、ほかに」

「わかつた、わたしがやる」苦り切つた貌で続けて、「わたしが死んだら、お前とゼノフォンで代行を務める。彼に、たけきころによく仕える」

「許さん。わたしのほうは依頼ではないぞ、命令だ。勝手に話を飛躍させるな」たけきころがクギを刺した。「マイナロスの言うとおりだ、彼女はまだなにもしない。様子を見ながら考えるのだ。」

いよいよという事態になったら、運任せで散りぢりになればいい。いいか、急ぐな、これは命令だ」

「たけきころよ、わたしにお任せを」

と言うなり、三人に止める隙を与えずに、マイナロスは怖気もなく檻に向かつて歩き出した。歩きながら振り向いて、「慌てずに！ こういうのは慣れていきますから」

（早まったことを……！）

クレアルコスが痛恨の呻きを漏らした。トリーネはもうなにをしいいかわからないといった様子で、ティナを見たりほかの三人を見たりと首だけを忙しくしている。

ほんの十秒ほどが無限の時間のようにも感ぜられる。マイナロスはほどなく格子の前まで来ると、格子越しに宙に漂って自らを見下ろすティナに、「やあ、こんにちは」と声をかけた。

「……たけきころよ、酷なようだが、今のうちに」と、クレアルコス。

「そつだ、逃げよう、彼には可哀想だけ」と、トリーネ。

「君たちは行け。檻の周りに伝令して、将卒を幕営に退がらせるのだ。もう敵はいない」すぐに付け足して、「退いたら、すぐにここを引き払う準備を。どのみち奇襲はあつた。カオス勢はすべてではないにせよ、こちら側に来ている公算が高い。もうこれ以上ここで足踏みはできない」

「ばかなことを」

「静かに。さあ行け、わたしを待つなよ」

結局ふたりは動かずに、三人肩を並べてマイナロスの動向を見守ることになった。ティナはすでに浮くのを已めて、檻のなかをうろつる歩き回りながら喋る彼を見ている。

「……笑ってるよ、彼女」

「……………」

「あんがい危険はないんじゃない」

「黙れトリーネ、静かに」

(しかしこれは新しい展開だ……やるではないか、マイナロス)
「ご覧下さい、たけきこころよ」マイナロスが話を中断して、ふたたび振り向いてにこやかに笑った。「ベヒーモス狩りの要領です、脅かさなければなんともありません。可愛いものでは」「
と、言葉の途中で、ティナがはつとうえを見上げた。天井がドコドコ鳴ったかと思うと、縁に誰かが乗り出してきて、「たけきこころ！」と叫んだ。

(フリオニール！)

「フリオニール大声を出さないで！ 静かに！」

と、マイナロスがうえに向かって手を振り上げた途端、彼はとつぜん発火炎上した。ティナが怯えも露わに手を突き出して、威嚇らしい蛇のような声をあげている。

「あつ、マイナロス！ マイナロスっ！」

「フリオニール下がれっ！ 撤退！ 皆に伝令！」

「うおっ！」

鋼の天井がゴンと盛り上がって、困惑する彼の足下を掬って転がした。下のティナが飛び上がって天井に激突したのだ。

「逃げる逃げる！ 行けっ！」

クレアルコスがそう怒鳴るなり、たけきこころの腕を引っ掴んで駆け出した。トリーネはいちど火だるまになって転げ回るマイナロスを見遣ったあと、彼らに倣った。

虫籠に囚われた甲虫のように、ティナは檻の中のそこかしこに激突しながら叫び回っている。

「フリオニール！」

「なあ、そういえばこの檻、なにが入ってるんだ」

「君、知らないの？ ちょっと動かないで」

「知らない。スコールは？」

「女がいる」

「……元氣いいね。オレは好みだな。スコールは元氣なのとお淑やかなのとどっちがいい？」

「……………」

「動かないでつたら」

「フリオニール！ おおい！」

いつとき鳴りをひそめていた「ティナティナ」が再開されると、最前から檻のなかで激しくドンドン遣っていたのがいつそう猛烈になった。鋼製の壁を今にも突き破らんばかりの勢いである。

（いつたい中でなにが……）

「なんだか凄い圧力を感じるのよ。檻から離れましょう」

「エリーチエ、座ってください」

（またやってる）

エリーチエが起立してラヴィアンが着席させるという一連の動作は、これでもう五回目を数えている。檻が揺れ出したあたりから、ぼうつとしていたエリーチエがにわかには凜然となって、しきりに「幕営まで退いたほうがいい」と主張し始めたのである。

（彼女の言うことに従ったほうがいいのかも）

アグリアスはいいかげん疲れて「フリオニール！」を中断した。

代わってもらおうかとスコールを見遣つても、彼は最前からうずくまったままなかに夢中で「われ関せず」を貫いている。ジタンは包帯づくめになるので忙しく、アリシアは彼を包帯づくめにするので忙しい。

フリオニールは一向に顔を出さない。

（なにかよくないことが起こっている……：ような気がする）

檻に手を触れてみると、手套越しにびりびり震動しているのが感じられる。先に寄り掛かったときに偶然きづいたのだったが、外気に晒され続けてすっかり冷えているはずの檻が、なぜか暖かいのである。どうも檻全体がなにかに熱せられているらしい。

（なにに？　今この中で暴れ回っているやつのが業と考えるべき

か)

「ここにいたら危ないわ、戻りましょう」

「囲まれていて戻るに戻れないんです、もうちょっとですから。お願いだから座っていて……」

アグリアスは慣れない思案を打ち切って、エリーチェの言葉に従うことにした。それでなくてさえ、ここでじりじり足踏みするのは飽いている。

「みな聞いてくれ。　　この幻像兵はあらかじめ片付けたのだから、いったん正面まで戻って指示を仰ごうと思う」

「正面までの道は」と、スコール。顔を上げようとしぬい。

「敵はただ叫んでいるだけなんだから、適当に押しつけて通ればいだらう」

「とつぜん動き出したらどうする」

「……それもそうだが」

「もう兵は回してあるんだらう。開通するまで待つんだな」

スコールはそれだけ言って、ふたたび手元に没頭した。指揮を預けた途端すっかり他人事になっている。アグリアスはちょっとムツとした。

「アグリアスさま、やはりフリオニールを呼ぶほうが」

「だってちっとも来ないじゃないか。さっきから呼んでいるけど

フリオニール！」

「彼に伝令を頼みましょう」

「そういや……うえのやつって、フリオニールっていうのか」

「そうだけど」

「フリオニールっ！」

「オレ勘違いしてた。女の子の名前ならぜったい忘れられないのになあ、アリシアとかラヴィアンとか」

「ジタン」スコールが俯けていた面を上げた。「ナイフを貸してくれ」

「安くないぜ」

「フリオニール！ ええもう疲れた！ アリシア代わってくれ！」

「もう少しで終わりますから……」

「はやく逃げないと手遅れになるわ。たけきところは」

「たけきところは向こうです、さあ座って」

「アグリアス」憤然と座り込もうとするアグリアスを、スコールが手招いた。「これをうえに投げてくれ」

「これは？」

「さっきあんたがやっていた。その続きだ」

手渡されたのは布切れを結わえたナイフである。

「フリオニールを呼べとも書いた。これだけの騒ぎだ、声なんか通らないだろう」

「……お前、なぜそれをもっと早く」

「通るかもしれない」

「……………」

果たしてアグリアスは膨れた。なかば自棄になってもう一度「フリオニール！」を遣ってから、彼女はえいとナイフを檻のうえに投げた。

「スコール、わたしの杖」

「わかりました、呼びますから、じつとして下さい！」いいかげん辟易した様子で、ラヴィアンがスコールを手招いた。「スコールすみません、こちらに来られますか」

「……行こう」

「フリオニールめ……さっきのことを根に持っているんじゃないだろうな」

スコールが立つのをアリシアが助けて、ふたり共々エリーチエのところへ行ってしまうと、話し相手を求めてか、すっかり包帯まみれになったジタンが「なあ」と声をかけてきた。

（なあだって！ 部隊長に向かつてなあもないものだ。兵の教育がなっていない。昔はこうじゃなかったのにな……）

アグリアスはそつと溜息をついた。ジタンの「なあ」がふたたび

飛んできた。

「なんだ」

「この中の、女？　どんなひとなんだい」

「子どもだ、お前くらいなの。　そういえばお前、なぜそんな若い身空で兵に」

「志願したのさ」と言っつて、彼はちよつとしんみりした。「とびきりの美人が兵を募つててね……一も二もなかった」

「たけきこころのお許しが？　あの方が子どもを兵にするはずはないのだが」

「たけきこころつて……ああ、あの野暮の朴念仁だろ。　仏頂面で高慢ちきの、えーと光の戦士だっけ」

「もういちどあの方を侮辱してみろ、脚の骨を折るぞ」

「おつとごめん。いや、悪いやつじゃないつてのはわかつてるけどさ」ジタンは両手を挙げて降参の姿勢を取った。「で、さっきの質問だけど」

「女のことか？」戦場で色目づかいに忙しくしている兵がいるなんて！　アグリアスは溜息をついた。自分の隊にこんなのがいたらさつさと叩き出して、炊きごとか繕いものでもさせていることだろう。

「名は……さつきからほうぼうで叫ばれているが、ティナという」

「あ、ティナつて、この中の子のことか。　なんで奴らがその子を？」

「わからない」

「なんで檻に。　そんなに大女？」

「どちらかというとお小柄だったはずだ。たしか、なにか重大な軍律違反を働いたとかで、もうずいぶん前からここに監禁されている。

　おおかた内訳は殺しといったところか」

「へえ……つまり、危険なやつつてこと？」

「なのだろう。　正直、今まであまり気に留めたことがなかったが、この有様を見れば頷きようもある」

「でさ、アグリアス、さつきそこに触つてみたんだけど」檻を指し

て言いながら、肩を脱いで肌を示して見せる。「ちょっと寄っ掛か
つたらさ、ここ、火傷したんだ」

「……………」

「この、ドンドン遣ってるせい？ だよな」

「…………わたしもそう思っていた」

「中の子って、何者？」

まんざら物好きで始めた話題でもないらしい。口を開きかけてか
ら、実に彼女自身も話してやれるほどの情報を持ち合わせていない
のに気付く。三度目の「なあ」に応じる機会は、しかしスコールの
時ならぬ切迫した声に浚われていった。

「アグリアス、いちど正面へ退こう。みなに伝える」

「正面って…………お前さっき」

「押しのけて通る。急ぐぞ」

「…………だってお前、お前が」アグリアスは盛大に膨れた。スコール
は取り合おうとせず、手近な兵を呼びによるよる歩いて行ってしま
う。「なんてやつだ…………わたしが最初からそう言ってたんじゃない
いか！」

「アグリアスさま抑えて」と、アリシア。

「エリーチエが警告を、檻の中に強大な魔物がいると」と、ラヴィ
ア。 「魔物って、ちょっと抽象的ですけど」

「魔物！ ここにもひとりいるぞ、さっきあいつが喚んだ」

「アグリアースっ！」

幻像兵の斉唱を圧する突然の大音声に、辺りにいたものみな一斉
に声の出所を仰ぐ。みな視線の先、檻の縁にフリオニールが半身
に構えて、下に向けて矢を番つかえている。

「フリ うわあっ！」アグリアスは飛び退りざまひっくり返った。
眼の合うなり故意が事故か、彼は彼女の脚のあたりを的に矢を放
つてきたのである。腿にきわどく鉤裂きが走っている。避けなけれ
ばほんとうに当たっていたかもしれない。

「この…………猪男オっ！ 当たったらどう！」

「逃げるオ！」

と、ひとつ怒鳴ると、彼はもうこちらに一瞥もくれずに引っ込んでしまった。アグリアスは猛烈に膨れた。

「もうなんなんだあいつは！」

「どうどう」と、ラヴィアン。

「ほらアグリアスさま、矢文ですよ、矢文」と、アリシア。

「わたしはちゃんと謝ったぞ！ あいつめ」

「きつとあとで謝りに来ますから　アリシア読んで」

「ええと読みますよ、ほら、いいですか、読みますよ」

「まったく猪男め……！」

「えー……あら？」

「さっき投げたやつだな、それは」スコールが跛こむらを曳いて戻ってくる。「急いでいたんだろう。ただごとではなさそうだが」

アリシアが矢柄からほどいたそれは、先のスコールの投文を使い回したものらしい。律儀に彼のしたためた文面を眼で追ったあとひっくり返して、彼女は改めて「読みますよ」と言った。

「……………」

「アリシア？」

「…………アグリアスさま、マイナロスが」と言つて、彼女は手で口を覆つて眼を伏せた。「マイナロスが死んだと」

「よこせ」

矢文をひつたくる。文面はごく短い。

「フリオニールより。マイナロスが死んだ。撤退。すぐに宿営まで逃げる。たけきこころの命令…………」読み終わつてから、それをさも憎げに躡にじる。「死んだと…………なぜ死ぬ。敵は無力化したぞ。死ぬはずはない！」

アグリアスは憤然と矢文を投げ捨てた。声に微かな震えを帯びている。

「なにかの間違いだ、フリオニールの勘違いだ」

「先の戦闘で斃れたのでは…………」と、ラヴィアン。彼女は仲間の訃

報を冷静に受け止めている。

「だれもうえには攻撃していない。敵の弓兵はもういない。死なない」

「あんたの言うとおりだ」平然とスコール。言いながらジタンに面を向けて、アリシアのほうへ顎を振ってみせる。「誤報が飛び交うのは戦場のならいだろう、向こうもそれだけ混乱しているということだ」

「くそつ、あいつめ！」

彼女は今ほど投げつけた矢文を、大仰に踐んだり蹴ったりしている。その隙に困惑気味の三人をスコールが厳しい眼で睨まえた。睨んで小さく首を振った。

「アグリアス、指揮官どのの命令も誤報だと思うか」

「……知るものか」

「ほんとうかもしれないな」

「……………」

「確かめに行こう。アリシア、裏へ走ってカミルラ隊の様子を見てきてほしい。うえの連中がここと同じような報せを廻したかどうかかわからない。ラヴィアンは向う側へ戻って、隊に引き揚げるよう伝えてくれ」

「しかし……誤報かもしれないと」と、ラヴィアン。

「指揮官どのに釈明するさ、フリオニールの報せだと」言いながら先にやったように睨んでみせる。「とにかくここから離れたほうがいい。あんたたちもそう思っている、違うか」

アグリアスは髪の中で齒噛みしたあと、面を上げてスコールを睨まえて、小さく首肯した。

「よし決まり。で、ご婦人がた、誰がオレに肩かしてくれんのかな」すかさずジタンが調子を合わせて、この場にはふさわしからぬ明るい声をあげた。胡座のままアグリアスに右手、ラヴィアンに左手、アリシアに尻尾を差し向けて、「おっと早いもん勝ちだぜ。気持ちにはわかるけどさ、奪い合いはご遠慮ねがいたいね」

アグリアスはわざわざ彼の背後に回って、ぴこぴこ振れる尻尾をふん捕まえて思いつきり引っ張った。

「ちよつと待った待った待った待って！ 痛いって痛い！」

「イヤなら這って行け」

「ラヴィアン行ってくれ、おれが代わる。さあ」

心許なげなラヴィアンを急ぎ立てて、スコールが彼女に代わってエリーチエの腕を取った。今は一転だまりこくって、じつと檻を見つめている。

「さつさと立て、首に縄をつけるぞ」

「そりや嬉しいお申し出　ちぎれるちぎれる！」

（それで騙せているつもりか、ごさかしい！）スコールの無表情はまあ許せるとしても、この状況にあつてなにも知らずにへらへらしているジタンはいっそ小面憎い。（誤報が飛び交う？ 戦場のならいだと？ わたしを虚仮にして！）

アグリアスはフリオニールの報せを疑っていなかった。

フリオニールは単純な男ではあるが、単純なだけに余計な注釈や類推のたぐいとは無縁の人間であった。自分の耳目か、それに比べると自身の信じる情報源から得た確たる情報でなければ、ひとに知らせて良しとはしない。彼とともによく斥候を務めるウルフリードもやはりそうで、元々ふたりとも斥候や偵察に向けた素朴な性格を買われてのことなのだろう。

「アリシア、あんたもだ。　　しっかりしろ、あんなものをいちいち信じても疲れるだけだ。あんたは焦った味方に踊らされている」

「そうそう。ウルフ……じゃない、フリオニールだっけ？　あいつアホっぽいし、なんか見間違えたんだろ、どうせ」

二人のなかば慰藉めいた言葉に励まされたか、アリシアようやく顔を上げて、思い出したようにジタンの治療に使っていた医具を片付け始めた。が、そうして拾った包帯を^{まなしり}眦に当てて、折に触れて小さく^{きよ}歎を漏らすのである。涙こそ見せなくても、ラヴィアンの貌にも苦いものが広がっている。

(さらばマイナロス) アグリアスは歯を食いしばって、短く黙禱を捧げた。(お前は悲しむだろうか。それとも悲しむひとの少なさに、せめてささやかな慰めを見出すだろうか。お前のために嘆くのは、今はただあの二人だけだ。今は)

人望の篤い副官だった。二人だけではない、多くの兵が彼に多大な好意を寄せていた。彼の訃報を耳にして嘆かないものがあるだろうか。その死は彼の上官を打ちのめすだけでは済まなかった。

アリシアと並んで彼の為に泣いてやりたかったが、戦場にあつて部隊長の身でそうするのはどうしても憚られる。アグリアスはやるかたなく唇を噛んで、スコールの言葉を鵜呑みにした単細胞の振り続けるしかなかった。

「エリーチェ、見えるなら見てくれ。もうあなたの我儘には付き合えない」

スコールがエリーチェに掴みかかって、肩を揺すぶっている。さすがの鉄面皮も業を煮やしたものが、彼の彼女にかける言葉はちょっと苛立たしげである。もっとも聞こえているのかいないのか、彼女は反応せずじっと檻のほうへ面を向けているのだが。

「おれも脚をやられてる、あなたの
「見るわ」

と、ふいに返事をするなり、彼女の身体がふわっと浮き上がった。慌てて手を放すまいと伸び上がった拍子に、スコールは平衡を欠いてその場に倒れた。

「エリーチェ！」

「来るわ、遅かった。なにもかも！」なおも浮き上がりながら、彼女は甲高い声で慨嘆した。身に纏ったロープの袖にしろい霜の降りるのが見える。「お逃げ、わたしの杖！ さようならアグリアス！
おおラスキウス・コスモスよ、あつきちしおよ見そなわせ！ あ
あなたの忠良が身許に参ります！」

幻像兵の斉唱がふたたび止み、スコールがなにか言おうと口を開き、そうしてなにかがもの凄い勢いで檻を突き破って、今し白み

かけた空をめざして飛び出してくる。エリーチェはそれに向かって
ゆっくりと移動を始めた。

「エリーチェ戻れ！ エリーチェ！」

「……あれがティナ？」ジタンが呆けたような声でぽつんと呟いた。

「あ、オレ、やっぱいいや。スコールに譲る」

「エリーチェ！」

ジタンの言葉は誰からも省みられない。まったく黙殺された。ス
コールにも聞こえた様子はない。まるでひとの変わったように、エ
リーチェの名を呼び続けるのに、彼は忙しかったので。

(ヤンのやつ、どこ行ったんだろう！　こんなときに……)

ユッグの隠れている薪の山の向こう、ほんの二、三碼ヤマトのところ
ドストドと足音がして、後で縮こまっていた子ども数人がすすり
泣きを漏らし始めた。止めたところで已みはしないだろうことを、
少年はこの短いあいだの経験から学んでいる。だから背後へは一瞥
もくれなかった。

彼の呼びかけで集まった二十数人の子どもたち　自称してオニ
リアルトウスオン騎士という　は、早くもそのほとんどを失っていた。主席総
長を自任するユッグは自らの失策、というより無策を噛みしめなが
ら、同じく主席総長を主張していた次席総長を当てもなく探してい
た。

とうとう溜まりかねたのか、子どものひとりがアーアーと声を絞
って泣き出した。が、件の足音は聞こえたふうもなく通り過ぎてい
く。あいつは幻像兵だイミターテイオーと彼は思った。

「なあ、がんばれよ、ちょっと遠くに来すぎたんだ。向こうへ行け
ば兵隊がいるから」

(その兵隊が当てにならないって、飛び出してきたのはぼくだ。み
んなを唆したのも。みんなぼくのせいだ　それとヤン！)

いや、ヤンじゃない。必要なのは一握りの勇氣だけ。なのに大人
はおしなべて腰抜けで、そんなものすら持ってないやつが多い
ほんの数時間前にそう言って回って、血気に逸る少年たちを煽動し
ていたのは、ほかの誰でもない自分ではなかったか。

(剣が手から離れない……接着したみたいだ)

今にして思えば、すこし舞い上がっていたことを自覚せずにはい
られない。ユッグは蹲ったまま房のついた剣の柄頭に唇を押し当て

て、かたく目を瞑^{つむ}った。随伴する子どもたちがひとり欠けるたびに、少年は度々そうやって自責の念　それにはもれなく同量の自己弁護がついて回ったのだが　と闘った。勇者ユツグの知恵の自らに宿ることを期待して。

アーリアートゥス
オニオン騎士の後継を名乗るのはこの上もない快感だった。普段から名なしのちびとして歯牙にもかけられなかったのが、腰の剣を示して光の戦士の信任を証したとたん、みな違うひとを見るように彼にいちもく置きだしたのである。彼の新しい名、オニオン騎士ユツグの由来を知っているものも多かった。

彼がおそかにそれを自称すれば、いつでも自らの規範とすべき英雄を捜している少年たちは、目に見えるほど近くに忽然とあらわれた「ユツグの剣」を、欣喜してそのきらめく眼に捉えた。捉えてしまった。　そうしてその持ち主と称する「ユツグ」を、剣に向けた眼で同じようにして見遣り、彼と自身との今までの近しさから、彼の勇者としての変貌がとうとう自らにも出来たのだと誤解したのである。

（いや、みんなだって喜んでたじゃないか、ぼくのせいだけじゃない……）

彼らは厨房からくすねてきた刀子や棒きれを、想像力をもって「ユツグの剣」に変え、敵襲の知れ渡るや役者はそろったとばかりに大挙して飛び出していき　その大半があっけなく捕まって、無惨にも殺された。自称主席総長がはりきって割り振った名ばかりの肩書きの数々も、あたら幼い血に塗れた剣と斧とによって無為にされた。

彼らの持ち寄った「一握りの勇氣」が、今し友人の頭を切り割った凶刃を前にして、いったいなにほどの働きを示しただろう。そんなものは悲鳴や逃げ足の助けにすらならなかったのだ。戦場はそれほど、彼らのあたまの中の世界とはあらゆる方面から隔絶したものだ。　だった。

オニオン騎士の残党は涙に暮れながら、下から篝^{かがり}に照らされて薄

ぼんやりと見える、彼らの隊旗をめざしてこそそと歩いた。怪我人が収容されているそこには、宿営を警護する兵隊が詰めているはずだった。

（とにかく、今はこの子たちを安全な場所へ！ ヤンを探すのはそれからだ）

鞘に収まらないのならと、ユツグは手擦れした柄巻を力いっぱい握り締めた。

戦場は彼のすべてを裏切ったわけではなかった。

随伴した少年たちの逃げまどう中でも、彼だけは常々こうすべきだと思っていたとおりに　それこそ当の本人が訝しむほどに動くことができたのである。つまり、敵と遭っては闘志のおもむくままにそれを殺し、味方が襲われれば勇気の命ずるままにそれを守った。が、少年が初陣に際してかくあれかしと願ったことごとくが叶っても、今の彼にそれらはなんの慰藉をも与えない。

（初陣はだれでも震え上がるし、脚がもつれて思うように動けないって聞くけど……）

仲間の惨死の衝撃とそれに伴う感情の激動が、彼におだやかな初陣を許さなかった。それに付きもののためらいや恐れを感じる暇を与えなかった。彼のつねづね思い描いていた、勝利をめざして恐るおそる未知の一步を踏み出す、そういつたたぐいの戦いではない。剣を抜いた瞬間から、彼は思いもよらず闘争に対して充実していたが、しかし皮肉にも彼の戦うのは功なき負け戦と決まっていたのだった。

「ユツグ」と、いちばん後にいた少年が声をあげた。「ユツグ、ぼく剣を落としたみたいだ。どうしよう」

ほかのみながあり合わせの得物を調達してきた中で、彼だけはどうやってか、比較的まともな短剣を持ってきていた。もつともそれも勇躍して振るわれることもなく、主人の腰の荷に終始するに留まったのだが。

「いいよ、そんなの」

「そんなのってなんだよ……拾いに行かなきゃ」

「あとでだ。死にたくないだろ」

「ユツグだつてそれ落としたら拾いに行くだろ」

言つて指さされたのは、例の「ユツグの剣」である。あんなものと一緒にするなとユツグは思った。

「ほら、もう近いぞ。戦いが終わつたら一緒に探しに行くから」

「いやだ。終わつたらなんにもならないじゃないか……」

(あれだけ逃げ回つておいて、まだ戦うつもりだつたんだ?)

「逃げ回つてただけじゃないか」

「武器が悪いんだ」件の少年が赤くなつた。「ぼくだつてそれを持つてれば、あんなやつら倒せたんだ」

「なに言つてんだい、これがなくなつてぼくはちゃんとやれた」ユツグはちよつとムツとして言つた。「このために前から準備してたんだ。きみにこれを持たせてたら、今ごろどこに落とされてたか」

「そんなことない。だつたらそれを貸してみろよ」

「なんでそうなるんだ。これはたけきところがぼくを信頼して」

「また始まつた。ユツグのそれは聞き飽きたぜ！」今度は別の少年が言つた。「信頼されてるならどうして側近になれないんだよ。変だろ」

「嘘なんだろ」

「嘘じゃない！」少年が大声をあげると、ようやく泣き止みかけていた別の子どもがまたしくしく遣りだした。「ぼくが若すぎるから、彼はそうしなかつたんだ！これは約束の証なんだ。きみらの持つてきたようになまくらとは違う！」

彼の「なまくら」発言には大いに抗議の声が上がつた。こんなところで足踏みしてる場合じゃないのに 少年は焦れた。

「おれ最初から思つてたんだ、おまえじゃおかしいつて。ヤンさんならともかく」

「そうだよ。それヤンさんのなんだろ」

「違う」ユツグは努めて怒りを抑えた。「もう後にしろよ、そんな

ことは。天幕についてから話そう」

「違うって言うんなら貸せよ、それを」

「そうだよ、これでやってみるよ」先になまくらと酷評された刀子を突きだして、「できないんだろ、おまえは嘘つきだ。なにがユツグだ」

「ヤンさんから借りたんだろ、正直に言えよ」

子どもらしい論理展開で、彼は一方的に嘘つきにされてしまった。先導されたからとはいえ、自らが良しとして飛び込んだこの窮地と理不尽とを持って余した彼らは、せめてほかの誰かをけな貶してもして溜飲を下げるにはいられないのである。

果たして、彼らは天幕の影にあたまを突き合わせて口喧嘩を始めた。それに加えて友人の不和を嘆く泣き声が高らかに響く。

（まったく、誰が守ってやってると思ってるんだろう！ こんなことしてる場合じゃないのに！）

幻像兵がどうやら声に反応しないらしいということ、ユツグは経験上 やかましい少年たちを引率してきた 理解していた。

声を聞きつけられる恐れこそなかったが、このまま仲違いしてほうほうへ散りでもされたら困る。彼はなお腹を立てながらも、少しずつ冷静になり始めた。

（考えるユツグ、お前の最終的な目的はなんだ。点と点を最短距離で結ぶんだ、ささいなことにこだわるな！）

「わかった、わかったよ！」ふと思いついて、ユツグはだしぬけにそう叫んだ。「正直に言う。ごめん、これはヤンのものなんだ」

彼は内心さかんに燃え上がりながらも一転、口撃の手を止めて全面的に降参した。

「ほらやっぱりそうだ、おまえが」

「ヤンは別の用事があって今ここにはいない。だからみんなを守るように、彼はぼくにこれを渡したんだ。嘘について恰好をつけたのは悪かったよ」

ユツグは努めて穏やかに、低い声でそう言った。少年たちはちょ

つと面食らったようになったが、それでも憎げに「じゃあそれを貸せよ」と付け加えることを忘れなかった。

「それもごめん。きみらの言ったとおり、これはヤンのものだ。だから貸すならヤンに許しを貰ってからじゃなきゃ。これはぼくのものじゃないんだから、ぼくの好き勝手にはできないんだ。わかるだろ?」

「……そんなことくらい」

「だろ。いや、実際これはすごいんだ。もう白状するけど、ぼくがあれだけやれたのも、まったくこれのおかげだね。ヤンはオニオン騎士になら誰にでも貸してあげるって言ってたからさ、彼に言えばきみらも同じことができるようになると思うよ」

彼らが眼を白黒させるあいだにも、ユツグは続けざまに畳みかけた。あたまの熱が冷めてしまえば、彼らも自分の身かわいさを思い出して避難を急ぐようになるだろう。要はその時間だけ彼らを黙らせて、彼らに聞こえないことを喋ってやれば済む話なのである。

「ちよつとくらいいいだろ、貸せよ」

「とんでもない、ヤンに知れたらなにされるか! あんなでかいやつに殴られたらもつと背が低くなる」少年たちが笑うのを内心腹立たしく聞きながら、「あいつの馬鹿力で殴りたい? あいつは約束を破るやつには容赦しないし、破らせたやつはもつと酷い目に遭わせるんだ。あいつより背の低い兵隊だっているんだぜ、そんなやつに殴られたら……」

などと言っているところに、ふたたび重い長靴の、それも複数の足音が近づいてくる。自称オニオン騎士たちはたちまち縮こまってその場に蹲った。ちよつどいい頃合に來たなとユツグは思った。

「こんなことしてる場合じゃないな」と、ユツグは囁いた。「今の話はきみらからヤンに話さな。とにかく今は天幕へ急ぐことだ」

少年たちはやや不完全燃焼の態ながら、彼の発言に賛意を示し、先の件についてそれ以上の追求を控えた。ヤンものちに突拍子もないことを聞かされてさぞ困惑するだろうが、あとでならなんとでも

言ってやれる。況してこの少年たちの怒りや非難などなにほどのものでもない。その時にはたけきところに事情を話した上で、この愚かものたちにユツグの剣の所有者は誰であるかをはつきりと宣言してもらえばいいのだ。ユツグは遠からず来たる復讐ふんまんの時を想って、先に節を曲げた忿懣ふんまんを慰めた。

「誰かいるの？」

足音の止まるや、足音の主の中から呼びかけが上がる。少年たちはひやりとした。

「誰かいるの？」

ふたたびの呼びかけ。声は女のもので、心配と好奇心を緬い交ぜにしたようないろがある。ユツグは無言のまま、後のものたちに手で制して黙るよう合図した。

「誰かいるの？」

(幻像兵だ)

みたびあがった声は、先のものと同調も声量もまったく同じである。幻像兵は妙なもので、ふだん漫ろにふらふら歩き回っているときは音に頓着しないのに、こういうときは耳聴く返事を聞きつけるのである。これに騙されて飛び出た子どもは、みな刃物と鉄靴による非情な歓迎を受けている。

幻像兵の一群はもう一度「誰かいるの？」を遣ったあと、気が済んだようでそこから離れていった。が、ほどなく別の足音が慌ただしくそれらに追い付いて、じき金物と怒号を遣り取りする不穏な音が上がり始める。味方が襲いかかったのだらう。

「聞こえる？ 味方が来たんだ、ぼくもいかなきゃ。きみらはここにいるんだ」

「おれも行く」と、先になまくらと評された刀子を手に、少年のひとりが名乗りを上げた。「おれだって闘えるんだ」

「無理だよ、それじゃあ」

「じゃあ、そつち貸せよ」

(また始まった……)

「駄目だ。言つたらう？ ヤンが」

と、言葉を終えぬうちに、少年が儘よとばかりに剣を持つ右腕に食らいついてくる。力づくで奪おうというのだ。揉み合いになる暇もあればこそ、先に剣を落とした少年が強奪者に荷担して二対一になると、体格で劣るユツグは抵抗もむなしく組み伏せられてしまった。

「ビッキやめろ！ 馬鹿なことを！」

「これがあればおれだって！」ビッキ少年は持っていた刀子をその辺に放つて、新しく手に入れた短剣を得意げに振り回した。「よう、おまえの番はこれでおしまいだぞ」

「くそつ、どけハル！」

泥棒の片棒を担いだハル少年が、馬よろしく彼に跨つて両腕を押さえつけてくる。その間にビッキ少年が彼の腰から鞘を奪った。怒りで赤くなるどころではない、ユツグは恐怖で真つ青になった。彼らがどういふつもりで、これからなにをしようとしているのかなかんずく、彼らをしてそうした行動に駆り立てたのは誰であったのか、彼は理解してしまったので。

「ビッキ、ぼくのぶんも残しておけよ」

「さあ、どうなるかな。みんな倒しちまうかもな」

「ハル、ビッキを止める！ 嘘なんだ、それはただの剣なんだ！」

「まだ嘘つくのか！」と、ユツグは後頭部に拳骨をお見舞いされた。

「おまえの分はもう終わつたら、黙つて見てろよ」

「ビッキ待て！ ビッキ！ やめろ！」

ビッキはもう振りかえることもなく、嬉々として衝突するふたつの勢力の渦中に飛び込んでいってしまった。と、その行く先に、柄の長い斧を手にした幻像兵がひとり、走り来る彼を迎え撃つようにして向き直るのが遠目に見える。もはやこれまでと、ユツグは強奪者の救済をコスモスに祈った。

ユツグに跨っていたハルが「ああっ！」と声をあげた。果たせるかな、幻像兵と打ち合うことわずか二合にして、ビッキは先に手に

入れたばかりの剣を易々と打ち払われてしまったのである。慌てて逃げようとするその背を凶刃が襲い、少年はあえなく地にまるんだ。最期の叫び声が聞こえたが、それは言葉らしい言葉になる間もなく、止めの斧の一撃によって途切れた。

(また死んでしまった……またぼくが……)

と、ふいに背の重みが消えて、それが足音も高らかに一目散に逃げ出した。なおも悪いことに後続の少年たちもそれに従って行く。こういうときに限って彼らの足は竦すくんでくれない ユツグは大急ぎで跳ね起きた。

「さてハルっ！ みんな、そっちに逃げるなア！」

オニオン騎士の残党たちが我先に逃げ出したのは、味方のいる方向とは真逆だった。そのまま彼らを追いかけようとして、急に腰のあたりが寂しいことに気付く。武器がない。あわれなビツキ少年の亡骸は、すでに敵味方の蹂躪するところである。打ち払われた剣も足蹴の憂き目を蒙っているだろう。ユツグは少し迷ったあと辺りを見回して、いまやビツキ少年の形見となった刀子を拾い上げた。

(くっそ……こんなもので闘えるのか！)

薄錆を刷いたそれは、畜肉を解体するためのものと思しい。先端が鋭利に尖っていたが、どうひいき目に見ても現役を引退している。ぐっと握り込むと、木製の柄がぱきつと音を立てて割れてしまった。

(だめだ、なにか武器を)

柄を欠いた刀子で闘うか、味方を恃たのんで戦闘中の彼らに駆け寄るか なおも迷っているうちに、少年たちの逃げていった方角から金切り声が聞こえてきた。それを合図にユツグは考えるのを已めて、声のしたほうへ駆け出した。少年たちは新手の幻像兵に取り囲まれている。

(一、二……二十人……！ もうなるようになれだ！)

走りながら屈み込んで、石を拾い上げざま思いつきり投げつける。今ほど少年の背から槍を引き抜いていた幻像兵に命中。あたまに手をやって怯んで こういう仕草は人間とまったく変わらない

いるところに飛び掛かって、横腹から心臓を狙って刀子を突き刺した。仲間の仇は幻となって消えた。

「みんな逃げる！ 逃げる……」

棒立ちになったところに幻像兵が殺到する。ユツグは反射的に横飛びに飛んで、地面をころころ転がった。逃げるもなにもない、少年たちははやひとり残らず殺されていた。もはや彼の言葉に応える人間はいないのだった。

（遅かった、みんな死んだのか……幻像兵どもにやられた？ 殺したのはぼくでは……）

立ち上がるなり、彼のあたまは追い縋ってきた剣の一撃に迎えられた。斬るというよりゴツツと殴られるような感触。刃がやや寝せ気味になっていたおかげで致命傷は避けられたようだったが、派手に出血する。

「ウ……！」

負傷した混乱よりも怒りの勝ったおかげで、彼ははたらくも恐慌を免れることができた。次いで繰り出された攻撃をしゃがんでやり過ぎして、刀子を腰ために身体ごとぶつかる。ぶつかったあとすぐにそれを引き抜いて、くの字に折れた敵の喉を突いて、腰の捻転を加味してそれを切り払った。血が迸^{はた}って、すぐに幻となって消える。

が、ユツグの反撃もそこで鈍る。彼は激痛を覚えて片目を瞑った。血が流れ込んだのである。たちまち世界が狭くなったところに、死角から槍の一撃が彼の腰に突き刺さった。骨を？んだ。ユツグは叫んで、持っていた刀子を加害者に投げつけた。

「ぼっず！」

他の敵からもう一撃、背中にもらったのめったところに、味方のものと思しい声があがる。割り当ての幻像兵をやっつけてきたのか。声の主を確認する余裕もなく、ユツグは追撃を恐れて虫よろしく這い回った。

「降りて来いガイド！ マト散らせ殺す気か！」

「手エ動かせ！」

頭上で甲高い弦打の音がすると、ユツグに止めを刺そうと詰め寄ってきた幻像兵のうち、三人が横合からあたまを殴られたようにして転んだ。うちひとりのこめかみには矢が、残りのふたりにはナイフを十字に合わせたような、奇妙な飛道具が突き刺さっている。

「ほらぼうず、見てないで逃げろ！」

ユツグを「ぼうず」呼ばわりした男は、十数人もの幻像兵に囲まれながら両腕を忙しく動かし続けている。ちよつと舞踏めいた軽妙な身のこなしで、ユツグはほんの数秒だけ痛みを忘れて男の動きに見入った。一瞥して丸腰だったが、彼が腕を縦横するたびに敵が怯んだり膝をついたりするからには、先に見た飛道具を投げまくっているのだろう。

「ぼうず！」

男が切迫した声をあげた。彼と遣り合っていた幻像兵のうちふたりが、ユツグの止めを思い出して囲みを離れたのだ。せめて石でもと地面を探り始めたところ、例の変わった飛道具がふたつ、弧を描いて足下に降ってくる。

「使え！」

男が放り投げたものらしい。幻像兵たちの背中の向こうから短く声があがる。

（使えって……！）

とりあえず急いで拾ったはいいものの、それは思っていたよりも重く、加えてまったく始めて見る形状をしていた。どう使おうかとためらう間に、幻像兵ふたりのうちひとりの喉から鏃が生えた。先の射手の為業だろう。頼れる相棒おやくを一顧だにせず、もうひとりの追撃者がユツグに迫る。

（そう、これは……ナイフだ。柄が真ん中に張り出していて、刃が付いていると思えばいい。これはナイフだ）

ユツグは見えるほうの目で敵を正面に捉えて、左に握ったほうを投げつけた。よく飛ぶ。件の変なナイフは重量がある。中心に錘おもじをあしらってあるようで、腕の力だけでも殺傷力を満足できる速度を

生み出せた。

(こつちが……本命！)

脛をしたたかに打たれて屈んだところに、ユツグは右を一閃した。あたまに当たればと思つたところ予想以上で、幻像兵は眉間の辺りにナイフを喰らつて絶叫をあげる。顔を押さえて膝をついたところに、背後から矢が飛んで来る。追撃者はユツグから五歩のところまで血を噴出しながら消えていった。

(……助かつた？)

なかば放心しているところへ、後から複数の足音が近づいてきて、それらがユツグを追い越して幻像兵どもに向かつていく。ここでようやく味方が駆けつけたのだった。男が増援を覺つてしきりに「助けてくれえ！」などと怒鳴るのが聞こえる。

「ちよつときみ、大丈夫？」

しばらく動かずに幻像兵の駆逐されるのを眺めていると、座り込む彼を見咎めてか、何人かの兵が足を止めた。かけられた声は女のもので、心配と好奇心を緬い交ぜにしたようないろがある。ユツグは既視感を覺えた。

「……大丈夫じゃない」

「きみ、ひとり？ だれか大人のひとは？」

女は見たところ若い。大人か子どもかと問われれば子どもの部類に弁別されるだろう。こういう手合いに露骨に子供扱いされるのは、彼の名前に付随する名誉をいたく傷つけることだったので、「きみだつてひとりだろ、だれか大人のひとはいないの？」

憤然と遣り返した。こういう返答を予想だにしなかったのだろう、果たして女は応えずに啞然としている。

「イーデイス！」

「ロツク！ グイードは」

(あつ……この男だ)

聞き覚えのある声がして、女が顔を上げた。彼女の名前はイーデイスというらしい。幻像兵どもは手早く一掃されたようで、兵溜ま

りの中から瘦身を丸めて男が駆け寄ってくるのが見える。

「やつは木の上でおしっこ漏らしてる　ぼつず、よくがんばった。大丈夫か」

(ぼつず……)

「生き残ったのはお前ひとりだけみたいだが……残念だったけど、腐るなよ。よくがんばったぞ！」ロックと呼ばれたこの男も、ユッグを端から子ども扱いにした。「こんなに小さい身体で幻像兵をやつつけたんじゃないか、すごいぞ。ああ泣きたいんだったら」

「だれも泣かないよ、ちよっと黙ってくれよ。いてて……」
こつこつ返答を予想だにできなかったのだから、ロックは言葉に詰まって啞然となった。

「ええと……よし、で、ぼつず、どこをやられた。あたまだけか」

「ええと……よし、血、止めようか。包帯包帯……」

(子ども扱いをやめるつもりはないな、これは)

「背中と腰もやられた。こんなのは慣れてるけどね」と、ユッグは嘸うなづいた。いかにもなんでもなさそうに、歴戦の戦士といったふう^{ふう}に戦傷を誇るように。「油断したんだ、みんなを守りながら戦わなくちやいけなかったし、武器も落としてしまつて」

「そつか、すごいね。動かないでね」

「さっきので十五人目だったんだ。ああ、変なナイフをありがとう。使いやすかつたよ」

「ぼつずは強いんだな　イーデイス、腰を先に診たほうがいい」

「あんたやつてよ」

(ちつとも信じる気ないな)

「ぼくはぼつずじゃない。ぼくの名はユッグだ」

「強そうな名前じゃないか。で、ぼつや、ちよっと腰ひねってみてくれ」

(ぼつや……)

ユッグはムツとしながら腰をひねった。ロックがなにかよい徴しるしを見てとつたのか「よし、いいぞ、よかつた」と安堵の息を吐く。

「ぼつやは筋がいいな　この子、駄目もとで渡したシユリケンで一匹やつつけたんだぜ」

「へえ、すごいねえ！」ユツグの顔を拭きながら、イーデイスが始めて賞賛のいろを表わした。つまり先の「さっきので十五人目」発言は信用していないということだ。「強いんだ。わたし一匹でもダメだ」

「ぼくはいいから、ロツクの手当もしたほうがいい」実際ちつともよくはなかったのだが、子ども扱いを撥ねつける含みも込めて、ユツグはそう言つて虚勢を張つた。「あんな多勢に囲まれて無傷のはずがないよ」

「彼はいいの」

「よかないさ　うわっ、血だらけじゃないか！」

注意しておきながら今さらではあつたが、改めて見るとロツクはひどい態をしていた。身体に着けているものなにもかもがズタズタになつていて、全身赤くないところを探すのが難しいほどである。

「おれはもともと頑丈なんだ」

「嘘だからね」ロツクを指さしてイーデイス。「でもちよつと理由があつて、なかなか死なないのよ、これは」

「それもな」イーデイスを指さしてロツク。「服に血がついてるだけでな、ほら、身体はなんともないんだ。心配するな」

「するなつていつても」

「お、グイード！　こつち！」

と、ふいにロツクが伸び上がつて、兵溜まりのほうへ手を振つた。薄明の中、弓を背負つた大柄な男がこちらに走つてくるのが見える。

「おーい！　なんだあいつ、変な顔して」

イーデイスも一緒になつて「おーいグイード」を遣りだしたのが、走り来る彼の貌に刷はかれた、色濃い焦燥の明らかになるにつれて、明るい声は尻すぼみになつていった。

「グイードおしつこ漏らしたんだつて？」

「な、なに？　なんの話だ」

グイードの立ち止まるなり、深刻な顔色を和ませようとしてか、息を整える彼にイーディスはそう言っただけだった。

「いや、ちつとも降りてこないからさ」と、ロツクが弁解した。

「おまえらと一緒にされちゃ困る！」なおも息を整えながら、「こっちは刺されたら死ぬんだぞ」

「で、なんでそんな辛気くさい貌してんだい」

「……その子は無事か」ロツクの言葉には応えず、まず自分の安否を口にしたことに、ユツグはなんとなく好感を持った。「二、三人は殺ってたが、そうとう手酷く反撃されてた」

ロツクもイーディスも今さらながら、「へえ……」と感嘆を漏らした。ユツグはますますこの男に好感を持った。

「大丈夫だろうと思う。腰は急所を外したし、背中もまあ、切っ先程度かな」

「烽火のろしが上がってる」

グイードのぼそつと呟いたひと言に、イーディスとロツクはたちまち凍りついた。

（烽火？）

「いつから」

「わからん。さっき見た」今は樹冠に遮られて見えなかったが、グイードはそう言って山の一方を指し示した。「樹のうえで」

「偶然だと思う？」

「狙ったんだろうな、この機会を」

「見間違いじゃないだろうな」

「そうあって欲しかったよ！　だが間違いない、ガーランドの本隊が来るぞ」

「……ロツク、檻へ行ける？」

ロツクは露骨にイヤそうな貌をした。

「たけきところに伝令するだけ」

「冗談じゃねえ、それがイヤなんだ」

「あんたねえ、こっぴつときに私情を持ち出すの？」

「なんとも言うってもらって結構。おれは御免だね」

「ぼくが」と、ユツグは名乗りを上げた。ロックがなにをそんなに忌避するのか定かでなかったけれども。「ぼくが行くよ」

「おれが行こう」ユツグを遮ってグイードが名乗りを上げた。「少年、お前は怪我してるからダメだ」

「こんなのなんでもないさ、慣れてる」

「そうか。いいなイーデイス」

「お願い」イーデイスは全面的に彼を推すようだった。「できるだけ急いで。わたしは撤退の準備を」

(このひともぼくを子ども扱いする……)

「子ども扱いはよしてくれよ。見たんだろう？　ぼくが幻像兵を倒すのを」

「見た。　　ロック、伝令がイヤならイーデイスにくっついて荷物運びでもなんでもやれよ」

「へいへい」

「待てよ！」と、ユツグは憤然と立ち上がった。とたんに背中の方が　それこそ付けられたときよりもなおいっそう　痛んだが、それが怒りの炎に油を注ぐ形となった。「子ども扱いはいいかげんにしてくれ！　兵士を兵士として見られないあんたたちこそ子どもじゃないか！」

一刻もはやく駆け出すか、それとも熱^{いき}り立つ少年の相手を務めるか　グイードはちよっと迷ったようだったが、けっきょく後者を取ることにしたようで、改めてユツグに向き直った。

「少年」

「なんだよ」

「戦場に慣れた兵士はな、そんな大怪我をなんでもないなんて言わない」

「実際なんでもないんだ。怪我は慣れてる」

「慣れてるならな、そのなんでもない怪我がどれだけ身体の動きを制限するか、治るまでどれだけ時間が掛かるか知ってるはずだぞ。」

立ってるだけで辛いんだろう」

「……………」

「お前は強い。その若さと体躯であそこまで遣れるんだ、本当に脱帽だ。兵士の中には、あるいはお前に勝てないやつだっているだろう。でもお前はガキで、兵士としちゃぜんぜん失格だ」グイー

ドはためらわずに断言した。「自分の体調を正しく認識できないし、意地や見栄を張って嘘をつく。これだけでももう兵士として使えない。イーデイスがお前に伝令を頼んだとして、お前、本当に檻まで走れるのか。走れなかったらどうするつもりなんだ」

「……………」

「グイード、子ども相手だぞ。大人気ねえな」

「ロツク、お前はこの子よりよっぽどガキだぞ。イヤだなんて理由が通るか」

「へいへい」

「少年、おれはお前を子ども扱いしないぞ。だからはっきり言った。なにか言い返してやりたいことはあるか」

「……………ないよ」

「ならもう行くぞ、いいか」

ユツグが首肯すると、グイードはそれを汐しほに一目散に駆け出した。が、すぐに振り返って、

「少年、でもお前は一握りの勇氣を持つてる！ なみいる大人だって兵士だって、それだけはなかなか持つてないんだ！ 胸はって誇れよ！」

莞爾かんじと笑って怒鳴った。一握りの勇氣という言葉、少年たちに言っ
て、激励して回った言葉を思い出して、ユツグはふいに目頭が熱くなるのを感じた。胸を張れ？ 自らの勇氣が殺したのは、幻像兵
だけではなかったのでは？ 初陣に際してその一切を免れた悉ことごとくに
彼は今さらながら襲われた。にわかにに手が震え、痛みと怖れに膝を
屈した。彼は俯してまったく子どものように泣き出した。

「あの単細胞、やり過ぎなんだよ。なあぼつや、あんまり気にする

なよ」

「彼、あんまり他人のこと考えてあげられないから、許してやって。そりゃ言うことも一理あるけど、君、子どもなんだからさ、真に受けちゃダメだからね」

「そうだ。伝令だなんだって、そんなのはどうでもいい話だ。それでなくたってお前、友だちを守って何匹かやつつけたんじゃないか。凄いいことだぜ、あんなこと言われる筋合いじゃあないって」

グイードが行ってしまうと、イーディスとロツクは彼の悪口を交えつつ、なんとかユツグに慰藉を与えようと大わらわになった。代わるがわる肩を叩いたり腕を撫でたり、優しい言葉をかけたりして宥めすかす。相変わらずの子ども扱いに腹は立ったが、今の自分にはこんなのがお似合いだとユツグは自嘲した。

「でもあいつだって褒めてたろう、勇氣あるってさ。おれもそう思うぞ」

「わたしも思う。ほんとにさ」

(そういえば、剣、落としたままだったな)

剣は探せば見つかるだろう。が、一緒に落としてきた多くのものはもはや見出し得まい。ユツグは亡くした少年たちを想って涙に暮れた。

(だめだ、エリーチエが押されてる)

イミターテイオー

幻像兵の群を掻き分けるのに疲れ果てて、アリシアは空を仰いだまま立ち止まった。膝に手をつけて息を整えるあいだにも、沸騰寸前のあたまから滝の汗が止めどもない。

(もうすぐよね……でもそれまでに倒れそう……腕が上がらない) 全身汗みずくで、着衣のまま湯から上がってきたような感触である。

いいかげん耐えられなくなって、一片の用心からこれまで大事に着けてきていた胃と籠手とを、アリシアはがまんの限界とばかりに荒々しく脱ぎ捨てた。濡れた金髪を絞ってうしろに撫でつける。甲冑を着けたまま全力で走りつつ、幾重もの幻像兵の人垣を押しおとし蹴たぐってきたおかげで、全身くまなく眩暈めまいのするほどの疲労を感じる。

アリシアは自らに小休止を許して、幻像兵のただ中に腰を下ろした。疲れのあまり警戒心ははや麻痺している。

(エリーチエが墜ちたらどうなるんだろう。あれが降りてくる？ 誰があれと闘えるんだろう……)

先程から上空で繰り広げられている決闘、今のエリーチエにはあまりにも荷が勝ちすぎている。ほぼ魔力を尽いて本調子でないのに加えて、檻から出てきた化物はいつこう疲れを知らない。

防戦一方の彼女がいまだ墜ちずにいられるのは、多分に化物側の攻撃が気まぐれで、なにより取るに足らない抵抗に怯えて簡単に追撃を諦めてしまう、極端な臆病さに助けられていることに過ぎなかった。いつなんどきでも向こうがその気になれば、ふらふら飛び回るだけで精いっぱい彼女の彼女に抗しうる手立てはないだろう。一方的す

ぎて見ているだけでもつらい光景である。

化物がひときわ大きい炎を放って、ために最前から明けつつあった空は、一気に白昼並みの明るさに満ちた。と、すぐ近くにその余波が及んだようで、ズンと重々しい音とともにひとの叫び声が聞こえる。カミルラの陣は近いようだ。

（もう彼女は保たない……たけきこころは退いたのかしら、それとアグリアスさまも）

エリーチエはなんとか攻撃を避けようとしたらしかったが、あえなく炎に巻かれて大きく高度を落とした。が、それでも墜落には至らず、苦しげにローブを舐める火を消そうと躍起になっている。

化物は様子を見ているだけで動かなかったが、エリーチエにもはや反撃する力は残っていない。勝敗は誰の目にも明らかだった。

（エリーチエはきつともうじき死ぬわ、焼けるか墜ちるかして。かわいそうなトリーネ！とても嘆くだろう、マイナロスを喪ったわたしたちのように。あるいはわたしもここで？アグリアスさまは嘆くだろうか。いえ、それまで彼女に命が？コスモスは最後に斃れたものために泣いてくれるかしら。フェロークス・コスモスよ、あなたの守りはいずこに？ここがコスモス勢の墓場なので……）

ようよう汗が引き出して、少しずつ身体が冷えてくると、それが先につやむやにした感傷を呼び起こして、悲しい想像が脳裏を飛び交ってやまない。それらが涙を呼ぶ前に言い争うような声を近くに聞いて、彼女は俯せていた顔をあげた。

（カミルラの声だわ）

腰を上げるとすぐに、前からばたばたとひとの薙ぎ倒される音が近づいてくる。じきに視界が開けた。と思う間もなく、いきなり彼女めがけて槍の穂先が飛んできた。幻像兵の一匹と間違われたのだろうが、疲れてへたり込んでいたあわれな伝令にはあんまりな仕打ちであった。

「待って待って！待ちなさい！味方よオ！」

避け切れなかった槍が胸甲むねあての蝶番を引っかけて、アリシアは地面のうえを猛然と転がされた。慌てて上体を起こした時にははや囲まれつつある。彼女は「味方！ 味方！」を繰り返しながら急いで剣を外して、鞘ごと加害者の足下に放り投げた。

「味方がなんでこんなところに？」

彼女に槍を突っかけてきた女がそう言って、用心ぶかく武器を保持したまま剣を拾った。暑さに倦うんで胸甲まで外していたらと思うとぞっとする。あるいはこの女に殺されていたかもしれない。

「伝令よ！ アグリアス隊の！ あなた確認もしないでなんてことしてくれるのっ！」

「アグリアス……」女の眉がかすかに顰ひそんだ。「いちいちそんなこととしてられないよ」

「アマンダ、殺らないのか」

辺りの数人がそう言って、女にアリシアの処刑を急かす。ここに来るまで多くの幻像兵を機械的に殺してきたからなのか、兵たちは一様にかなり単純に、かつ殺伐としていたようだった。アリシアは青くなった。過去戦闘の渦中に誤って殺された伝令がないわけではないのだ。

（冗談じゃないわ、戦闘が終わってから味方に殺されるなんて！）

「……あんた、立って」

アマンダと呼ばれた女が、突きつけた槍で起立を促した。まったく捕虜あつかいである。逃げようにもすでに周囲を囲まれてしまった。ここで大声でカミルラを呼んだらどうなるだろう　アリシアは仕方なくアマンダに従った。

「うしろ向いて」

「こんなことをして、あとでどうなるか……」

「黙って」

足音が近づいてくる。身体中をまさぐられたあと、とつぜん両腕を後ろ手にねじ上げられて、次いで冷たいなにかを喉に宛がわれた。見えなくてもそれが刃物であると感触でわかる。アリシアはいよい

よ青くなった。

「あんたは幻像兵だ」

「違う！ あなたあたまがおかしい！ なんて　！」

「カミルラかセシルを暗殺しに来た」

「誰かまともな兵はいないの！ カミルラア！ 助けてエ！」

「死んで幻になるのよ」

ぐっと刃が肉に食い込む。アリシアは半泣きになってコスモスの仕打ちを呪う。が、横に動くはずの刃はふいに外されて、腕の縛めが解かれた。彼女は背後から軽く抱擁された。

「あんたは幻像兵じゃない、悪かった」

「……………」

「殴らないって約束したら、手を放す。どう？」

「……………いいわ」

アマンドは腕を解いてぱっと飛び退ると、申し訳なさそうに両手をあげて「ごめん、確認なんだ、謝る」と言った。

「確認にしたってもう少し遣りようが　！」

「アグリアスの伝令は？」

（カミルラ！）

声のしたほうを見れば、アマンドの連れが呼んできたのか、彼女の肩越しにカミルラが何人かの兵を伴ってやってくるところだった。戦闘に際していつもそうであるように、全身隙間なく白銀の甲冑で鎧い、水玉のように透く長大な槍を握っている。

「アグリアス隊のものが……………なぜ向こうから？」

表情のない冑の面頬がちよつと傾いた。くぐもった声は困惑気である。自分たちが檻をまたいで反対側から来たことを、アリシアは今さらながら思い出した。ひよつとしてアマンドはこれを警戒したのかしら　アリシアは少しだけ彼女を許してあげることにした。

「先に檻のうえを通って、エリーチェ隊の援護を」

「エリーチェ……………」カミルラは空を見上げた。「時間の問題だわ、また怨みの種が撒かれる」

「カミルラ、あなたの兵士はちょっと遣り過ぎではないかと」と、アリシアはさつそく抗議を始めた。アマンダに少しだけ便宜をはかって「ちよつと」を付け加えてあげるのを忘れなかったが。「殺されるかと思いました。いえ、じつさい本気で突かれたんです」

「しかるべき警戒を責めるわけにはね」

「警戒といつてもこの有様です、いったいなにに対してあんな……」

「暗殺者が横行してるわ、そちらには行つてない？」と、カミルラが言った。「幻像兵の全てが突つ立っているわけじゃない。伝令を名乗つてこの陣に来たのはあなたで四人目、でも本物は始めてだわ」「暗殺者……」

「多分アグリアスのところへも。彼女の身辺は？」

彼女の身辺 無口な怪我人、陽気な怪我人、隊の重装歩兵が百人弱と、あとは寄せ集め。信頼できるマイナロスもラヴィアンもない。アリシアは急に不安になってきた。

「我々は退却を そう、こちらに同様の命令は？」

カミルラはすぐさま「来てないわね」と言った。ちよつと撥ねつけるような言い方で、アリシアはなんとなく彼女の言葉に疑いを持った。

「ではよかつた、すぐに」

「カミルラ！」

と、そこで男の声がして、カミルラはすぐにアリシアに背を向けた。甲姿の彼女とアマンダたちとに遮られて声の主は見られなかったが、声からそれが副官のセシルであるとわかる。彼の声は切迫していた。

「伝令が来たと」

「じつとしていて、重傷なのよ」

「内容は？ 伝令はどこに」

「ここに」

と言つて手を挙げたのを、カミルラが非難するように素早く向き直つた。むろん表情は見えなかったが、おそらく睨めつけられ

ている。そうしているあいだにアマンダが脇に退いて、兵の肩を借りて剣を杖にした、銀髪の麗人の姿が現われた。

(うーん……美形だわ、いつ見ても)

剣を杖にしていることから連想して、彼女はふいにスコールを思い出した。ムスツとしていてちよつと映えなかったけれど、そういえば彼もなかなかの美形だった。アリシアはカミルラが睨むのも忘れて、彼女の副官にしばらく見惚れていた。

「きみは？」

「……アリシアと」

何度か会ったことがあるはずなのに、どうして自分は顔と名前を覚えてもらえないんだろう。アリシアは既視感を覚えた。

「どんな情報を？」セシルは短兵急だった。伝令使の名前などどうでもいいらしい。「命令？」

「ええ、命令です。撤退と」

「我々の許には来ていないわ」と、カミルラが割り込んできた。

「この戦闘は終わったはずだ。アグリアスに撤退命令が出て、あなたに来ないはずがない」

なにかこの隊特有の理由があるのか、セシルは撤退命令にがぜん励まされた様子である。部外者のアリシアには、それほどありがたがられるような命令とも思われなかったのだが。

「我々宛の伝令が来ないかぎり、退くわけにはいかない」

「今ここに來てるじゃないか」

「彼女はこちらに同様の命令が来たか確認しに來ただけ。伝令ではないわ」

「皆に回っているはずですよ」

と、今度はアリシアが割り込み返した。

推測に過ぎなかったが、おそらく間違っではないだろう。なによりカミルラがどのような故あつてのことか、どうも兵を退きたがっていないらしいのが不審で、それが彼女を大胆にさせた。果たしてカミルラの無言の非難に迎えられる。

「……はず、とはなに？」

「たけきところからフリオニールを経由して、矢文が来ました。すぐに宿営まで撤退と」実のところ、撤退ではなく逃げると書いてあったのだが、アリシアは無意識のうちにその表現を避けた。続けて多少の脚色を交えつつ、「そう、かなり切羽詰まっている様子でした。たけきところになにかあったか、あるいは宿営のほうかも。それで、万一にもほかの隊が襲むっに陥るのを防ぐ意味で、念のために確認と注進に来たんです。ス……アグリアさまの命で」

「幻像兵はまだ残っているわ。これを掃討しないうちに退くなんて命令が出るとは思えない。いつまたこいつらが動き出すかわからないのよ」

もうアリシアを話し相手と認めないつもりのように、カミルラは聞き終わる前に彼女に背を向けて、副官に向き直ってそう言った。

（やっぱり……撤退命令をやむやにしようとしてる）

「あなたらしくもない、いつものあなたなら率先してこう言うはずだ」と、ここで言葉を止めて、セシルはいちど苦痛を堪えるように俯いて、呼吸を整え始めた。彼は甲冑を着けていない。着衣も乱れほうだいで、引き摺り回されたような傷が身体のおちこちに認められる。「……たけきところが指揮官だ、指揮官の命令には従わなければと」

兵の肩を頼って浮かせぎみに庇っている左脚に、大仰な漆木のしであるのが目につく。先にカミルラが重傷だと言っていたのは、なるほど伊達ではないようだ。あの軟膏を擦なすり付けたらどんな顔をするかしら　アリシアはふいにいつもの欲求を覚えた。

「ここは戦場よ、何人もここでらしくあることを許されはしないわ」「もちろん、そしてたけきところも同様に。彼が掃討を諦めざるを得ないのも、戦場にゆかりある特別な事情があつてのことだろう」

「部隊長には時と場合に応じて独自で判断することが要求される。

彼にはたぶん前線が見えていない。指揮官の目の届かないところを補助するのも我々の務めよ」

「命令違反を弁解する言葉とも取れませんが……」

「あなたには話していかないわ」向き直りもせずに氷のひと言。アリシアの発言は一蹴された。

「あなたが孤立無援で敵勢のただ中にいるなら、その考えに賛成するとも。でもあなたは明確な判断材料を手にしている。彼女　アリシアという伝令を」と言って、セシルがアリシアのほうへ目を向けたので、彼女はなんとなく誇らしくなって胸を張った。「指揮官の目はどうかわからなくても、声はちゃんと届いている。それを聾どころか自ら耳を塞ぐなんて、彼女に命令違反と言われても仕方ないじゃないか」

「間違った命令には従えないわ」

「ぼくもだ、カミルラ。彼女も、皆もそうだ。間違った命令には従えない。だからあなたの副官は痛いのを堪えて具申してるんだ、正しい命令に従ってくれと」

「部隊長として命令しなければ聞けない？　副官さん」

「あなたの副官はもちろん従うだろう。指揮官に忠実な部隊長の命令になら、喜んで」

「……あなただってこういうとき、ちょっと耐えがたいほど頑固だわ」「戦場では誰もらしくできないって、誰かが言ってたね。そのせいじゃないかな」

カミルラは笑いまじりに溜息をついて、手を腰にやって顔を背けた。その姿勢のまま少し黙考したあと、

「残念だわ、わかって欲しかったけど……いえ、これでよかったのかもね」

妙にしみじみとした口調で呟いた。セシルは怪訝そうにしている。「なにが」

「セシル、あなたを罷免します」と言って、カミルラは甲冑姿のままセシルを抱擁した。「どうか無事で、あとで会いましょう　愛してるわ」

身体を離しざま、彼の鳩尾に掬い上げるような一撃が吸い込まれ

るのを見て、アリシアは咄嗟に二、三步まえへ走り出た。走り出たとたん、鼻先に鋭いものを突きつけられて急停止する。カミルラが首だけで振り向いて、手に持った槍の石突をこちらに向けたのである。

「カミルラ、乱心を！」

「静かに。あなた……アリシア」

「……………」

「ここまで御苦労だったけれど、もうひと働きしてもらおうね。」

アマンダ、彼を運ぶのに何人が選んで」

アマンダはしばらく言葉もなく、地面に横たわったセシルとカミルラを交互に見遣っていた。が、ややあつてなにかを諦めるようにあたまを振って「トビアス、ガイド、パトリツイエ、エレーミアス」と叫んだ。近くで一部始終を見ていた兵　先にアリシアを囲んだものたち　のうち三人が呼びかけに応じて、気絶したセシルの許にそろそろと歩み寄る。呼ばれた四人のうちもうひとり、最前から彼に肩を貸していた兵のことらしい。

「アリシア、この五人と共にたけきこころの許へ。我々はここであの化物を防ぐと、彼に伝えてちょうだい」

「……………命令に公然と背くと？」

「罰なら甘んじて受けるわ。もつとも、そうなるとは思わないけど」上空を槍で示して、「あれが、あいつが宿営まで飛んで来たら、たけきこころはいつたいどうするつもりかしら。　どうしようもないわ。兵を逃がすことができても物資を焼かれてしまえば、どのみちコスモス勢は遠からず全滅する。だから、あいつはなんとしてもここで殺しておくなければならない」

「カミルラ、冷静に考えて。あれには勝てません。命令に従ってください！」

「伝令使と問答するつもりはないわ、伝えるのがあなたの仕事よ。」

否むのならあなたはここで事故に遭う」言い終えるやいなや身構える暇もなく、アリシアは喉に槍の先端を擬せられた。「過去戦

鬨の混乱のさなかで、同士討の憂き目に遭った伝令はけっこういるわ。あなたはその最新の例となる」

応えずにいと、槍をそのままに半歩だけ詰め寄ってきた。痺れるような痛みがあつて、次いで鎖骨のあいだに血の流れ込むのを感じる。言っていることは無茶苦茶だったが、彼女はどうかやら本気らしい。否めば躊躇なくこちらを突き殺すことだろう。アリシアはほかにどうしようもなく、仰け反つたまま苦しげに「わかりました」と呻いた。

「……こんなことをするのは本意ではないのよ。でもあなたを付き合わせるわけには行かないし、時間も無い。エリーチエはもうじき墜ちるわ」カミルラは槍を外した。「そうなる前にさあ、行って。そして彼を無事に落として」

(大変なことに……せめてアグリアスさまが一緒なら！)

話し終えると、彼女はきっぱりとアリシアたちに背を向けて、足早に陣へと戻っていつてしまった。その背を兵たちがためらいがちに追う。じき選抜された五人とセルル、アリシアだけが、無言で佇立する幻像兵たちのただ中に残された。

「アマンダ、あなたは彼女に盲従するの？」

「……とりあえず最初は、あんたとあたしとパトリツイエで彼を運ぼう。男組は得物を持って、幻像兵どけて。それで疲れたら交代、それでいい？」

「アマンダ」

「カミルラは間違つたことは言つてない、そうだろ」

「正気の沙汰じゃないわ」

アマンダはひとつ溜息をついて「かもね」と呟いた。

六人はそれきり無言で出立を急いだ。陣のほうから誰かが声を張り上げるのが聞こえる。カミルラのものだ。

「あいつに近いひとを殺されたものは、その悔しさを思い出して。今こそそれらを余さず報いるときよ！ あの悪魔に死を！」

フェレウス・コスモスは

「

「いちにのさんで持ち上げる。　アリシア、聞いてる？」

「……………」

セシルは思ったほど重くなかった。「さん！」で身体が持ち上がると、長い銀髪が垂れ下がってゆらゆら散った。一行が動き出すと脚の怪我に障さわったのか、彼は微かに貌を歪めて呻き声をあげた。

（ローザ？）

誰も気に留めない。あたまに近い位置にいたアリシア以外に、この囁きを聞いたものはいないようだ。が、彼女はさしあたって自分の悩みで忙しかったので、そんなことは次の瞬間にはきれいに忘れ去っていた。そう、そんなことを考えている場合じゃない。

（たけきこころに、アグリアスさまになんて言えばいいのかしら…
…カミルラ、無事で！）

林道にはいつてしばらく、幻像兵どもの斉唱の遠くなってきたところで、ふいに後続の兵たちのどよめくのが聞かれた。夜はようやく明けて、辺りは樹頭の天蓋を戴いているとはいえ、すでにかなり明るくなってきている。

クレアルコス少し脚を止めて、いらいらと後の様子を覗った。

「……………なにをもたついている」

「見てきますか」と、ゼノフォン。

「タイタス、様子を見てこい」言われて、近侍していた兵のひとりが隊列を離れた。「お前はいい。それよりその手を放すなよ」

言うなり、クレアルコスの言う「その手」の持ち主が苦り切った様子で、

「いつまでこうしているつもりだ、我慢にも限度があるぞ」

険悪な声をあげた。両腕をゼノフォンとトリーネにしつかりと捕まえられて、ついでに背後からもうふたり、そうして連行される彼の両肩を掴んでいる。つごう四人の捕縛者に縛められて歩くたけき

「こころは、さながら縄を受けて引つ立てられる敗将のようだった。

「さあさあ、歩きたまえ。君を捕虜あつかいにするのは久しぶりだ」
クレアルコスはその言って笑った。それはかなりの努力を要する笑
いだったが。「たまにやるとなかなか楽しいじゃないか、なあ君」

「前は二人だった。そのうちひとり君だった。今回は誠意が感じ
られない」たけきこころは少しだけ機嫌をよくしたようだった。「
友よ、手を放したあと自分がどんな目に遭ったか憶えていないよう
だな」

「ゼノフォン、ほんとうに放すなよ。この捕虜どのの我慢の限度つ
てやつはそうとう短い。放したら即ぶちのめされるぞ」

「この手が自由になったらまず君に礼をするとも、クレアルコス。

盛大にやるから、捕縛者諸君のぶんまで残せるか自信はないが
ね」

ゼノフォンはどこ吹く風で涼しい貌をしていたが、トリーネほか
三名は非常に決まり悪げにしている。宜なるかな、光の戦士の意志
を公然と挫くなど、命令されているとはいえ彼らにとってはとんで
もないことなのだ。

（それでも昔じゃあ考えられない光景だな）と、クレアルコスは思
った。（自分でやっておいてなんだが、彼らと兵とが近くなるの
も一長一短だ）

コスモス勢が今とは比べものにならないほど巨大であったころ、
誰であれ光の戦士のこんなことをしようものなら嚴罰。それも命
に関わる。は免れ得なかった。いや、それ以前にこんな命令に従
う兵などひとりとしていなかったらう。

指揮官の死後、軍勢がだんだんと縮小していくにつれて、光の戦
士と兵卒とを分かつ垣根は次第に薄くなっていった。まるで数の不
足を結束で補おうとするかのよう。コスモスの巫覡ひげまきとしてなかば
神格化されていた彼らは、かつてさときまなこが努めてそうあるう
としていたように、偉くても親しむ余地のある將軍として改めて見
出されるようになった。ふだんから将卒にあごで使うなど言っ

いても、当のクレアルコスもこの「一長一短」の恩恵に浴しているひとりである。それは確かに魅力的な、それこそぞってむさぼりあう恩恵だった。ものみな何にも阻まれずに、光の戦士たちへ愛を注ぐことができたのだから。

背後でふたたび、それも悲鳴まじりのどよめきが起こって、ようやく一行は異変を察知して立ち止まった。

「テイナあいつじゃなさそうだが……幻像兵か」

「隊長、やはり様子を」

「お前はいいから、彼を放すな」

「ゼノフォン、トリーネ、ふざけるのもここまでだぞ。わたしを放せ」

「いやあ、命令に従っているだけでね、君をどうこう思ってるんじゃないんだがねえ……」と、ゼノフォン。

「大まじめだよ、でも許してね」と、トリーネ。

「……ゼノフォン、このまま天幕まで彼を連れて行け。こちらに戻ろうとしたら」ちらとたけきこころを見遣って、「構わん、遠慮なく縛れ。礼はあとでわたしが全て引き受ける」

「クレアルコス！」とうとうたけきこころは声を荒らげた。四人に縛められてもがきながら、「これ以上は明らかに越権だぞ、君は私の権利を侵している！ 指揮官の命令に従え！」

「そうとも、君は指揮官だ。それもちよつと軽率な」言って、クレアルコスは小脇に抱えていた胃を被った。「そもそも指揮官というのはだ、最後の一兵の斃れるまで敵の姿なんか見ないものさ。さときまなこはそうだった」

「……君もわたしを彼と比べるのか」

「君も、というのはなんだか妙に聞こえるね。誰もかつて君と彼を比べたりなんかしなかった」と言って、クレアルコスはたけきこころのあたまを両手で掴んだ。「なあ、わかれよ、友よ！ 君は指揮官だぞ、君は最後だ！ 最後の一兵がどんなふうにして死んだか、見届ける義務が君にはあるのだ！」

「君の死もだ、クレアルコス！」

「ゼノフォン、トリーネ、行け」手で追い払うような仕草をして、
「いま言った最後の一兵というのに、わたしはなる予定なんだ。こんなところでは死なん。さあ、さっさと行って撤退の準備だ。しろきかいなも待ちくたびれてる。行った行った！」

「クレアルコス！　ゼノフォン放せ！　トリーネ、放さなければ処罰するぞ！　放せと言うのだ！」

（あとで腕の一本も折られるかもなあ……）

五人は揉み合って蛇行しながら、林道を早歩きに隊から離れていった。たけきこころのなおも怒鳴り続けているのが聞こえる。処罰の具体的な内容に言及してゼノフォンたちの翻意を促しているようだった。四人ともさぞ冷や汗をかいているに違いなかるうが、彼らが自分の命令に背くことはあるまいとクレアルコスは確信している。彼らの忠誠に期待するのではない、それはもっぱら彼らのたけきこころを想う真情に拠よっていた。

「ヴァレリアス、五十人つれて彼を追いかけろ、護衛にまわれ。幕営はもう安全とは思うが」

「隊長は……行かれないのですか？」

「どのみち戻るつもりだった。まだみな引き上げてきていないからな。さて、だがここで待つというのも　おお、タイタス」

「セフィロス！」

タイタスは戻ってくるなり、会釈もせずにもう怒鳴った。辺りにいた兵たちがにわかに浮き足だった。

「クレアルコス、最後尾にセフィロスが！　すぐそこまで来ています！」

「……落ち着け、見間違いじゃないだろうな」

カオス軍中武勇つとに名高き戦士で、名前だけで一隊を退かせたことがあるほどの破格の強者である。タイタスは顔面蒼白だった。いや、この場で顔色を保っているものはひとりとしていなかった。

「よりによって彼か」まあティナよりはマシだ　クレアルコスは

諦めて溜息をついた。「なんにせよ……たけきこころを逃がしておいてよかった。で、何人だ」

「それが、その、ひとりです」

「ひとり……」

「ええひとりです、ひとりで百人を圧倒しているんです！」

（ひとりだと？ 彼ならやれるだろうが……それにしても、ひとりで一体なにをしに）

「……ヴァレリアス、言ったとおりだ、行け」

言われた当のヴァレリアスはまったく瞠目した。タイタスも、周りの多からぬ兵たちも同様である。

「百人で当たれない敵です、我々も加勢しなければ」

「いい。彼はわたしが引き受ける　タイタス」

「ひ、引き受けると、言われますが」

「あつきちしおの槍は持つてきてあるな、よこせ」

「クレアルコス無茶です、奴と　！」

「早くしろ」

タイタスはなおも食い下がって隊長の翻意を懇願したが、クレアルコスは頑として譲らない。いくばくかの応酬を経たあと、タイタスは仕方なく言われたものを取りにふたたび隊を離れていった。

「ヴァレリアス、何度も言わせるな。急げ」

「……フェレウス・コスモスよ、クレアルコスに能うかぎりの加護を」

（そうとも、わたしには彼女の加護がある）

ヴァレリアス以下五十人がいそいそと　それこそ逃げるように

去ると、入れ替わりにタイタスが戻ってくる。自前の槍と楯の代わりに、両手で十呎フィートもある大槍を抱えている。亡きあつきちしおの遺品のうち、形見分けとしてクレアルコスに贈られた品であった。「まあ、凄い槍だな。こいつを枝切れみたいに振り回したんだからなあ、彼は」

「クレアルコス後生です、ここは退いてください」まだ諦めきれな

いのか、タイタスがにじり寄って来てそう言った。「誰がどう言おうと実質的な指揮官はあなたです。退くべきです。あなたの亡骸を引き摺って戻って、たけきこころになんと釈明すればいいのです！」
クレアルコスは応えずに、受け取った槍を脇に抱えて、真一文字に空を斬ってみせた。轟音とともに辺りの兵の持っていた槍の穂先が二、三、なかほどから切れて飛んだ。タイタスは呆気に取られて口を嚙^{つく}んだ。クレアルコスの槍も腕も、振り回されずにぴたりと止まったのである。

「退けない訳を、じゃあ言うが、わたしより強い兵がここにいないからだ」言って、クレアルコスは槍の石突で地面をドスンと突いた。「それに話し合いの余地も、まあ、たぶんあるだろう。そう見縊^{みくび}ってくれちゃあ困るぞ」

(まあ、こんなことだろうとは思った。無理もないが)

隊列の最後尾からちよつと離れたところに、長い銀髪を晒した男が、三十名ほどの兵に囲まれて佇んでいた。丈高い偉丈夫で、そうして槍垣に圍繞されていても首からうえを遮るものがない。それがクレアルコス近づいてくるのに気付いたようで、ふとこちらを向いた。兵たちの足下には死んでいるのか、得物を握ったまま倒れ臥した兵がいくばくか。

タイタスの「百人を圧倒」発言は、なるほど確かに嘘ではあるまい。が、それを言うならセフィロスが現われて名乗った時点で、おそらく彼らは圧倒されていたのだろう。彼のような強者の最大の強みは、武器を執るまえに敵を挫きうるその威名にあった。

「軍団長どの！」

と、呼ばわると、呼ばれた彼の代わりに包囲していた兵たちが吃驚して振り返った。すっかり怖じ気づいて腰が退けている。クレアルコスが「みな離れる、彼を囲むな」と言うなり、彼らは我先に喜んで囲みを解いた。セフィロスは剣を下ろして構えてさえいない。(戦う前からこちらの負けだ、これは)

「お久しぶりです、軍団長どの」

クレアルコスはただひとり、ぎりぎり槍の届く位置まで近づいてそう言った。セフィロスの薄い唇が少し和んだ。

「久しぶりだ、クレアルコス。 見覚えがあるな、それはサングイス・カローリスのものか」

「ええ」

「……お前に宗旨変えを強いた槍が、今はお前の手のうちにあつてわたしに向けられている。皮肉だな」

「あの長いのは、今日は持ってきていないのですか」セフィロスは兵から奪ったと思しい長剣を握っている。「残念です、あれと同じくらい長いやつを探してきたのに」

「久しぶりに会うのだ、いきなり期待に承えてやれるものか」

「あなたがここにいると聞いて驚きました。どうやってこちらに？ ガーランドは山の向こうにいるはずですが」

「想像に任せよう」セフィロスは肩を竦めた。ともするとあっさり答えてくれるかもと期待したのだが、やはりそううまくはいかない。「わたしも驚いた。お前がここにいるのに」

「いつこう貌に出ませんな」

「努力しているからな。内心は跳びあがって泡を吹きそうだが」

けるりとしてこんなことを言い放つ。部下の緊張を解こうとするとき、彼はたいていこんなふうに見えさつて冗談を言ったものだった。彼を將と仰いで付き従った日々がつかのま脳裏をよぎる。

「……時に、たったひとりどこへ行くつもりです。用向きを伺いましょうかな」

「できうればこの混乱に乗じて、ブラキウム・アルプスを討てと命じられている。彼女はどこにいるかな」

(しろきかいな……なぜ彼女に限定する)

「言つとでも？」

「久しぶりに会うのだ、いきなり期待に承えてはくれまい」

「ではどうします。その剣に物を言わせますか」足下に転がった兵を見遣つて、「すでにあなたはそうしつつかあるようですが」

「これが物を言ったら死人が出ています」言つて、セフィロスは剣の刃を執つて、血のついていないことを示した。「仮にそうだったとしても文句は言えまい、先に仕掛けてきたのだから」

「殺していない？」

「この兵士がブラキウム・アルプスならそうしよう。どうも違つようだが」

(……彼はいったいなにをしに来たのだ)

「ではお引き取り願えましょうかな」

「そうだな……もともとさして気の乗る任務でもなし」セフィロスは持っていた剣を地面に刺して、腕組みをしてこころもち俯うつむいた。「どうでもいいのだがな……」

それきり言葉を発しない。命令無視は彼の場合そう珍しいことではなかった。が、こういう煮え切らない様子はかつて見たことがない。彼は悩んでいるようだった。

「なにを悩みます」

「わたしにもわからないのだ。ただ、なにかに引かれてここに来たような気がする」

「わたしに挨拶をしに？」

「お前がここにしていると知っていたら、あるいは」

(彼に争う気はなさそうだ……これはひょっとすると)

ふたりはしばらく無言で対峙していたが、ややあってセフィロスが腕組みを解いたので、それを汐に、

「で、いつまでここにいます」

クレアルコスが口火を切った。セフィロスは格別なんという色も見せず、剣の柄に手を置いて首を傾ないだ。

「さて。障りがあるならここから退どこうか」

「……いつそしばらく留とどまられては？」

「先に帰れと言わなかったか」

「軍団長どの、単刀直入に言いますが、こちらに降るつもりは？ なにかに引かれたと言うのなら、きつとそういうことなのではないでしょうか」クレアルコスは思い切って寝返りを持ちかけてみた。

「地位はむろん約束します。弱りきった軍ではありますが、そんなことを気にするあなたではないでしょう」

「その槍でそうしてみせるがいい、クレアルコス」セフィロスは喜ぶでもなく侮るでもなく、しごく穏やかにそう言った。「かつてサングイス・カローリスがお前にしたように」

「できないことは百も承知のはず、できたとしてもしませんよ。」

それほどにカオスへの忠誠心が？　あなたは軍規違反の常連だった」

「わたしはカオス勢の一介としてこの戦いを始めた。コスモス勢に降らない理由があるとすれば、まあ、それだけだろうか。どのような帰結を見るにせよ、決着がつくまでは旗幟を取り替えたりはしないし、そうすべきではない」

「怒っていますか、わたしが命を乞うて寝返ったのを」

「そのくらいは我慢するさ、お前が死んでいたらもつと腹を立てた」「争いは望んでいません。別してあなたとは」

「コスモスに祈れ。要すればカオスにも。神が我々の祈りを聞き入れた試しなどないが」

「カオスはそうでしょうな。コスモスは違います」

「わたしはコスモスを知らない」セフィロスが肩を竦めた。「お前は両方知っているようだが、あまり誇れることではないな。裏切ったものだけが知り得るのだから」

「……………」

セフィロスはじきに腕組みに戻り、クレアルコスは話の接穂をうしなうて押し黙った。ふたりともふたたび無言で対峙することになった。セフィロスの目的がわかれば打つべき手立ても見えようものだが、彼は差し当たってなにをしようともしない。試みに突きかかって勝てる相手とも思えず、人海戦術には兵数に不安を残す。かといって光の戦士の暗殺を命じられている以上、まったく無視してしまおうわけにもいかない。この妙な敵を扱いかねて、彼も腕組みをして悩み出したところで、セフィロスの肩越しに檻のほうから兵のやつてくるのが見えた。大勢で、ところどころ裂目のついた隊旗がスコールの居場所を示している。

「兵が戻って来たようです、軍団長どの。あなたには分が悪くなつたわけだ」

セフィロスは悠然と振り返って「そのようだな」と言った。別段あわてる様子もない。

兵の一群はセフィロスの姿を判別できるほど近くに来ると、案の定ぎよっとして急停止した。と、先頭にいた金髪の女が駆け出て、

「セフィロス！ きさま、ここで遭ったが百年目！」

腰の剣を抜いて高い声で怒鳴った。

「あれは？」と、セフィロス。

「アグリアス！ いい、彼は戦わない！」已めるとばかりに手を振って、「アグリアスといえます。何度かあなたの隊とぶつかっていますが」

「クレアルコス、そいつから離れて！ 戦わないとはどういうことです！」

「なにも被っていないからわからなかった。アグリアス」

「気安く呼ぶな！ なんだ！」

「そんなに経ってない、二年くらい前に会っている」真面目くさって自分の髪を指し示して、「髪に泥がついてるぞ」

「なにをきさま　！」

「アグリアス黙れっ！ 軍団長どの、気にしないでください」

「退いたほうがいいようだな」

「ええそうしてください」

彼はまったくこういうひとだった　クレアルコスは冷や汗をかきながらも苦笑を禁じ得なかった。アグリアスは嘲弄ちょうりやうされたと思っ
ているようだったが、彼としてはただ彼流の挨拶をしたに過ぎないのである。セフィロスは戦っている時とそうでない時の懸隔けんかくの激しい人間だった。

変わっているのは性格だけではなく、軍人としての性質も同様で、その武勇と功業とは裏腹に、彼独特の規矩きくに従って気に入らない命令にはとことん無視を決めこんだ。戦闘に際しては策を嫌って最前線を好み、自ら一兵卒をもって任じ、向かってくるものには容赦なく、命を乞うものは必ず逃がした。カオス勢のなかで戦闘に際して檻を携行しなかったのは彼くらいだったろう。

セフィロスは林道の外、わずか一碼^{ヤード}ほどの位置で立ち止まると、手近にあった樹に寄りかかってみた。腕を組んだ。ほんとうにちょっと退いただけである。長身の彼の見下ろすその脇を、兵たちがおっかなびつくり通り過ぎていく。彼に突っ掛かるところではない、眼を合わせようとすものすら、ひとりとしていなかった。

「スコール、アグリアス、ご苦労だった」

「クレアルコス」言つて、スコールが林道の脇にたたずむ男を指さした。「あれはあのままでもいいのか」

「あれはあのままがいい」

「今なら兵も大勢います、討つべきです。でなければ捕らえるべきだ！」と、アグリアス。「どうして指を啜えて眺めているのです！」

「そうすべきだからだ。　ティナはどうなった」

「エリーチエが足止めを」と、スコールが短く言った。「もう保たないだろう」

「……先の戦闘に次いで人的損害は計り知れんな、まったく」クレアルコスは舌打ちした。「ほかの隊には会わなかったか」

「彼女の隊と、あとアカルタエたちと合流したが　クレアルコス、

カミルラに撤退命令は出したか」

「フリオニールが報せたはずだし、追つて伝令も出したが。アカルタエは話さなかったか」

「聞いたが……いや、いい」

「それよりアグリアス、先に伝令で　」

「あいつをどうするつもりです」と、アグリアス。よほどセフィロスが疎ましい様子である。「放つておくのですか」

「彼に争う気はない、好きなようにさせるさ」

「悠長な、いきなり斬りかかってきたら　」

「彼はそういうことはしない」

「なぜそうと　」

「わかるのだ。ひところは彼の部下だった」

アグリアスはしばらく絶句していたが、じきに勢いを取り戻して、

「では念のために奴を囲みます」と言つて憤然と踵を返した。

「待て、彼を挑発するな」

「挑発などというものは乗るほうが悪いのです」とアグリアス。ただ囲むだけに止めるつもりなど毛頭ない様子である。

「彼の隊と安易にぶつかつていったい何人うしなつた、アグリアス！」と、クレアルコスが怒鳴つた。「そのうちの何人を彼がその手にかけたか、知らんお前ではあるまい！」

「そこまで事情を知つていてどうして止めます、クレアルコス。

奴を槍床で囲め！」背後に控えていた重装歩兵にそう号令して、

「奴はここでわたしが討ちます。止め立て無用」

「已めろと言つのだ！ 聞けないか！」

「已めません。聞けません」

(たけきこころよ、君の怒りが今ならよくわかるぞ、まったく！)

クレアルコスはふたたび舌打ちをした。公然と命令を無視されるのはなるほど、されてみると腕の一本も折つてやりたくなるほど腹立たしい。今しがた連想した友人にあやかつて、クレアルコスは動き出した兵たちに、

「セフィロスに対する敵対行動はいつさい禁じる！ 命令に従わないものは軍規に則つて処罰するぞ！ 止まれ！」

厳しい声をあげた。こちらは先例の轍を踏まずに済んだようので、

兵たちはとまどいがちに歩みを止めた。 たけきこころの口癖は

なかなか効果的である。命令を撤回されたアグリアスがきつと振り返つて、大きな瞳を怨みで漲らせる。

「……構うものか、わたしひとりでじゆうぶんだ」

「いい加減に　！」

「アグリアス」と、ここで静観を決めこんでいたスコールが割り込んで来た。「加勢しよう」

「お前までなんだ」と言いかけたの、容赦のない肘鉄が遮つた。抗議の視線にも鉄面皮は動じたふうもない。なにか含みがあるようで、スコールは前を向いたまま蚊の鳴くような声で「任せろ」と囁いた。

「ありがたい！」その意気やよしとばかりにアグリアスが喜色を露わにした。「ご覧なさいクレアルコス、戦士の真情を知るものはさだめてこうあるのです」

「あなたの気持ちはわかっているつもりだ」

「うん。お前のことをすこし誤解していたようだ」

「それでアグリアス、ちよつと」と、スコールが彼女を手招いた。

「こつちへ来てくれ」

「ん？ なぜ」

「おれがそつちに行けないからだ、脚に障る。いいからこつちに来てくれ」

「ああ、うん」

アグリアスは釈然としないながらも、このこと道を引き返して来た。スコールはといえば、彼女を靡なみきながらも到着を待たずに、兵の行列を逆行して道の外れまでよたよたと歩いていく。できるだけセフィロスから引き離すつもりらしい。いったいなにを始めるのかと肩越しに眺めていると、ややあつて彼は彼女の肩を抱くようにして、のろのろと長たらしい作戦指導を打ち出した。

「ふたりで一気にかかれば……」

「ダメだ、だからあんたは……」

「おまえ言つに事欠いて……」

「まずおれが後に回つて……」

「だって気付くだろう、向こうから……」

「これからその作戦……」

(……このさき彼女の誤解の解けることはあるまい)

スコールが水掛け論に忙しくしている間にも、兵は二列縦隊でセフィロスの傍らを通つて、続々と宿営へ流れていく。それがようよう途切れがちになつて、ふたりの水掛け論が穏やかな中傷合戦に移行しはじめたころ、卒然とセフィロスが道に戻つてきて、伸び上がるようにして檻のほうを注視した。妙に子どもっぽい仕草で、彼のような大男にされてみるとたいそう滑稽である。

「なにか見つけましたか」

返事はない。彼の視線の先にはだいぶ数を減らしたものの、なおも撤退してきた兵たちが途切れとぎれに列を作っている。そのうち先頭の一群が例によって、セフィロスの姿を認めるなり、阻まれたように立ち止まってどよめいた。旗こそなかったが同じ隊なのだろう、ある程度まとまっていて、一様に弦を張ったままの弓を肩に慄然としている。と、中傷合戦から今し掴み合いに移行しようとしていたアグリアスが、その中の誰かを見咎めて大声をあげた。

「ラヴィアン、アリシア！」

(セシル！)

アグリアスの慌てて駆け寄った辺りに黒い甲冑姿を見出して、クレアルコスも彼女に倣^{なら}って兵溜まりへ走った。兵たちがセフィロスの姿とクレアルコスの持つ槍を交互に見遣って困惑気になっている。ひとしきり周りを見渡しても、カミルラの姿は見つからなかった。

「セシルご苦労だった、カミルラは後か」

セシルは先に話し込もうとしていたスコールを手で制して、クレアルコスに向き直って、

「戦場に」

と、短く言った。甲に隠れてよくわからなかったが、脚を庇って槍を杖にしている。妙な力のおかげで負傷に縁遠い彼の、そうした姿はしごく珍しい。よほどの激戦だったのだろうか。

「戦場に残ったのか？」

「戻ったのはあんなだけか」と、スコール。彼の周りに重装歩兵のいないのを見て取ったのだろう。

「意識はないのか……うう、アリシア……」

「アマンダ」と、セシルが誰かを呼んだ。今ほど悄然と膝しよしげんを折ったアグリアスの傍らで、意識のない兵に肩を貸していた女が、声に応じてついと振り向いた。「顛末を。彼女はそこに横たえて」

女は黙って言われたとおりにすると、すぐにクレアルコスの許に膝をついた。

「カミルラは戻りません。留まってテイナを食い止めると」

「食い止め……フリオニールが行ったろう、伝令も遣ったぞ。命令は届いていたはずだ。なぜそうなる」

「ラヴィアン、手当はしたのか？ 血が……」

「……来ました、三人」なにか嚙下するようちよつと俯いたあと、アマンドは意を決したように面をあげた。「三人とも殺しました、カミルラの命で。これは幻像兵だからと……」

「……ここにも違背が？ 殺した？ いったいどうなってる？ 殺しただと！」

「ぼくも知らなかった、つい先程まで。言い訳にはならないけど」と、セシルが言った。「もうどうしていいか……」

「アリシアしっかりしろ、聞こえ」

「アグリアス黙れっ！」

「アマンド、彼女……アリシアも」と、スコールが草生に横たえられた女を示して言った。彼にしては珍しく剣呑な様子で、「カミルラがやったのか。彼女もそっちに伝令に向かった」

「黙れですって！ 黙りませんとも」アグリアスは涙に咽んでいる。

「あなたには戦士の真情など少しも酌めないのだ！」

「彼女は違う。パウサニアスたちのところへ辿り着くまでに、幻像兵に……彼女だけじゃない、五人やられた。残ったのはあたしだけ」

「ところでなぜセフィロスが……」と、セシル。

「ああ彼は アグリアスしっかりしろ、兵が見るぞ！」

「見ればいい、仲間の斃れたのが悲しくないものなどいない！ うう、マイナロス……」

「幻像兵が動き出したのか？」と、スコール。

「なに幻像兵が？」と、クレアルコス。「なぜ ええくそっ！

来るときはいつぺんに来るな、厄介ごとってやつは！」

「クレアルコス、おおい！」

「それで幻像」呼ばれたほうをいい加減にちらと見たなり、クレアルコスは蒼白になって今度はそちらに駆け出した。「スコ

ール聞いておけ。フリオニール！」

スコールたちに少し遅れてやってきたフリオニールは、もうひとりの兵と肩を分け合って、気を失っているらしい誰かを支えていた。さらにそのすぐ後に遅れて五人ほど、なにか重たいものに縄をかけて懸命に引き摺って来るのが見える。その後が続くものはいない。彼らは最後尾だった。

「フリオニール、死んだのか！」

「代わってくれないか、脚をやられてて

「クラウド、おい！」

「掴まないでくれ生きてるから！ 痛いつて！」

クラウドは有体に言って瀕死に見えた。あれほどの重傷を負いながら、そのうえからなおも新たな傷が刻まれているのである。フリオニールの肩からだらりと垂れ下がる、彼の左腕の惨状が眼に飛び込んできた。クレアルコスは心臓も凍る思いだった。血染めのそれは、まるで朽木かなにかのようにささくれ立っていて、その先の五指はあらかたちぎれてなくなっていたのだ。これではあの巨剣を振り回すことなどおぼつかない。

（コスモスよ、わが女神よ、この試練はあまりにも望みが薄い！
これほどまでに打ちのめされたあなたの軍から、なぜ最後の英雄すら奪おうとする？ ひとりでは足りないというのか！）

アグリアスよろしくクラウドに縋って泣き出した気分である。あつきちしおの槍を握ったところで、自分に英雄の資格の備わらないであろうことを、彼はよく知っていた。

「おい……あれ、セフィロス」

「……彼はあそこに立っているだけだ、無害だ。それより彼の手当を」

「いや こっちに来るぞ」

フリオニールはぐずぐずしていなかった。クラウドの腕をクレアルコスに押し付けて、襷がけに負っていた弓を素早く執る。隣の兵の矢筒から一矢を引き抜きざま、「おい止まれ！」と怒鳴った。

「フリオニール已める　スコールお前たちもだ！　彼に手を出さな！」

最前からなにに気を留めるでもなく、伸び上がったあたりあたまを？　いたりしていたセフィロスが、気が付けば早歩きにアグリアスたちの脇を通り過ぎるところだった。スコールの制止の声も一顧だにしない。無人の野を往くがごとくのセフィロスの眼は、平素おだやかに細められているのが嘘のように、かつて見たことのないほど豁然と見開かれている。大きな碧眼がうすい朝靄の中で照るようである。「クラウド、クラウドか」

セフィロスの声の届くなり、まったく気を失っていたはずのクラウドが、雷に打たれたように跳ね起きた。首が痙攣して反って、血糊で練り固められたごわごわのあたまがぐつと持ち上がる。傍目には誰かにむりやり掴み上げられたかのような眺めである。

「自ら望んでこの道を？　それともいつものように目を瞑って、誰かの後についてきたのか」
「もう一度だけ警告するぞ、止まれ！」　フリオニールが弓弦を引き絞った。

「フリオニール！　軍団長どの、彼を知っているのですか」
ただ歩みを進めるだけで返事はない。スコールとセシルが剣呑な声をあげながら追い縋ってくる。クラウドはといえば、助けを求めているのか威嚇しているのか、狩人に追い詰められた獣じみて唸るだけである。面識のあるなし如何はともかく、双方とも尋常の様子ではない。

「どこを歩いたにせよ、お前の行く先はひとつ。お前の道は必ずここに繋がっているのだ、クラウド。わたしの足下に」
「軍団長どの、彼は怪我を　」　構わずつかつかとやってくるのでクレアルコスは仕方なしに邪魔な槍を置いて、逃れようと力なくもかくクラウドをいったん地面に横たえた。制止しようと立ち上がった、「落ち着いて、彼になにか　」

早足に歩み寄ったところを無造作にひと突きされた。しばらくは

なにをされたかわからずに、鎧元まで突き込まれた長剣の柄を見下ろして突っ立っていたのが、ややあつて支えを失ったように膝を折った。クレアルコスは横ざまに倒れた。フリオニールの絶叫が耳を劈いた。

「今は挨拶までだ、クラウド、しかしすぐに会えよう」

セフィロスの囁く声が途切れとぎれに聞こえる。それとともに弦打の音と、誰かが猛然と走り来る足音と、色々な音が一緒くたに彼の耳を訪うて、

（わたしが死ぬ？ そんなはずはない、わたしには彼女の加護がある、わたしには彼女の加護が）

最後に静寂が彼の意識を占めると、まぶた瞼が暗幕よろしく静かに降りていった。瞼の裏にはしかし、恋いしたう女神の微笑みはなかった。

「ねえ、あれ」

右手でトリーネが呆けたような声をあげた。左手のゼノフォンが「どれ」と短く聞くと、両手を自由にできない彼女は、包帯の巻いてある右足をひよいと上げて「あれ」と示して、立ち止まったために後続の兵に衝突されてつんのめった。彼女を支えてやりながら、「気をつけるトリーネ、わたしはいま君の手を振り解けたぞ」と、たけきこころは呟いた。

「ごめん。なんか変だな」トリーネが苦笑した。「なんのためにこうしてるんだっけ」

「彼が大好きだから離れたくないんだよ、わたしたちは」ゼノフォンが雑ぜ返した。「彼と腕を組むこのひとときの素晴らしさよ！」

目頭が熱くなつてこないかい、たけきこころよ」

「今わたしに一撃されるより、あとでみなの前で鞭打たれるほうを選んだからだ」と、たけきこころ。なかば冗談めかして、「わたしは君たちが大好きだから、この大きな借りにはたっぷり利子をつけ

るぞ。君たち、今のうちにしるきかいなの仲裁を期待できそうな釈明を考えておくことだ」

「……振り解けばよかったのに」

「君たちが崇高な改悛のところに打たれて、前科を恥じて哀哭しつつも善行の喜びに思い至って感涙に咽びながら……自ずからそうするのを待っているのだ。目頭が熱くなつて来ないか、ゼノフォン」

「おおフェレウス・コスモスよ、あなたの巫覡ふげきの放言をお赦し下さい。彼はなにも知らないからこんなことを言うのです」ゼノフォンは空を仰いだ。負けじと冗談めかして、「わたしたちは彼に隠れてそんな涙ははや一滴のこさず流し尽くしてしまったというのに」

「クレアルコスは楽しんでいたな。君も実に楽しげだ。コスモスは見ているぞ」

「隊長はいま泣いているんだ。君この戦闘が終わつたら行つて見てみたまえ、涙の池が あっ！」言いかけて、ゼノフォンは前方になにかを見出して大声をあげた。「くそ、やられたのか……」

彼の視線の先には、規則正しく一定の間隔で連なつた屋根の群が見えるか否かといったほどの微かな煙を上げている。宿営はほど近い。話している間に鬱蒼とした枝葉の天蓋はようやく切れて、薄雲に滲んだ朝日が一行の頭上に現われていた。

宿営の敷地の四方を囲んでいる板塀の、表に打たれた鉄板の薄錆が見えるころになると、煙の出処もだいたい正確に把握できるようになった。ゼノフォンが小さく舌打ちをする。備蓄庫のうちもつとも奥まった辺りから、それは細く棚引いていた。スコールの言っていた例の奇襲によるものだろう。意図してか忘れてか、彼はこの凶報をゼノフォンに伝えなかつたらしい。

「あれつて、あの煙のことかい」

「なにが？」

「さっき自分で言ったんじゃないか、足で示して、あれつて」

「ああ……いや、でも気のせいかな」トリーネは曖昧に言葉を濁し

た。「ほら、今は見えないんだけど、丘のあの道の辺り。なにか変な、黒っぽいものが見えたような気がしたんだ……」

光の戦士の天幕が設えられた丘は、ひろい宿営地を挟んで彼方にある。言われて目を凝らしてみても、淡い緑の丘の腹が見えるだけで、自然の道など馴染んでしまつて判別できない。これをもつと離れた位置から見取つたのだから、

「眼がいいな、君は。わたしには見えない」

「わたしもだ。 トリーネ？」

彼女の返事がない。トリーネは情性で数歩あるいた後、丘のほうを見つめたまま立ち止まつてしまった。たけきこころとゼノフォンがそれを見咎めて歩みを止めると、後のものたちも宿営を目の前に急停止を強いられる。

「どうした」

「進まないと後が」

「見える？ 天幕の上」トリーネは目を細めたまま、たけきこころの腕から手を放して、それで丘のほうを指さした。眉はにわかな焦慮に顫められている。「揺らめいてる。たぶん火が あっ」

「うわっ、馬鹿！」

自由を得た右手がすかさずゼノフォンの顎を突く。彼が身をよじつて両手を放してしまうと、

「後のふたり、涙を流せとは言わない、手を放しなさい。これ以上そうしつづけるなら鞭打ち刑でいどでは済まないぞ」

両肩を掴んでいた兵を低い声で恫喝した。言い終わる前に彼らの手は離れた。

「ま、待ってくれ、たけきこころ。 トリーネ迂闊すぎる！」

「ごめん、ほんとごめん！」

「ヴァレリアス！」呼ばわりながら、たけきこころは早足で敷地へ入っていった。「手勢は」

「五十ほど」待機していた後続から声上がる。胄を小脇に抱えた偉丈夫が駆け出てきて、振り返りもせずに進むたけきこころに並ん

だ。「精鋭です」

「……君はわたしを檻に閉じこめようとしたふたりの、片割れだな」
「は……」

「わたしが縛められていたとき、君は指を啜えてそれを眺めていた。
次はないぞ、わたしの命に従うか」

「はっ」

「おい待ってくれったら」ここでゼノフォンとトリーネが追い付いてきた。「崇高な改悛うんぬんはどうなったんだい」

「事情が変わった。時間が惜しい、天幕へ急ぐぞ」

「もう一度つかまえようとしたら、怒るだろうね、君は」ゼノフォンの声に諦念がにじむ。「隊長すみません、彼は放たれました……」
「そんな命令に従う不埒者はもうどこにもいないぞ。それだけではない、君を同じような目に遭わせることもできる」と、余憤さめやらぬといった様子で、「トリーネ君もだ、二度と妙な気を起こすなよ」

「わかった、けど、もういちど同じことを言われても、たぶん従うよ、わたしは」と、トリーネは胸を張った。「ゼノフォンも、みんなもそうだ、命令されたからそうしたんじゃないよ。わかってるんでしょう?」

「……なにか見えたらすぐに報せる」

「わかった、あ」

「あ?」

トリーネは黙って前を指さした。宿営地を貫く路の真ん中、オニオン騎士旗を戴く天幕の向こうから、忽然と大柄の黒チヨコボが現われたのである。

(逃げてきたのか? やはり異変が……)

「スポリアートル!」

呼ばれるまでもなく、彼の鳥はたけきこころの許を目指していたように、声を聞きつけると走るのを已めてひよこひよここと歩き出した。近づくにつれて騎乗者のあるのが判別される。スポリアートル

の首に突っ伏して、乗るといふより鞍に引つかかっている態である。たけきところは卒然と駆け出した。

（コスモスよ照覧あれ、光を与えたまえ！　どうか他のものであつてくれ……誰でもいい、彼でさえなければ！）

ちょうど鳥と合流したところで、騎乗者は鞍からずり落ちた。あたかも図つたかのようにたけきところの腕に落ち込んだ。血に濡れた甲冑と、腕に纏わりつく蔓薔薇つるばらの腕輪、ミスリルの剣帯はいまや赤く塗装されて、朝日を射返してぬらぬらと輝いている。彼は膝を折った。

（なぜ君なのだ、なぜこうなる！　なぜこういつ予感ばかり当たる！）

「ヤン！　ヤンよ、声が聞こえるか！」

ヤンの眼は半開きのまま、どこをも見ていなかった。彼の代わりにスポリアートルが足を踏みならして、二度三度と短く鳴いてみせた。

「ヤン目を開けなさい。光の戦士の命令だ」

「……天幕が」

唇がかすかに動いて、辛うじて聞き取れるほどのか細い声が漏れ出た。彼はヤンのあたまを抱えるようにして、口元に耳を近づけた。

「天幕が？　ヤン！」

「たけきところよ、傍にいて下さい」と、彼は言った。それは存外に力強い声だった。「置いていかないで」

「ここにいろぞ」

彼はもう一度「傍に」と言うと、それで全ての力を使い果たしたというふうにして、ぐったりとなった。たけきところの全身を後悔の炎が灼いた。彼の同行を許していれば、セシルの言うとおりにしていけば、あるいは死なせずに済んだのでは？　青年のすっかり血のいろを失った両の頬には、歪んだ冑の頬当になかば隠れて涙の轍わだちが光っていた。

「……死んだのかい」

彼と一緒にについて駆けてきたゼノフォンが、声をかけ倦^{あく}ねたあげくといった態でぼつんと言った。これにもスポリアートルが代わりに応えて、嘴^{くちばし}をポクポクと打ち鳴らした。

「彼を頼む」

「待った、待て、待てよ！ 君は行くなよ、わたしが行こう」

「丁重に扱ってくれ、優秀な伝令使だった」

構わずスポリアートルの手綱を取るたけきところに、これ以上の説得は無意味と踏んだのだろう、ゼノフォンがものも言わずに掴みかかった。

「放せ」

「放すものか トリーネ！ ヴアレリアス！ 早く来い！」

「君も頼当をへこまされたいのか、わたしはやるぞ」激しく揉み合いながら、「放せ。これで二度目だ」

「君は最後だと言ったろう！ たけきところよ、しろきかいなの安否がわからない今なら、尚のこと君の安全が優先されるんだ、冷静になりたまえ！ 頼む！」

「死はじゅうぶん見た、彼が最後のひとりだ。放せ もう警告はしないぞ！」

「少しは指揮官の自覚を持ってこの分からず屋っ！ クレアルコスが！」

トリーネたちが追い付く一歩手前で、ゼノフォンは顎に一発、胸に二発、ついでに足払いを喰らってあえなく地べたに接吻した。頼当も胸甲も拳のかたちに陥没している。右手の被害はヤンを殴ったときの比ではなかったが、こんな痛みは少しも彼の気を引いてはくれない。それこそ赤の他人の手の痛みも同然であった。たけきころは全き^{まった}悔恨の激痛に、すでになずんでいた。

「たけきところよお待ちを！」

「ヴァレリアス、先の言葉よもや違えまい！」鎧^{あぶみ}に足をかけてひらりと鞍に跨る。「ゼノフォンの手当を。それと彼を……」彼を？ ヤンを埋めるとでも？ パウサニアスの掘ったかもしれない墓穴に

？ たけきこころは言い淀んだ。「……彼を頼む」

「すぐに追いつくよ」「トリーネはもう諦め顔である。騎鳥の足下に伸びたゼノフォンに駆け寄りながら、「言って聞くとは思わないけど、慎重に。できればわたしたちの到着を待って」

言っのを最後まで聞かずに、黒チヨコボは首を返して走り出した。天幕からひとがさまよい出てきてもお構いなしといった、ひどく乱暴な手綱捌きである。オニオン騎士旗も靡なびけよとばかりに、スポリアートルは早々と襲歩に入った。

天幕は炎に巻かれながらも、いまだ原型を留めていた。火をつけられてそれほど経っていないのだろう。騎鳥の手綱を執とって坂を駆け上がりながら、たけきところは朝日に溶け込こむ見えざる炎を仰いだ。

先に騎鳥を下りたのは、彼の鳥の死体を踏むのを嫌ったためである。戦鳥として訓練されたスポリアートルは、踏んでも足に異常を来さないと判断したものを踏んづけるのになんの躊躇もしない。戦場で敵を踏んだり蹴ったりするのも彼の仕事のひとつなのだ。

丘には静かな朝があった。幕布ははや焼け落ちていて、梁材のしんみりと爆ぜる音のほかは、すぐ後をついてくるチヨコボの足音くらいしか聞こえない。真夜中の喧騒が嘘のようだ。風はそよとも吹かず、白っぽい煙がふわふわと坂の降り口までを侵して来ていて、そこかしこに斃たおれた兵の亡骸をおぼろに覆っている。

その数、百名を下るまい。生きて動いているものがないということとは、パウサニアスに従わなかったニューラーズたちは、天幕を衛まもつてことごとく戦死したに違いない。無論である。死の爪はあたら若い命のひとつにすら、目をこぼしてはくれなかったのだ。名にし負う強奪者スポリアートルはなにも奪えずに戻った。すべて奪われて討報ばかりを持ち帰った。

丘へ登ってしまつと、息を整えている間にも天幕が不穏な音をたてて、内側に頽くずれるようにして崩壊してしまった。あたかも彼が来るまで堪えていたかのような眺め。

(しろきかいな)

今し崩れた天幕のあげた、濛々たる粉塵と火の粉の治まつたあと、

その前に行き倒れるようにして俯うつむしたクローク姿が目に留まった。すっかり灰と煤に塗れてしまつて、白地も赤の縁取りも見分けがつかない。たけきところは震える脚でゆっくりとそれに近づいた。近づきながら、それが彼女でないと判断しうる全ての可能性を精査したが、これは試みる前から無駄であると解りきつていた。それこそ天幕の燃える光景の見えたときから、そんなことは試し尽くしていたのだ。あつきちしおも逝き、ルーカンも逝き、ヤンも逝き、きつとニューラーズも逝つた。どうして彼女だけが免れられよう。昨日は嘆きの日であつたが、それは昨日だけではなく、今日でおしまいというわけでもないようだった。

クローク姿の傍らに両膝をついて、たけきところは小さな背に降り積もつた木片や埃を払つてやつた。

「しろきかいなよ、あなたは待つたらうな。すっかり遅くなつた」
言つて、臥せた肩にちよつと触れると、存外に暖かい。微かな希望が心臓を突き上げる。火の近くにいたせいかと慎重に考えて、地についでいた脇腹の辺りに触れてみる。やはり暖かい。神よ 彼は不覚にも涙を落としそうになつて、かたく目を瞑つむつた。縋るようにして肩を揺すりながらかけた言葉はしかし、どうしても震えた。

「しろきかいなよ、しっかり！ 起きてくれ！ これか」
と、突然クロークがぱつと跳ね上げられたかと思つと、それを貫いたナイフの刃が、舞い上がった埃とともに彼に殺到する。彼の心臓めがけて。たけきところは仰け反りぎみに辛うじて、右の掌でそれを受けた。どうして彼女だけが免れられよう！ クロークの下に潜イニクティオーんでいたのは幻像兵であつた。

「ウオ……！」
凶刃は掌を貫通して、彼の胸板に切つ先ばかり突き刺さつた。激痛よりも絶望のほうが彼をより強く打ちのめした。幻像兵は間隙を得て立ち上がるとまつたくの無表情のまま、得物に両手を添えて体重をかけてくる。たけきところはなかば押し倒された恰好で、それでも左肘を突つ張つて必死に抵抗した。

（コスモスよ照覧あれ、照覧あれ　これを見る！）たけきころはふいに、自らの中で知らず番つがえられたまま、久し久的を睨にらんでいたものの存在をはつきりと知覚した。知覚してよりのちは、それを射放つのにためらいはなかった。（これを見るっ！　見えないのか！　お前の見放した将兵の累々たる屍が！　貴様の見捨てた巫覡ふげきの流した血の夥おびただしきが！）

刃を生やしたままの、震える彼の右手がゆっくりと握り締められると、しばらくは均衡を維持していた力比べは徐々に、奇襲者のほうを圧倒し始めた。たけきころは自分でも聞いたことのないような、不気味な唸りの自らの口を衝ついて出るのを聞いた。

（百年祈った。聞こえまい、貴様はすでに耳を塞いで久しいのだから！　百年間、寝食を惜しんで貴様に語りかけた！　光あれと救あれと！　なんとということだ、わたしたちが神だと思っていたものは土壁に等しかった！　なんとという愚か者たち！）

「もはや祈るまい」一転、両者の体勢は入れ替わって、たけきころが幻像兵を脅かす恰好になる。「もはや祈るまい、この愚行に救いなど　」

左手でさかしまに長剣を抜き放つと、その先端を幻像兵の喉に宛がった。この期に及んでも幻像兵に感情らしい感情のいろはなく、ただ全力でこちらを押し返し続けるだけである。神はただこれだけを期待したのだろうか、たけきころはふと思った。

カオス勢はそのほとんどがなんの感情もない、それこそ命も魂もないまぼろしの兵である。あるいはコスモスは自らの兵にもこうなれと言うのだろうか。刺されても斬られても、餓えても悲しんでも言葉も涙もない、ただ動いて自分の願望に沿うだけの、具足を纏ったもの言わぬ木石に変ぜよと。

「　救いなどなかったのか」

たけきころは長剣を突き下ろした。ユツグの剣は幻像兵の喉を、しろきかいなのクロークを、そして彼の最後の信仰の基もとを貫く。砕け散った信仰の欠片は大粒の涙と変じて、彼の眼から止めどもなく

こぼれ落ちた。

太陽が正中にかかろうとしている。

奇襲を受けて弱りきったコスモス勢には、目下のところ戦友の甲いはおろか、その死を嘆く時間すら与えられてはいなかった。ガーランド本隊の侵攻が間近に迫っている。傷つき悲歎する兵たちにかける労いの言葉はなく、代わりに待っていたのは野営地をたたむ重労働だけである。戦傷の疼き、悲歎の^{なみだ}涙、睡眠不足、行き渡らない食糧、いつ来るかわからない敵襲の恐怖。疲労困憊した彼らを、さまざまな鞭が代わるがわる打っては急かす。況^ましてこのつらい労働の報酬として用意されているのは、知れきつた苦しい逃避行のみ。いつそ幻像兵のようになにも感じないでいられたなら、どれだけよかったことだろう。カオスに祈ればそうなれるのか？ 兵の口からこんな言葉が出て、疲れ切った同僚はみな^{もた}黙した。それを咎める労すら厭^{いと}わしい。カオスへの祈りはついぞなかった。しかしコスモスへの祈りも同様であった。

オニオン騎士旗の掲げられた、野営地中央の天幕。ただ機械的に働く兵たちと対照的に、ここに集ったものたちは深夜の争いの続きさながらの、疲れを知らない怒号を戦わせている。

議題はこの騒動の引き金になった、囚人の処遇についてであった。もつとも衆を割って論撃紛々というのではない。処刑派が多数で、それを議長が論拠もなしに承知しないという泥沼である。

擁護派はたけきこころとパウサニアスのほかは、ただスコールのみで、そのほかゼノフォンを筆頭にトリーネ、セシル、アグリアス、臨時で隊を任かされたアカルタエとアマンダたちは、結託して速やかな処刑を要求した。フリオニールだけがはつきりと旗幟^{きし}不鮮明を宣言し、すでに天幕から姿を消している。はつきりしないということもはつきりさせるといふ、いかにも彼らしい判断で、それについ

ては特にみなも異論を差し挟むというわけではなかったのだが。

「　　なんどでも言うぞ、こっちは六人、そっちは三人だ。時間が
ない、採決を！」

「実質はふたりだ。パウサニアスはあなたの言うことならなんでも
盲従するもの」

口撃はもつぱらゼノフォンとトリーネによって行われた。かたや
師と仰ぐクレアルコスを喪い、こなた姉と慕うエリーチエを喪つて
いる。森林の火災が収まるとすぐに、彼らは檻へ偵察を遣つて被害
の確認を済ませていた。

あまりにも大きな犠牲。将だけをも古参のルーカン、クレ
アルコス、カミルラ、エリーチエ、ニューラーズと、彼らの副官た
ちが戦死した。なかんずく前者四名は、いずれも四百年以上もの従
軍経験を持つ、コスモス勢の主柱である。彼らの喪失はこの戦いに
おける損害の最たるものであると言えよう。この四将と格別したし
い関係にあつたゼノフォン、トリーネ、セシルの慨嘆は激しく、し
かしこの差し迫つた現状、涙に暮れることを許されない彼らは、そ
れが直接的か間接的かは考慮の外として、先の戦いの原因　ひい
ては大事なひとの死因　を手つ取り早くテイナの存在に求めたの
であつた。

「君も見たろう、あれをこれいじょう連れて歩けばどうなると思う
！　　今度こそ終わりだ！」

「結論は出てるんだ、早く誰かに命じて。わたしでもいい。このま
まじゃ兵たちも納得しない！」

「あんたたちは短絡的に殺せと言うが」スコールが低い声で言った。
髪はぼさぼさに乱れ、汚れて隈の目立つ顔は苦渋一色に染め抜かれ
ている。「どうやって殺す。それができないから今までああしてい
たんだらう」

「今は沈静化している、確認済みだ。普段のあれなら新兵だつて首
を落とせるさ」

「手ぬるい」トリーネが押し殺した声で、「四肢を切り落とすたう

えでそうすべきだ！　それでなければ罰にならない！」

「だからいつ、どういう条件下で、どれくらいの時間であいつが変身するのか、わかるのか、あんたたちは！」ここで辛抱強いスコールがとうとう大きな声をあげた。「何度おなじことを言わせる、だから今までどうすることもできなかつたんだろー！　いざ殺そうとして変身されて、それであんたたちはどうやって身を守る！　いたい何人死んだと思ってる！　あんたたちまで消炭にされるわけはいかない！」

「ではお前はどうするべきだと言うのだ」と、アグリアス。「言うてみる。どうするのが一番安全か」

スコールはちょっと言い淀んだあと、「このまま連れていくしかない。誰にも接触させないように、動揺させないようにするしか」と苦しげに言った。

「今までどおりに？　もう檻は持って行けない」セシルが口を開いた。「もういちど彼女めあての奇襲を受けたら、今度は味方のだ真ん中だ。身を隠すものもない。あるいはたけきところが近くにいかもしれない」

「少しでいい、少しの時間があれば観察できる。あいつの変身についてきつかけや周期性が割れば、それを武器に転用できるだろう。こつちを数千人殺せる力は、向こうも同じだけ殺せる力だ。ただでさえ兵力でこれだけ水をあげられた。使えるものはなんでも使う」

「少しの時間か！　実に簡単に言うね、君は」ゼノフォンが鼻を鳴らした。「そんなものが、まああると仮定しようか。で、観察とやらは君がひとりですか。いいね、あれは確かに目の保養にはなるものな。それで君が失敗して消炭になったら、次は誰がやるんだい。前もって希望者を募っておくか？　裸の女の子を好きだけ眺め回せるおいしい仕事だつてね」

「……おれを怒らせるのが目的か？　ゼノフォン。あんたは成功したぞ」

「彼女の見た目に騙されているのでは？　スコール。あなたは新参

でした」と、アカルタ工。「我々はあれの被害を一度ならず見ています。あなたのように割り切れるものでは」

「アカルタ工。言いたくはなかったが我慢の限界だ、言うぞ」と、パウサニアスが割り込んだ。「ほかの誰がそうしても、お前がたけきこころの意向に背くだなんて思わなかったよ、わたしは。とんでもないことだぞ、なにかを決めるのは神であつて、その意志を代弁するのは常に彼だ。神が不承知のことに公然と楯突くなんて、お前はいつたい何様になったつもりだ、背信者め。ゼノフォン、トリーネ、君らもだ、まったく見損なつた。コスモスは見ているぞ」

「たけきこころの安全を第一に考えるからこそこう言うのです！」アカルタ工は真つ赤になつて熱り立つた。「あなたの言う神の代弁者が身罷つたらどうします。あなたが代わりを務めるとしても？あなたこそ何様ですパウサニアス！あれをお側に置くなつてとんでもない、それを考えなしにしようとするあなたのほうこそ背信者ですわ！」

「殺しに不安があるなら、うまくやる自信はあります」アマングの声はどこまでも冷たい。「べつに難しいことはありません。わたしがやります」

「殺すなど言うんじゃない」スコールは黙つたままのたけきこころを見遣つて、ひとつ舌打ちをした。「いずれは……いいだろう、あなたたちがどうしてもそうしたいのなら、殺せばいい。ただ今はよせと言うんだ。あいつだつて今ごろ考えているはずだ、自分を罰しにやつて来るものがあるかもしれないと。向こうが警戒しているときに無理してそうする必要はない」

「スコール、君は譲るまい。平行線だ、もういい」ゼノフォンが椅子を蹴つて立つた。「たけきこころよ、君の意見が聞きたい。この議題の決は出ていると最前から言っているぞ」

たけきこころは腰かけたまま懶げに、ゼノフォンの貌を見上げている。が、言葉は発しない。

「たけきこころ、最後の決断はあなたに任せるけどね、わたしたち

の意見を無視したら兵たちは従わなくなるよ。指揮官が堂々と軍規を破るんだもの、当然でしょう?」

「……あんた、なにか言ってくれ。どうして黙ってる」スコールがいらいらとたけきところに耳打ちする。「おれにばかり喋らせて……どうしたいんだあんたは。はつきりしろ」

「どうとは」

「どうって……話を聞いてたろう?」

「おい寝ぼけるなよ、たけきころよ」

「口を慎めゼノフォン、彼に向かってなんだその態度は」

「腰巾着」

「聞こえたぞトリーネ、わたしが腰巾着だと！ お前さんはあたまに血が昇るとたいていそうなるな。カミルラと同じに私怨に狂ったお前さんだ、まともな議論なんぞできるものか！」

「パウサニアス、口を慎むのはあなたのほうだ。もういちど死者を侮辱したらどうなるか……！」

「沈黙は肯定と取りますよ、たけきころよ。誰も行かないならわたしがあれの首を取ってきます」

と、言ってアマランダが席を立ったその時、たけきころが無言のまま静かに立ち上がった。包帯で吊った右手ももどかしく、のろのろと剣帯から長剣を外すと、それを鞘がらみに思いつきり卓に叩き付ける。あまりのことに一同呆然、美しい玉髓の細工は碎け散り、ミスリルの地金を晒した鞘が卓に突き刺さって震えた。

「どうとはこうか。こうすれば諸君は満足か」刺さった鞘から白刃を抜き放って、充血した眼でみなを睨め回す。抜身を手にゆっくりと卓を横切りながら、「新兵でも首を落とせる？ あれの首を取ってくる？ 結構だな、コスモス勢がこれほど殺し好きだったとは。わたしもすっかり感化されたよ。こんな血生臭い我々には似合いの獲物ではないか。虫一匹殺せない少女というのは」

「……たけきころ、一匹も殺してなくても、あれは何千人も殺した」と、ゼノフォン。たけきころの狂態に少しく気圧されつつも、

負けじと彼を睨みつけながら、「ひとりふたりならいくらでも酌量してやれる。でももう桁が違いすぎる。危険すぎるんだよ。我々の取り得る手段はごくわずかだ。そしてそれを誤れば軍は崩壊するだろう。トリーネの言葉は仰山じゃないぞ」

「だからそれをしに行くのではないか、わたしは」たけきこころはけろりとしている。「四肢を切り落とす？ 親愛なるトリーネよ、まだまだ、残酷すぎな君の言葉とも思えないな、わたしならもつと君を喜ばせてやれる。指を一本ずつ関節ごとに寸刻みにしてやろう。君、聞き耳を立てているよ、ここまで彼女の悲鳴が届くかもしれないから」

一同、水を打ったように静まりかえっている。みなたけきこころの正気を疑いだしたのである。

「アマンダ、いとも頼もしい女傑よ！ それほど彼女の首にご執心なら、では君の取り分として頭蓋骨を確保しておこうか。そう、この卓がちょうどいいっ！」がん、と剣の腹で卓を打つ。「ここで皮を剥いで肉を刮こそげて、髓を抜いて脳を除いて、君のために下ごしらえをしてやろうではないか。それで杯でも作ってみるといい」

「……たけきこころ」

「さあセシル！ 遠慮はいらない。死者の侮辱は止よしにして、思うさま生者を侮辱しようではないか。君もついてくるか？ わたしはちよつと勉強不足だが、君ならそのためのあらゆる手段を万事遺漏なくこなしてくれるだろう。カミルラは石を投げたが、君なら彼女を痛めつけ苦しめるに足る、どんなものを投げるのだろうな。わたしには想像もつかないよ、実に楽しみだ」

天幕の入口で彼は振り向いて、もういちど参会者たちを眺めまわした。鉄面皮のスコールですら色を失って、立ち上がりかけたままの姿勢を保って自失している。

「どうした諸君、喜べ。笑え」言って、握っていた拔身で入口の支柱のひとつに猛然と斬り付けて、「笑えっ！ 諸君の思い通りになつたぞ！」

そう怒鳴ると、たけきこころは踵かかとを返して天幕を後にした。

(ない……やっぱりない。誰かが拾ったんだ)

ユツグはようやく捜し物を諦めた。膝丈の草叢からよるほい出て、路の傍ら遺棄された枯木にそろそろと腰かける。風は吹かず、午も近い。暑くなってきた。

背中も腰もあたまも痛い。汗に濡れた額の包帯に手をやると、果たして薄く血がにじんでいる。おまけに熱も出てきたようだ。明け方に蒙った大怪我の功名で、つらく単調な撤収作業を免れたのだが、代わりにこんなことをしては怪我など治らないだろう。

誰かの指摘のあったとおり、腰と背中への傷は腹立たしいほど身体動きを制限した。彼にしてみれば勲章同然の負傷だが、とても割に合うものではない。代わりに剣も仲間も名誉も自信もすべてなくしてしまったのだ。こんなもののために自分はすべてを擲なげつたのか！ 少年はできることなら地団駄ふんで転げ回りたい心境である。

後悔してもきれない昨夜の軽拳。そしてついさきほど聞かされた親友の死。溜息が漏れればいっしょに涙も落ちた。

(一握りの勇気がいったいなんの役に立ったんだろう。ほかのものがぜんぶ揃ってなきや、そんなものなんの意味もないじゃないか……)

「きみ」

しばらくぐずぐずと鼻を嚙すっている、足音が近づいてきて、彼の眼下に影が落ちた。顔を上げなくても少年には誰だかわかっている。イーデイスという女で、先程から幾度となくやってきては欲しくもない慰めを押し付けようとする。

「ねえ、怪我、治らないよ。いま荷車に床を用意したからさ、横になってなよ」

「行けよ。話しかけないでくれよ」

「……見つかった？ 剣」

「……………」

「わたしも探そうか？」

（探そうかだつて？ 信じてもないくせに！）

ユツグは無視を決めこむことにした。イーデイスはなおも何度か優しく話しかけて、返事を期待できないことを悟ると、「はやく来なさいよ」と捨て科白して去っていった。どうせまた来るつもりだろう。

（ぼくもあの天幕にいればよかつたんだ。そうすればヤンを助けてやれたかもしれない。そうできなくなつたつて、一緒に死んでやれたんだ。ぼくはいつたい何人、子どもを死なせたんだらう。そんなやつは死ねばよかつた。そうだよ、お前なんか！）

足下を通りかかつた不運な昆虫が、腹立ち紛れに蹴られて飛んでいった。怒り冷めやらずに、なにか八つ当たりの材料はないかと辺りを見回す。群生した羊歯。南天の灌木。葉漏れ日を浴びてひるがえ翻る黄いろい蝶。なおも未練がましく左見右見していると、ふと右肩に揺れるオニオン騎士の肩章が眼の端に引つかかつた。

（なにながユツグだ、恥ずかしいやつ。みんな笑つてたんだぞ、知らなかつたのはお前だけさ）

早速ひきむしつて足下に投げつける。が、こんな自虐で気は晴れなくても、悲しみはむしろいや増すだけだつた。膝を抱えて泣いていると、ややあつてふたたび足下に影が差す。今度はロツクかグイードか、懲りずにまたイーデイスがやってきたか。

「それも捨てるのか、少年よ」

ユツグは弾かれたように顔をあげた。目の前に後光を背負つた丈たかい男が立っている。灰いろの長髪がうなだれるユツグに日傘を作る恰好である。

「たけきこころ……………」

「ひどく遣られたな」

とだけ言つて、彼はユツグに背を向けて歩き出した。彼にはちよ

つと似合わない、大きな背嚢を背負っている。もつといろいろ話しかけてくれるものと期待していた少年は、咄嗟に立ち上がって傷の痛みに悶絶しながら、

「ま、待ってください」

と、呼び止めた。

(あつ……彼が……！)

向き直ったたけきころの、右の腰に下がっているものを見て、ユツグはそのあとに続ける言葉を飲み込んだ。誰が彼に届けたものか、なくした短剣がそこに吊られていたのである。

「なにかな」

「……どこへ行くんですか」

左手に持った長剣で宿営と反対側を示して、たけきころは「向こうだ」と言う。右手は包帯で吊られていて、左手に握った剣に、しかし鞘が見当たらない。ひとりきりで供を連れた様子もない。この態で檻へ行ってなにをするつもりだろう　ユツグは訝った。

(今は大変なときはすだけど……)

「ぼくも……行っていいですか？」

「好きにするといい」たけきころはちょっと肩を竦めた。以前とは違ってすこし冷たく感じられる。「その怪我で来られるなら」

「平気です」

痛そうにしても労ってはくれず、手を貸そうともしない。今ほど放った肩章を引っ掴むと、振り返りもせずにくてく行ってしまつ男を追って、ユツグは齒を食いしばって小走りに駆けた。

「たけきころよ……その、ぼくは、大きな、罪を犯しました」

と、ようよう悶えがちに言えたのは、林道に入ってから経つてからであった。そのあいだ、ふたりはひと言も口を利いていない。

「罪とは」

やはり振り返らない。口調もそつげなく冷たい。

「ぼく仲間を、子どもたちを死なせて、しまいました。その、いえ、自分でやったわけじゃないですけど、彼らを煽動して、幻像兵と……」

たけきところが立ち止まったので、ユツグも歩みを止めた。立ち止まって来たる叱責に身を硬くした。

「イーデイスに子らの犠牲を聞かされたときは驚いた。二十と少し、幕首のところどころで惨死していたと。身に覚えが？」

「はい」

「これを」と言つて、腰に下げていた短剣に目を落とす。「グイードが届けてくれた。彼はあつきちしおと親しかったから、見覚えがあったのだろう。彼は道ばたで拾つたと言つていたが」

「ぼくが」ほんとうは違ふのだが、事情を説明し出せばどうしても言い訳に流れていくだろう。彼らの代償として失つたものを思えば、こんな小さな誤解はいくらでも引つ被つてやれる。「ぼくが落しました」

「君は戦つて、剣を落とした。子らは？ 彼らはなにを落とした」

「……い、命を」

「君が殺した？」

「はい、ぼくが死なせて いえ、殺しました」

ここで初めてたけきところが向き直つた。その面にもはや穏やかおもてなものはない。汗か血か、眉根から冷たいものが滑り落ちてくる。

「……子らはやがて長じ、彼らがもしそれを望んだなら、ミールスの誓いを立てただろう」彼の声は感情のいろのない、低く押し殺されたものだった。「訓練を経て武装し、カオス勢と戦い、そのうちの誰かは功を認められて兵卒を率いたかもしれない」

「はい」

「君は殺したぞ、未来の兵を、将を、あるいは無辜の非戦闘員を」ユツグは怖ろしくなつて身震いした。彼の凍てついた瞳が周囲の熱

を奪うようである。「殺しの罰について、軍規にはこうある。相応の理由なき殺人には原則死刑を以てすると。君は二十余名もの殺人を正当化しうる、なにか忽せにできない理由を持つか」

「……いえ」

「君を弁護してくれるものに心当たりはあるか」

「ありません」一瞬、都合のいいことにイーディスやロツクの顔が思い浮かんだが、彼は黙した。「弁護なんて……」

「では君は死刑に処される。異論はあるか」

「……ありません」

たけきところが拔身を引つ提げて近づいてくる。ユツグはたまらず下を向いて硬く眼を瞑った。肩に硬いものがこつんと当たる。脚が震える。先に死ねばよかったと思うだけでも、彼にはやはり命はなによりも惜しまれた。そうして二十数人がひとしく今の自分と同じ気持ちを味わったのだと思えば、今さらにして自らの罪の本当の大きさが思い知られる。死にたくない、けど、死んで当然だ！ 左足は懸命に逃げ出そうとしても、それを右足が同じだけの力で留めた。

「受け取りなさい、君の剣だ」

目を開けてみると、彼の肩に宛がわれたのは剣の刃ではなく、柄のほうである。腰に吊っていた短剣を鞘ごと、彼はユツグに差し出していた。

「君は二十数名を殺して死刑になるかもしれないが、それを言えばわたしなど何千回何万回刑死しなければならぬかわからない」たけきところは溜息をついた。「わたしのような大罪人に死刑執行人は務まらない。君を処刑するのはわたしでない誰かであるべきだ」

「どうやら死刑は免れたようである。ユツグはなおも震える手で、差し出された剣を受け取った。」

「よく自ら打ち明けた。殺人の大先輩であるわたしも、それは見習わなければ」

「……知っていたんですか？」

「ユツグを名乗っているそうだな。それを聞いたものが何人かいる。昨夜おそくに少年たちを集めて、盛んに騒いでいたと　君らは消灯時間を守らなかったな」

たけきところはちよつと笑った。ユツグは恥で真っ赤になった。勝手にユツグを僭称していることを彼に知られるのは、そうなってみて初めてわかったのではあるが、少年にとってはとてつもなく恥ずかしいことに思われた。

「いえ、もう、やめます、すみませんでした……」

「なにを已めることがある、胸を張って名乗りなさい　さあ、歩こう」と、たけきところは少年を促して歩き出した。「君にユツグのことを少し話そうか。彼のが気になるだろう、どんな人間だったか」

「ええ、はい、知りたいです」

後に少年を従えて、たけきところは林道をそぞろ歩く。思い出しているのか、彼はしばらく無言のままそうしていた。

「彼は強くて勇敢で……傲慢だった。とても」ようよう口火を切ったたけきところは、昨日に天幕でそうしたように、どこを見るでもなく遠くに眼を遣っている。「自分のことを認めるものには寛大だったが、そうでないものには驚くほど狭量だった。他人の意見を容れず、自分より優れたものには冷たく、興味のない分野においてそうであるものを端から嘲った。あいつのあれはいつたいなんの役に立つのだ……などね。彼は自らに天分のある能力だけが、世界で求められているものの全てであると、そんなふうを考えているふしがあった」

「……………」

「そう……よく目下のものの面倒を見ていたな。でも気分屋で、些細なことですぐ暴力を振るった。寂しがり屋で、感動屋で、おしゃべりで、なにか見たり聞いたりしたこと、強く周りの共感を求めた。見栄っ張りで、反省が大嫌いで、加減を知らず、それで、あとで後悔してね、よく泣いていたよ。　さっきの君のように」

(……だいぶ想像とちがうぞ)

「驚いたろう。生きているうちから英雄と呼ばれていても、内実はそんなものだった。彼も人間だった。君もわたしも、ティナも」

「ティナ？」いきなり思ってもみなかった名前が出てきたので、ユツグは素っ頓狂な声をあげた。「え……ティナですか？」

「君がユツグを名乗っていることを、彼女が教えてくれた」

ユツグはなんとなく彼女を怨めしく思った。別に秘密にしてくれと言ったわけでもなかったのだが。

「……ある時、ユツグの部下の多くが斃れたことがあった」たけきところは急に話題を戻した。「ガールランドとの戦いだったが、彼は彼奴きやつの策を意に介さず、無謀に進みすぎて手痛い反撃を喰ったのだ」

「はあ」

「彼の部下は激減した。それこそ任をいったん解いて、隊の再編を図らねばならないほどに。そしてその犠牲の中には当然、彼の力と持たのむオニオン騎士アーリアートゥスもつとも当時はそうとは呼ばれずに、神の聖獣にちなんで雄牛の戦士とか騎士などと呼ばれていたが、その腹心の戦士たちも多くいたのだ。ユツグは悔しさと悲しさで、食を断つて何日も泣いて暮らした。さときまなこに再三出頭を命じられても、自室に籠もったまま」

「はい」

「やっと出てきたとき、彼は糞やっれ果ててはいたが、なんと笑っていた。わたしたちは当初正気を疑ったよ。悲歎のあまりとうとう狂ってしまったのだと……しかし彼は言うのだ、楽しみで仕方がないと」

「楽しみ？」

「何人だったろう、正確な人数は覚えていないが、ともかくも彼は失ったオニオン騎士ひとりひとりの、自分なりの甲いを企てたのだ。それは彼流のいかにもな強がりひそりで、ほとんど復讐同然であったが……彼の眉が少しく顰ひそんだ。「死んでコスモスの許に行ってしまうたオニオン騎士ひとりにつき、カオス勢の兵士三人を奴隷として送

り届けてやると。彼はひとりぶん達成するたびに強いて笑って、喜び楽しむふりをした。そしてひとりで百年以上もの時間をかけて、けつきよく全員分を達成してしまっただのだ。凄まじい執念と闘志で、実に三千人以上を自らその手にかけてた」

「……凄いですね」

「ユツグよ」と、たけきところは初めて彼をユツグの名で呼んだ。

「内に籠もって泣くのはいいが、その後のことは、あるいは彼の遣り方を参考にするのもいいだろう。手段はどうであれ、彼は涙の中でも立ち直るために、懸命に方法を模索したに違いないのだ。彼は傲慢で、しょうじき鼻持ちならない男だったが、最大の長所は常に前向きであったことだった。前向きで明るかったために、それらが数多くの短所を隠してくれた。彼はありていに言って、多くのものに愛された……わたしは面白くなかったがね」

最後の言葉は彼の本音だろうか、なんだかとても珍しいものを見たような気がする。彼の笑顔にユツグも屈託なく笑い返した。ただ無闇に偉くて近付きがたい存在であった彼が、少年の中で少しずつその立場を変質しようとしていた。

「ぼくがやるとしたら、六十人くらいでしょうか」ユツグは傷の痛みを忘れて、たけきこころを追い抜いて後歩きに話しかけた。「腕が鳴りますよ」

「君はまだ育ちきっていない。兵士にすることはできないぞ」たちまち親しげな笑顔が引っ込む。「それにまだ君に罰を与えていない。死刑は免れるが、別の方法で君は罪を償わなければならぬ」

「はい……」浮かれ上がった気分が急にしぼむ。ユツグはがっかりした。「……ええと、打擲刑ですか？」

「君には罰として わたしの伝令使を務めてもらおう」彼の口の端がちよっと上がるのが見えた。「わたしは厳しいぞ。容赦なくしごくから、そのつもりでいなさい」

(伝令使……ぼくが?)しぼんだ気分が途端に浮かれ上がった。(う、嘘みたいだ、やった、ぼくが光の戦士の近侍に!)

「あ、ありがとうございます！ がんばります！ ヤンの、ヤンのようにはいかないかもしれないけど……」

「頑張ってくれ、ヤンの分も」たけきところはまた笑顔に戻っている。「まずは怪我を治すことだ　ああ、檻が見えてきた」

言われてふと辺りを見回せば、よほど話に夢中になっていたのだろう、いつの間にか林道は終わりに差しかかかっていて、ほど近くに枝葉に半ば隠れた檻が眺められた。が、ひと晩見なかっただけに、檻はその輪郭を著しく損なっている。ユツグは今更ながら、昨夜ここで戦争のあったことを実感した。

（そういえば…… テイナ！ そうだ！ テイナはどうなったんだろう！）まったく今更である。泣いたり悩んだりするのに忙しくて、実に今の今まで彼女の安否を失念していたのだった。（くそっ、なんて馬鹿なんだ、あの子のことを忘れるなんて！ でもあの檻の様子だもの、きつと宿営に…… そう、そうだ、たけきところは？ 彼はなにをしに来たんだろう、こんなところに？）

「たけきところよ、あおう」ユツグはにわかにそわそわしだした。

「ここへはなにをしに？」

「ああ、うん、言っただけだ」

たけきところの笑顔の裏に、なにか異質なものが浮き上がってくるのを少年は見た。彼は楽しくて笑い出したのではない、それこそ先に彼の話したユツグさながら、強いてそうしていたのだと、彼はそのとき忽然と悟った。見ている間にも、その裏に満ちた悲しみが滲み出て来るようである。

「……君の死刑は御免を蒙ったが、実のところ、わたしはいまだに執行人でね」たけきところはちょっと泣き笑いのような貌で、左手の長剣に眼を落として言った。「コスモス勢の総意により、わたしは彼女を、テイナを処刑しに来たのだ。　君の同行は断るべきだった」

あれほど嬉しく誇らかであった気分が、かつてないほど萎えしほむのを感じる。ユツグは愕然となった。

背後の少年の呻くのが聞こえる。

(やはり同行は断るべきだった、この少年には酷な眺めだ)

「……凄いいいだ」

声に振り返つてみると、あんがい動じた様子はない。ただ眉を曇らせて、握り拳を鼻の下に押し付けている。凄惨な焼死体の数々を目の当たりにしても、その童顔に怯えのいろはなかった。始めて見るものの反応にしては至極あっさりしたものだ。

檻は焼け枯れ^{すす}煤けた樹木と、いつけん倒木とも見紛う、無数の真っ黒な焼死体に囲まれて、いびつに立ち竦んでいた。死体は焼損が激しく、誰彼の区別などもはやつかない。炎は斬死したものたちももれなく焼いてしまったのだった。

(それほどの火勢のわりに、火災の範囲はごく狭い。彼女が消して回ったのだろうか)

「酷い眺めだろう。こういう死体を見るのは初めてかな」

「あ、いえ、初めてでは」

「……君にそんな機会がたびたびあったとは思えないが」

「焼けたのはあんまり見たことないんですけど……実を言うと、こういうのはもう慣れっこなんです」においに辟易しながら、ユツグは鼻声で応えた。「戦死した兵の亡骸をこっそり見に行ったり、診療院でミーンを手伝ってる隙に、大怪我したひとの傷を盗み見たり……ヤンが昨日、兵になるための訓練をしてたつて、言つてたでしょう。あれ、そういうのも含んでたんです。ぼくも一緒に……」

「君らには驚かされる」

たけきこころは足を止めた。檻はもう目の前で、あちこち開いた

黒い穴に、葉叢に濾された弱い朝日が射し入って、もはや方形の態を留めない惨状を露わにしている。表面には高熱に炙られてきたのだろう、真つ黒な波紋が斑まだらに焼き付けられている。少年が感嘆らしい溜息を漏らした。檻の周辺は辺り一面の焦土で、いまだに黒い地面から淡い熱の放射を感じられるほどだ。

「子どもはそういうものをいっさい識しらないと、識るべきではないと思っていた。いや、今でもそう思っている。わたしが間違っているのかな」

「たけきこころよ」

「……こうなってしまうては、友人の死を悲しもうにも悲しめないな。見分けがつかない」

「あの、これをほんとうに、その、ティナが？」

「それが正常な反応だ」たけきこころは苦笑した。「君はもうこれで三回、おなじことを訊いたわけだが、わたしが応えるのに倦むかと心配しているのなら杞憂だ。君は少ないほうだ」

「だって信じられません、いえ」彼のこの応えに勇気づけられたように、ユツグは熱り立って大きな声をあげた。「あの子のこともそうだけど、あなたが、あの子を処刑するって」

「わたしも信じられない」たけきこころは他人事のように肩を竦めた。「なにが信じられよう。この世界は信じられないものばかりで満ちている。だが君の元いた世界は、きっとそうではなかったらうな」

「茶化さないください」と、ここで言おうか言つまいか迷ったように吃つて、「あ、あなたらしくない、そんなの、変ですよ」

「らしくないか。らしくない。君にも言われたな。きっとたいそうらしくないのだろう」

「あつ、待って！」

「待つとも。来なさい」たけきこころは少年を従えて檻に歩み寄った。「君は慣れっこだと言ったが、わたしはいっこうに慣れない。

二千年の間、死とそれの齎もたらしたものが、わたしにとって静かな隣人

であった試しはなかった」

「そりゃ、ええ、ぼくもそうです」

「正常な反応だ、そうだろう？」 たけきところは笑ったが、少年は威嚇されたような貌をしている。「そうとも、わたしもまんざら間違つてはいないようだ」

「……間違つてるのはさつき言つてた、総意つてやつです。ティナにこんなことできるもんか、おおかた幻像兵の奇襲に託^{かこ}けて、カミルラなんかがそう言つて回つてるだけなんだ」と、ユツグ。「言い出しつぺはカミルラ、そうなんでしょう？ なにが総意だ、あいつ、いつもティナを苛めてたんです。大勢で石を投げに来てて」

たけきところは応えずに、腰の隠しから古びた鍵を取り出した。それを少年に手渡して、

「その鉄扉の鍵だ。君が開けてくれ」

と言つた。もつとも扉とはもはや名ばかりで、檻のそこそこにはすでに扉のない入口が散見されるのだが。

「はあ……」

「……こんな穴から入るのは、悪人が悪人を助けるときにすることだ。彼女は悪人じゃないし、我々もそうだ」少年の動こうとしないのをそう言つて促して、「鍵を開けて、扉を開けなければ。さあ」「ぼく……誓つたんです。必ず彼女をここから出してあげるって」

「誓いは果たされる」

「処刑するために出してあげるんですか？ そんなの誓いの履行じゃない」

「ユツグも誓いには拘つた。だがしばしばそれを忘れた。彼は頻繁に破誓した」

「ぼくには……」

「君も破誓する？」と、たけきところは笑った。我ながら苦しげな笑みであつたが。「そういうところは似て欲しくなかつた」

「……やります」

ユツグは気の進まない様子ながら、自らの握り拳ふたつ半ほどの

大きな鍵を鍵穴に突っ込んだ。が、入れてしばらくがちゃがちゃだったあと、困惑気に「開きませんよ、これ」と振り向いた。檻に加えられた衝撃で錠の機構が破損したか、扉自体が歪んだか、どうやら悪人の慣ならいに従わなければならなくなったようだ。

（少なくともわたしは悪人なのだから、まったく流儀に適った次第だな。招かれてもいない人間に開かれる扉などないのだ）

「では仕方ない、そこから入ろう」

「はい。 たけきところ？」

「先に入ってくれないか」

「はあ……」

（そしてこの少年に悪の片棒を担がせる。戦争は識るべきでないのに、こういうことは教え込むのか。わたしは間違っていない？ 間違っていないとも、これが不誠実なコスモスの徒の遣り方さ。そうとも）

「入り……ますよ」

たけきところは黙ったまま手で促した。

檻に入って最初に目に飛び込んできたのは、天井から差し込んでくる光に照らされた、しろい素足だった。奥まった暗がりから対の脛はぎが突き出ている、日光を反射しているのだ。

どういう経緯か、焼死体はここにも積み重なっていて、目を凝らせば五体が揃っていないものも散見される。焼けた鉄と肉のにおいが鼻と咽から這入ってきて、さかんに少年の胃を突き上げた。外と変わらない、檻の中は炎の名残の赤黒と異臭に満ちていたが、こういう室内では 換気がいいとはいえ 臭いも籠もるし、凄惨さも際立つ。その中であって白一色はまったく相容れない。この一画だけ使う絵具を間違えた絵画のような光景である。

「ティナ？」

足は声に反応を返さなかったが、まさかひよつとして、と少年が肝を冷やすあいだにも、それは隅っこの暗がり引込んで。ああ、彼女は無事らしい。このあと檻の外に引きずり出されて、彼女にはまったくわけのわからない理由で一方的に死刑を宣告されて、かわいそうな仕打ちを受けたあげく土に埋められてしまう程度には！

目が薄闇に慣れてくると、ユツグのいる位置からでも、彼女がどうやらなにも纏っていないらしいことが明らかになった。壁を背に膝を抱えて、それに面を突っ伏して縮こまっている。毛布はどうしたんだろう？ 焼けてしまったのかしら。ユツグは歩み寄りかねて立ち竦んだ。ただでさえそうするために邪魔になるいろいろな障害があるのに、よりによって彼女が裸だなんて！ 年ごろの少年の例に洩れず、彼もこういう場面では困り果ててもじもじするより法がなかった。

「ティナ」

はやく前に出てきて自分の窮状を救ってはくれないかしらと待つことしばし、ようやく背後のたけきところが重い腰を上げた。追いつ越しざまユツグの肩に手を置いて、その姿勢のまま俯した少女の旋毛を眺めている。解けた髪が海草さながらに身体を覆っていて、そのおかげでなんとか目を逸らさずに済んでいるが、もし彼がなにか喋って彼女に立ち上がる必要を思い立たせたら 遺憾ながらこの好ましい手も振り払わざるをえまい。

「怪我はないか」

ティナに反応はない。眠っているのかもしれない。たけきところを見上げるとちょうど眼が合って、それを汐おしに彼は剣を床に刺して身体を揺すって背負っていた背囊を外した。「これを」と言っ手渡してきたそれは、思いがけずなかなか重量がある。

「あのう、これは？」

「道具だ。これから必要になる」

（道具……縄とか、鋸とか、斧とか？ 穴を掘る鋤もあるかも、きつと折り畳んだやつ）ぞつとして、ユツグはそれをすぐさま床に下

ろした。中身を確かめてみる気も起こらない。(彼の言うとおりにやないか、ユッグ、お前なんかついてくるべきじゃなかったんだ……わざわざ痛いのを堪えてくっついてきて、あげくに彼女の埋葬の手伝いをさせられるはめになったんだから!)

「……背負っていなさい」たけきこころが咎めるような声をあげた。見れば処刑道具を満載した背囊は床というより、そこに絨毯みたい延べられた亡骸の背のうえに鎮座していた。「そんな汚いところに下ろしてはいけない」

(汚いだって……中身はじゅうぶん汚れてるし、これからすぐにもっと汚くなるわけじゃないか……)

ユッグが胸中に反発めいたものを暖めているうちに、たけきこころは彼女の目の前まで歩いていって、そこで膝をついた。

「ティナ、戦は終わった」

「……………」

「ティナ」

「フェニヤは」いろいろの薄い金髪の中から小さな、くぐもった声が上がった。「フェニヤは無事?」

「無事だ」

「うそ」

「……死んだ。あなつてしまった君の、すぐ隣にいたのだ」たいまつのようになって、髪と肉を激しく焼きながら、地獄の激痛に悶え苦しんで、ひよっとしたらこの子を怨んで、「速やかに、苦しまずに。彼女にもよくわからなかっただろう、自分の身になにが起きたのか」

「……………」

「空虚に聞こえるだろう、君のせいではないと言っても……」またも例の依頼心が首をもたげるのを感じる。折れた指の代わりに、た

ついていた。まだ若く未熟だったが、君のところが和めばと、特にカミルラが計らって君の近侍としたのだった」

「……よく弓を忘れたわ。それで、わたしが持っていてあげると、今度はべつのものを置いてきた。よく笑ったわ、とてもいい子だった」

「そして迂闊だった」

「……………」

「誰も君を責めなかった。みなこぞって、前に飛び出た彼女のほうを悪しざまに言った。君は激しく自責したが、強いところでこれを克服した」

「……………」

「二度目に、君は泣いて戦場を拒んだ。誰も責めないばかりか、たったひとりで何千人もの力オス勢を打ちのめす君の、参戦にかかる期待はいや増すばかりだった。しろきかいなは、君をよく説得できたのかな」

「……………」

「……三度目、カミルラは涙を吞んで君を許した。君を祭る祭壇も寂しくなった。泣き叫ぶ君を天幕から引きずりだして、ミーレスの誓いを盾に戦いを強要したのは」

「あなただった」

「……………」

このひと言にせめて怨みらしいなにかが籠もっていれば、少しは気が楽になったことだろう。彼女は自分以外の誰も憎むことのできない、気の毒な人間だった。

（自身に振るう鞭に容赦のない……わたしなどではない、友よ、クレアルコス！ それは彼女のことだった）

「そう、たけきところだった。冷血で無慈悲な彼は、またとは得がたい貴重な戦力を、失うことだけが怖ろしかった。君の髪を掴んで、言うことを聞かなければ容赦しないと恫喝した。当時の戦況も、君の力を前提にせずして、どんな作戦も成立たなかったから……もっ

とも彼は、あとであつきちしおに齒が折れるほど殴られたのだった
が」

ふと足音に振り返ると、果たしてすぐうしろまでユツグが近付いて来ている。努めて無表情を装っているようだったが、心中おだやかではあるまい。

「……次はもう、誰も君の側に立ってやれなかった。すまない。すまなかった、本当はもっと早く謝罪しなければならなかったのに」
右手首を握る手に力が籠もる。「ルーカンは君から一切を剥奪したうえで、軍営から追放して、虜囚あつかいにすべきだと　今になつて思えば、そうだな、あれは君の安全を慮つてのことだったのだらう。彼は君を愛していたのだ、本当だ」

「……………」
「奮起して欲しかった、いや、今でもそう思っている。もし君が最後の、くだらん、已めよう、つまらない話をした。すまない。なにもかも繰り言だ、わたしは自分を慰める為にこんな話をしている」
「……………」

「ティナ、君を処刑する」

と、言つて彼が立ち上がると、ティナはおもむろに面を上げた。
真っ赤に充血した眼が大きく見開かれて、恐怖と諦めとに歪んだ顔が、しかし静かに「苦しまないように」と囁いた。背後でユツグの息を呑むのが聞こえる。

「愚かなことを……………」

ティナのしろい首から鎖骨の辺りにかけて数力所、なにか鋭利なものによる刺し傷がついていて、そこから乾いた血が胸乳までを赤くろく染めている。兵士たちの手によるものではあるまい、彼女は自殺を図つて為果せなかったのだらう。

「わたし、臆病だから、できなかつた。やっぱり死ぬのは、なにより怖ろしい……………」
ティナは肩を震わせて寂しく泣き出した。「命が惜しい……………」でも生きているのはもっと怖ろしい、どうか楽に……………」
「ユツグ」

「はい」

「さつき渡したものを」

「……本当に？」

「早く」

「ぼく、彼女の気持ちが変わる」

「わたしもわかる。みなわかる、みな死ぬのは怖ろしい。早くしなさい」

「い、いやだ……」肩越しに振りかえると、ユツグは囊を背後に押しやって、先に取り戻したばかりの剣に手をかけている。「やつぱり間違ってる、彼女がいつたいなにをしたんです！ 説明を！」

「しても納得すまい。わたしとて納得ずくですてやれる話ではない。彼女も傷つく」

「傷つくだって？ これから死ぬまで傷つけるつもりのか？」

「なんで、なんでティナひとりだけこんな目に？ 今までじゅうぶん過ぎるほど苦しんできたのに……」ユツグは歯噛みして両拳を震わせている。「不公平だ！ まず彼女を苛めてきたやつらを同じ目に遭わせるべきです、あなたの沙汰を待たなかったんだから、罰せられるべきじゃないか！ まずはあいつを、カミルラを石打刑に！」

「ユツグ、カミルラにはもう飛礫こぼりなど届かない」
「届かないって」少年は絶句した。憎みこそすれ、彼女がコスモス勢の支柱であることは理解していたのだろう。「……死んだんですか？」

「カミルラ！」自らの顔に爪を立てるようにして、ティナは激しく泣き出した。「カミルラ、とうとうあなたまで……」

「カミルラも、エリーチェも、ルーカンも、クレアルコスも、わたしの少ない友だちはあらかた死んでしまった。寂しくなった」

「この子を憎めればさぞ楽だったろうと、たけきところはふと思っ
た。」

「いったい正当な復讐ほど気力の栄養になるものがあるだろうか。強くこころよい酩酊を齎す火酒があるだろうか。両方とも常に切望

してきたものだったのに、彼女に対しては腹の足しにもならない同情と哀情ばかり募るだけで、不思議なほどそういった激しいものが通わなかったのである。実際、もしティナが幾度幾人味方を殺そうとも、それを乗り越えて奮起してくれさえすれば　彼は何度でも喜んで許したに違いなかった。

（わたしは彼女のなにを許したのだろう。その力に免じて？　人間に？　まさか容色に？　彼女のなにがそれほど、わたしにとって特別だったのだろう）

「……ユツグ、背囊を」

「殺させないぞ、ユツグだって、きっとそう言ったんだ、きっと」
言って、少年が剣を抜いた。怪我の影響か、その構えは不自然に傾いたものだったが。「オニオン騎士は誓いを破らないんだ、彼女はぼくが護るぞ」

「ユツグ、わたしに決闘を挑む前に、中身を見てみないか」

「……斧や縄なんかにはないさ」

「裸のままでは身体に障るから、彼女になにか羽織らせたいのだ。背囊を取ってくれ」

ユツグはなおも身構えながら　不意打ちを警戒したもののか
後ろ手にさきほど押しやった囊を引き寄せた。それに触れたとたん、開けるまでもなく彼の表情の変わるのが見て取れる。触ってみさえすればすぐわかることで、ここまで大儀に背負ってきたそれは、角張った出っ張りや金物の触れあう物騒な音とはもちろん縁がなかった。衣類や食糧がそんなものに縁付くわけもない。

「これ……たけきこころよ！」　囊を開けて中を覗くなり、ユツグの貌はたちまち喜色に明るんだ。「すみません、ごめんなさい！　そうだよ決まってる、あなたがそんなことするわけないんだ！　なんて馬鹿なんだろう！」

「さあ、彼女が冷える」

「もうあなたも人が悪いです、最初からそうと言ってくれれば
！」

「早くしなさい」

「は、はい」

窘められても嬉しげに、少年は囊を胸に抱えて彼の横に並びかけて
たしな 卒然と立ち上がったティナを見て「うわあ」と回れ右をした。
「……ユツグを戦場に？」ティナの瞳ににわかかな生気が宿った。面
を上げて、初めて彼の痛々しい姿を認めたのだ。怒りと非難が声に
も眼にも滲んでいる。「怪我してるわ、なにをさせたの」

「いかにも」たけきところは平然と言った。「彼の怪我は戦傷だ」
「あのティナ、むこう向いてくれないかな。いやダメだ、なにか着
て……ここにあるもんな、ええと」ユツグは背中を向けたまましど
ろもどろになっっている。「ええとティナ、ぼくは子どもじゃないん
だけど」

「ユツグ、囊を。ユツグ？」少年は手の汗を拭うのに忙しい様子。
たけきところは彼の肩越しに手を伸ばして、汗拭きがわりにされて
いた囊を取り上げた。「……しろきかいなのものを適当に持ってきた。君の死衣も彼女が保管していたから、一緒に持ってきたのだが」
「……ユツグいらっしやい、治してあげるから」

「いや、いらっしやらないよ、その、なにか着てくれないと……ぼ
くは子どもじゃないし」

「着方がちよつとわからないのだが、君のほうで適当に繕ってみて
くれ」

「二度とその子を戦いになんか出さないで」

「ティナ、ぼくは望んで行ったんだ、ぼくにはそれができたし、た
けきところもそれはわかってたんだから」

「……食べ物と飲み物も、入るだけ入れてある。火も熾せるだろう。
いや、君には無用だったかな」

「見損なつたわ……あなたは優しいひとだと思つてた」

「違う！」言つて、少年は猛然と振り返つて、それからまた猛然と
元に戻つた。「あの……違うんだ、ぼくが勝手に出て行ったんだ、
彼に禁じられてたのに」

「そんな子にどうして刃物を？ あぶないってわかっていたはずよ」

「違う」

「君は正しい」

「わたしは、わたしはひよっとして、その子みたいな子どもまで手に……？」

「ティナ、だからぼくは子どもじゃ」

「処刑するのなら早くして、でもユツグに手伝わせるのだけは許さない！ そんな小さな子どもを」

「いいかげんにしろオ！」少年はついに声をひっくり返して大爆発した。今度は怯まずに振り返りながら、「子どもあつかいは已めろっ！ ぼくは十五人の幻像兵を倒した立派な戦士だ！ オニオン騎士ウスの末裔ユツグだ！ ぼくをその辺りの小さい子どもと一緒にするなっ！」

ティナは剣幕に驚いて、大きな眼を見開いて立ち竦んでいる。たけきこころも口出しは控えたが、小さなオニオン騎士の闘志の萎えないように、彼女の肩に長い毛布を着せ掛けてあげるのを忘れなかった。

「あなた」

「彼を馬鹿にするやつはティナだって許さない！ 彼はぼくを認めてくれたんだ、剣だってくれたし、伝令使にしてくれたし、何人も味方を殺してしまったぼくを許してくれたんだ！ 彼を馬鹿にするやつは許さない！」

「……」

「ユツグ、君の為に心配してくれているひとを罵ってはいけない」言って、たけきこころは絶句しているティナに向き直った。「ティナ、安心しなさい。君の手は子どももの血には濡れていない」

「……ごめんなさい、わたし」

「ティナ」

「？」

「ほら、君はいま処刑されたぞ」

「え？」彼の科白せひやくの突飛に過ぎたのだろう、ティナは果たしてきよとんとしている。「……いま、なんて？」

「君は死んでしまった」

「なにを」

「見ただろウツグ、この囊から斧が取り出されるところを。この囊には縄や斧が入っていた、そうだろう？」

「は？」少年もまたティナと同じような　ちよつと姉弟のような

困惑の面持ちだったが、ふいに弾けたように大声で肯ってみせた。「あ、はいっ、見ました！」

「彼女の遺言に従って、わたしは君を遠ざけた。コスモス勢の注文に従って亡骸を切り刻んだ」ユツグに向かって少し笑ってみせる。

「……君は怒って已めろと言った」

「その通りです！」

「そのあと君の掘った穴に彼女を横たえた」

「はい！」

「……………」

「よろしい。ティナという少女は亡骸となって、今やその焦土の下に眠っているというわけだ」たけきところは視線を切つて、誰にともなく語り出した。「彼女は苦しんだ。処刑に際しても、その少女はコスモスの徒の憎悪を一身に受け、五体十指を引き裂かれたあげく、痛苦のうちにこの世を去つたのだった。彼女の生はただ辛いばかりで、終わりに際してさえ安楽がその肩を叩くことはなかった」

「……………」

「ここにひとりの少女がいる。彼女に名前はなく、しかし傍らには中身の詰まった背囊と、勇敢な戦士である友人と、なにより自由があった」たけきところはティナに向き直つて微笑んだ。「足下に埋まっている少女のことを、彼女は考えた。そしてあんなひどい仕打ちをした野蛮なものたち、なかんずく彼らの首領である、かの冷酷非情なる男の所行を。　彼女が一刻もはやくそんなところから立ち去りたいと熱望しても、それは無理からぬことだった」

「たけきこころ？」

「名なしの少女よ、君はティナではないのだからして、お互いに用事はないはずだ。君がこんな汚いところだなにをしているのか、我々は知らないし、君のほうでもいらぬ詮索だろう。君は自由だ」たけきこころは壁に空いた穴を指し示した。「この檻の向こうが西だ。ちよとどコスモス勢の野営地の真反対になる。もし東へ行きたければ、そのまま向かわずに、向こうからいったん森を抜けて、野営地を迂回しなさい。それから山脈を左手に見て進むといい」

「……………」

「西へ数哩マイルいけば樹木は薄くなつて、やがて岩石のこごしい山峡へ入るはずだ。もし君がそちらの道を選ぶのなら…………君はほどなく力オス勢を見出すだろう」たけきこころはここで黙って、さんざんしゅん逡巡した末にぼつりと呟いた。「彼らに投降するのもいい。我々は敵同士になるが」

「…………右手、見せて」返事を待たずに、ティナは彼の傷ついた右腕を取った。「わたしはコスモスを裏切ることになるの？」

「裏切りはかの神のもつとも得意とするところだ、名なしの少女よ。まったくコスモスは喜びさえするに違いない、自身の行為に忠実な信徒を得ることになるのだから」たけきこころは憎しみを隠さず、そう吐き捨てた。「君がいまさらほんの少しなら做ってみたところで、どうして罪になろう。ユツグ、君もだ。もしこの少女が心配なら、一緒に行つても構わないが」

「たけきこころ…………なんて言つたらいいのか」ユツグは呆然としている。「あなたらしくない、あなたが神をそんなふうに言うなんて信じられない…………」

「わたしも信じられない、なにが信じられよう」虚勢めいて見えないうやうにと努めながら、彼は笑った。少年の貌を見るに、それはどのばかりで満ちている　終わつたかな

「うん…………あの」

「ありがとう。ではもう我々のことは忘れて、君自身の身の処し方を考えなさい」囊をティナに手渡すと、たけきころは先に刺したままにしてあった剣を掴んだ。「……いまさら放り出されたところで、なにをどうしてみようもないであろうことはわかっているが、少なくともここや我々のところに縛められているよりは……よほどいいだろう。少なくとも昨夜きみの身柄を欲して、強談判を持ちかけてきたものたちもいるのだ、君はまったく寄る辺のないわけではない」

「……………」

「たけきころ、ぼくは」

「好きにするといい　突き放してこう言うのではないのだ、君の自由だ」

「ぼく」

ついでこようとすする足の止まるのを見て、たけきころはそれを応えと見なして踵を返した。ひとりで十五人の幻像兵を倒す　彼が偽ったのでなければ　小さなオニオン騎士を失うのは痛手だったが、この少女の傍にそれほどの護衛を用意できたのだと思えば惜しくはない。彼は鉄扉の隣に空いた穴から外に出た。

「ティナ、さらばだ。願わくば君の魂が、君の大なる功績に余さず報いてくれるよき神の許に召されんことを。今までよく戦ってくれた」最後に振り返って、たけきころは檻の中の少女というより、その足下の地面に向かってあたまを垂れた。「光の戦士の名代として、コスモス勢の代表として、アニマ・ウアリドウスが感謝を献げる」

（ゼノフォンたちが確認に来る前に、早く逃げてくれればいいが……）

今や完治した右手に剣を持ち替えると、彼は野営地へ向けて歩き出した。

少年が「とりあえずここを出よう」と言うので、彼に先導されるままティナは檻の外に出た。地面に足をついたとたん、彼女は声をあげて飛び上がった。焦げた土は今なお、ひとの皮膚に水脹れをこしらえるくらいの余熱を留めていたので。

「大丈夫、夫？」心配の声はすぐに、驚きのそれにすり替わった。ユツグは口を半開きにして、宙に浮かぶティナを見上げている。

「あつ……大丈夫」

「ティナって、その、飛べるんだ」少年の眼にはちよつと羨むいろがある。

「え？ ええ、うん、そうね、浮いてるみたい、わたし」

別に意識してやっているわけではなかった。むしろ彼女のばあい、意識してやればやるほど悲惨な目に遭わされるのだ。なにかにこの力を集中しすぎて自我の把握をおろそかにするたび、たちまちこの身体を乗っ取るうとする、あの憎むべき獣に。

ティナはむしろ少年を先導して、火勢の及んでいないところめざして木間うまを漂った。今ほどの火傷に加えて、先につけた首の自傷が思い出したようにしくしく痛んだ。乾いた血に塗れた彼女の胸の裡うちも。

（ひどいありさま……わかる？ これはあなたがやったのよ！ フエニヤを焼き殺したのはあなただし、カミルラもそう。いつもやってきたようにね、いつものこと……）

あれほど流してすっかり流し尽くしてしまったと思われた涙が、またも眦まなひじりに溜まるのを感じる。なんとかして自分を弁護してやりたくても、すでに証拠は揃いすぎるほど揃っているし、前科には覚えがありすぎるほどだ。眼下の焦土に涙と溜息が落ちた。

自分がやったのではない。自分は被害者だ。責めるひとがいたなら不当だし、とうぜん自分を慰めて肩を撫でてくれるだれがしかが用意されていて然るべきだ。などという甘えは、もうずいぶん前になくしてしまっている。最初の罪業がそれを生んでも、二度目が早くもそれを育むのを拒否した。三度目はその死体すら細切れにしてしまつて、刻み足りないとはかりに彼女の胸に突き立ったのだ。自傷は今に始まつたことではなく、もうこれで充分というわけでもなかった。

（充分じゃないわ。じゃあどうして生きてるの、わたし）

はかない甘えの消え去つたときから、彼女は自らの罪垢を清めうるほどの、厳しく激しい罰を欲しがつた。が、それがほぼ例外なく苦しい死に直結していることを知らないではいられなかつたので、彼女の臆病さは喜んでその甘受を諦めたのであつた。間断的に加えられた暴行も、それによって自分の穢れがいくらかでも削ぎ落とされるに違いない、大きな罪の負債からこうやって、少しずつでも弁済しているのだとの、恰好の言訳の材料となつた。彼女は四十年あまりもそうやって、むしろ増え続ける利子を後目に、卑屈に膝を抱えて、去るはずもないと解りきつて雷雲の、去るのを待つていたのだつた。むしろ雷はいつかは落ちてくるはずで、その直撃が逸れないための檻で。じっさい審判者は彼女の頭上に落とすための雷霆をひっさげて、さきほど現われたのである。だのに、

（わたしは自由だつて）

被災した区画を抜けてほどなく、白蠟樹とねりしの若木に突き立つた矢の結ぶ、朝露に光る羽を見てとつて、それを目印にティナは地面に降り立つた。味方に射掛けられたものだろう、矢羽はコスモス勢のあまり使わない、鮮やかな緑と黄とで染められている。芽吹く青葉と間引かれる病葉わくろは、大地を象徴するカオスの色。

「ティナ、もう少し向こうにいかない？　ここ焦げ臭くないかな」
じき少年がはあはあ言いながら追い付いてきて、さらに先のほうを指さした。ティナは振りかえる前に涙はなを噉はなつて涙を拭つて、少し

く気を取りなおした。この感じやすい少年にこれ見よがしな涙を浴びせかけることはためらわれる。なんといつても彼女は年上で、この子どもは頼りになる保護者が必要としているのだ。

「わたし麻痺してるみたい　怪我、大丈夫？」

「こんなの大したことないけど、ねえティナ」少年は困り切った貌をしている。「あの、とりあえずさ、なにかちゃんとしたものを着ようよ。ぼくにとっちゃそっちのほうがよっぽど大したことなんだ」「うん」

（なにか身に纏ったって、どうせ燃えてしまうのに……いえ、ダメだわ、こんな考え方じゃ）

持ってきた囊の中を気乗り薄で掻き回しながら、ティナは涙の跡をもういちど拭った。とにもかくにも自由を得たのだから、これまでの卑屈な考え方は改めなければいけない。自分の周りに廻らされていた壁はもうないし、頭上を覆っていた雲は晴れたのだ。虜囚の苦痛から　そして安堵から　解き放たれたいま、すっかり身体になじんだ弱気と諦めの獄衣も脱ぎ捨てなければならぬ。それが存外に着心地よく手放すのが惜しまれ、またいま別の着物を勧められるにあたって、衣のほうで脱がされるのをいやがっているにしても。

（そうよ、わたしは自由だって、あのひとは言ったわ。わたしはティナじゃないらしいけど……これからわたし、なんて名乗れば？）囊の中から水筒を探り当てると、彼女はそれで首から胸の血を洗い浄めた。ぬるい水に溶けた薄桃いろの液体が腹をつたう。（ばかなこと！　ティナでいいじゃない、どうせ誰の耳にも届かないし、気にもされない……）

「ユツグいらっしやい」と、言って振り向いた彼女の首には、血の汚れはおろかどんな傷も見受けられない。「治してあげるから」

「べつにこんな　少年は振り向きかけて、あわてて回れ右をした。「着てないじゃないかもっ！」

「いまちよつと洗ってたから」

「あのさあ、ティナはさあ、恥ずかしくないの？」少年は背を向けたまま、呆れたような声をあげた。「裸なんだよ。ふつう隠すものじゃないか」

「そう？ ユツグは恥ずかしいの？」

「恥ずかしいもんか。関係ないじゃないか。ティナが恥ずかしくないか訊いただけだろ」少年は怒った。

「べつに、寒くもないし」恥ずかしいことと言うなら、それこそ悔いても悔やみきれないくらい恥ずかしいことを、数え切れないくらいしてきたのだ。服のあるなしがなにほどのことだと言っのだろう。「どうとも思わないけれど」

「ああそう……もうどうでもいいからさ、とにかく着てよ、服」

「わかったわよ、あなた困るみたいだし」

「困らないって。なんでぼくのことが出てくるんだ。もう早くしろよ」少年は怒っている。

「急に生意気になった」

「怒るよティナ」少年は最前から怒っている。

「あら恐い、それじゃあ着るわ。あなた恥ずかしがるし」

少年はもうひと言もなく、腹立ち紛れに剣を抜いて、その辺りの草叢を刈り払い始めた。

（かわいい子。　そうよ、この新しい服を燃やすわけにはいかない）なんとかこうとか形にしてみた、自らの身体をティナは見下ろした。（フェニヤはあの毛布と一緒に燃えてしまった。これの燃えるとき、あの子が巻き添えにならない保証はないんだわ）

さながら久しく会わなかった友人が便りもなしに訪ねてきたかのように、ティナはまったく忽然と、身中に清新な気概の湧いてくるのを感じた。どうせ燃えてしまっただなどと、つくづくばかげたことを考えたものだ。あの愛らしい少年が火に巻かれて、助けを求めて泣き叫んでいるときにも、自分はそう嘯さいせういて彼が静かになるまで眺めているつもりなのか。

（いったいティナはあなたの名前？　あの獣の名前？　あの獣のテ

イナに跪いて、あのティナの都合にいちいちお伺いを立てなければ、名なしのわたしはなにか着たり脱いだりもできないの？)

「ユッグ、着たわよ。いらっしやい！」

少年は決まり悪げに剣を納めると、彼女の着衣を確認してそろそろと近づいてくる。目の前に来るなり彼がなにか言いかけるのを遮って、とつさに抵抗するのも構わず、ティナは無理矢理あたまを抱え込むようにして少年の傷を治療した。

「つぎはうしろ、はい」

「いいって、痛っ、痛いつて！」

「ほら痛むんじゃない、いいわけないわ」

次いで背中と腰。ユッグはなかば羽交い締めのような格好にされて、「痛まない」とか「痛い」とか「ティナは乱暴だ」とか喚きながら蠢うごめいている。ティナは治療が終わったあともしばらくそのまま、彼を解放せずに抱きすくめていた。長く孤独に監禁されていた彼女にとって、人肌の温もりはなによりも得がたくありがたい貴重品だった。たまに世話係が与えてくれるそれだけでは、彼女の貪欲な需要を満たすにはぜんぜん足りなかったし、さぞ抱き心地はよからうと、じつは格子越しに彼を値踏みしたりもしていたのである。少年の背は彼女よりあたまひとつ半だけ低い。まことに頃合いな寸法と言える。

(……けっこう筋肉がついてる。この子、ほんとうに戦場へ行ったのかしら)

ユッグの背中も二の腕も、彼女がかくあろうかと想像していたよりにずっと広く太く、硬く筋張っていた。なんとなく期待していた柳のような繊細さには乏しい、それこそ「子ども」の肉体を半ばいじよう卒業しかけている身体である。

「ティナ、ねえ、もう終わっただんだろ？ 離してっつてば」

「ユッグ、あなたさつき、イミター・ティナ幻像兵を倒したって言うてたわよね」

「言ったし、倒したよ。ねえっつたら」

「あと……味方を殺したって」

「……言つたよ」少年はにわかにおとなしくなった。「言つたし、
したよ」

「聞いてもいい？」

少年は少しく渋つたが、けつきよくは折れた。誰かに話したいと
いう感情もあるいはあつたのかもしれない。彼はティナに促されて
訥々とあらましを語つた。

「わたしはあなたに剣なんかあげた、あのひとも悪いと思うわ」あ
まり彼の悔恨の深いのを気の毒に思つて、ティナは聞き終えたあと
すぐさま少年の弁護を試みた。「だつて兵士になりたがつてる子に
そんなもの渡したらどうなるか、わかりそうなものだもの」

「彼はすこしも悪くない。悪いのはそこまで目をかけてもらつたの
に、あんなこととして彼の期待を裏切つたばかりさ。たけきこころの、
光の戦士のすることに非なんかあるもんか」

「そうかしら」

「ティナにはわからないのさ。そうさ、それで許してくれたば
かりじゃない、罪を償うために、ぼくを伝令使に任命してくれたん
だ。伝令使は年少者に与えられる任務の中じゃ最高に名誉なものな
んだ。知つてるでしょ？」

「え？」

「あれ、知らない？ ティナつてその、ええと、以前は軍に」

「許してくれたのに、罪を償うの？」

「あ、そつちか。そうだよ。 なにか変なこと言つたかな」

「許してもらつたために……罪を償うんじゃないの？」

「ええ？ なに……もう、ティナつてさあ、ときどき間抜けなこと
言うよね」少年はようよう彼女の腕から逃れ出ると、腰に手を当て
ていかにも無知を諭すといったふうには、子どもを教えるような口調
で続けた。「あのさ、許されれば罪つて消えるの？ 許すのは向こ
うだし、罪はこつちのものだよ。それつてぜんぜん関係ないこと
じゃないかな」

「……………」

「そうだよ、そうだよ！ なに言ってんだろっ、忘れてた、ティナ どうしよう、やっぱり一緒には行けない、ぼく伝令使だったんだ。」

でもティナをひとりで行かせるわけには「

「……そうよね」

「でもたけきところは自由にしろって言った……けどそれは関係ない。でもティナは」

「関係ないわね、そうね」

「ないけどさ、ないけど……そう、ティナ、ティナはこれからどうするの？」

（これからわたし、どうするの？）

自分はこれでもういっさいの罪から逃れ得たのだ、と言えば、それは正しくない。が、それでもたけきところの謝罪するのを見たとき、これで自分は救われた、何十年も自分を苦しめ圧していた重荷は下りたのだ、わたしは自由だ。彼女は確かにそう思ったのだった。

少し考えてみればわかりそうなものだ。今も変わらないこの悲しみは、罪悪感はあるいは死者、あるいは生者たちに対する、このとてつもない申し訳のなさはいったいどう説明をつける？ げんに自分は今も変わらず、その重荷を肩に感じているのではないのか。今まで肩に担っていたものにただ荒縄が括りつけられたというだけで、自分はそれを掴んで今も荷を引きずっていることに違いはないのだ。ただ背後にあるというだけで、それがなくなったのだと愚かな思い違いをしていただけ。

（ばかだわ、わたし。たしかに自由は得たわ、この重荷をどこにも引きずって行ける自由をね）少年の言葉はまさに少女の蒙を拓いた。たとえコスモス勢のすべてが彼女を許そうとも、この肩に食い込む縄は切れはしないのだと。（終わりのない徒刑……監禁されていたときと比べて、わたし、なにか善くなった？ 変わりはないわ、同じよ。壁がないだけ）

「ねえつてば」

「ごめん、聞いてなかったわ」

「ティナはどっちに行くつもりかって聞いたんだよ」

「そうね……西に行くとかオス勢がいるのよね」

「そう、だけど、ほんとうに行くの？ その、ぼく思うんだけど」

「

「じゃあ、あっち」ティナは背囊を背負うと、東を指さして言った。

「東に行くわ。あなたもこっちなら困らないでしょう？」

「いや、困らないっていうか、ティナ、そっちに行くなら迂回しなきゃ。向こうに　ティナちよつと！」言葉の途中で歩き出すと、

少年はあわてた様子で彼女を追い抜いて、諸手をあげて通せんぼした。「ダメだって、忘れたの？ たけきところが」

「覚えてるわ。でも野営地に行くならこっちを通らなきゃ」

「え？」

「たけきところのところへ行くの。それならあなたも困らないじゃない」

（これからわたし、どうするの？　決まってるわ、しなければならぬことをするのよ。ずっと先延ばしにしていたことを）

そうするために必要なだけの自由は手に入れたし、弱気と諦めの衣は脱いだ。荷の重きにへこたれない気概にも満ちている。今ならどんな敵意の視線にも加虐の鞭にも耐えてみせる。この荒縄を断つ鉄はあそこにしかなく、カオスの許にそれはない。

「い、いいの？　ティナ、困るんじゃない？」

「いいの。いらっしやい、ユッグ」

ティナは少年と手を繋いで歩き出した。武器を執ってあまり経たないのだろう、体つきとは打って変わって、少年の手のひらはまだ子どもらしい、柔らかかなところを多分に残していた。このかわいい手もやがては剣や槍になじんで、胼胝たこでこつこつした兵士のそれになっってしまうのだろうか。

（いいえ、そうはさせない。この子に剣なんか握らせてはいけない、わたしが守ってあげなくちゃ）

重荷がにわかに軽くなったような気がした。この手に繋がる命ひ

とつ分、ユツグの体重の分だけ。

「フリオニール」

「なんだ」

「めし」

「いま忙しい」

「いらぬいんなら食っちまうぞ」

「いらぬいなんて言つてないだろ、もうあといくつもない。手伝えよ」

「これ置かないと塞がっててな」

「ちよつと待つてろ」

「おい、いまなに積んだ」

「……なんかの乾物だろう」いまほど荷車に積んだ古びた包みにちよつと触れたあと、フリオニールはようやく催促に応じた。素焼きの杯を受け取りながら、「グイード、天幕は」

「あれ以上あつても役に立たんとさ。遺棄するんだそつだ」

杯の中身は葡萄酒らしい。黒い液体に麵麩の切れ端がふたつみつ浮いている。質素ここに極まれりといった感がある。杯に口をつけてみると、果たして葡萄酒は水で埋めてあつた。最近このたぐいの予想は外れた試しがない。

（こつこつ期待ならたまには裏切られたいもんだ……）

フリオニールは一息に杯の中身を呷あおつた。

「燃料にするつて手もあるだろうに」

「あれを運ぶ足がもうないんだろつ。おあつらえ向きに騎鳥チヨコホはほとんど出払つてゐるんだから」

「あ、これ黴が生えてる。ほら、裏みてみるよ」

「それ変なおいしくないか」

「そつこつもんだろつ、こつこつのは」

「どれ、ちよつと開けてみよう」

「おい、勝手に食糧に手をつけたらどうなるか」

「わかってるよ、見てみるだけだ。腐ったりしてたらほかのも悪くなっちゃう」

グイードは嬉々として荒菰あらいもの包みを開けにかかった。笑みを浮かべていても、その横顔は一晩でこころなしか痩けたように見える。この強靱で不屈の副官にしてからが、疲労と憔悴のいろを隠せないほどだ。ほかのみなはどれほど疲れ切っているだろう。

陽が傾いてきていた。撤収作業は大詰め、終われば休む暇もなく出発の予定だった。

（六、七時間は経つたろうか……だいぶ時間を喰ったな、奴ら、来ようと思えば来られたはずだが）

カオス勢が駐屯している正確な位置は把握できないでいたが、件の隘路からそれほど離れているということはあるまい。これだけ時間が経っていけば、たとえ大軍の鈍歩で岩を乗り越え森をかき分けるといった道行きにしろ、彼らの斥候がいつ顔を出してもおかしくない。

（山のうへの連中も戻ってこない……）

「うへえ、こりゃ懲団子だ、凄いな」

「捨てだな。もう食い物じゃない」

「前世はなんだったんだ、こいつ」一見してまず食べ物には見えない。食い意地というより好奇心に駆り立てられたのだろう、その辺りに落ちていた小石を拾うと、グイードはいちめん茶色に覆われたなにかの表面を刮こそげだした。「うわ、まるで石だ……いや、こりゃ肉だな、元は」

「冗談だろ」

（仮に一時間後、無事に出発できたとして、いったいどこまで歩けるっていうんだ。みな寝てない、いくらも行かないうちに倒れてしまっ……）

「肉さ、たぶん。でなきゃ石だ。」

「食べるかな、これ」

「やめとけよ。腹こわすぞ」

「もしそれまで歯が無事ならな」

(そういえば、会議、どうなったかな。ばかげてるよな、おとなしくなったら急に意気込むんだから。罰するだの殺すだの言うなら、なんで変身してるときにそうしないんだ)

「いや……こりや硬え。ちんけなナイフなんか通らないぜ、ほら」
なにかの楽器よろしく、グイードは戯れに黴肉をコチコチ叩いている。「いい音だな」

「グイード」

「いい音だろ」

「……なんか、聞こえないか、向こう」

グイードはコチコチを已めた。笑顔も吹き消えた。西のほうからかすかにひとの怒鳴る声と、なにより大多数のなにかがたてる、硬いものの擦れ合う音が聞こえる。ふたりは同時に備蓄棟の庇間ひまわいから飛び出した。すっかり見晴らしのよくなった野営地のそこここに、薄着を汗に濡らした人びとがちらほらと立っていて、物音のするほうを眺めてなにごとか言い交わしている。

「あれは……カオスじゃないらしいな、騎鳥に乗ってる」

ひとまず安堵したようで、グイードは後生大事に持ってきた黴肉でふたたびコチコチ遣りだした。騎鳥、というより、野生動物は並べて幻像兵を極度に怖れる。彼らが徒歩以外の方法でここに来ることは考えづらい。とすれば、

「クレウーサたちだ！ だいぶ時間が掛かったなあ……けど、なにしてるんだ、あれ」

クレウーサたちかと思しい一群は、ちょうど野営地に入っすぐの空き地に屯たむろして、というより、なにかを囲んでわあわあ言っているのである。さながら鬪鶏かなにかを観ているような雰囲気。

(なにを悠長に構えてる、なんで早く上に行かないんだ？ いや、ほんとうにクレウーサか？)

「やけに盛り上がって」と、言いかけたとき、兵たちの輪の辺

りから子どものような甲高い声が響いて、それを汐しほにグイードが血相を変えて走り出した。「こらおまえらア！」

「あ、おい！　なんだって　」と、言いかけたとき、ちょうど人垣の合間から、地面に蹲すくまるひとのようなものを見るに至って、フリオニールも彼に倣ならって猛然と走り出した。兵たちは集団で誰かを暴行している。「こらおまえらア！」

前を走るグイードの手から例の黴肉が投げられた。さすがに石なみの硬さで、それをもろに胃に喰らった兵のひとりがあえなく昏倒する。そこにさらに体当たりでもう二、三人を吹き飛ばしたところにフリオニールが加勢して、ついに人垣の一画を破った。まろび出た先には、さぞや猛烈な殴打の雨に晒されたのだろう、血だるまになって蹲る小柄な人間と、驚いて暴行の手を止める数人の兵。

「……おい、なにやってる」

「痛ておいフリオニールどけ！　手エ踏んでる！」

「あ、悪い」

「指おれなかつたらうな……」グイードは立ち上がるなり、フリオニールの肩を乱暴に掴んで、おれにやらせるとばかりに彼の前に立った。「おい、クレウーサはどこだ」

「おまえは」と、兵のひとりが訊いた。

「フリオニールの副官のグイードだよ。おまえの名前は知ってるから言わなくていいぞ。腰抜けの臆病者ってんだろう」言って、兵がいまさつきまで打ち下ろしていた槍の石突きを邪険に蹴り払う。「もうちょっと詳しく自己紹介してやろうか、おれはおまえのことがぜんぜん気に入らなくなってる、できるなら今すぐ鼻の骨をへし折ってやりたいって思ってることとか」

「グイード待て」

「グイード！」ここで人垣がこじ開けられて、そこからすっかり顔を腫らした子どもが、泣きながら転がり出てきた。「助けてくれよ、ティナが死んじゃうよ！」

「よお少年！」先に気に入らぬと言われていた兵が怖じけたよう

に一步さがった。今のグイードがどんな貌をしているか容易に想像がつく。「なんだよおい、楽しそうなことやってるじゃねえか。おれも混ぜろよ、腰抜けの臆病者の弱いものいじめ君よ」

(いま、ティナって言ったか?)

少年は確かにそう言った。この場で「死んじやう」ように見えるのは、目下すぐそこに縮こまっている血だるましかない。どうやらこれがティナであるらしい。頭を両腕で庇って、血と吐瀉物に突っ伏したまま苦しげに呻いている。そうとう手酷くやられたらしい。「グイードやめろ　なあ、クレウーサはいないか」

フリオニールはできるだけ穏やかに訊いた。副官の侠気にはまったく共感できたが、ここでふたりで突っ張っても半殺しの目に遭うのがオチだ。周りの兵たちはおおむね殺気立っている。あと幾度か言葉の応酬を経れば、部隊長や副官に払われて然るべき尊敬などたちどころに忘れ去ってしまうだろう。

「……少しうしろにいるはずですが」凄むグイードを怖れてか、一片の理性を取り戻してか、ややあつて加虐者のうちのひとりがそう応えた。「隊長に用事が?」

「たくさんあるけど、とりあえず呼んできてくれないか」それだけ言って、フリオニールはティナらしい怪我人の傷を検め始めた。「さあ、早く」

(……腕と脚を折ってる。指も、おほい肋も。あたまは無事だ、多分)見るも無惨な態だったが、致命傷と見られるような深刻なものはない。おそらく刃物は使われなかったのだろう。折れた肋が臓器を傷つけてさえいなければ、そしてすぐに処置さえできれば、命に別状はなさそうである。それでも何ヶ月か寝たきりになることは請け合いだ。 (くそ……寄って集ってどうしようもないな、よくこんなことができるもんだ!)

「おいあんた、しっかり」

「ティナ、大丈夫?　ねえ」先に助けを乞ってきた子どもが恐るおそる近寄ってくる。ティナほど徹底的にはされなかったのだろうが、

彼も見逃されはしなかったらしい。頬面に殴打の跡が見て取れる。
「あんまりだ、なんでこんなことするんだ！ たけきところは許してくれたって何度も言ったじゃないか！ おまえらみんな敵罰だからな、彼に言いつけてやる！」

少年の声に反応したように、ティナの血染めのあたまが持ち上がった。顔はそれこそ少年の比ではない、みにくい裂傷と痣とで元の人相など判別できないほどだ。もっとも彼自身、「檻のティナ」のことは話に聞いていただけで、見るのは 変身した姿を除けばこれが初めてなのだ。

（そりゃ人気も出るさ、マイナロス。こんなに美人ならな……）

「立てるか？ 立てないよな、立てるわけないか」

「ユツグは、無事？ あの子は」四つん這いになろうとして、しかし折れた腕を支えにしかねて、彼女は中途半端な格好で蹲っている。
「ユツグ、そこにいる？」

「ユツグは大丈夫だ ほら、背負うから、おれの首に腕を」とりあえず適当に流してからじきに、ユツグとはおそらく先の子どもの名前だろうと見当がついた。「痛むぞ、できるだけ屈まないようにするから」

「フリオニール、なにを勝手に」

クレウーサの声。顔を上げたときにはもうガイドが間に立っていて、姿を見ることはできなかったが、口調には非難めいたものが刷かかれていた。この騒動は部下の暴走というわけではないようだ。

「そりゃこつちの科白だぜクレウーサ。なにを勝手に私刑なんぞ加えてんだ」と、ガイドが代弁した。「偵察のほうはどうなったんだ。烽火は見たぞ、ここで油うつてる時間があるのか」

「……フリオニール、どうしてみんなは来なかったの？ ぎりぎりまで待ったのよ」喧嘩腰の大男を露骨に避けて、彼女はフリオニールに對話を求めた。「カオス勢は山峡を貫いたわ、もう防ぎ止める術はない」

「なにから話したもんかな……こつちもいろいろあったんだ。でも、

それはたけきところから聞けばいい。ところで、これはいつたいな
んの騒ぎなんだ」

「そいつが脱走したのよ、見ればわかるでしょう」

「うそだ、たけきところが出してくれたんだ！」と、ユツグという
らしい少年がクレウーサを指弾した。「何度も何度も言ったのに……
カミルラと同じだ、おまえもただテイナを苛めただけなんだ！

覚えてるよ、おまえにだってあいつと同じに、天罰が下るんだか
らな！」

「クレウーサ、おまえの誤解みたいだな」と、フリオニール。「ち
よつと前にさ、この子の処遇について会議が持たれたんだ。おれは
出なかつただけけど、その少年がこう言うんなら、釈放か放逐かは
ともかく、この子は檻から出されたと見て間違いないんじゃないか」
「ばかな……それに天罰って」

「おいクレウーサ、仮にこの子らが脱走者だったとして、おまえは
脱走者ならみんなこうすんのか。なあおい、縛って連れてくりやあ
いいんじゃないのかよ、クレウーサさんよ」グイードは少しも怒り
を収めない。恫喝めいてずかずかと詰め寄りながら、「ええ？ お
まえたちが朝な夕なに拝み倒してる、あのカオスさまの思し召しつ
てやつか？」

「グイード！」

「おまえは信心ぶかいから、カオスさまが子どもを殴ってお望み
になりやあ、涙を流して喜んで従うつてもんだ」

「もういちど言ってみる貴様……！」

クレウーサ以下すべての兵が色めき立った。「カオス信奉者」は
最大限の侮蔑で、使うほうにもかなりの覚悟を要求する禁句である。
グイードの憤怒は一通りのものではない。弱者への暴力と多勢を恃
んだ卑怯なふるまいは、武張った容貌に似合わしからぬ辛抱強さと
礼儀正しさを具えた彼の、容易に逆鱗に触れうる数少ない要素なの
だ。

（完全におかんむりだな、こいつ）

「グイード落ち着け……って言っても、もうダメだろうな。なあ、それはあとでゆっくりやってくれよ。それよりクレウーサ」

「信じられない……命をかけてあの裸山に詰めていた我々に対する、それがあなたたちの言い草なの、フリオニール？ おまけに最後の機会をみすみす逃しておいて！ 呪われるがいいわ！」

「クレウーサ、まずは報告だろう。一緒に行くから、このあらましをたけきところに伝えて、ついでに今あったことも言えばいい。そのうえで罰せられる必要のあるやつがいるなら、彼のほうでなんとでもするだろう」

「覚えていなさい 光の戦士の、コスモスの罰の厳しさを思い知れ」グイードを睨め付けながら、クレウーサは吐き捨てるように言った。

「もう忘れちまったよ、あんたも忘れたほうがいいぞ。でもあんたは忘れてもコスモスは覚えてるからな」グイードはなおも挑発する。「厳しい罰か、そりゃいいね。なにせあんたはこれからたつぷりそいつを味わうんだから。そのあと気が向いたらぜひご教授願いたいもんだ」

「いい加減にしろっ！」両手が自由にならないので、フリオニールは脚を駆使した。脛を思いつき蹴られて大男が飛び上がる。「おまえらしくない……とは言わないけど、軽率に過ぎやしないか。おまえの短気が隊同士のいざこざに繋がるかも知れないんだぞ！」

「悪い、けどなあ……」グイードは言いかけて已めて、少し萎れた。クレウーサのほうを憎々しげに睨んでいた子どもを手招いて、「少年、もう已めるとき。一緒に行こう」

「グイードは間違っていない、ぜんぶあいつが悪いんだ」少年はしきりに悔しがっている。「くそっ、剣さえ抜ければあいつらなんか……！」

ティナを背負ったフリオニール、グイード、少年、すこし離れてクレウーサ以下二百人という行列は、兵たちの好奇の目を惹きつつ野営地を横切って、光の戦士の天幕のあった丘のうえを目指して進

んだ。少女はいちおう意識はあるようで、周りを見回しているのか、呻いたり咳き込んだりしながら彼の背中で弱々しく蠢いている。フリオニールはため息を漏らした。背に感じる温もりはすでに、血の粘質を伴い始めている。洗ったところで落ちまい、この服もあの黴肉と同じ運命を辿るようだ。

「その子、大丈夫か」

「ちつとも大丈夫じゃないな。死にはしないだろうが……」

「死んで当然のことをしてきたのよ。そんなのは罰のうちにも入らない」うしろのクレウーサが耳ざとく聞きつけた。「さつき死んでいればさぞ本望だったでしょうに……もしそいつに恥を知るところがあるなら、だけれど」

「……………」

（よかったよな、クレウーサ。この子をグイードが背負ってなくてグイードより短気な自分が自制していられるのは、ひとえに部隊長の責任が放埒ほうちやうを戒めるからに過ぎない。が、それもいい加減に我慢の限界だった。もしこの両腕が自由だったなら　今ごろ彼女に飛びかかって歯の数本も折っていることだろう。（どいつもこいつも、なんで変身する前と後を一緒くたにするんだ？　相手が強けりや逃げ回ってびくびくして行くせに、大人しくなつたとたんにこうだ！

馬鹿野郎め！）

耳元でティナがなにかもぐもぐ言い出したが、少年とクレウーサのやかましい応酬にかき消されてよく聞こえない。いちど揺すり上げると彼女は苦痛を漏らした。折った肋を圧迫せざるを得ない、いまの姿勢は楽ではあるまい。たけきところへの話はいいい加減に切り上げて、早いところどこかに寝かせて安静にさせなければ。

「当然……死んで当然……」

早いところ安静にさせなければ　彼女もつらいし、自分もつらい。

たけきところは屍の原にいた。それを作り上げた剣を血の河に浸して、大きく肩で息をしている。

（これで全員斬った……見たか、不実と破誓の神よ！ 本来あるべき貴様の巫覡ふげきの、これが正しい行いというものだ！）

足下にはゼノフォンとセシルの亡骸が転がっている。手にはまだパウサニアスを斬った感触が残っている。みな何故こんなことをと驚愕しながら死んでいった。これに驚くようならコスモスの徒とは言えまい、彼としてはただ神に忠実に、軽蔑に塗れた敬虔のうちに祈ったに過ぎないのだ。ただ手を合わせなかつただけ。ただ剣を使っただけ！

（これを見る、このざまを見る、さぞや嬉しかりう。わたしには貴様の笑顔が見える、声が聞こえるぞ、この足を浸す血を啜りたいと）
トリーネとアカルタエはひと突きで死んだ。アグリアスとフリオニールは苦しんで死んだ。スコールはたいそう用心深く、殺すのはひと手間かかった。彼は懸命に祈った。これほど一心不乱に祈ったことがかつてあつたらうか。この全き信仰を見たならけだし、さときまなこも、あつきちしおも、しろきかいなだつて驚倒するに違いない。

「アニマ・ウアリドウス！ おまえはなんということをしでかしてくれたのだ！ おまえはわたしの軍隊をすっかり滅ぼしてしまつた！ おまえを生んだ神の命に背いて！」

少し離れたところに忽然と、異形の神が佇んでいた。肌を溶銀のような白っぽい耀きで飾り、おそらく高熱を帯びているのだらう、その周囲の空気の揺らめくのが、おぼとれ髪を蛇の群のように蠢かせている。

（これはコスモス、貴様の言葉とも思えない。わたしはようやく改心して、貴様が示し続けてきた模範にほんのすこし肖あやかつてみたに過ぎないのに。嬉しかりう、さあ喜べ、笑うがいい！）

「いまのおまえ、血を浴びた怪物のようなおまえ！ さあ見よ、才

クルス・サガーキス、おまえの兄弟はわたしを裏切った！ 聞け、
サンゲイス・カローリス、おまえの兄弟の不遜と背信に満ちた言葉を！ この醜行を呪うにふさわしい、どのような言葉を吐きかけてやろう、ブラキウム・アルプスよ！ よつたりの光の戦士は今こそ死んだのだ！」

ミテレス・アエテリス
（光の戦士が聞いて呆れる！ 死と詐略の神よ、貴様に従うのは夜と闇で、貴様の戦士は死肉あざりと盲いた奴隷が相場よ！ 光を知らぬ貴様が光の戦士などと笑わせる！）

「ごめんなさい、アニマ・ウアリドウス！ あなたをこれほどまでに追い詰めてしまった。あなたたちの血を吐かんばかりの叫びを聞いてあげられなかった！ すべてはわたしのせい！」

異形の神の傍らにいつの間にか、汚い毛布一枚を纏まとった少女が佇んでいた。薄いろの金髪が肩に、緩く海藻のようになだれかかっている。

（百年祈った！ なぜ聞き届けなんだ、コスモスよ！ なぜ貴様は、あなたは見過ごすのだ！ このうえどこにこれ以上、流せる血が蓄えられているというのだ！ わたしはもう虚ろで、血も汗も流し尽くしてしまった！）

「おまえに神罰を、アニマ・ウアリドウス！ 最後の最後、おまえがひとり虜囚の辱めを受けるとき、おまえが限らない責苦と屈辱に灼やかれるように！」

（憎むがいい、コスモスよ。いまやあなたの、貴様の憎悪だけが、わたしの裸の胸に飾られうる最後の勲いさなのだ）

「あなたに憫れみを、アニマ・ウアリドウス！ 最後の最後、あなたほんの少しの戦士が生き残るとき、あなたが全てから救われるように！」

（ありもしないものをちらつかせるな、コスモスよ。貴様には、あなたにはもうなんの力も残されてはいない。じきにあなたは滅び、カオスは勝利を全うするのだ）

そして影の衝撃が世界を揺るがすのだ。

夢から醒めた時にはすでに、その内容のあらかたを忘れてしまっていた。

(声を聞いたような……)

うつぶしていた顔を卓から上げると、とたんにしろく血の脱けた右腕が、無機物めいて存在を主張しはじめた。あたまに敷いていた右腕はすっかり痺れて冷たくなっている。地図もピンも見当たらない。傷んだ木の卓には汚れた両の手と、飲みさしの杯だけが置かれている。

(地図もピンもない。ないはずだ、象徴すべきものから、すでにないのだ)

たけきところは情けないような悲しいような、沈んだ気分こもに陥った。夢の中身はよいものではなかったようだ。目を開けても瞑こもつても、目下のところ見えるのは悪夢だけらしい。彼は静かにため息をついた。

ふと視線を感じて顔をあげると、いったいいつからそうしていたものか、天幕 粗笨そほんな木組に幕布を引っかけただけの仮小屋の入口に誰かが立っていて、妙な面持ちでこちらを見ている。額の傷が目に留まった。

「スコールか」

と言った矢先、彼の背後からもうふたり、先客を押しおしのけんばかりにして天幕へなだれ込んでくる。どうもなにかあったらしい。先に声を聞いたような覚えのあったのを思い出して、たけきところは感覚の失せた右手をさすりながら腰を上げた。

「ど」

「どうした、なにかあったか！」

「なにかございましたか！」

今ほど闖入してきたふたりが同時に口をきいた。パウサニ阿斯とアグリアスである。ちょうど口にしようとしていた言葉を先制されて、たけきところはちよつと鼻白んだ。

「……なにかあった、とは」

今度は二人が鼻白む番である。スコールだけが平静に、ただちよつと呆れたように鼻息を漏らして、

「声がしたんで見に来たんだが」

ぼつんと言った。

「いや、わたしも聞いた、ように思ったんだが。すまないが、寝起きでね」この仏頂面の青年に寝ているところを見られていたのかと思つと、なんとなく落ち着かない。たけきところは所在なげにまなじりを揉んだ。「それで……パウサニ阿斯、君は？ それを報せに？」

「ああ、まあ」

「……アグリアス、君は？」

「ええ、あのう」

「声を聞いた、と言ったな」と、スコール。「寝てた、とも」

「ああ。寝起きのせいかな、なんだか混乱するな。君たちはいつたいてどうしてここに？」

「その声だが、たぶん、あんたのだ」すこし言いにくそうにスコール。「……悪い夢でも？」

「わたしが？ ばかな」

パウサニ阿斯もアグリアスも、気の毒そうな、気遣わしげな貌のまま黙っている。

「……わたしが」

(夢を見て声をあげた？ 子どものように？)

どつと座り込む。恥も恥だが、この青年に指摘されたことがいつそう恥を募らせた。椅子がきしが軋る。スコールの顔に「人騒がせなやつめ」と大書してあるのが読み取れるようだ。彼はさぞいい気分にな

がないと、たけきところはつかのま邪推を逞しくした。

「お疲れなのですよ」ふいにスコールが顔を歪ませて、今し喋りだしたアグリアスに抗議の視線を送った。彼女にうしろからなにかさられたらしい。「出発のまえに車を用意させましょう。すこし揺れるかもしれませんが、お休みになれます」

「そうだ。ちよつと頑張りすぎだ、君は。さつきはさつきでひとりできつさと行ってしまうし」パウサニアスも畳みかける。「言いつけてくれればなんでもするさ、だからいいかげん骨休めしてくれよ……その、できる限りは、だがね」

「悪いが」スコールが割り込んだ。相変わらずの鉄面皮ぶりで、「この幕営で疲れてないやつなんかいない。休む時間のあるやつも。あんたも、兵も」

「冷血め、このお方がお倒れになったらどうするつもりだ！」

「彼には代わりがないんだぞ！」

「いい、彼の言うとおりだ。パウサニアス、出発の準備は」
「できてるが、知つての通り、騎鳥が少なくてね。速さは期待できないよ」

「なんの、カオスどもにも騎鳥の脚はないのです。我らの不屈の忍耐にどうして影まぼろしの兵ごときがついて来られましょう」

「やつらは昼も夜もおなじ速度で歩き続ける。少しでも早く出発した方が」

ふたたびスコールの顔が歪む。

「クレウーサは、まだ？」

「まだだ。間に合うかどうか」

「おおかたカオス勢の進入を食い止めるために、ぎりぎりまで防柵か罨でも作っていたのでしょうか。じき参りますとも」

「望み薄だ。カオス勢に討たれたか、そうでないにしろ、もう待つ時間はない。彼女らは切るしか」

スコールとアグリアスがつかみ合いを始めたところで、パウサニアスが訝しげに天幕の入口を見遣った。にわかになら騒がしくなっ

てきていた。

「スコール、アグリアス、静かに。　なんだろう」

「見てこよう」と、パウサニアス。「君はここに」

「もちろんわたしも行く」と、たけきこころ。残りのふたりに向かって、「君たちは？　続きをするなら静かにやりたまえよ。　だ

れかが聞きつけて飛び込んで来ないように」

言い終わったあとには笑みが浮かんだ。悪夢の余韻ははや去ったようだ。スコールの無表情が割れて、その裂け目に恥のいろの垣間見えるのにすこし気をよくして、たけきこころはふたたび立ち上がった。

右手にはすでに熱い血が巡ってきている。つい先まで穴の開いていた掌。彼女は無事に逃げおおせただろうか。

「おい友よ、見てごらん。たまにはいいこともあるじゃないか、クレウーサだよ！」

天幕を出るなり、パウサニアスが歓喜の声をあげた。

丘のうえからは、赤茶けた空き地の目立つ野営地から、二列縦隊でこちらに登ってくる、騎鳥を交えた兵の大群が眺められた。パウサニアスの声に反応して、一緒になって帰還兵を見下ろしていたゼノフォンとアカルタエが振り向いた。彼らが集まってくる間にも、辺りの人垣からトリーネ、セシル、アマンダが吐き出されてくる。みな一様にその表情は硬い。

「パウサニアス、彼は」

「いや、まあ、なんでもなかったんだが　ゼノフォン、やけに多くないかね」

「……うしろにほかの兵たちもくっついてきてるんです」

「おいおい、こりゃ全員くるんじゃないか？　ここに上がり」

「たけきこころ、あれは、どういうこと？」パウサニアスを遮って、

トリーネが食ってかかってきた。表にいたほかの四将も黙ってこしていたが、おのがじし眼に不穏な光を宿してたけきところを見つめている。トリーネが彼らを代弁する形である。「あいつが、ティナが、先頭にいるのよ！ あなたはわたしたちを欺いた！」

「……………」
（なぜティナがここに？ 愚かな、あれほど迂回しろと言ったものを……………！）

「ぼくにはまだ見えないけど、トリーネがこう言っている」と、セル。「説明してくれ、あなたは彼女を殺さなかったのか？」

「あなたはなにをしに檻まで行ったんです」と、アマンダ。「みな疑問に思っています。あなたは帰ってきてから誰とも会っていない。ちょうどいい、ここで説明をお願いしますか」

アマンダの言うとおり、たけきところは檻から戻ったあと、目覚めるまで誰とも話していない。というより、たまたま誰にも会わずに済んだというのが実際だろう。

「……………」

「さあ。あれほど豪語したんです、それに見合うなにかをあなたはとうぜんしてきたのでしょね」

「アマンダなんとも言わせるなよ、彼に話すときは言葉遣いに気をつける」

「パウサニアス黙っていてももらいましょう。わたしは彼と話していません」

なかばアマンダの問いかけを無視するような格好で、たけきころはじつとクレウーサ隊の、くたびれ傾いた旗を見下ろしている。

なぜティナが？ いや、その前に、なぜティナとクレウーサが一緒に？

（クレウーサ、そうか、クレウーサか！）

「たけきこころ？」

まったくまわりの八将がいなかったら、あたまを抱えてしゃがみ込みたい気分だった。もちろんティナは彼の勧めたとおり、カオス

勢の許めざして西に向かったに違いない。そしてちょうど撤退してきたクレウーサ隊とはち合わせた。いっとう愚かなのは彼自身だったのだ。西に逃げようとしていたティナにどんな釈明ができたろう。自由にするところではない、自分は彼女の逃げ道を完全に断つたうえで、カミルラとひとしなみに彼女を憎む獄卒の手元に向けて、その背を蹴り出したにひとしい。

（なんと愚かなことを……）

帰還兵たちはもうトリーネの千里眼に頼らずとも、ようよう先頭に見える位置まで近づいてきていた。確かにティナはいた。背のたかい男ふたりに両腕を掴まれていたが、それが歩行の助けなのか私刑の一形態なのか、見た目からは判じがたい。さんざんに痛めつけられたのだろう、先に見た姿とはかけ離れて血まみれで、遠眼にも歩けるような状態ではない。ほとんど引き摺られるような格好である。

「殺さなかったんだな」と、スコールが耳打ちしてきた。この事実喜んでいいのか憤っているのか、表情や口調からは判別できない。

「あんたらしくないが」

（また言われた）

ほどなく丘はクレウーサの隊と、成り行きを気にして仕事そつちのけで集まってきた兵とでいっぱいになった。上がって来られないものがほとんどだったが、それでもおとなしく戻る気はないようで、彼らは坂に留まって事態を見守ることに決めたようだった。遠く野営地跡に動くものは見られない。あるいは本当に全員が集まってしまったのかもしれない。

ゼノフォンが静止を命じて、先頭のものたちは脚を止めた。ぐったりしたティナを左右で支えるフリオニールとグイード、すぐとなりに横面を腫らしたユツグ、そして険しい面持ちでたけきころを見つめるクレウーサ。副官のテレマツハは後列にいるのか、姿は見えなかった。

「クレウーサ」

「帰営が遅くなりました。お尋ねになりたいことがございましたよ。」

声をかけたとたん、クレウーサは短兵急にこんなことを言った。非難のいろが見える。むろん、作戦どおり山峡の防衛に向かわなかったことに対してだろう。先に言わせたうえでまさか言い訳などさせない。このあたりが本音といったところか。それともティナを伴ったことについて質問を受け付けるという意味だろうか。いずれにせよ、彼女はひどく不機嫌に見えた。

「カオス勢は」

「今ごろはもう山峡を抜けるか否か、といったところでしょうか。ご存じでしょうか？」

「我々もいろいろあった」

「でしようとも」

ちらとティナのほうへ眼を遣ると、クレウーサが目ざとくそれを見咎める。彼女は傲然たる口調で「脱走です」と続けた。

「なにを企んだものか、ここに向かっていました。危うく我々が追いついたからよかったものの、そうでなければ敷地に侵入していたことでしょう。」

(ここに向かっていた?)

「これについても報告がございます。この脱走兵を捕らえる際、フリオニール隊の妨害がありました。抗議した我々にカオス信者などと暴言を。詳細は本人からお聞き下さい」

言つて彼女が眼で促すと、フリオニールはティナの身体を副官に預けて、近くにいたユッグに手招きした。クレウーサに負けず劣らず彼らも不機嫌そうにしている。

「彼女の言い分に相違ないか、フリオニール」

「本当かっつていう意味なら違つて言うけど、間違いないかっつていう意味なら、まあ、否定はできないな」と、フリオニール。

「全然ちがいます！ あいつは大嘘つきです、あんなやつ言うことなんか信じないでください！」と、ユッグ。

「フリオニール、君が見たままでもいい、話してみないか」

「……まず聞いておきたいんだけど」ティナのほうをちらと見遣って、「あんたはあの子を檻から出したのか？」

「出した」

「なんていう背信！ 光の戦士が嘘を吐いたっ！」トリーネが怒鳴った。彼女の処刑に賛成していたほかの四将もそれに和してどよめいた。「あなたは殺すと言った、約束した！ だのにこれはどういうこと？ フェレウス・コスモスよ、あなたの子の裏切りを見そなはせ、わたしたちはみな欺かれたのだ！」

トリーネが彼の激怒を誘おうとしていることは明らかだった。少なくとも昨日までの彼に対してならば、きっと成功したに違いない。ちよつと向こう見ずとさえ言える。非難するためだけに神の名など出せば、なるほど彼はどれほど怒ったことだろう。もっとも、コスモスの名になんの名誉も栄光も見いださなくなつた今となつては、あたまの中で彼を使って神を裏切るなり横面を張るなり、彼女がどのように空想しようがそれに非を鳴らそうが、たけきころにはもはやなにも響いては来なかつた。むしろなにか善い事柄と結びつけて語られたほうがよほど気分を害しただろう。

「フリオニール、続きを」

「……あんなこと言ってるけど、いいのか」

「いい。わたしも否定できない」

「クレウーサ来てくれ、あんたにも聞いてもらわなきゃ。おれが間違つたことを言ったりしないか」フリオニールの手招きに、しかし彼女は恬然として応じない。彼もこだわらずにすぐ諦めた。「……まあ、いいさ。そこでも聞こえるだろう」

フリオニールは短く簡潔に話したあと、「できるだけ早く彼女を安静にさせたい」と述べて、傍目にもなにか言いたくてうずうずしているユッグと替わつた。ティナはグイードに介抱されて横になっていたが、気を失っているのか、なにかしら自発的な動きは見せない。

(魔法を使つて自衛しなかつたのはわかるが……なぜ奇跡を使わな
い。いや、それ以前に、なぜここに来たのだ。クレウーサに追いつ
かれなかつたとしても、ここを目指せば早晚おなじような目に遭う
であろうことくらい、わかつていただろうに)

「　　ほくもテイナも必死で説明したんです。でもあいつはちつと
も聞く耳なんか持たないんです。テレマツ八とかいうひとが一生懸
命とりなそうとしてくれたんですけど、とうとう周りのやつらに小
突かれて黙ってしまつて……こいつらはただ、テイナを虐めたいだ
けなんです。そのために不都合なことはぜんぶ無視したんです。そ
れが仲間の口から出た言葉でもね！」クレウーサに憎悪の一瞥を遣
りながら、ユツグは熱っぽく語つた。語りながら悔しさのあまり泣
き出した。「それからあとは殴つたり蹴つたり。テイナは逃げられ
ないようにつて、両脚の骨を折られたんです。信じられない、ぼく
何度こいつを抜いて、あいつらひとり残らず叩き切つてやるうかつ
て、思つたんですけど、テイナが止めるつて……」

「ユツグ、もういい。　　クレウーサ」

「はい」

「彼らの言い分に相違ないか」

「本当かという意味でなら違つと申しますが」ちらとフリオニール
のほうを見る。「間違いないかとのご質問であれば、否定はいたし
ません」

「君はテイナとユツグに私刑を加えた。なぜだ」

「私刑ではありません、刑罰です。正当なね」

「罰とは君が勝手気儘に加えていいものなのか。軍律に則つて、要
すれば裁判にもかけるべきではないのか。君は指揮官に判断を仰が
ずにそんなことをできる身の上なのか。　　それとも君は指揮官か、
クレウーサ」

「……軍律と仰いましたね。あなたはひとにそれを押しつけておき
ながら、自身は平然と破つて恥じないのですか。わたしの行動の是
非を云々なさりたいのであれば、まずは先ほどのトリーネの言葉に

対して、きちんと彼女が納得できるような弁明を試みてからにすべきでは？ あなたは言った、あれを檻から出したと。さあ、わたしにもこう言う権利があるということ、もちろんあなたは快く認めますね？ なぜだと！」

「君の行為は越権も甚だしい、そうやって論点をずらして逃げるのは君自身、それがわかっていているからだ。君は軍律に背いた」

「あなたも、アニマ・ウアリドウス。わたしを斬首なり磔なりどうとでもなさるがいい、すぐ隣であなとも同じ目に遭わされるのだ。カオス勢もじき追いつく、ガーデンにはちよつとした見物でしょう」

「ちよつといいか」

言い争うふたりの視線が、相も変わらぬスコールの、仮面じみた無表情に集まった。双方喧嘩腰、一触即発の緊張のさなかに、おなじみの鉄面皮ぶりを発揮してずかずか割り込んでくる。

「……あなたは」

「スコールだ。あんたが出て行ったあと部隊長になった。ちよつと気になることがあるんだが、邪魔かな」

「……話すといい」

「クレウーサ」彼にしてはしごく明るく、「あの女だが、昔になにかしたのか？ 新参で事情に疎くてね、誰に訊いても話してくれない」

「話しても？ たけきところよ」挑発のいろも露わにクレウーサ。

「あなたの御意を得なければ、わたしはなににもできないらしいのでこうお尋ねするのですが」

「従うつもりもない命令を催促されるのは初めてだ」憤激のいろを隠さずにたけきこころ。「君は君の好きなときに思うままをするのだし、いまさらわたしがなにを言おうとも聞く耳など持たない。せめて祈るだけだ、君が君にしかわからない理由で彼の逃亡の可能性に思い当たったあげく、彼の両脚を叩き折るうなどと血迷うことのないように」

「質問に答えてもらえないか？」

「……味方を殺したのよ、それも何千人も」

「今回の件のことではなくて？」

「そういうことがあったらしいわね、小耳に挟んだだけだけど」クレウーサは少しく嬉しげにさえ見えた。「言っておくけど、そんなのは勘定にも入らないわ。今まであれがしてきたことに比べればね」

「それがあの女の罪？ 罰と言っただ、それに相応ふさわしいするだけの罪があるということだろう。だからあんたはあいつを痛めつけた」

「言うまでもないわ」

「それで納得した。それならあんたは筋を通しただけで、別に軍律を犯してはいないわけだ。指揮官どの、あんたに分はなさそうだが」

「たけきころよ、彼は話がわかるようですね」

「フリオニール、と、その副官どの。あんたたちもそう思わないか。罪には罰を。当たり前の話だろう、それが軍律だ。違うか」

いきなり話を振られたフリオニールとグイドは、なにかふたりでこそそ耳打ちし合ったあと、うんざりと首肯した。甚だしくふたりの心証を害したことに、スコールは気づいたふうもない。

「そこのおまえは。ユツグ？」

「おまえみたいなやつがいるから……！」

「あいつは悪いことをしたらしい。罰せられないままでもいいはずもない。おれは間違ったことを言ってるか」

「……君はそれを言いに？」つくづく忌々しい青年！ 口ごもるユツグに加勢して、「君がこれほど頑迷で、かつ矮小な人物だとは思わなかった。友を悪く言いたくはないが、クレアルコスクレスの眼も曇っていたらしい」

「痛いところをつかれたら負け惜しみの中傷か、指揮官どの」スコールの無表情が、このときだけは割れた。「この件、どう考えてもあんたが悪い。なぜ罰を引き延ばした。決めないまま先送りにするからこうなるんだろう。これも昨夜の襲撃も、あんたとあんたの煮

え切らない幕僚が招いた。　　「いったい何人死んだか知ってるか？
クレアルコスが、しろきかいなが、あんたが張り切っておれに任
せた兵たちが、何人死んだか、あんたは知るまい」

「言わせておけば……！」

「トリーネ、あんたはどう思う。罪には罰を。あいつはそもそもあ
んなふうにされて然るべきだった。違うか」

トリーネはむしろたけきところに宣言するように、「そのとおり
よ、あなたの言うとおり！」と快哉を叫んだ。

「ゼノフォン、あんたはどうだ。あいつがあんな格好で臥せてるの
は正當ななりゆきだ、そうだろう」

「君は正しい」

「アグリアス」

「……苦しめるのは哀れだ、はやく止めをさしてやるべきだ」

スコールは残りの将にも大声で、一種異常な執拗さでもってテイ
ナへの虐待の正当性を訊いて回った。恬然と拒否したのはパウサニ
アスくらいで、ほかのみなは一致してスコールの行動を勇氣あるも
のとして評価した。この窮地を打開する術を模索するのと、かの傲
岸不遜の青年に憤怒を募らせるので、いきおいたけきところは真っ
二つに引き裂かれんばかりであった。

（あれほど処刑を思いとどまるように言っていたのが嘘のようだ！
理詰めで考える彼のことだ、彼女を生かしたままにするよりも、
殺したほうが得になるようななにかを思いついたに違いない。アグ
リアスは正鵠せいこくを得たものだ、彼の血は凍せいてついでいる）

スコールは主立った將の言質を取るとさらに嵩かさにかかって、今度
は気絶したまま横たわるティナをむりやり立たせようとした。フリ
オニールの主従が殺気だつてそれを止める。ここぞとばかりにトリ
ーネたちの掩護射撃が浴びせかけられる。ふたりは無念に齒ねを食
しばつて、スコールの陶器めいた面を穴も開けよとばかりに睨ねめつ
ける。齒がみする音がここまで聞こえるようだ。

（彼女を殺して溜飲を下げて、それでいいなにかどうなるとい

うのだ……彼女なら多くの兵の命を救える。いまや死に瀕しているクラウド、彼も彼女なら癒せるだろう。だが）たけきところは振り返ると、むしろ怒りより多く悲しみを込めて、トリーネたちの得意げな貌を眺め回した。（彼らは聞く耳を持たない。見よ、平素は思慮にあふれた賢智も、ひとたび怒りに眼を覆われればこうもたやすく盲いるのだ）

スコールがなにか兵たちに向けて喋っている。丘の隣までティナを引き摺っていったうえで、彼女の骨折した腕や足を取ったり曲げたりしているらしい。彼女の悲鳴が聞こえる。この死者に鞭打つような陰惨な責めに、さすがに迎合する気にはなれなかったものか、ゼノフォンとアグリアスの面には不快感が刷かれていた。丘の下の兵たちも水を打ったように静まり返っている。

（なぜそんな貌をする）

ふと、セシルが異様な面持ちでこちらを見つめているのに、たけきところは遅れて気づいた。みなむしろ意識して彼を無視しているなかで、セシルだけがただひとり、詰問するような探るような熱視線を送ってきているのである。

（……………）

なんとなく彼の視線を追いかけるようにして向き直ると、今度はフリオニールの凝視に迎えられる。こちらはセシルほど穏やかではない、まったく殺意一色で、腰に吊った剣の柄に手を置いて一触即発といった態だ。頷いてくれ、そうすりゃこいつを殺す！ フリオニールもグイードもありあまる義侠心のゆえか、少しくはやまった覚悟を決めてしまったようだ。とはいえ甘美な覚悟だった。首をちよっと傾けさえすれば、あの憎むべき鉄面皮にこれ以上ないほど思い知らせてやれる。たけきところもあるいは頷いてしまったかもしれない。この小石を呑んだような懸念がなかったならば。

（セシルはなにか疑っている。彼らにとって非常に都合のいい展開になりつつあるのに、彼はなにかよくないことの兆しを見たのだ。なにに？）

小さく、だが断固として、たけきところは首を横に振った。フリオニールの貌に失望と、こんどは彼にまで放射を始めた強い怒りが浮かんだ。

（わたしの顔に？ いや、スコール、彼のふるまいに！ セシルはわたしが彼になにかさせていると思っっているのだ、それも彼らの意に添わぬようななにかを）

「指揮官どの。来てくれ、あなたは承認しなければならぬ」

スコールの呼ぶ声。ぶしつけとも取れる呼びかけに、たけきころはなにか符丁のようなものを聞いて取った気がした。トリーネたちだけではない、自らの両目をも覆う重く分厚い怒りの幕布を、彼は懸命に払いのけた。

「あなたは兵たちを納得させなければならぬ」スコールはここで急に語調を落とした。含みのある低い声で続けて、「将たちじゃない、兵たちを」

（そうか……そういうことか。君は諦めていなかったのか）
いつセシルが割って入ってくるかわからない。足早にスコールの許に歩み寄って、すれ違いざま、たけきところは彼に顔を寄せて、「兵たちを」と呟いた。背に安堵の溜息を聞いたのは気のせいだろうか。

（スコール、では君の執念に賭けてみよう）

ティナに近づくのを阻むような形で、フリオニールの主従が掴み掛からんばかりにして詰め寄ってくる。これいじょう彼らの気に入らないことを耳に入れれば、スコールともども刺されかねない雰囲気である。

「たけきところ、あなたの決めたことだ、だがあなたは！」

「しっ、友よ、急がせてくれ」たけきところは声を絞った。「セシルがスコールの演技に感付き始めている」

「え、演技？」

「君はその子を殺したくない。違うか」

「違う」

「グイード、君は」

「もちろん助けたいですよ」

「よし、ならもうしばらく、そう、先のように悔しげに、憎げにわたしを睨んでいてくれ」

フリオニールもグイードも困惑の極みにあるようだったが、わからないなりに諾つくなったあとは言われたとおり 少々わざとらしいのには眼を瞑るとしても 彼とスコールを上目づかいに睨み始めた。(……生きているのが不思議なくらいだ。いや、死なないように痛めつけられたのだろう)

先に責め苛まれたせいもあって、ティナは意識を取り戻していたが、たけきところが傍らに膝をついても声をかけようとはしない。かけられないのだ。なかば閉じ塞がった眼でなにか訴えかけるようにして、ただ見上げてくるだけだった。

「名無しの少女よ、なぜ来てしまったのだ。ここに来ればこうなることはわかっていたはずではないか」

彼女の腫れ上がった唇がもぐもぐ動いて、かすかに声らしいものを紡ぎ出す。彼はティナのあたまを抱えるようにして、口元に耳を近づけた。今は亡きかの伝令使の、逝きしなに際してそうしたように。

「名無しじゃない」

「……………」

「わたしはテイナ、名無しじゃ」

「^{ケアル}奇跡を使いなさい、使ってくれ！ なぜこんな姿になってまでこ

こに来た！」

「死んで、死んで当然だから、わたし」

「頼む奇跡を」

「戦わせて」

「……………いま、なんと」

（彼女はいまなんと言った）

彼は思わず呻いた。両膝について、テイナの手を取って強く握った。毛穴という毛穴がいつせいに開いたかのような、物凄い感覚が脳天からつま先までを貫くを感じる。そして懐かしい、あたまの中身を直接てらし出す光のような、あの神託の兆しもまた同時に。彼のうちで跡形もなく粉碎された結晶の、まったく掻き出されたとばかり思っていた塵が、陽射しの下の砂の中に見出されるような微細なものではあれ 彼自身にも信じられないことに このとき忽然と輝き出したのである。神よ！ 声にこそ出なかったが、彼の口は確かにその形をなぞって動いた。

「いまなんと言った」

「最後の機会を、どうか、戦います、この重荷を……………この重荷を」

たけきところは必死で涙を堪えた。もちろん神託はなかった。が、啓示はあったのかもしれないのだ。すなわち彼女と、すぐ下に集った兵たちと、背後で成り行きを見守っている将たちが。スコールの

見えがたい謀事と、彼にそれを教えたセシルの疑惑とが。啓示があつただと！ 愚かなこと、すべて偶然だ！ 進歩のないやつめ、こんなことのあるたび、お前はいつたいどれだけ信じては騙されてきたというのだ！ 二千年を閲けみした彼の理性は、これらをすべて蓋然性がたまたま引き当てた稀有な札だと一蹴しようとしたが、砂粒のきらめきは執拗に眼を射て、感動の涙を誘った。涙と靈感が鉄の理性を揺るがした。あれほど呪い踏みにもじって唾棄したはずの神の似姿を、しかし今まったく意識せずに、拾い上げて口づけさえた己を、たけきところは口を極めて嘲罵したがつた。しかしそうするための言葉を思いつけなかった。彼はしばらく蹲つたままなにもできず、ただテイナの手を握つてぶるぶる震えていた。

「指揮官どの」

スコールの突き放すような呼びかけ。たけきところはにわかによりを取り戻した。自失している場合ではない。この機会が偶然であり必然であれ、全うしなければならぬのだ。いまは行動の時だ。ひと言、万感をこめてテイナに「ありがとう」と囁くと、彼は立ち上がつてスコールに向き直つた。

「君ほどの冷血漢をわたしは未だかつて知らない。これを見る。これを見る！ これを見るっ！ みな！」振り向いて眼下の兵たちに、「彼女のこの姿を！ これほど全き暴力に躡にじられたひとの姿を、諸君はかつて見たことがあるか！ ひとがひとをなんの故のあつて、これほどの虐待を加えうるのか！」

兵たちはひと言もなく押し黙っている。いま地面に横たわる彼女の姿こそ見えまいが、先にスコールの懇切丁寧な「説明」を受けているのだ、テイナがいまどんな状態に陥っているかは理解しているはずだった。

「今度は情に訴えようとも言うのか、指揮官どの」スコールの口は相も変わらず憎たらしい。あるいはこちらが勘違いしているだけで、もともと最初からテイナを処刑しようとしていたのかも疑うほどだ。「あんたは認めなければならぬ。兵たちも納得しない、

こいつは罪人で、罰せられなければならなかったのだと」

「罰？ 彼女がなにか悪いことをしたのか？」

「トリーネ！」スコールが苛立たしげな声を上げた。舌打ちさえした。了解済みではあっても腹立たしいものは腹立たしい。「指揮官どのは忘れたみたいだ、教えてやってくれ」

「ここだとぼけるなんて白々すぎるよ、たけきこころ！ 兵たちもみな知ってる、その女は十人の将と四千人の兵を殺した！」

「もちろん知っている」けろりと即答すると、果たしてトリーネは相貌に血を上らせた。「それが罪だと言うのか。彼女の意志でないのは先刻承知だろう」

「だから放っておくって言いたいの？ それでいいとして、次にまた同じことは起きないの？ いったい、クレアルコスはその辺で転んで死んだの？ ルーカンが病気で死んだの？ 姉さんは、姉さんはどうして死んだの？ どうして死んだの！ そいつが殺したんだ！ たけきこころ、そいつが、殺したの！ そして次も誰かを同じようにそうするのよ！」

トリーネの肺腑の叫び。彼女は中途から涙を堪えられなくなっていった。

「それが罪か」

「そうだ、それが罪だ」トリーネの後を受けてスコール。「その罪によって罰せられた」

「それが罪か 諸君の考えも彼と同じか！」ふたたび兵たちに向き直って怒鳴る。「彼女はトリーネの言う罪によって裁かれた。相違ないか！」

「そのとおりよ！」兵たちのあいだから女の声が上がると、それを汐しほに石を投じた水面よろしく賛同の声が広がっていく。呼び水となつたこの声には聞き覚えがある。先に靈薬エリクサーによって命を繋ぎ止めた、スコールの副官の声。

「そうか いいだろう。間違いを認めるのは苦い経験だが、これも力の足りぬ指揮官を陶冶ちゆいする、得がたい諫言けんげんには違いない」わざ

とらしくならないように、不機嫌に過ぎず、かといって快活に過ぎず。ここが先途と、たけきところは熱弁をふるった。「わかった！ 彼女は罪人であり、ゆえをもつて罰せられた！ 光の戦士が認めよう！」

「みな聞いたかつ！」ここでスコールが、彼のふだんの印象からは想像もつかないような大音をあげた。ちよつと大衆を扇動する予言者めいた様子で、「彼は認めた！ この女は罪人で、であればこそこれほどまでに打擲された！ クレウーサの行いは正当化された！ たけきところは過ちを認め、ティナは罰を受けた！」

兵たちの反応は賛否こもこもといった態であつた。が、この光景だけを見たとしたなら、彼女に同情を寄せるものの非常に多いのに驚いただろう。兵たちがふだん彼女に向けている感情といえは、憎しみのほかは無関心がすべてで、それとて多くの兵がそうであろうように、彼女のことをほとんど知らないということに起因している。スコールはこの降つてわいた悶着において先駆けて、にわかには掌を返して、彼女の嚴罰を確実にするはずの槍玉をあえて引き受けた。なぜ？ むろん同情票を集めるためだ。将たちではない、兵たちの（セシルはこれを訝いぶかつたのだろう、彼には先見がある。が、もはや手遅れだ、わが鉄面皮どのの一枚上手だつたな）

結果的にクレウーサの遣りかたはこちらを利したのだ。彼女を参考にしたかどうかはともかくも、スコールは彼女流に目立って残忍酷薄にやつた。眼下にひしめく無関心と興味本位の札をひっくり返して、その多くを哀憐の情に塗りかえた。

怒鳴り終えたあと、彼は黙つてたけきところを見つめた。墨黒の瞳が刺すように、なにか言えと催促してくる。彼の真似をして身を乗り出してみようかとも思ったが、ここで芝居めくのは説得力を損なうだけだと思ひ直した。彼は息を吸い込んだ。

「みな、ここに集まってくれたのはちよつとよかつた。いままでの話は聞いていたはずだ、ゼノフォン以下の将と、彼、スコールは彼女を犯罪者として糾弾し、また彼女はそのゆえに、かく手酷い責苦

をこつむった。感情からであれ論理からであれ、わたしは彼女を罪人とするに忍びないが、みな、先に聞いたとおりだ、わたしは彼女を罪人として認める」ここでさらに息を大きく吸って、「彼女は罪人であり、罰を受けた！ よって彼女の罪垢せいくは濯すすがれた！ 彼女はかつて罪を得るまえにそうであつたように、軍属に復帰することとする　ティナ、ミールスの誓いゆめ破るなかつ！」

たちまち背後で怒号が爆発した。兵たちはあんがい冷静だったが、だからといって得たりと諸手をあげるつもりもないらしい。不満の声が丘を突き上げてくる。まずはうしろからと振り向くと　案の定、フリオニールとグイードが眼を白黒させている。トリーネとクレウーサは合流して、真つ赤な顔を引っさげて突進してくる。それを追うようにアグリアスの駆けてくるのは、果たして彼女らへの加勢か調停のつもりか。アカルタエとアマンダはなにを考えているものか、突つ立つたままなんの反応も見せない。セシルははや諦めたようで、悄然とこちらを見つめるだけだったが、意外なことにゼノフォンも彼と同じように、これもやむなしとばかり諦念を温めている様子である。

「これはなんの茶番ですか、こんな苦し紛れの茶番！　あなたひとり都合のいいように解釈して、それをさも勿体ぶつて皆の見解のように触れるなど！　恥をお知りなさい！」

「独裁者！　誰がこんな子供じみた決めつけに従うつていうの？　たけきこころ、あなたがこんなに愚かで自分勝手だつたなんて！」

トリーネとクレウーサは感情を爆発させて、おのおの知っている限りの悪口雑言を並べ立てて、たけきこころの決断を言語道断だとして詰なりののしつた。いまや完全にあたまたに血の上つているふたりに、躍起になつて反論したところでムダであろう。彼女らが怒鳴り疲れて静かになるまで、彼は涼しい貌で黙っていた。

「トリーネ、クレウーサ、もう已めろ、たけきこころは聞き届けておいでだ」ふたりの矢の尽きかけを狙つて、アグリアスが仲裁に割り込んだ。「たけきこころよ、ご存念を伺いたく。ふたりもこのま

「までは納得しません」

「君もか」

「はい」

「……話してもいいかな」

「なにか正当なことが言えるのならね」と、トリーネ。

「言い訳ならやめていただきたいものです。あなたをこれいじょう軽蔑したくない」と、クレウーサ。

「クレウーサ」たけきところは静かに、噛んで含めるように話し始めた。「君は先に、彼女に加えたのは私刑ではなく、罰だと言ったな」

「もちろんです、そしてそれで終わりだとは　！」

「まだ続くと言ったか、君は。まだ続くのだとして、なぜ君は細切れに分けた。罰とは拷問の謂いではないぞ」彼女の言い募るのを遮って、「よしあとでそうするつもりだったとして、それは君が勝手にそうしていいものなのか。わたしは確かに言ったぞ。罰とは君が勝手気儘に加えていいものなのかと。それともさっきのは勘違いで、あれはやはり私刑だったのか。応えなさい」

クレウーサは言葉に詰まった。ここでやはり私刑だったと前言をひるがえせば、テイナの処刑は改めて行われることになるが、そうなれば彼女はただでは済まない。もし自身を犠牲にしてまで処刑に漕ぎ着けたとしても、そして主立った将が死刑を望んだとしても、すでに加えられていいる私刑によって酌量される可能性があるうえに、いまや兵たちから集めた同情票が重大な障害になることは確実である。ましてたけきところがそれらを最大限利用しないような虚仮だなどと、彼女は夢にも思わないだろう。分のわるい賭のはずだった。

「さあ、応えなさい」

「……あれは死刑妥当です、あなただつて知っているはず！　相応の理由のない殺人は原則死刑であると！」

「トリーネ、君も彼女と同じ意見か」

「もちろん。わたしも、みなもね。あなたも知ってる」

「トリーネよ、では君はわたしでなく、彼女に、クレウーサに言うべきだった。なぜ罪に釣り合うだけの罰を与えなかったのだと」と、たけきこころ。「クレウーサよ、わたしとしては、いま君の言ったことをそのまま返さざるを得ない。わたしは確かにこうも言ったはずだ。軍律に則って、要すれば裁判にもかけるべきではないのかと。死刑妥当と言うのなら、なぜ裁判を設けたうえで、その席で堂々とそのように述べなかった。君は君の都合で軍律を無視し裁判を省略して、自分勝手に好きな罰を与えておきながら、あとになってどうやら足りないようだと思ひ直したとたん、なんの関与もしていないわたしに非を鳴らすのか。これは最初から最後まで わたしはそれを認めた覚えも許した覚えもないが 君の担当した処刑だぞ。君は先に、わたしはトリーネに対して弁明しなければならぬと言ったが、それは君のほうだ。クレウーサ、君はティナが死刑妥当だとするものたちすべてを、君の用意した刑罰をもって納得させる義務がある。違うか」

「……あなたは、あなたはどうなのです、アニマ・ウアリドウス、関与していないなどと言っておいて、あの檻からあれを出したのはあなたでしょう！ さあ、なぜそうしたのか説明を！ あなたにこそそうする義務がある！」

「あいつはあなたの前を歩いていたんじゃないか。罰を受けさせるためだろう」またもスコルが強引に割り込んで。例の鉄面皮を遺憾なく発揮しながら、「むろん、裁判つきで」

「わたしはたけきこころに聞いているのよ」

「別に指揮官どのじゃなくてもわかりそうなものだ。じゃあ、あなたはなぜあいつがここに向かっていったか、なにかもつともな理由をあげることができるか」

「……笑わせないで、それなら、そういうつもりなら、なぜ誰かを遣って連れてこさせなかったの？」

「あんたみたいなのが勝手に暴行するからだろう」しれっとスコル。

「あのふたりはそんなことはひとことも言っていないかった！　ふざけないで！」

「罰するから来いなんて正直に話したら逃げるだろう」さらりとスコール。

「たけきところは殺すと、殺すと言ったわ」トリーネがクレウーサの後を継ぐ。「大仰に！　でも嘘を吐いた！」

「だから、彼のほうでも処刑するつもりだったんじゃないのかと言ったんだ。それが死刑かどうかはわからないし、大仰だったかどうかも知らないが」スコールは肩を竦めた。「じっさい裁判があったなら多数決で、あいつはまず間違はなく死刑になっていたはずだ。

あんたたちがそれを望めば、指揮官どのの言ったような、指を切るだの、あたまに穴を開けるだの、できたかもな。あんたたちは多数派だったし……そうすると、そういうこと的一切を阻んだのは、やはりクレウーサということになる。もつとも彼女は事情を知らなかったんだから、あんまり強く言うべきじゃないと思うが」

「……あなた、どっちの味方なの」トリーネが憎々しげに声を絞った。「あなたはあいつが憎くないの？」

「あんたは誰の敵のつもりなんだ、トリーネ」珍しいことに、スコールの貌に少しく悲しげないろが浮かんだ。「ここには味方しかない。敵なんかいない、そうだろう」

「そう、そう！」クレウーサがなにか思いついたのか、急に大きな声を上げた。「あなたは、あなたは罪人と認めていなかったって言うていた！　なのに裁こうとしてあいつを呼び寄せたと言うの？　矛盾する！」

(どうあっても承伏するつもりはないようだ……)

たけきところもスコールも、おのおのできるかぎり冷静を努めて説得に当たっていたが、相手のふたりといえば大人しくなるどころか、いよいよ感情的になるばかりで、話し合いというより足下を掬うための、都合のいい言葉後を待ちかまえているといった態になりつつある。多数の兵のまえで　模範を示さなければならぬ対

象のまえで　そうしているということに、もはやふたりは拘泥していない様子だった。この一件がどのように帰着するにしろ、両者の関係の修復は易くあるまい。

「どうなの、たけきこころ、この矛盾を説明できるの？」

スコールが女性陣に背を向けて、物凄い眼でこちらを睨んでくる。嘘をためらうなと言いたいのだろう。彼の骨折りに免じて、というよりは、もっぱらティナの安全のために、たけきこころは慣れない嘘を吐くために懸命に考えた。

「たけきこころ」

「彼の言うとおりだ。わたしは彼女を裁判の席に呼ぶつもりだった。言って、相手が口を開くまえに続けて、「彼女の無罪を主張するために。もしそれができないまでも、君たちがそれによって怨恨を忘れる、また彼女を我々にとって役に立つ人物として認めうる、せめて軍律が処罰を猶予しうる、彼女の価値を証明するために」

「呆れた！　あなたは言うことがこころ替わるね、たけきこころ！」と、トリーネ。「あれほど大言壮語して殺す殺すなんて言うていたくせに、よくもぬけぬけとそんな恥知らずなことが言えるね！」
「それについては」こころ言うよりほかあるまいと、たけきこころは腹をくくった。「あのときは正直、かなり感情的になっていたことを認めざるを得ない　ちょうど今の君や、クレウーサのように」
「なにを　！」

「トリーネ、クレウーサ」今まで黙って成り行きを見守っていたアグリアスが、ここでふいにふたりの肩を掴んで引き留めた。「もう已める、兵が見ている」

「……あなたまで裏切るの、アグリアス」

「なんとでも言うといい、ただ今は黙るんだ。　見えないのか、最前から兵たちがどんな眼でおまえたちを見ているか」

「日和見ならどうぞひとりやってちょうだい、アグリアス」辛辣にクレウーサ。「わたしたちを巻き込まないで」

「そんなに聞きたいのなら言うぞ、クレウーサ」アグリアスはたち

まち怒りを露わにした。「たけきころはおまえたちの質問にすべ
て応ぜられた。それがおまえたちに納得いこうがいくまいが、とも
かくも応ぜられた。それに引き替えおまえたちはなんだ？ 不誠実
にもなにひとつ釈明せず、応えに窮すればこの方を中傷するか、
さもなければ代わりに新しい質問をひねり出してぶつけるだけ！」

「間違ったことを主張してるのはあくまで　！」

「内容以前の問題だ、あまりにも見苦しい……！」

押し殺した、怒りの滲んだ、しかし真率な口調である。こうもあ
けすけに断じられて、ふたりもさすがに人目を気にする必要に思い
当たったようだった。トリーネとクレウーサはようやく黙った。黙
って追撃の代わりに、たけきころとスコールに殺人的な凝視を送
った。

「わたしも、わたしも大事な部下を亡くした。しょうじきこの決に
穏やかではいられない。だがこのうえにまだ、わたしは苦しまなけ
ればならないのか。クレウーサ、トリーネ」ふたりの肩に置かれた
手は震えていた。「この手は本当なら、死んでいなくなってしまう
た部下を労うために、愛するアリシアとマイナロスの肩に置かれる
はずだった。辛酸はもうじゅうぶんすぎるほど味わったのだ、
このうえにこんな浅ましい苦杯など強くないでくれ。可愛い部下を
抱いてやれない代わりに、これだけの衆人環視の只中で醜態をさら
していつこうに恥じない、同僚の肩に戒めの手など置かせないでく
れ」

アグリアスは涙さえ見せて、見事にふたりを沈黙させた。静かに
なったところにスコールが畳みかけて、

「ふたりとも落ち着いてくれ。どうしてもこの決断が気に入らない
のなら、あとでまた話し合える。指揮官どのも無下にはしない、彼
にだって落ち度はある。おれにも含みはある。　　いいか、この件
は今までただ留保されるだけだったのが、完全に決まったんじゃな
い、動き出したんだ。とりあえずはこれで、おれたちは満足するし
かない。後背に敵が迫っているいま、のんびり仲間同士で言い争っ

ている場合じゃないのはわかるな？ 恨みは今だけでいい、飲み下してくれ。おれもそうする」

彼女を参考にしたのだろう、今度は情に訴えつつ、まるで最初から彼女らの側にいたかのような口で妥協案を提示した。感情を論理でもって除算しようとする失策に気づいたのだ。そういつたばあい結果はたいてい乗算になるもので、図らずもアグリアスのやったように、情は情によってでしか割り引けないようになっていく。

「決まって、いないのね？ たけきころ」と、トリーネが口を開いた。いまだに憤懣やるかたないといった面持ちだったが、興奮は冷めつつあるようだ。ともかくも矛を収める鞘を探す気にはなつたらしい。「あなた本人の口から直接きいておかなきゃ。あとで言い逃れできないように」

この論争において優勢であつた彼としては、ここでする必要もない譲歩をして、相手に都合のいい言質を与えるのはまったく業腹だつた。が、スコールの言うとおり、カオス勢は近づきつつあつた。実際に兵士を率いて戦うトリーネたちの、機嫌を損ねたまま物別れに終わるわけにもいかない。話の落とし所としてはこのあたりが妥当か たけきころはしぶしぶ折れた。

「わたしとしては、言うべきことはすべて言つた。君たちも聞いた。平明な知性を持つひとであれば誰しも、この話し合いから導き出された結論に疑いを差し挟む余地は」 「なおもぐずぐずとこんなことを話していると、横合いから鋭く肩を小突かれた。いい加減にしろとばかり、スコールが怖い貌で睨んでくる。」「 決まっていな
い。これでいいだろう」

「聞いたよ、確かにね」

「それだけでは足りません」と、クレウーサ。「いまここで皆に宣言してもらいましょう、彼らも混乱します」

「ダメだ」と、スコール。「いまさつきあれだけ大げさに罪は濯がれたなんて言つたのに、こんなにすぐに撤回させるべきじゃない。余計に混乱するし、指揮官どのの信用にも関わる」

「信用ならもうとつくに落ちているわ」

「あんたのものな。あんたのだけじゃない、おれも、トリーネも、みなもだ。コスモス勢は弱り切ってる。あつきちしおやクレアルコスやルーカンが死んで、みななにを頼ったらいいか迷ってる。とりあえずは間違ったことでもなんでもいい、自信たっぷりに言わせておくさ。いまの決断を不満に思っている兵は、ごらんのとおりたくさんいる。彼らの話を聞くだけ聞いて、吟味するふりをしたうえで、あとで宣言させればいい」

クレウーサはみなまで聞き終えずに、憤然と踵を返した。トリーネも遅れてそれに従った。ふたりとも納得したというよりは、射掛ける矢を尽いたためといった具合だ。引き返してきた彼女らに、セシルとゼノフォンがなにか話しかけている様子だったが、ふたりは無視を決め込んでいるようだ。

「……スコール、彼女らと和解はできそうかな」

「わからない。むつかしいだろう」

と言って、スコールはひとつため息をついた。先にトリーネに対してそうしていたような、悲しげな面持ちで。ふだん憎たらしいほど無表情な彼が、こつもはつきりと感情を露わにするのはしごく珍しい。ひよつとして泣き出すのではと危ぶむ間にも、彼は無表情を取り戻して面を上げた。

「指揮官どの、まだやることが残ってる」

「うん」

「……正直、あんたが気づくかどうかは賭だった」

「セシルに感謝してくれ」たけきところは破顔して、スコールの肩に手を置いた。「危うく君を殺すところだった」

「殺す……」スコールが目を睜った。「……そんなことをしたらこの場がどうなるか」

「あまり手の込んだことに気づけないものもいる。わたしとか、フリオニールとか」スコールが眼を白黒させている様子は見物だった。「それだけでなく君の指揮官どののはあたまに血が上りやすいのだ。」

次はもうすこしわかりやすくしてくれたまえ」

「本来なら、あんたが、するべきことだぞ、これは」スコールは怒りを隠しきれないといった様子である。「だんまりを決め込んで、喧嘩まで始めて、いったいあんたは指揮官の自覚があるのか？ そのうえ憎まれ役を引き受けて、きわどい橋を渡った部下に、殺されたくなければもつとうまくやれときた！」

「あまり大きな声を出すと兵たちに聞こえてしまつぞ」たけきころはにこにこしている。

「まったくあんたの礼儀正しさには頭が下がるな。やる気が出るね、最高の報酬だよ。おれは黙って腕でも組んでいればよかったのか……！」スコールはぶりぶりしている。

「君を駆り立てたのは、君の指揮官どのの無能ではないよ。君自身の良心と正義の声がそうさせたのだ。君が自分の両腕の不仲を案じたところで、もちろん結果は同じだったとも。さあ、いま言い争いは已めよう、まだやることが残っている」

「……………」
トリーネ、クレウーサと言い争い始めた頃からすでに、兵たちの不満の声は鳴りをひそめていた。しんとして将たちの言い合いに耳を傾けて、次に自分たちにどんな言葉がかけられるのを待っている。彼らはしごく冷静に見えた。あたまに血の上ったトリーネたちのように、ひっくり返すためだけに相手の言葉を待ちかまえるといったふうはない。あるいは彼女らがああも感情的になったればこそ、あれほど大っぴらに反面教師を演じてくれたからこそ、そしてそれをつぶさに眺めていたからこそ、今の彼らの冷静があるのだろうか。ともかくも彼らは聞く耳を用意し、こちらには彼らを納得させられるだけの材料があった。この問題に直面した当初、彼がさしてよい考えもなく、場当たり的にしてきた事々が導いたにしては、そしてスコールの骨折りを勘定に入れても、ここまでの道のりはうまく行きすぎている。これはやはり、ひよっとすると、と期待してしまつたが、たけきころにはひどく腹立たしかった。

「みな、待たせた」と、たけきところは眼下の兵たちに話しかけた。「諸君はテイナの復帰に不満があるようだが、それは彼女の力の暴走を危惧してのことだろうか」

「そうよ、そうです！」と、すぐさま女の声が応えた。先のものと同じ、スコールの副官のイーデイスだった。「わたしは元力オスです、そいつの力を何度も眼にしました。そいつに仲間を何万人も殺されたわ。たったひとりで！ 何万人も！ ガーランドはコスモス勢の誰よりも、そいつを怖れていました。コスモス勢が十万人あつまってもあれよりはマシだって。そんな人間兵器が隣に？ そいつがちよつと手を上げるだけで、わたしたち死体も残らないのよ！」

この宣伝とも非難ともつかない言葉に、辺りの兵たちがどよめき始めた。紛れもない、彼女は味方だとたけきところは確信した。テイナの倒したのはほとんどが幻像兵イミターテイオーだったし、あの周到で慎重なガーランドがこんな軽々しい言葉を、たかが一介の、それも騎鳥の世話係などに漏らすはずはない。

「君の恐れはもつともだ。だが」

「それについてだが」と、スコールが割り込んでくる。「こいつの力については目下解明中だ。だがそんなに時間はかからないだろう（……よくもまあこんなに平然と嘘が吐けるものだ）」

「それならなぜ今までそうしなかったんですか」と、今度はべつの男の声が上がった。非難と疑念が滲んでいる。こちらは純然たる反対派だろう。「急にいまそんなことを言われても信じられない、すぐにできたならそもそも、こんな大惨事にはならなかった！」

「あんたの言うとおりだな」しれつとスコール。「以前、最初にあいつが暴走したとき、つまるところこんなことさえ考え出す奴がいなかったということだ。なんの対策もしないまま同じことを繰り返して、うまくいかなければあたまに血が上って、利用法なんか思いも寄らない。そういう例を、みなもついさつき見たはずだ。当時の鈍いコスモス勢の手には余ったんだろう、この人間兵器は」

事實はまったく違う。こぞつて解明に乗り出し、甲斐もなく断念

し、それでも頼らざるを得ないために已むなく使ったのだ。それも兵器のほうで否んだにも拘わらず。スコールの口は癩に障ったが、ここで抗議するわけにもいかない。

「諸君、彼女の軍事的な貢献については、それでは賢明なスコールに任せようではないか」せめてちらと皮肉を利かせて、「わたしとしては当面は、彼女を前線に立たせるつもりはない」

「ではどうするつもりです」と、イーデイス。「それ以外、そいつにまだなにか価値があるとでも？」

（よし、ここまで漕ぎ着けた。この切り札を披露する舞台としては出来過ぎなくらいだ）イーデイスに向けて軽く手を振って、たけきところは再びティナの傍らに膝をついた。（あとは彼女が応じてくれさえすれば！）

「ティナ、奇跡を」

「……………」

「君はうまくいかないと言ったが、試すなら今だ。もう機会はない。ここが先途だ、決断を！」

「……………」

「あんた、こんなところまでわざわざ来たのは、なにかをするためだろう」スコールも同じように膝をついて、ティナの決心を促した。「それを思え。そのためにできることをしろ」

「君は彼女の力を？」

「しろきかいなが　そうでなくて誰があんな悪趣味な見せ物なんか」

「そしてイーデイスも一枚かんでいると」

「いや、そんな時間はなかった。彼女は彼女なりに考えてやって」

にわかにティナが呻き声をあげて苦しみ出したので、ふたりは会話を已めて卒然と腰を浮かせた。しまった、悠長にしすぎたかと思う間もなく、彼女の血に塗れた肌の、そこここに刻まれた痣や腫れや裂傷が、やや怪奇的な様相ながら徐々に癒えていく。時間を

巻き戻す、というより、内側からなにかよくわからないものが滲み出てきて、それが組織に成り代っていくといったような、ちよつと不気味な眺めである。四肢の骨折の治るくんだりでくぐもつた悲鳴を上げると、それきり彼女の貌は穏やかになった。やれと責^せ付いておきながら、いざその光景を目の当たりにして、たけきこころもスコールも驚きを隠せない。あれだけの重傷がほんの数呼吸の間に、完全に癒えてしまったのだ。

「……信じられないな。しろきかいなもこんなことが？」

「無理だつたらう。いや、できたかもしれないが、我々はさせなかつた」と、たけきこころは呟いた。「この子にもあるいは、させるべきではないのかも」

「それを当然と思ひ込むから、か？」

「そうだ。それができなくなつたとき、兵たちはそれを彼女の恣意^しと疑うようになる。この特権を奪い合いの対象とするものも出てくるだろう。一部にしか分かち得ない恩恵とはそういうものだ。

だがもはや考えるまい。我々はすでに選択した。ことは動き出したあとはもう、彼女の力次第だ。百人を癒して彼らの尊崇を勝ち得るか、十人を癒して残り九十人の悪罵を得るか」

「その悪罵にも甘んじます」横たわつたまま、ティナが静かに口を開いた。「十人しか癒せないのなら、せめてそれだけでもするわ。なんでもするわ、この重荷を除くためなら」

「よく言つた。 スコール、ちよつと拭こう。血まみれであまり治つたように見えない」

「指揮官どの、これ。これで……急げ、顔と腕だけでいい、みな待つてる」

大車輪でティナを揉みくたにしたあと、ふたりはやや決まり悪げに腰を上げた。遅れて彼女もスコールの手を借りて立ち上がる。血はあらかた乾いてしまつていて拭いきれず、彼女の顔はいささか冒險的な化粧を施したようになったが、それでもあれほど痛々しかった身体に今どんなことが起きたのか、兵たちにはじゅうぶん見て取

れるはずだった。

「ご覧の通りだ、諸君。彼女はこういう力を持っている」

イーデイスを含め、眼下の兵たちは一様に、口を半開きにしてひと言もない。知っていてさえ目を睜みはるのだ、いきなり目の前に突きつけられたなら、

（その驚きは非常なものだろう。この困惑から立ち直れば、彼らの多くはきつと靡なびくはず）

「もし彼女を軍に受け入れるなら」と、スコールが畳みかけた。「いまいる怪我人はまず一瞬で完治するだろう。みなも今後、死にさえしなければ五体満足は保証される。気楽なものだな。瀕死で横たわっている、あのクラウドも元通りになる。幻像兵を鼻唄まじりに千人も斬った、彼の活躍を知らないものがここに？ 見てみたくはないか？ このティナとクラウドがカオス勢を叩き潰して、倒した幻像兵どもの数を競い合うのを！ セフィロスが虜囚の縄目に涙し歯がみする姿を！ 全ての元凶、あの忌わしいエクステス、奴が怯えて命乞いする様を！ 八つ裂きにされる間際、自身の身の破滅を招いた、かの呪わしい外法によって引き起こされた事どもを、奴が身をよじって後悔する様を見たくはないか！」

「そしてガーランドが恐怖し、胄かぶとを投げ出して逃げまどう様を！」スコールに感化されて、たけきこころも負けじと声を張り上げた。

「我々は失った。多くを、昨日も失った。だが今日は得たのだ、かの二傑を！ 苦しく恨みに満ちた昨日を我々は忘れまい、死んだ友を忘れまい、彼を殺した者を我々は決して忘れまい！ だがよりよい明日のために我々は迎えよう、新しい友を迎えよう、仇を討つてくれる者を我々は喜んで迎えよう！ 諸君、矛を向ける相手を間違えるな！ 復讐の甘い毒液を末期まっごの水とするな！ 甘いのは喉を通りすぎるまでだ、それは諸君を内から灼き滅ぼす！ 今は惜しまれてもそんなものは吐き捨てるのだ！ 我々の舌はきたる勝利の美酒にこそ備えよう！ それを醸たし湛たえる杯は、見よ！ 諸君の目の前にある、そつだ、ここにあるのだっ！」

いまは亡きさときまなこの霊が、このとき乗り移ったものか、それとも驚きに自失しているところへ不意打ちでやったのが効いたのか　このふたりの即興の演説は、意外にも大多数の喝采をもって迎えられたのだった。

「みな、今日この日、彼女の刑罰の日を覚えておこう。混沌の神殿を粉碎したとき、我々はそれを思い出して恥じるだろう。かつて贈られるべき花が鞭に代えられたことを。遠からぬ未来、我々は喜んでこの教訓に学ぼう。けだしその時こそ我々は花を惜しむまい、それを踏みじめるカオスの足はもはや存在しないのだから！」

それだけ叫んで、盛り上がる兵たちに背を向けると、たけきこころはスコールとティナを促して坂から離れた。ユツグが腫らした顔に満面の笑みを浮かべて駆けてくる。フリオニールとグイードといえば、まったく棒を呑んだように立ち竦んで、お互い目配せしたり首を傾げたりと困惑の極みにあるようだった。その向こうにトリーネとクレウーサの姿はない。アグリアスとアマンドの姿も。ゼノフォンとセシルに動きはなかったが、この大喝采を受けてどのような貌をしているか、なにを考えているかは想像に余る。

「たけきこころよ、ありがとうござ　！」

言い終わらないうちに少年はティナに捕獲された。そのまま怪我を治す治さないうちで掴み合いを始める。

「たけきこころ、なんて言ったらいいもんか……」フリオニールが歩み寄ってくる。「……まあ、とにかく、うまくいったんだろ？ おれにはさっぱりだが」

「うまくいったよ。このスコールのおかげで」

「あんた大したやつだなあ。なにがどうなってるのかわからんが」グイードがスコールの肩をびしびし叩く。「見直したよ、感服だぜ。ついさつきまでどうやってあんたを殺そうかって、そればかり考えてたつてのに」

「……ご再考いただけただけようで嬉しいね」

「みな、これからが大変だ、協力して欲しい」と、たけきこころは

言った。「この場はうまく切り抜けられたが……結局のところ、我々の主張は強弁に過ぎない。いや、我々にとって説得力のある真実なのだとしても、彼女に仲間を殺されたものたちがこれだけで得心して、完全に恨みを捨てるとは思えない。すべてはこれからだ」

「おれに任せてもらおう」と、スコール。「あとは一刻も早く既成事実を作るだけだ。あいつを恨もうが憎もうがどうでもいい、あいつが軍にとって必要不可欠で、代わりなんかいないということ、是が非でもみなにわからせる。そのあとなら誰がどれだけ非を鳴らしたところで、あいつをどうこうすることはできなくなる。少なくとも、正当な手段では。あとはあいつ次第だが……」

「うん、君に任せよう。ところで どうだ、フリオニール、グイド」たけきこころはちよっと自慢げに、ユツグに戯れかかるティナを示した。「彼女は。驚いたろう?」

「ああ、驚いた」

フリオニールとグイドは感嘆まじりに、しばらくティナをじろじろ眺めていたが、ややあつて彼に向き直ると、

「驚きだ、あんなにかわいいとはね」

「おお、ほんとだよ。えらい美人だ」

ふたりして頷くことしきりであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4848i/>

DISSIDIA PHANTASIA FINALIS

2011年2月28日21時58分発行